
転生少女 さやか(!?) マギカ

ナガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生少女 さやか（！？） マギカ

【Nコード】

N8190S

【作者名】

ナガン

【あらすじ】

* 現在改訂中。東方の世界で神兼妖怪の生活を送っていた”美樹さやか”。しかしあることによって再び死んでしまい、目が覚めるとまどマギの世界のさやかに転生していた。これはかなりかわったSYK派の俺が書くさやか魔改造ものです。下手です。チート、駄文、ご都合主義が嫌いな方は見ないほうがいいです。後不定期更新です

プロローグ（改）（前書き）

どうも、ナガンです

それではつたないながらも頑張った自分の作品を読んで下さい

プロローグ（改）

桜が散りはじめた晩春、一人の女性がその様子を茶をすすりながら神社の居間で見ていた。

腰のところまである青の髪を、ポニーテールでまとめ、服も青を基調とした魔法少女のようなものを着ている。

「…暇……」

とその女性、美樹さやかが暇をもてあましていると

「お~~~~~い」

と言う声と共に箒に乗って空を飛んできた、これまた白黒のいかにも魔法使いです、という服を着た少女、霧雨魔理沙がそばに降り立った。

「どうしたの、魔里沙？生憎お菓子は切らしてるよ。」

「魔里沙さんはそんなお菓子をたかりにくるような人じゃないんだぜ。今夜博麗神社で宴会があるから、それを伝えに来たんだよ。しかも今回は紫が主宰らしい。」

「紫が？珍しいこともあるものね。」

いつもと変わらない日常

「で、いつも通り酒持ってけばいいの？」

それが変わるのは予測がつかない。

「とびつきりいい酒を頼むぜ、じゃあな!!」

「うわっ、ちょ、飛び出すと時は周りを確認しろー!!」

その時がすぐそこまで迫っていても、全く、おかしくはないのである

さやかサイド

「めいりくん、ってまた寝てるし」

あの後、私は再びやる事がなくなったから、宴会までの暇潰しに、美鈴と組み手することにして、紅魔館に向かった。

着いてみると案の定、門の前で、長い赤髪に大陸風の緑の服を着た女性が立ったまま寝ていた。

……それにしても立ったままどうやって寝ているのだろう……、あたしには到底できない。

「まあいいか。……コホンッ……。美鈴、ナイフの餌食になりたいのなら、そう言ってくれれば言いのに。いくらでもナイフを投げあげましょうか?」

「わひゃい!!いや違うんですよ咲夜さん、これはあの、なんと言いますか……ってなんだ、さやかさんですかびっくりしたあ」

うん、咲夜じゃなくて良かったね。

でもね美鈴……

「なるほどなるほど……美鈴、あなたの気持ちはよ～～～～くわかったわ」

「ひっ！！さっ咲夜さん、今度は本物！？」

咲夜からあんたが逃げられるはずないじゃない。

美鈴の悲鳴をBGMに、私は美鈴の奇怪な踊りを楽しんだ

それからなんとか咲夜を宥め、美鈴と組み手を小一時間程して別れた

戦闘描写？誰に何を求めちゃってるの？

「さてつと、次は守矢神社にでもいこうかな」

善は急げということで、あたしは守矢神社に飛んで行った

――――

守矢神社に着くと、ここの巫女兼現人神の早苗が、箒で神社前を掃除していた

早苗がこちらに気付いて、顔を向ける

「あつ、さやか様。こんにちは」

「こんにちは早苗。諏訪子と神奈子は？」

「お二人共なかにいらっしゃいます」

「わかった、ありがとう」

「いえいえ」

中に入ると、神奈子と諏訪子がお茶を飲んでくつろいでいた

「いらっしゃいさやか」

「ああ、来てたのかい」

「うん、それにしても早苗はいつ見てもいい子だね。お持ち帰りしたいくらいだよ」

「早苗はあげないよ。さやかも体鍛えてないでらしい加減早く巫女さがしなよ。神社を掃除する神なんてあんたぐらいしかないよ」

「ははは、それはいわない約束だよ」

言い忘れて（？）いたけど、私は一応神である（妖怪でもあるけど…）。が、信仰はしてくれているのに巫女、というかあたしの下で仕えてくれる人が、今一人もない。

おかしいな、幻想郷ができてから（その前からでもあるが）私、妖怪らしいこと一度もしてないのに。

これが社会の冷たさっていうやつなのかな？

「あんたいつも何してるのさ？」

「美鈴と組み手、たまに幽香が遊び（襲い）にくる」

「他には？」

「武器の手入れや神奈子達のところでダベる」

「…もうそれさ、巫女探しが面倒くさいからやってないだけだよね
…」

他愛のない話をしているうちに日も暮れはじめ、私は宴会に持って行く酒を取りに、私の神社に戻る

「？……やけに静かね……」

お酒を持って、博霊神社に向かおうとした、

ちょうどその時だった。

轟音

「！？何！？」

ピシッ…ピシッ…

上から罫が入る嫌な音

見上げると、結界に罫が入り始めていた

「結界が…」

呆けている場合じゃない！今は状況確認をしないと…

私は能力を使って、空間を繋ぎ、博麗神社に移動した。

博霊神社には、宴会に来ていた人や妖怪が大勢いて、あたしはその中で、特徴的な紫の服をきた女性を見つける。

「紫！！」

「…さやか」

「どういうことなの！？なんで結界が割れ初めてるの！？」

私は紫に詰問すると、彼女はどこか諦めた様子で言う

「…外からの圧力に耐えられないからよ」

「外からの圧力って…、今までそんなのなかったじゃない！！何か策はないの！？」紫は何を考えているか全くわからないけど、幻想郷を愛していることだけは確か。だから幻想郷が崩壊するのは、なんとしてでも避けたいはず…。

だけど紫はあたしが期待した返答はしなかった。

「ええ、ないわ。あらゆる状況における数多の策を立て、施行した。でも、ただ一つだけ立てれもしない状況があるのよ」

残酷な真実を受け入れろと言わんばかりに、紫はそれを突きつける

「…それが…いや、その状況ってどんな時なの？」

「…世界の崩壊…」

私は息を飲んだ

「それじゃあ…外の世界は…」

「無いわ。後残っているのはここ、幻想郷だけ」

罅がどんどん細くなっていく。皆が頑張っているけど、何分もつか…

「…私が空間を断絶して、紫がその間に幻想郷を一つの世界にするのは…」

考えられる対応策を提案する。何もしないよりはましなはず。

「必要エネルギー量が圧倒的に足りないし、ここまで小さい世界はすぐに押し潰される。何より…時間がない」

「そう…」

良く見ると、彼女の手は自分の血でぬれていた

パリン…

呆気なく結界が割れて、

底知れない闇が私達を飲みこんだ

――――

ピビッ ピビッ

「…懐かしい夢だったなあ」

私は目覚まし時計を止めながら、今までのことを振り返る

気が付いたら赤ん坊だった何が（ry

……ともかく私は二度目の転生を果たしてしまったらしい……。

……で、その名前が

「美樹さやか」

だった。何故だ

東方世界に転生した時は、まだかマギガのアニメ放送が中止になって、結末がわからないまま昇天したから、むしゃくしゃして、SYK派だったあたしは名前をそのままもらっただけなのに……、縁が出来ちゃったのか？

いつの間にか口調も自然と変わっていったし…

それで、この世界の物語である、まだかマギガのストーリーを思いだそうとしたけれど……、なぜか内容が全く思い出せない…。

これが噂の世界の抑止力か…。初めて実感した瞬間だった

能力を使おうとしたけど使えなかった。発動する気配もない

しかもただの人間だから、神力や妖力が使えるわけなくて……

代わりの霊力もずば抜けて高くもない

つまり簡単に言くと、

チート要素がなくなったと……

……まあ戦闘経験はあるし、一通り武器は全部使える。もしかしたら、なにもおこらないかもしれないし、考えるだけ無駄よあたし！
！ポジティブになろう！！

考えもまとまったところで…

「今日も1日元氣に行きますか！！」

プロローグ（改）（後書き）

さやか「さて、始まってしまいましたよ。あたしが主人公な話」

ナガン「？何が不満なんだ？」

さやか「これまでのSSで完結した作品はあたしがみただけでは2割にも満たなかった。どうせあんたのもそのくちでしょ？そもそも受験生なのに大丈夫？」

ナガン「大丈夫だ。問題ない。実はエピソードは完成している」

さやか「」は”？じゃあその前は」

ナガン「…すみませんアニメ12話みて衝動的に書いたからエピソード以外は全く…」

さやか「因みにあたしのモデルはこいつが考えたかつこいい自分にさやかを足して2で割ったものらしいよ」

ナガン「ちょ、おま、何暴露してんの！？」

さやか「いいじゃない。どうせ受験とか言って完結するのは一年以上かかるんでしょ？最初のことなんて皆忘れてるよ」

ナガン「うつ…しよっぱなから何故に自分のキャラに虐められるんだー！！！」

さやか「まあこれから生暖かい目で見守ってくださいな」

主人公設定（前書き）

7月3日追加

9月13日 みき追加

主人公設定

美樹さやか（女）

転生者であり、気付いたら妖怪になっていた。東方時の容姿はさやかを大人びさせて髪をポニーにした感じ

元々人間であった為、能力を使いあまり人を驚かせたり、めったになかったが殺したりはなかった。むしろ人を助けたり人食い妖怪を退治していたせいでいつの間にか神として信仰されていた。

日々鍛練ばかりして（本人は暇潰しと言っている）いて、一通りの武器は扱える。

一番よく使うのは双剣であり、転生当初から所持していた双剣がある。

幻想郷に来てから巫女を募集していた。

ある理由により視線や気配に非常に敏感

能力

「時を支配する程度の能力」

←

「時空間を司る程度の能力」

どこかの物理学者が「空間と時間は元々ひとつだった」と言っていたが、上のは簡単にいうと某メイド長の能力の上位に位置するもの。

下のは空間も操れるようになったもの。頑張れば次元も操れる

まどマギに転生した時、能力は使えなくなった。

原作知識もほとんどない。

世界からの修正力で原作知識もほとんどない。かろうじて覚えてるのは美樹さやかが物語に関わっていることぐらい

性格

戦い好きだがバトルジャンキーではない。逃避の為に戦いに没頭したが故のバトルマニア的な感じ。命に関わらない程度の戦闘なら気兼ね無く応じてくれる。故に幽香の場合本気でとりに来ているから逃げる時もある。

親しい人に対してはかなり優しい。困っている人を見かけると放って置けない。神になったからなのかそれとも…

無鉄砲には突っ込まず、引き際はしっかりと見極める。但し身内がピンチならその限りではない。

自分または身内に危害をくわえる輩は容赦しない(テンプレww) 思い込みは激しくなく、割と受け入れてしまう。その為舌戦はちと苦手。

時音 みき

武器 仕込み刀(外見がネギ)

容姿 初音ミクの緑の所を黒くする。

服装 PスタイルPB（ググったら画像は直ぐ出ます。）

性格 さやか神と似ている。勝ち気？

口調 さやかと極若干違いがある。

好物 ネギ

備考 さやかの魔女の部分が分離した存在。さやかと一体化も出来る。

さやかの能力『時空間を司る程度の能力』も使用可能。但し現時点では上手く扱えていない。

本人はちよつと名前と容姿に複雑な思いがある。

歌は普通に上手い。

性質は守護。防衛戦の時にその真価が発揮される。

結界内の様子

時計がふよふよと浮かんでいる。

あと最深部には神社がある。

後魔女特有の禍々しさはない。

（それ以外はまだ決めてません。）

蒼穹双刃について

東方に転生時からずっと所持していた双剣

切れ味はモンハン準拠

時を止めた中でもその切れ味を遺憾なく発揮するというチート武器
ぶっちゃけこれ使えばまず勝てる。

弓に変形可能。

因みにこれは作者が考えたかつこいい自分である説が現在最も有力
な模様

巻き込まれる2人な一話（改）（前書き）

ナガン「言い忘れてましたけど、ネギまの設定とか使えそうなの
はどんどん使っていけますのでよろしく」

巻き込まれる2人な一話（改）

「行つてきまゝす」

私、美樹さやかは見滝原中学二年生で、今日も元気に学校に登校中。いつもの通学コースを歩いていると、緑色の髪の毛の清楚な雰囲気の子女子中学生があたしを待っていた。

「おーい、仁美」

「おはようございますさやかさん。」

「おはよう。まどかは？」

「まだですわ。」

「そう、それで今日って…」

今日の学校でのことを話しながら待っていると後ろから桃色の髪をした胸がぺったんこな少女が来た。

「ぺったんこは余計だよ…」

「！？心を読まれた！？」

「口にでてましたわよ。」

「…まどか今日リボン変えたよね？」

「ものすごい強引な話の変えかただね。うん、お母さんに言われてね…」

こうして学校に行つて特に変わったところもなく終わるだろう…と思つていただけ、

先生ののろけ話からの転校生紹介があつたからどうやら違うらしい。

「曉美ほむらです。よろしく願いします」

心臓病で長いこと人と接していなかったのかと怪しんでしまつぐらゐに物怖じしない転校生。

普通緊張ぐらゐはするもんだと思う。

……さつきからこの何者も寄せ付けないような雰囲気をかもし出しているクールビューティーな転校生だけど、まどかの方ばかりみてる……なにかしちゃったの、まどか？

このあと転校生がまどかを保健室に連れ去つたり文武両道な面を存分に発揮したりして学校は終わり、まどかと仁美と一緒にファーストフード店に立ち寄る。

「はあ！？なにそれ？」

「わけわかんないよね……」

「胸はないけど文武両道で才色兼備な転校生、しかし中二病がすべてを台無しにしてしまう……一体何が彼女をそこまで堕としたのか……」

やれやれと肩を竦める。

「中二病？彼女は心臓病を患っていると聞きましたけど」

「心臓病とは別の病気……一種の精神病かな……症状は摩訶不思議なところ、俗に言う非日常に憧れて謎めいたことを言ったりする。ときどきいきなりニヤついたり、ひどいといきなりぼそぼそとなんか言い始めたり、奇声をあげたりする。」

「それは病気とは言わないよね……」

その後中二病は病気がそうでないかという論議に発展したが、最終的に転校生は中二病という結果に落ち着いて話は終わった。帰りに怪我で入院している友人の上條の為にCD（クラシックだよ、決してアニソンじゃないよ）をまどかと一緒に買いに行った。

「どれにしようかなあ…」

これはもう買ったし、あれは上條の好みじゃない…そもそも今月はもうお金ないし…いっそもも買わなくてもいいか？いやそれだここに来た意味が…。

そうこう考えているときまでCDを聞いていたまどかがいつの間にか忽然といなくなっていた。

まわりを見渡すがCD屋にはまどかの姿はない。

「まどか…？」

ここからあたしは、俗に言う非日常というのに巻き込まれていった。

「え」

まどかの追っていると人気のないまだ改装がすんでいない、薄暗いフロアについた。

そこが何もなかったら良かったんだけど…。

「何この障気。」

妖怪にはちょうどいいぐらい。

ただ今今は人間なあたし。害になりこそすれ快適なわけがない。

…はあ全く、何も起こらない…か、そんなことあるわけもなかったなあ…

とりあえずまどかはこの空気を出している本体に誘い出されたと考えるのが妥当かな…

軽い自己嫌悪の後、何か武器になるものはないかと辺りを見回すと一本の鉄パイプが転がっていた。

これ拾ったら敵がでてくることなんてないよね…と警戒しつつ鉄パイプを拾う。

敵はもちろん(?)出てこなかった。

まどかの気配を探りながら歩き出す。

鉄パイプが軽い、鉄パイプがこんなに心強く感じる…こんな気持ちで戦うのは初めて。もうなにも怖くない!!

…なんだろう、フラグを立てた気がする。

「まどか〜どこ〜」

おふざけは止めて、真面目に探していると景色がいきなりぐにゃりと歪みはじめた。

「げっ」

ヤバイと思った時にはもう遅く、気付いたら先程の殺風景な景色から絵画の中に入ったような世界に変わっていた。

そしてどこからともなく出てきた毛玉に髭が生えた小さい妖怪に囲

まれた。

「まどマギって題名からして魔法少女ものだったよね？なんでこんなに気色悪い生き物が出てくるの？」

これが最近の魔法少女ものなのか？とため息をついていると妖怪達が一斉にハサミを伸ばして襲いかかってきた。

こいつら自分達が誰に攻撃してるかわからないの？もしそうなら…

「身の程を弁えなよ」

妖怪達が私にハサミみたいな手を伸ばし、手は私が”いた”ところに次々と刺さる。

動揺する妖怪達。そこに私は一体に背後から霊力で強化した鉄パイプを叩きこんだ。

ドコツと地面が凹みそこにいた妖怪は跡形も無く消える。

その後も鉄パイプを振るう度に妖怪の数は減り、ものの一分足らずで全滅させた。

…あっけな。もう少し齒応えがあってもいいのに…

「つてまどか探さない」と

妖怪の戦闘力を100とするとまどかの戦闘力はたったの5、ひとたまりもなく死ねるはず。

あたし？軽く一万越えるけどなにか？

「まどかー！！何処ー！！」

走りながら必死に声をあげる。
時折襲ってくる妖怪達を蹴散らしながら進むと、遠くにまどかが妖怪に囲まれているのが見えた。

「ヤバッ」

妖怪達はもうハサミを伸ばしている。

「ああもう!!」

足に靈力をため、踏み込みと同時に後ろに放出する。

どこかの漫画で言う縮地というやつだ。

そしてまどかと妖怪の間に割り込み、一気にハサミを薙ぎ払った。

「さやか…ちゃん…?」

振り替えるとポカンとしているまどかがあたしを見つめていた。

—————

まどかサイド

私は今ほむらちゃんから逃げている。理由は今腕の中で弱く息をしている白い犬みたいな生き物。

音楽を聞いていた時、突然頭の中に響いてきた声に呼ばれて歩いていたらこの子を見つけた。抱き抱えた時に柱の影から変わった服装のほむらちゃんが出てきて、この子を離せって言ってきた。

どうしてかわからないけどほむらちゃんはこの子を傷付けていたみたい。

隙について逃げ出したけど気が付いたら絵の中のようなところに迷いこんでいた。

「え？なに？ここどこなの？」

どこからともなく化け物が出てきて私を取り囲む。
化け物達ば私にジリジリと近づいて来ている。

足がすくみ動けない。

「嘘…だよ…夢オチだよ…」

ペタンと足元で音がする。視点も低くなった。いつの間にかしりもちをついたらしい。

嫌だ、死にたくない

ポロポロと涙がこぼれる。

「助けて…」

跳びかかる化け物達を見て思わず目を瞑る。

その直後聞こえてきた音は肉を貫く音ではなくて、何かを吹き飛ばす音だった。

恐る恐る目をあけると見慣れた青い髪が目飛び込んでくる。

「さやか…ちゃん？」

声をかけられて振り返るさやかちゃん。

その手には鉄パイプが握られていて…

「ちょっと下がってて」

と笑いかけて化け物達を吹き飛ばしにかかっていた。

さやかちゃんは襲いかかるハサミを軽いステップをふんで避けて、化け物に鉄パイプを叩きつける。その様子は舞踏のようで…

パイプが真つ二つに両断されても、全く動じずに今度は二刀流に持ち変えて攻撃する。むしろ攻撃が苛烈になっていた。

普段見ないさやかちゃんの姿に見惚れているうちにさやかちゃんは一通り化け物を倒した。でもまた周りから化け物がいっぱい出てきてきりがない。

「このままじゃじり貧か…しょうがない。」

ヒュッ、カアン！

鉄パイプを階段に向かって投げつけるさやかちゃん

「いるのはわかってるから、さっさと出てきて。それともあんた、この結界の元凶？」

そうさやかちゃんが言うと、物陰から金髪のドリルロールの綺麗な女性が現れた。

巻き込まれる2人な一話(改)(後書き)

ナガン「さて、一話が終わったけど」

さやか「全然だめ、あたしTEEE成分が全くない」

ナガン「それただのお前の願望だから」

さやか「はっ、感想も怖くて読めない奴にわざわざ感想言っちゃったってのに…やれやれ…」

ナガン「…ノクターンになんか投稿してやる」

さやか「ちょ、あんたなに言ってるの!? わざわざ自分で自分の傷えぐる気!？」

ナガン「かくぞー諏訪子と神奈子に犯される話書くぞー」

さやか「…」

ナガン「あれ、ちょっと、なんでそんな目死んでるの? 怖いんだけど、やめて、冗談だってだから許し…」
ピチューン

ナガン「俺ってば…ホントバカ…」

今回はじっくりと進む2話（改）（前書き）

ナガン「くそ……キャラ崩壊が止まらねえ、どうすねば……」

さやか「もうあきらめなよ」

ナガン「これじゃさやかの皮を被った何かじゃねーか……」

さやか「当たり前のこといわないでよね」

今回はじっくりと進む2話(改)

さやかサイド

「いるのはわかってるから、さっさと出てきて。それともあんた、この結界の元凶？」

さつきからじろじろとこちらを見ている気配に向かって鉄パイプをなげる

そしてまどか、その抱えている猫みたいな生き物はなんだ。まさかそいつに呼ばれたとかそんな中二病的発言はよして下さいお願いします」

「ちゅ、中二病じゃないよ！本当に呼ばれたの。後中二病は作し、それは言っちゃ駄目」

取り敢えず冗談を返せる程度に混乱から回復しているようだけど…なにそれどこの魔砲少女？

「…そろそろいいかしら？」

出てきたのは金髪の胸がでかい女性。

「…早苗クラス」

「何がかしら？」

「いえ、なんでもないですよ。っと」

後ろから迫るハサミを体をひねってよけ、そのままハサミの出前部分を掴み引き寄せる。妖怪が飛んできたところでパイプを叩き付けて打ち返す

「変身しないの？」

金髪の女性がそんなことを尋ねてくる

「変身？」

「魔法少女ではないの？あなた」

「そんなファンシーな存在になった覚えは無いです」

妖怪をぶっ飛ばしながら言う。

あゝ鬱陶しい！！この人いなければ霊力使って一瞬なのに！
さっきからぶっ飛ばしてばっかで消滅させられてない

「ねえあんた。あれ倒せるよね？」

「ええ勿論。その為にここへきたんだから」

「なら任せた」

「あらいいの？もしかしたら私がこの結界の元凶かもしれないのに」

「あんたの気配と結界の空気がぜんぜん違っし、それに元凶ならわざわざ警告なんてしない」

「…あなた本当に魔法少女ではないの？」

「違うって言うてるでしょ。さっさとこいつら倒して下さいよ」

そういうとあきらめたのか金髪っ子は卵見たいな球体を掲げて変身した

黄色を基調とした魔法少女らしい服。

なつかしい

前世で私がきていた服を何故か思い出す

「離れて！」

そっどリルっ子が言う

百に及ぶ数のマスケツト銃が妖怪達の方を向いていた
「行くわよ！！」

おびただしい数の弾丸が妖怪を貫き、消滅した
それと同時に景色が歪み元の景色に戻っていく

「おー戻った戻った」

手に残っていたパイプを投げる。

投げた先にはこれまた懐かしさを感じさせる魔法少女っぽい服をきた転校生がいた

「あなたも気づいてたの」

「まあね。急いでこっちに向かってくる気配がしたと思ってたけどまさか転校生だったとはね。で、転校生、魔女退治がしたいなら追いかけたら？消滅した感じはしなかったからまだ生きてるはずよ」

「私があるのは…」

「聞き分けが悪いのね。今回は見逃してあげるって言ってるの」

あなたは見逃してあげないけどと胸デカっ子は私に言ってくる

厄介なことになっちゃった…

その後転校生は引き下がったけど、その時一瞬くやしいというかなんていうか、やってしまったという表情をしたのが妙に残った

「んでまどか。それなんなの」

ほっと一息吐いているまどかにちよっと剣呑な雰囲気で見ると

「えっあついや、その…声が聞こえたの。『助けて』って。それでその…声がした方に行くとこの子が倒れてて…」

あたしは優しく両肩をつかみ

「うんまどか、分かるよ、普通ではあり得ないことが起きたら気になるのはね…」

うんそうだね、気になるよねなどとまどかは愛想笑いをしている。あたしは両手をさりげなくまどかの頭に持ってきて…、

「ちょっとただけだね!!」

こめかみをグリグリした

いたいけな少女の悲鳴がしばらく響いた

「うっ…ひどいよ。こんなやつてないよ」

「うっさい！大体頭の中に声が響いてきた時点でフラグたってるってわかんなかったの!？」

「そんなのわかんないよ…。大体フラグってなんなの？さやかちゃんの方が絶対中二だよ…」

「へえ？それは光栄だね。そんなまどかにはお礼にもう一回…」
「ほむらちゃんほんと中二病だね！いつもほむら言ってるのに考えるかほんとわかんないや！」いやー、まどかは賢いねー。お母さん嬉しいな」

「そろそろいいかしら？」

いつの間にかまどかが抱えていた猫的生物を治しながら金髪のお姉さんが尋ねてくる

「キュウベえを助けてくれてありがとう。この子は私の大切な友達なの」

「あー！私さっき言いましたけどこの子に呼ばれたんです！」

「ええ。わかっているわ。信じたくない人もいるようだけれど」

お姉さんはそう言ってくれる。

何かこの人私のこと警戒してるのよね…魔法少女じゃないって言うてるのに…

魔法少女って各々で対立してるの？

「あたしを見ながら言わないでくれる？それに誰も信じたくないとは言っていないんですけど。おばさん」
笑顔でこう返した

「おばっ…どうかしらね？この子を魔法少女にさせたくないのかもしれないし。後おばさんじゃないわ。バマミよ」

この程度の挑発には乗らないか…口がひきつつてるけど

「ちょ、ちょっとさやかちゃん。なんでそんなに喧嘩腰なの？魔法少女なの？」

「何そのバカなの？的なノリは。警戒してる相手に仲良くできるはずないでしょ。そしてあたしは魔法少女じゃないって何回言ったら気が済むんだ！..」

「じゃああの瞬間移動はどう説明するのかしら？」

納得いかないと言った風にマミが聞いてくる

さて…誤魔化し方は一応考えてあるけど…

「…ああそれは中国武術の歩法の一つで、ここをこうしてこうやると…」

と言って実践する

「こんな感じかな…」

「そんなに速くないのね」

5メートルぐらいの移動だったけどマミは目で追えていたらしい

「まあね、でもこれを予備動作なしですと…」

今度はマミの目の前に移動する。今度は目で追えなかったらしく、驚愕の色が見て取れた

「大抵の人は目で追えない」

「…どうやら私の勘違いだったようね。ごめんなさい」

何とか誤魔化せた…

「こちらこそおばさんなんて言って悪かったわね。後助けてくれてありがと。私は美樹さやか。よろしくね」

そう言ってまどかの方を見る。まどかは二回共見えなかったようで、頭を抱えていた。さやかちゃんって現代に受け継がれた忍者の一族の子孫なの？などとうんうん唸っている

「まどか、自己紹介。あと私は忍者でもない」

「えっあっえっと鹿目まどかです。よろしく願いします」

「ふふっ、さつきも言ったけど私は巴マミ。あなた達が通う滝見沢中学の3年生よ」

そしてマミは治療が終わったのかキュウベえを抱き抱えてこう言った

「そしてキュウベえと契約した魔法少女でもあるわ」

—————
ほむらサイド

考える。まどかとキュウベえの契約の阻止を

思い出すのは自分が手につけた私の大切な友達の言葉

——キュウベえに騙される前のバカな私を…助けてあげてくれないかな——

キュウベえとの出会いを阻止出来なかったことに唇を噛む

まどかはことあるごとに契約を迫られるはず。いや、契約してないのがせめてもの救いね…

これからの立ち回りを考える

それにしても…

彼女、美樹さやかはこれまでとは何かが違う

彼女の動きはただの一般人ではなかった。それどころか

「闘い慣れていたわね…」

まさかもうキュウベえと契約した？それならば変身しているはず…
いや、なんにせよ…

「調べる必要があるわね…」

願わくばこの変化が吉と出ますように…

今回はじっくりと進む2話（改）（後書き）

ナガン「キュウベえを信じているマミさん。さて、ここからどうあの顔にもって行くか…」

さやか「あんた馬鹿じゃないの？そんなことしたらどこからともなくマミさんが好きすぎる人が出てくるのに大丈夫なの？」

ナガン「大丈夫だ、問題ない。あいつは動画の中を自由に移動出来る程度の能力を持っているが流石にここはSSの後書きだ。さて、マミさん話の流れ的にやっぱ殺すしかないかな」

ガチャ

ナガン「へ…？」

禪一丁に帽子という出で立ちの黒人男性がドアから現れる

ナガン「（マミさんが好きすぎる人！？…て声がなんで出ない！？）
」

呆然と見上げるしかないナガン

ティロ・フィナーレ（物理）！！

ナガン「ぐふあー！！」

さやか「ほら言わんこっちゃない」

ナガン「グフ…なんで紳士なのに禪？」

さやか「あれが彼のスタイルだから」

ナガン「なんでここにこれる？」

さやか「後書きとはそういう空間だから」

ナガン「なんで」だから」ばっかし使うとんだよ！…読者飽きるだろ！！」

さやか「なら今度はあたしが…」

ナガン「ごめんなさい調子こきました！！」

さやかのステータス

状態 良好

武器 なし

その他 なし

説明会は簡略化した三話（前書き）

ナガン「感想でさ、誤字とかアドバイスとかありがたいのがあるよ」

さやか「うんそれで」

ナガン「直して再投稿したんだけどタイトルに（改）ってなぜか付かないんだ」

さやか「この調子だと直し忘れがあるよね？」

ナガン「それは多分…あるかも」

説明会は簡略化した三話

『助けてくれてありがとう。鹿目まどか。それと美樹さやか』

無機質な赤い目、無表情な顔

『君達にはお願いがあつて来たんだ』

直感が叫ぶ

『僕と契約して魔法少女になつて欲しいんだ』

こいつにだけは心を許すな、と…

あれから魔法少女と魔女のについてマミに説明してもらつた為に家に連れて行ってもらった

そこで説明されたことを纏めると

- ・希望から生まれる魔法少女と絶望を振り撒く魔女は対照的な存在
- ・契約は願い事を叶えることと引き換えにソウルジェムを生成すること

- ・ソウルジェムを持ったものは魔女と闘わなければならない

感想

一見すると悪魔の契約よりはまし…かな？

あつちは魂捧げて願い事叶えてもらっけどこっちはそんなことは無いようだし

だけどキュウベえ…こいつ紫並に胡散臭い。

キュウベえのメリットが現時点で全くわからない。どんな願いを叶えても返ってくるこいつの見返りはなに？

マミは全幅の信頼をおいているようだけど…

思考に没頭していたら、魔法少女がどんなことをするのか知る為の体験ツアーをマミが提案した

…これは渡りに船かな？

まどかも行く気のようにだし、転校生の目的もわかるかもしれない

私達はOKを出して明日の放課後また落ち合うことにした

…さて、今夜は徹夜かな…

その日の夜どこかの暴力団のアジトで刀剣類全部とハンドガン二丁とその弾薬が盗まれたとか盗まれてないとかそんな事があり、犯人は未だ捕まってないそうです

マミサイド

「ねえキュウベエ、美樹さんのことなんだけど…」

『美樹さやかがどうかしたのかい？』

「実は…」

あの子達が帰ったあと、キュウベエに今日の話を話す

「美樹さんは…キュウベエとは契約してないのよね？」

『そうだね。美樹さやかとは契約はまだしていない』

「あの子…闘い慣れしすぎてるのよ」

いくら武術に精通していて闘ったことがあるとしてもそれは対人に限つての話。異形との闘いは初めてのはずなのに…

『幼少のころから特殊な訓練を受けて来た可能性もあるよ？』

「それじゃあ魔女以外に化け物がいるの？」

『僕が確認している限りでは空想上の存在しか確認してないね』

「それにあの瞬間移動、あの時は納得したけどまどかさんの周囲10メートルには人影は見えなかった」

つまり美樹さんは10メートル以上瞬間移動できることになるけど…

『それは人体の構造的に無理なはずだよ』

キュウベエに否定された

美樹さんの謎がさらに深まる

…情報が少なすぎるわね。とりあえずこのことは保留にしまし
よう

出したお皿を片付けようと立ち上がった

『そうそう。彼女、暁美ほむらについては僕とは契約していない』

「え…」

手が止まる

「暁美ほむら、ってあなたを襲ってた…」

『うん。どうやってかはわからないけど彼女は僕と契約せずに魔法
少女になった。これは確実だ』

「じゃあ美樹さんも何らかの方法で魔法を使えるようになったの？」

『彼女自身からソウルジェムの反応はなかった。でも身体強化なら
他人にもかけられる。』

「…彼女はそのほむらって子と繋がっている？」

『その可能性は否定できないね』

でもそうだとしたら彼女になんの利益が？

あらゆる推測を立てる

…駄目ね。どれもしっくり来ない

「…ほんと、不思議ちゃんね」

いつの間にかキュウベエは居なくなっていた

キュウベエサイド

『美樹さやか…か』

まどかの家に向かいながら思案する

彼女は今まで契約を結んできた人間達とは明らかに違う

願いを叶える

これだけで大抵の人間は僕が存在についてはああ、そういう存在なんだと納得し、何も考えずに契約する。

ただ説明している間彼女は終始僕に懐疑の目を向けてきた

恐らく疑問に思っている。僕の目的が何かを…

彼女は恐らく曉美ほむら同様まどかとの契約の最大の障害となるだろう

『できればこれでマミと対立してくれればいいんだけど…さすがにないか』

少なくともこれでマミはさやかに懐疑心を持った。

『それにしても…』

彼女は僕のような生命体を見慣れている。そんな事はある得ないのに。過去に僕以外の個体が彼女と接触したという報告はない

『全く、わけがわからないよ』

さやかサイド

くあ
…

あゝ眠い。やっぱ貫徹はするもんじゃないわ

「どうしました？寝不足ですか？」

「んゝまあそう」

誰かが後ろから走ってくる音がするので振り返るとまどかと肩に乗ったキュウベエがいた

「おはようございますまどかさん」

「おはようまどか。早速だけど今日の授業は任せた」

「えゝいきなり何言ってるのさやかちゃん」

「今日はまともに起きてる自信がないからに決まってるじゃん」

さりげなくまどかの横に行く

「（やっぱりキュウベエってあたし達にしか見えないみたいなの？）」

「（うん、そうみたいだね）」

「何してるのですか？」

仁美が不思議そうな顔で聞いてくる

「いや、何でもないよ」

そう言ってまどかから離れる。

（『頭で思っただけで会話することもできるよ』）

「！-！」

びっくりと思い切り動揺してしまったけど声は辛うじて出さなかった

（「いきなり話しかけないでよ！びっくりしたじゃない！」）

批難の視線をまどかに向ける

（『でもこれは秘密の話にはもってこいだよ？』）

（「いやそうだけど…」）

「あの…2人共どうしてそんなに目配せなさっているの？」

不審に思った仁美が尋ねてくる

「ああいやこれは…」

何とか言い訳しようとしていたら

「はっ！？まさかお二方はきのうの今日で目と目で会話できる仲に急接近！？昨日あのあと何があったと言うのですの！？」

「はっ！？いや、それはないわ……」

「うんそくだよ。考えすぎだよ」

「……でもそれはいけないことですの——！！」

そう言って走り去る仁美

人の話を聞け

「……ねえまどか……」

遠い目で言う

「何？」

「前から思ってたけど仁美って腐女子の気があるね」

「それは多分……あるかも……」

とりあえず仁美が置いていったカバンを拾ってあとを追った

学校に着くなり机に突っ伏して寝る私。気が着いたらお昼だった。
なんか頭が微妙に痛い

「起こしてくれても良かったのに……それになんで皆拍手してきたの

「？」

「あはは…（先生が一限使っても起こせなくて頭垂れて帰った時はある意味尊敬したよ…）」

屋上で弁当を食べる

「さやかちゃんは願いごとは決まったの？」

急に真剣な顔つきになってまどかが聞いてくる

「いや。決まってるないし、このまま決まらないなら決まらないでいいかなって」

「え…」

予想外の言葉だったのだろう。まどかはとても驚いている

「今私達が立っているのは日常と非日常の境界線の上。まだ引き返せるギリギリの場所。そして願いを叶えてもらうともう日常には戻れない」

まどかはいまいちピンときてないようだ

「簡単に言つと普通に学校に行つて、普通に勉強して、普通に恋をして、普通に普通に生活して、といったのが出来なくなるってこと」

「それは…」

「まあ…生半可な覚悟だといけないうてことだよ、曉美ほむら」

屋上の入り口に視線を向けると転校生がいた

「……いつから気づいていたの？」

「あんたが階段を登ってくるぐらいかな」

（「マミ、いまどこ？」）

（「大丈夫、あなた達が見えるところにいるわ」）

「…鹿目まどか、あなたは私が言ったことを覚えてる？」

「え！？あつ、うん」

「そう、ならいいわ。」

言いたいことは言ったのか転校生は踵を返して戻ろうとした

「ちょい待ち、ほむらさん」

私は持っていたガムを投げる

「何かしら？これは？」

「いらないからあげる。他意はあるかもしれない」

「いやそこはないって言おうよ」

まどかがツッコむ。こんな空気でもツッコミは容赦しないまどか

キャラのプロフィールにそろそろツッコミには定評があると書かれ
そうだ

転校生は訝しげにガムを見ていたが、

「いいわ、もらっておいてあげる」

とポケットにしまった

「そいつは重畳」

今度こそ転校生は教室に戻った

ほむらサイド

おかしい

私の心情を表すとこれの一言に尽きる

美樹さやかは極端に言うと思ひ込みの激しい半端な正義感を持った
一般人だったはず。そしてあの場合では私に気づいた時点でまどか
のそばによるはずなのにその素振りさえ見せなかった

わざわざそばに行かなくても巴マミが守ってくれと思っていたの
だろうか。それともそばに行かなくとも対応できたということ？

考えを巡らせているとあることが頭に浮かぶ

ポケットにあるガムを取り出しくまなく調べる

…銀紙に何か書いてある？

『090 - * * * * - * * * *』

一度腹割って話さない？』

「……………どここのスパイ映画よ」

彼女の洞察力、推理は今までとわけが違う。恐ろしいとさえ思う程だ。彼女は恐らくいろいろと気づいている。これならばもしかしたら…

はっと出かかった期待を振り払う

今までもそうだったではないか。淡い期待を持つては裏切られてきた。だから…今回も…

…何にせよ私は全て利用する。そして今度こそ…

「まどかを助ける…」

……………でも、なぜか皆が笑いあっている、そんなハッピーエンドを彼女に期待してしまうのはどうしてなのだろう…

説明会は簡略化した三話（後書き）

ナガン「今回は書くネタが思いつかないから適当に今回出てきた「紫」っていう名前の妖怪を紹介するよ」

さやか「紫は幻想郷の創設者で一人一種の妖怪」

ナガン「設定上さやかもそれだけだな」

さやか「紫の能力は『境界を操る程度の能力』。あらゆるものの境界をいじくれるチート能力で、本人の特徴は小説の中にもあったけど兎に角胡散臭い」

ナガン「キュウベえの場合胡散臭いと言うより怪しいがな」

さやか「幻想郷を愛していて、壊そうとする者には容赦しない。しようとも思わないらしい」

ナガン「まあそれは誰でも思うだろ。最愛の人を殺そうとしてるよな奴に手加減なんかしたくないわな」

さやか「残念ながら紫はこの小説では名前しかでて来ないよ」

ナガン「馬鹿。おま、いっちゃだめだろ」

さやか「あっ…」

さやかのステータス

状態	良好	
武器	刀 10 本	ナイフ 3 本
		G S R 2 つ
その他	ほむらとの連絡手段を確保	

第一回魔女退治ツアーな4話（前書き）

ナガン「この小説は基本原作に沿わせるつもりだけどアニメが見れないから時系列が原作とおそらく矛盾するかもです」

さやか「いや、ネットで確かめなよ」

ナガン「アニメ見るんだったら小説書く」

さやか「勉強しろ!!」

第一回魔女退治ツアーな4話

さやかサイド

「さて、今から魔女退治体験ツアーを始めるのだけれど何か持ってきたかしら？」

学校も終わり、いまあたし達は行き付けのファーストフード店にいる

「あたしは取り合えずこれ持ってきた」

布に巻かれていた棒を取り出し、布を取る。そこには二本の木刀があった

「修学旅行の時に買ったものなんだけどね」

ちなみにこの二本はかなりの業物。恐らく一本5000円は下らないだろうこれらを二本で1000円という破格の値段で売ってくれた、あのおばあちゃんには感謝が足りない

その事を思い出してふふふ…と笑っていたら2人が若干ひいていた

「ま…まあ充分に意気込みは感じられるわ。それで鹿目さんの方は…」

するとまどかは一冊のノートを広げて

「えっと…私は自分が魔法少女になった時の格好だけでも考えてお

こうかなって…」

「フッ」

思わず鼻で笑ってしまったあたしは悪くないと思う

崩れ落ちるまどか。ちょっと嗚咽が聞こえる

「ふふっ、やる気は充分に感じられたわ、鹿目さん」

フォローを入れるマミ、さすがです

「さて、そろそろ行きましょうか」

こんな感じで魔女退治ツアーが始まった

最初に行ったのは魔女の搜索。

昨日襲ってきた魔女は近くにはいなかったから地道に魔力の痕跡を追う

そして着いたのがとあるビル

「…確かになんか嫌な感じ」

「あー!!あそこー!!ビルの上ー!!」

上にはちょうど投身自殺を図った女性がいた

目が虚ろだ…暗示かな？

と同時にマミが変身して落下地点に駆け寄り、黄色いリボンで受け止めた

…首筋の呪印みたいなのでの思考誘導…？

「あの、この人の首筋にあるのって…」

「魔女のくちづけね。これをつけられると体を操られるわ」

女性は気絶しているだけようだからビルの入り口に寝かせておいて（口づけは取り除いてある）、魔女の搜索を再開した

「ここね…」

この淀んだ空気の中で特に淀んでいる場所にマミが立つ

そこに2、3発撃つと異空間へつながるゲートみたいなのが現れた

「美樹さん、あなたの木刀貸してくれるかしら？」

マミが差し出した木刀に触れると、戦乱の武将達が良く使っているようなシンプルな鉄刀に変わった

「これであなとも使い魔ぐらいは倒せるわよ」

「ありがたく使わせてもらうよ。なんなら魔女も一緒に退治する？」

「それには及ばないわ」

行きましょと先を行くマミ。

さて、気合い入れていきますか！！

「ここね…」

「意外とあっさり見つかったね」

「美樹さんが後ろをバッチリ守ってくれたからね」

ポジション的には逆なんだろうけど…

マミが前方の敵を撃って前進し、後ろからくる敵はあたしが斬る。
共闘は初めてだったのかマミはずっとイキイキしていた

話を戻すけど今いるところの下に魔女はいるんだけど…

「うわ…グロい…」

「あんなのと戦うんですか？」

「ええ、そうよ。でも大丈夫。」

マミは私達の周りに半球状の結界をはり、

「負けるもんですか」

颯爽と降りて魔女と対峙した。

…でもやっぱりグロい

「妖怪なんてもんじゃないわね」

小声で自然とそんな言葉が出てくる

人間の恐怖の象徴として具現する妖怪とこの世界の魔女。認めたくないけどどことなく似ている。……そっぴいやそもそも魔女って何かあかし知らない…

「ねえキュウベえ。魔女ってずっと昔、4000年ぐらい前にもいたの？」

『いや、有史以前から魔女はいたね』

「マジで！？そんな昔からいたんだ…」

この世界の妖怪のポジションは魔女にとってかわられたようで……
なんか憂鬱

「ティロ・フィナーレ!!」

考えてるうちにどうやらマミが勝利したらしい

「…すごい」

あたしは万が一のことがないようスタンバっていたけど結局あっさり倒して意味はなかった。…でもマミさん、ものすごく華麗に闘いすぎです。ほら、まどかが見惚れてる。これじゃ死の危険性があるって伝わりにくいぞ。けど言うのもなあ…。ベテランの動きって一種の芸術だって誰かが言ってた気がするけど、マミの闘い方もおそらくそれだろう。むやみに変えてもらってもんじゃないし…

魔女の結界も消えて、ビルの内部の景色になる。結局黙々とくことにした。変なことと言って負けられても困るし…あんまりキウウベえの前で霊力は使いたくない

マミが小さな黒い球体に針が刺さったようなものを持って歩いてくる

…何て言うか…負の感情がこれに集約されている感じ…

「これはグリーンフシードと言って魔女の卵よ。時々魔女が持っているわ」

「え！？大丈夫なんですか？」

『この状態のものは安全だ。むしろ魔法少女にとって役に立つものだよ』

マミは自分のソウルジェムを取り出した

「私のソウルジェム、少し濁っているでしょ？」

「本当だ」

「でも、ほら…」

マミはソウルジェムとグリーンフシードを近づける。すると、ソウルジェムの黒ずみがグリーンフシードに取り込まれた

「これで消耗した魔力は元に戻るの。魔女退治の見返しよ」

…それ見返しじゃないし…装備の補充とかそこら辺に該当するよね…

「ねえ、ソウルジェムが完全に濁るとどうなるの？」

「魔法が使えなくなるわ」

「それだけ？」

「私も良くわからないのだけれど、濁っていくとだるくなったり体に変調をきたして魔法が使いつらくなるからそうだと思うんだけど……」

「……で、そこんとこどうなの？スト……転校生」

そう向こうの影になっているところに問いかけるとそこからほむらが出て来た。

パターン化し始めてる……

「……何をいいかけたは知らないけど半分正解よ。」

「もう半分は？」

するとほむらは少し戸惑った後

「言う必要がない」

と切り捨てた

「じゃああたしが魔法少女になったら教えてくれる？」

言外に教えないと魔法少女になるぞという意味を含ませてみる

「……もしそうしたら……」

一気に苦虫を噛み潰したような顔になるほむら

なるほど…まどかだけでなくあたしにもなってもらうと困ると…

「出る杭は打つとでも言うのかしら？」

マミが口を挟む。

もしかして…マミやまどか…いや、キュウベえがいるから言いたくても言えない…？

「…ええ、そうよ」

「そう…それが答えと言うわけね…」

相容れないとマミは感じたのだろう。対するほむらは表情こそ変わらないものの…なんでか悲しそうに見えた

「あ、そうだ。昼間のガム食べた？」

「…ええ、とてもおいしかったわ」

もう用はないと言わんばかりに立ち去るほむら

ポケットからガムを一枚取り出す

「まどか」

「え？なに！？」

それをまどかの口に突っ込んだ

「！ー！うえ、ゲホ、オエ…」

「やっぱり不味かったか…」

「ひどいよさやかちゃん。こんなの…あんまりだよお」

「ゴメンゴメン。でもこれぐらいの試練で挫けてちゃこの先乗り越えられないぞ」

「魔法少女にこんな試練はないのだけど…」

マミが介抱しながらツツコむ

「けどあいつ、何を知っているのかねえ」

キュウベえを抱き抱えてその無機質な目を見て言う

『…』

キュウベえは黙して語らない。でもいつかは…

「洗いざらい吐いてもらわないとね…」

第一回魔女退治ツアーな4話（後書き）

ナガン「ニコ動でドイツ軍がまどかの二期か映画が作られるまで戦うって言うってたね。これでまどか マギカも安泰だ」

さやか「それはさておき今回の話、実は最初魔女は20年前から現れ始めたという独自設定にしてただけだ……」

ナガン「原作で有史以前からっていう設定が明らかになって変えざるを得なくなってしまうって……キュウベエの野郎……。でも変えて見るとこつちの方が後々の展開がしっくりきたからよかったけどね」

さやか「あんたこの小説終わらせたらどうすんの？」

ナガン「……昨日まどか達5人が麻帆良祭に遊びに行っていた漫画を読んでいる夢を見たんだ」

さやか「……おk、把握」

さやかのステータス

状態 良好

武器 刀10本 ナイフ2本 GSR2つ（300
発）

その他 なし

密会する2人な5話（前書き）

ナガン「GWに連日投稿という冒険を試みた結果がこれだよ」

さやか「多分これからもっと更新速度は遅くよね」

ナガン「リアルは火水木土が潰れてるからな」

さやか「毎日更新している人の凄さがみにしみてわかるよ」

ナガン「最後に一言、コラボとかやってみたい」

密会する2人な5話

ほむらサイド

言いたかった

あの時、声を大にしてキュウベえに騙されていることを叫びたかったでも、寸前に出て来た、信じてもらえない、という予測が二の足を踏ませた

いや、マミが信じることはまずないだろう。確かに、マミは魔法少女の中では上位に位置するが、心は弱い。だから真実を受けとめられない。あれはマミの心を充分に破壊できる爆弾だ。

マミの心を壊して戦えなくするのも考えたが、私の目的を達成するのには得策ではない。マミと私の2人でならワルプルギスの夜を倒せなくもないからだ。それに何回もお世話になった先輩を傷つけることも気が引けた。

だからマミに敵対心を向けられた時、悲しかった。誰にも頼らないと決めたのにこの様だ。笑えてくる

「あ、そうだ。昼間のガム食べた？」

…ああそうだったわね、つい今までとほぼ一緒だと思い込んですっかり忘れていたわ。いる。先入観に左右されず、情報を客観的に整理して考える、今までとは全く正反対な人が、すぐそこに

「…ええ、とてもおいしかったわ」

話そう。彼女に真実を

さやかサイド

「ふう…こんなもんかな…」

あたしは強化札を貼った刀を収納札に入れる

「…はあ…」

思わずため息がでる

率直に言うとなまくらすぎる。いや、刀はそこそこの業物だよ。でもあたしが前世で使っていた半身とも言える刀と比べると明らかに見劣りするんだよね。まあこのご時世にそんなものが見つかったら逆にアレなんだけど…

因みに札の中に入れれる量は巻物にしまうやつに比べて少ないけど貼ることが出来るから服とかに貼つといて、武器をすぐに取り出すことができる。あたしのは透明になる特別製

何で作れるかって？それは来る巫女の為に作っていた頃があったからですがなにか？

「って何説明してんだか…」

ピロピロピロ…

携帯が鳴る

番号は非通知

さて…真実でも聞きに行きますかね

「はい、さやかですけど…」

キュウベえサイド

ナガン

「夜、今日もキュウベえはさながら悪徳商法の営業マンのようにまどかに執拗に契約を…（ドカツ！）」

ナガンがログアウトしました

人聞きの悪いことを言わないでくれるかな。僕はただ魔法少女の良さについて話しているだけだよ

『まどか程の才能を持った人間は僕も今まで見たことがない』

「えゝそんなことないよ」

『本当だよ。君が契約すれば確実に最強の魔法少女になれる』

「さやかちゃんの方がすごいよ。私が魔法少女になってもさやかちゃんに勝てる気がしないよ」

『確かに彼女の魔法少女の才能はすごいわけではないけど、戦いのセンスはすごいからね』

「すごいよね。目の前に現れた使い魔に私なんか足がすくんだのに、さやかちゃんは眉一つ動かさずに切り捨てたんだもん」

こうスバツ！！と斬ってたよね、とまどかは美樹さやかの真似をする

『大抵のひとはそういうものだよ。彼女が物怖じしなさすぎるだけだ』

「そう言えばさやかちゃんがまともにびっくりするところを見るのは今日が初めてかも…」

彼女は全くと言っていいほど怖がらない。むしろこの程度は日常茶飯事であるような振る舞いだ

——…妖怪なんてもんじゃないわね——

妖怪

情報によると人間を食らい恐怖を与える存在である、物語に出て来る空想の存在であり、魔女と本質的に似ているが、どうやら彼女にとっては違うらしい

『まどかはさやかとはいっつ知り合ってたんだい？』

「中学生になってすぐかな…なんか成り行きでなっちゃったっていう感じで…」

まどかが続きを語ろうとしたら父親に呼ばれたので話が流れてしまった

小学生かそれ以前にさやかに何かが起きたのは確実だ
それが何かわからないけど…

『とても興味深いね』

さやかサイド

夜1時

見滝原中央公園

電話で呼び出されたあたしは誰もいない公園で1人寂しくベンチに
座って転校生を待っている

「…ふあ〜」

眠い…虫の鳴き声が子守唄に聞こえる…

「待たせたわね」

とそこへ転校生がやってきた。まわりを確認しているのかしきりに
目を動かしている

「まどか達、特にキュウベえならその気配は今のところないよ」

もうなれたようで転校生は特に動揺せず続ける

「…そう、なら心おぎなく話せるわ」

「さて、話してくれるよね？あなたの目的、そして出来ればキュウ

べえの秘密も」

転校生は話す内容を少し思案した後語りだした

「まずキュウベえだけれども、正式名称はインキュベーター、地球外生命体よ」

「へえ、イレギュラーな存在だと思っていたけどそうなんだ」

初めてみるのはもつと純粋なものがよかった…

「そしてその目的は…世界の延命だそうよ」

「世界の…延命？」

いまいち意味がわからない

「世界のエネルギーは限りがありそのエネルギーは使われる度に口スが生じる。そしてそれが尽きると世界は滅ぶ。その対策として彼らは感情をエネルギーに変える技術を発明した。それを使えば100%以上のエネルギー効率をもたらすことができるけれど、その感情そのものを彼らは持ち合わせていなかった…」

「そこであたし達人類に白羽の矢がたったと…」

思い出すのは前世の最後。あの紫でさえ崩壊を食い止めらる手段を講じることができず、その力は幻想郷の猛者がどんなに力を合わせてもまともに拮抗しなかった

確かにああなればどうにもならないか…紫達は…やめよう、寂しく

なる

「魔法少女はそれとどのように関係してくるの？」

「奴ら言っていたわ…第二次成長期の女性の希望と絶望の相転移が最もエネルギーを回収できるって」

ああ…なるほど…つまり魔法少女は魔女を滅ぼす為にあるのではなくて…

「…魔女は魔法少女の成れの果て。そしてあたし達はエネルギーの燃料としてしか見られてない…」

辛うじて出て来た言葉は震えていた

本来なら妖怪や神を作り出す感情はキュウベえ達によってすいとられた

つまりこの世界の妖怪や神はキュウベえ達に殺されたようなもの。

…キュウベえ——いやもう淫Qβでいいや——見たら殺そう、絶対

「察しが早くで助かるわ。グリーンシードはソウルジェムが濁りきった時に発生するもの」

「そしてまどかは…」

「最強の魔法少女にして最悪の魔女になりうる存在」

「…ふざける…」

「そうね。でもこれが真実よ」

「ママはこのことは…知っているはずないよね」

ベンチから立ち上がる

ここまでくれば、あとは簡単に答えはでる

「あなたの目的はまどかを魔法少女にさせないこと」

「その上でこの地に現れる魔女、ワルプルギスの夜を倒すこと」

「それはあなた1人で倒せるの？」

転校生は首を横に振る

「私ではあれは倒すのは難しい」

つまりこの場合あたしがするべき役割は…

「…とりあえずあたしはまどかが契約しそつになったら意地でも止めればいいってわけ？」

「ええ、あと出来ればママミの協力も取り付けて欲しいのだけど」

「うん無理」

爽やかに即答する

返し方がお気に召さなかったようでちょっとムツとした顔になる転校生

淫Qβ殺そうとした人の話なんてマミは信じないし、それぐらいマミは淫Qβを信頼している。逆にマミの目の前で淫Qβがそれを肯定すれば、最悪自殺しかねない勢いでショックを受けるだろう

「そう、じゃああなたはまどかの契約阻止に集中して」

「りょーかい」

さて…今夜はもう遅いし早く帰って寝よう…

転校生に背を向けてあるきだす

「待つて。今度は私が質問する番だわ」

がしつと肩を掴まれる

どうやらそうは問屋が卸してくれないらしい

「あなたは以前に魔女と戦ったことがあるの？」

「…いや、3日前まで知ってさえいなかったよ」

疑うような視線が返ってくるがこれが真実であるからあしからず。妖怪なら腐る程見たけどね

「もうひとつ、あなたのそのその武術。どこで習ったの」

…答えづらい質問を…

「独学」

「独学、ね」

瞬間眼前に突き出されたのはサープレスサー付きの拳銃、名称はM
K22

反射的に顔を右に反らし、右手で拳銃を左に

放たれた銃弾はあたしの髪の毛を数本さらう

そのまま手首を掴み捻って手首の関節を固定、左手を絡ませつつ、
そこを支点として右手を左に持つていく。追い討ちに転校生の右足を
ヒザカッコン

倒れたところにGSRを突き付ける

「いきなり打たないでよ」

「拳銃を向けられた時の対処の仕方、そしてCQC、あなたがこの
軍人さん？少なくとも一人でできる訓練ではないわよ。さあ、誰に
指南して貰ったの？」

こころなしに転校生が少し笑っているような気がする。

…もついいや。どうせ遅かれ早かればれると思うし

「…分かった分かりました！。話します！！嘘だと思っようなでた
らめな本当のことを！！あたしは前世の記憶を持っていて、前世の
あたしは武術の達人だったの！！」

空気が止まった

ヒュッ…

冷たい風が吹いた

若干帰りたくてやけになってた部分もあるけどここまでとは…

「…あなたふざけてるの？」

…転校生の第一声がこれだったよ

明らかに私怒ってます的な顔してるし…

「ふざけてない。大体マスコットポジかと思いきや黒幕だったキウベえよりは信じられるでしょ」

必死の弁解（？）が効をそうしたのか

「…一応信じてあげるわ、一応」

一応信じてもらえたよ

なんかこのままだとグダグダのうちに終わりそう…最後に真剣な話ぐらいはしとこう

「えーと、あんたがまどかを大切に思っているのはよく分かった…その上で最後に一つ聞きたいんだけど、なんでまどかにそこまでするの？まどかにそこまでの恩があるの？」

転校生とまどかの接点は考えられる限りない。まどかは入院したことがないし、たとどこかで出会ったとしても転校生もそこまでする理由もみつからない。家族とかを守りたいのならまどかを殺せばいい。でもそうしないのはまどかを傷つけないからと推測できる。

淫Qβの真の目的と魔法少女の真実を知った経緯も関係ありそう

すると転校生はさも当然のように

「ええ、返しきれない程の恩があるわ」

清々しい程の即答で返した

「…まああなたがまどかを守りたい気持ちは充分伝わったわ」

転校生はなにも言わない

「けどあんたが守りたいのはそれだけ？」

「…私はまどかが無事ならそれでいい」

…確かに全員を救えるわけではないけどさ…

「…それはまどかの為ではなくてあんたの為だよね。本当にまどかの為を思うなら…」

全てを救う気概で行かないとね

そう笑いかけたところ、転校生が何か言おうとしたので背を向けて

全速力で帰った

まどか1人残しても寂しいだけじゃん

密会する2人な5話（後書き）

ナガン「さて、転生者であることをバラしてしまったけど大丈夫か？」

さやか「大丈夫だ。問題ない。転校生が信じるはずがない」

ナガン「そっぴや未だにほむほむのこと転校生って呼んでるんだな」

さやか「転校生が心開いてくれたら多分変えるよ」

ナガン「それはさておき今回前世でさやかが持っていた半身とも呼べる武器、という文章があつたんだがなにがいい？」

さやか「見切り発車ここに極まれり」

ナガン「失礼だな。一応虚淵が武器はモンハンのやつを参考にしたとか言っていたらしいから、俺もそれにあやかるつもり」

さやか「オリ武器ではないんだ」

ナガン「私のネーミングセンスを舐めてもらっちゃ困る」

さやか「具体的にはまだ決まっていからこれがいいって思うのがあれば言ってね、ただし双剣に限るよ。15話ぐらいまでは出ないのでそこまで遅れても大丈夫で問題ないから」

ナガン「おまえとんだけエルシャダイ好きなんだよ」

さやかステータス

状態 変わらず

武器 変わらず

その他

キウベえの目的を知った
ほむらの目的を知った

許してしまった2人な6話（前書き）

ナガン「神かみは言っている（俺に）。全てを救えと…」

今回はマミさんのテーマを聞きながら書きました

許してしまった2人な6話

ほむらサイド

「全てを救え…」

さやかはもういない。さつき全速力で駆けて行ったからだ

「…できるわけじゃない」

今までだって守ろうとしたこともあった。でも何回繰り返してもまどかさえ守れなかったのに他の人まで手が回るはずがない

「…考えても仕方がないわね」

踵を返す

…前世…ね…魔法少女がいるのならそんなこともある…わけない。
そもそも話の終わり方だって少し強引だった。どうせ嘘が綻ぶ前に
帰りたいかったのだろう。

…言わなかった方がよかったかしら…

そんな後悔が生まれるが、振り払う

理由はともあれ彼女は頭が回ることには確かだ。私の選択は間違っ
てはいない…はず…

哀れさやか、どうやら彼女の君の評価はガクッと落ちたようだ

「……？あれは……」

ふと視線を前に戻すと魔女探索にきたのだろう、巴マミがまわりを見渡していた

さやかサイド

「恭介、今日もさやかちゃんが来てやったぞ」

今日はまどかと一緒に病院に行き、まどかを待たせたとある個室にあたしは向かった。あたしの古くからの友人の上条恭介が事故で入院している個室だ。決して愛しているとかなんな人じゃない。あくまでただの男友達です（断言）

「今日もってこの前きたのは一週間前ほどじゃないか」

「一週間に一度もきてるの」

ベッドの横にある椅子に座る

「んで、手の調子はどうなの？」

「ああ、うん。医師はもう満足に動かないって言ってたけどこのとおりさ。」

てをヒラヒラさせたり、グッパグッパする恭介

なんのことはない、あたしが夜な夜な忍びこんで治していたのだ。担当の医師には悪いけどそのふざけた予想をぶち壊させてもらいました。

「でも、さすがに足も…というわけにはいかないみたいでね」

ちなみに左手しか治してないのはさすがに余裕がない、というか足の方が酷くて完治出来なかったから

「まあ手が完治したらまた演奏聞かせてね」

「うんわかった。一番いい演奏を聞かせるよ」

「待たせたね」

恭介との面会も終わりまどかに迎えに行く

「もついいの？」

「いいの、ほら、さつさとマミのところに行い」

淫Qβを抱えてやってくるまどか。

…こけるんだまどか。そしてそのぺたんこの体で淫Qβを圧殺しろ
「ど、どうしたのさやかちゃん。なんか怖い…そして酷いこと言われた気がする」

「ああいや、なんでもないよ」

心を読むとまではいかなきけれど、何かよからぬことを考えてると気づかれたみたい。…もうそれぐらい時間が経ったのか…早いねえ…

前を歩いていると後ろでまどかが止まる気配がする

「?どしたの、まどか?」

「さやかちゃん…あれ…」

まどかの指差す先には黒いもやみみたいなを出しているグリーンフィードだった

『グリーンフィードだ!! 孵化しかかってる!!』

「見りゃわかるよ…。まどか、マミの連絡先知ってる?」

「うっん、携帯の番号知らない」

現状を踏まえて冷静な思考が最善策を叩き出す。

「…まどか、マミさん呼んできて。い…キュウベえは私といてアンテナ代わりね」

「そんな…危ないよ!」

『僕もオススメできないね。ここは2人でマミを呼びに行くべきだ』

「悪いけど、ここにはほっとけない人がいるからね…。それに…」

まどかに安心させるよう笑いかける

「あたしがこの程度で死ぬと思っっているの？」

まどかは一瞬戸惑ったがすぐに決意したようで

「わかった。すぐ呼んでくるね!!」

走って行った

…それにしても、こいつと一緒に…憂鬱だわ

マミサイド

いつもの集合場所で私は美樹さんと鹿目さんを待ちながら二日前の夜のことを思いだす。

「あなたはただの一般人を魔法少女に誘導している」

「特に鹿目まどか。彼女だけは絶対に契約させない」

「美樹さやかにはもう釘を刺しておいたわ。本当なら鹿目まどかにも刺しておきたかったけど」

彼女、曉美ほむらとは次は確実に戦うことになるだろう。話し合いはあの時限りだ。ただ…美樹さんに釘を刺したといったけど、学校では特に変化はなかった。

隠しているだけかもしれないけど、曉美ほむらに怯えることもなか

った。

…今思ったけど美樹さんが怯える姿が全く想像できない…彼女は窮地に立たされても挑発的に笑って抗うタイプだと思う

暁美さんと繋がりががあると最初疑ったけどよく考えるまでもなく無理があると思われる

暁美さんにメリットが見当たらないからだ

ちょっと外に出てみれば魔法少女なんてたくさんいる

グリーンシードを対価とすれば協力する魔法少女なんてすぐに現れる

なのにあえて魔法少女ではない美樹さんと協力するのは余りにもナンセンス

始め疑ってしまった自分が恥ずかしい

出会って5日だけど彼女の人となりは大体わかる

守ると決めたものは守り通す

そして彼女はもうそれを見つけている。

夢見る少年少女が言いそうな恥ずかしいこの信念

だけど美樹さんが言う又何故か実感がこもっている

羨ましい

彼女に対してそんな気持ちが芽生える。

片や守りたいものが確定している美樹さん、片や漠然と誰かを守っている私

私も見つけたいわね…

「マミさん!!」

声に呼ばれて顔を上げると鹿目さんが息を切らせて走ってきた

「グリーンシードが…ハア…ハア…病院で…孵化しかかって…ます」

「!!…わかったわ行きましょう」

私は駆け出した

さやかサイド

「…グロい…」

あれからやはり魔女の結界に取り込まれたあたしの目の前では手術中のランプがついた牢屋の中でスライムみたいなものがぼこぼこ何かを取り込んで大きくなっている。字面ではあまりグロくないが慣れてない人が見れば吐くと思う

それはともかくとして…

「…なぜあたしの肩に乗っている」

『なぜってさやかは近くにいないといけないからだよ』

「刀振る時に邪魔になる」

『その時には降りるよ』

使い魔さん。ここに美味しそうな白い獣がいますよ。早く食べてください

『それで、君はどこまで知ってたんだい？』

「…なんのこと？」

『魔法少女のことだよ。ここ最近君の僕に対する反応が違ったからね。3日前の夜おそくにどこかに行っていたみたいけど、おそらく暁美ほむらから教えてもらったところかい？』

「…全部。魔法少女と魔女。そしてまどかのことも」

『何故暁美ほむらはそのことを知っているんだい？』

「教えるとしても？」

『だろうね』

わかりきったことの応酬

「あなたの目的が宇宙の為だろうがなんだろうがまどかを魔法少女にはさせない」

『数多の命より一つの命をとるのかい？君達はいつも他人を切り捨てても身内を守る。同じ種族なのに何故重要性が違ってくるのか訳がわからないよ。かわりはいくらでもあるはずなのに』

「あんた達の価値観で人間は計れないよ。それにね、どうせ終わりは避けられないんでしょ？ならあんた達がやってることって結局意味ないじゃん。それに100年以上未来のことなんかあたしには関係ないし」

『これは君達人類の為でもあるんだよ。いずれ君達が僕達と同じ立場になった時、枯渴寸前の宇宙を渡されても困るよね？』

「ならその時になってから人類に頼んでよ。何度でも言っけど、今のあたし達には関係ない」

それにさ、と以前やったようにキュウベえを両手で前に持ってきて見据える

「あんた達にとって人はただの宇宙の燃料にすぎないんでしょ。どうせやるだけやって不都合が起きたら後はあたし達に押し付けてトンズラする気でよね」

キュウベえは黙して語らない。相変わらずの無表情。その時

（「キュウベえ、美樹さん。聞こえる？今結界の入口にいるのだけれど」）

マミからの念話が入る

（「聞こえるよ。こっちは無事。相変わらず魔女はボコボコいつててキモいけど」）

（『派手に暴れて魔女を刺激するのもまずいからなるべく静かに入ってきて』）

（「わかったわ」）

そう言つてマミは念話を切った

ボコボコと不協和音が響く

『実は君にも魔法少女になつてもらいたいんだ』

唐突にキュウベえがそんなカミングアウトをかましてきた。

こいつ何言つてんの？今までの会話全力で無視して来やがったよ

そんな視線を送っていると

『別にさっきのことを無視しているわけじゃないよ。君は何か魔力に相当する何かを有している。君が魔法少女になればもしかしたら予想をはるかに越えたエネルギーを手に入れられるかもしれないからね』

おもいつきり一部、しかも重要なところを無視してるよこいつ……つかバレてたらしい

「それこそあり得ないから」

『そう？まあ契約したくなつたらいつでも言つてね。力になるよ』

誰が借りるか吐き捨てておく。いつの間にか魔女の孵化が終わりそうだった

（「マミ、魔女が孵化する。早くきて」）

（「わかったわ。今日という今日は即行で終わらせてあげる」）

やけにテンションが高い返答がかえってきた。何かいいことでもあったのか？

物陰に隠れて様子を見る

牢屋がいつの間にかお菓子の箱のようなものになっている

箱が破裂し、中から可愛い人形が長い椅子の上に乗って現れた

「さやかちゃん!!」

「美樹さん!!」

とそこへちょうどマミ達が合流してきた

「あなた達はここで待ってて」

と嬉しさを隠しきれない笑顔で駆けていくマミ

「ねえ、まどか。マミすごくうれしそうなんだけどなんかあったの？」

まどかは照れながら

「えっと…この戦いが終わったら私も魔法少女になることになったのやっ…」

まどかもうれしそうだがあたし（転校生も）にとっては無茶苦茶まずい

まどかを魔法少女にさせないと言ったそばからこれですか…

どうやったらまどかを穏便に魔法少女にさせないように誘導するか
考えこむ

そのせいだったかもしれない。いや、まどかもマミの戦いに魅せられたようにあたしも少し魅せられていたのかもしれないし、マミが負けるはずないと無意識に思っていたのかもしれない。ともかくいるんなことが偶然重なりあって…

あたしはマミさんが人形から出てきた新たな魔女に頭を食いちぎられるのをただ見ているしかなかった

許してしまった2人な6話（後書き）

BGM マミさんのテーマ

マミ「……」（背後に修羅が見える）

ナガン「……」（全力で顔を背ける）

マミ「……」（静かに歩みよる）

ナガン「……」（目があっってしまう）

マミ「……」（ニコッ）

ナガン「……」（ニコッ）

マミ「ティロ！！フィナーレ！！」（殴打）

ナガン「ぐふあー！！」

さやか「えゝさつきから何かを殴る音が続いているけど気にしないでいくよ」

さやか「今回の話はマミさんがマミののを許してしまう2人な6話さやかとまどかだったね。え？マミがマミらないって誰が言ったの？前書きでさうと原作沿いにするって言ったけど」

さやか「今回マミさんには（副詞句）退場してもらって後書き要員となるけど今後の展開しだいでは…どうなるんだろ？」

さやか「これ以上はネタバレになるけど、妖怪と魔女の関係が重要になるかもね」

さやか「今回は絶対フルボッコするよ」

さやかのステータス

状態 変わらず

武器 変わらず

その他

マミが魔女に不覚をとる。生存は絶望的

勝手に定められる一匹な7話（前書き）

ナガン「タイトル通り、今回はQBの捏造設定満載です。それに伴って一部原作と矛盾するところが出てきますがご容赦を」

勝手に定められる一匹な7話

さやかサイド

バキッグチャッ

肉が潰れる音が響きわたる。

一瞬なにが起こったかわからなかった、なんては言わない。戦闘中の思考の停止は一瞬でも死を招くから。だからあたしは冷静にそれを認識する、してしまう…

そしてあくまで冷静に…キレた。

縮地でマミの体をさらに咀嚼するという万死に値する行為に及ぼうとする魔女の横に移動し、霊力を込めて思いきりぶん殴る。

魔女は面白いようにぶっ飛ぶ。

その際口からナニカがとびだす。

これで遠慮する要素は1つも無い。

その存在のチリ一片も残すことも許さない。

完膚無きまでに殺す！！

霊弾を体の周囲に出現させる。その数約100個

それを射出してすぐさま先ほどと同じ数の霊弾を出し、撃つ

「マスタアアアア」

そしてしばらく生き残っている魔女の上に跳び右手に溜めていた霊力を解放する。白黒の魔法使いやフラワーマスターが十八番にしているけど、その気になれば使える人は使える技

「スパアアアアーーク！！！」

魔女は光の奔流に飲まれ跡形もなく消えさった。

カラン

グリーンシードが割れて血に濡れたカップの中に落ち、魔女の結界が消える。マミの遺体は結界と一緒に消えたのか見つからなかった。代わりにソウルジェムがグリーンシードのそばに落ちていた。

それらを拾って握りしめる。

まどかは泣いていた。何が起きたかまだ理解できてない顔で

「……くそつたれ！！」

マミが死んだ。

そのことがあたしをがんじがらめに締め付ける。

マミだったら大丈夫？いつだれがどこで決めた！！

腹がたつ。マミを殺した魔女に。何より油断していたあたしに！！

気付けば手から血がでていた。強く握りしめたせいだろう。

「そのグリーンフィード…渡してくれないかしら」

背後から転校生の声がする。

「…これは渡せない」

「あなたが持つていても何の役にも立たないわよ」

「…誰がなんと言おうとこれはあたしのだ。渡さない。」

あたしはその場から立ち去る。

ここにいとまどかや転校生にあたりそうだ。何より…耐えられない。

…昔はこんなに取り乱したりしなかった…

ホント…平和ボケしてたよ…

14年

人間^{ヒト}になってからあたしはどれだけ弱くなったのだろう。

キュウベえサイド

すごく興味深い

美樹さやかがあの力をあそこまで使いこなし、あまつさえ魔女を打倒できるその力。

アレを研究すればまた宇宙の寿命を伸ばせる方法がまた1つ増える

はずだ。

でも、疑問に思わないかい？

さやかがどのようなにしてあそこまでアレを使いこなせるようになったのかも興味深いけど、本当にアレを使えるのは彼女だけなのかい？

過去を含めて、人類史上始めて彼女に備わった力だとは到底僕は思えないな。

過去にもいたはずなんだ。さやかのようにアレを使いこなせる人間が。

そこで地球の過去の情報をマザーベースで調べて見たんだけど、ここでも興味深いことを発見したんだ。

西暦1896年以前の情報が丸々無いんだ

まるでその年から地球に降り立った様にね。

もともと地球の情報なんて欲しがる個体は有史以前の頃しかほとんどいないにしてもおかしい。

調べて見ると1886年に地球を監視していたマザーベースが突如爆発、僕たちが住んでいた星も同時に消滅したんだ。

結果それ以前の感情エネルギーの収集量等の重要なものを除いた全ての情報が消えた。

マザーベースにいた固体は当然全滅。星の方も信じられないと思うけど逃げる暇がなかったらしくてこちらも全滅。

月程の大きさの惑星だったけれど前触れも無しに一瞬で消滅するなんて普通あり得ないはずなのにね。

さらに地球に滞在している固体から情報はまた復元できるのにそれ

がなかったんだ。

すなわち地球上の全ての固体がその時まで死滅していたと言えるよね。でも数がだんだん減少していたなら、マザーベースも異変を察知してそれに対応するはずなんだ。

その対応もとられなかった。いや、出来なかったと言っべきかな。地球上の固体も一斉に死んだことになる。

時期が合いすぎだとは思わないかい？

地球に存在するなんらかの生命体が僕たちを殲滅しようとしたのは確実だよな。

そこで今度は別の角度から調べて見たんだ。

西暦1896年以降の魔法少女の数の合計と魔法の発生数と死亡数の合計

理論上これらは多少の誤差はあれど等しくなるはずなんだ。

でも、ズレたんだ。

累計魔法少女数

305249

魔法発生数

263217

死亡数

40031

ズレ

2001

何なんだろうね。

このズレは

とても興味深い

でもさ、さやかのもつアレと魔力が合わさったらどうなるか…もつと興味深くないかい？

僕という固体が誕生して25年の中で一番興味深い事柄だ。

これはマザーベースに記録しておくべきだね。

ちなみに、僕たちインキュベーターにはSOPリンクver11014というのがあってね。思考の共有は勿論、マザーベースに”更新”と思うだけで自分だけが持っている情報をマザーベースに記録できるんだ。そしてそれはすぐに全インキュベーターに反映される。ただしこれは10年前に最新版になった時に追加された機能だけだね。

最近は常時マザーベースに情報が記録できるように改良していると聞いているけど、難航しているらしいよ。

閑話休題

さて、もうすぐさやかの家につくけど、もう本人の同意なしで契約してしまおうか。いや、それだとマザーベースからつきあげをくらってしまうから無理だね。あくまで合意の上じゃないと駄目だってうるさいんだよ。

まあ、逆に言えば合意さえ貰えばマザーベースは何も言えないんだよね…

さやかサイド

『驚いたね。君にあそこまでの力があるとはね』

夜、あたしがベットに寝そべっているとどこからともなく淫Qβが現れる。
横に寝転がって背を向ける。こいつとは話もしたくない。

『マミが死んだのは君のせいだと自分を責めているのかい？』

「…」

『僕には理解出来ないな。たかが69億人中の一人が死んだただけだ。代わりなんていくらでもじゃないか』

こいつ喧嘩売りに来たの？

「…マミの代わりはどこにもいない」

『ならなぜあの力を最初から使わなかったんだい？そうすればマミは今も生きていたかもしれないよ』

「…うるさい」

こいつ絶対喧嘩売りに来たな。次なんか言ったらその喧嘩買ってやる。

『異端と思われなくなかったからかい？それでまどか達から恐れら

れたくなかつ…』

ヒュヒュヒュン

起き上がりつつ振り向き、札から出したナイフで切り刻む

淫…もう白い生物ナマモノでいいや——はバラバラになり中身をぶちまけた。

「…確かにあたしはまどかや家族にもこのことは話してない。他人から嫌われるのはなんとも思わないけど、親しい人から嫌われるのは嫌だったから」

独り言のような独白

「でも、そんなんじゃ救える人も救えるわけなかったね…」

前世のことを思いおこす。

妖怪になってすぐの時、一度妖怪だとバレると怖れられ、避けられ、襲われる。

それがいやだから、妖力をひた隠し、人を襲う妖怪を退治して、自分分は人にとって無害な存在だと示した。

幻想郷にいた時も神として振舞い、妖怪としての部分は極力見せなかった。

そついや一回そのことについて聞かれたことがあったっけ…。その時ははぐらかしたけど…

「…なーんだ」

あたしは今も昔もハブられるのがいやで、根幹はなににも変わってなかったんだ

「よし！！決めた！！」

なら、ここで覚悟しよう。もう出し惜しみはしない。
こわがられるとか恐れられるとか知ったことが。

今度こそ、あたしは…

「全部守ってやる」

勝手に定められる一匹な7話（後書き）

ナガン「さて、さやかにフラグがすごい勢いで立ちました」

マミ「（男性の写真を見せて）この人あのマミさんが好きすぎる人の動画を最初に作ったんですって」

ナガン「…いや、マミさんそんなことはどうでもいい…」

マミ「（別の男性の写真を見せて）この人は吹き替えをした人よ」

ナガン「…さて、今回QBの過去に起こった事件を捏造しましたが…」

マミ「（ナガンの写真を見せて）この人はさやか派で何がしたいのかしらね」

ナガン「……………」

マミ「この人は…」

ナガン「うるさいよ！！そんなに後書き要員にしたのを根に持っているのか！？どうせ生きてても豆腐メンタル発動するから扱いづらいことこの上無かったんだよ！！」

さやか「（肩を竦めて）あゝあ、言っちゃったよ」

マミさん指を鳴らす

ガチャ

再びマミさんが好きすぎる人（以下MSH）ゲスト出演（マスケツト銃装備）

ナガン「え？いや、なんでそんなもん持ってるの？」

マミ「彼に5万で売ったのよ」

ナガン「したたかだな！！つーかあわなさすぎるだろ！！」

マミ「大丈夫よ、弾は入ってないわ」

ナガン「余計に危険度がました！？」

ゆっくりと歩みよるMSH

ナガン「ひっ！！わかりましたマミさん生き返りますからティロ・フィナーレ（殴打）はやめ…」

ティロ・フィナーレ（殴打）！！

「ぬお！（ネックショット）」

ティロ・フィナーレ（殴打）！！

チャキーン

「ぐああー！！（ヘッドショット）」

ナガン「何なの今のSE!？」

マミ「彼最近MGOにはまっているらしいわよ。RPG撃つときに『ティロ・ファイナーレ!!』って叫ぶのには感動すら覚えるとか…」

ナガン「お前はそれでいいのか!？」

さやか「最後に言っておくけど次回は今までで判明していることを整理した設定を投稿するよ」

さやかのステータス

状態 良好(?)

武器 変わらず

持ち物 マミのSG

GS 1個

その他

QBの契約優先順位が入れ代わりました

まどかに霊力の存在を見られた可能性があります

設定その2（七話まで）（前書き）

これは世界観とか他のキャラクターの設定です

設定その2（七話まで）

Q B

とにかく合理的である。感情がない様に振る舞うが、もしかしたらあるかもしれない

有史以前から地球の人類に目をつけ、魔法少女の契約を行っていたが、1896年以前の具体的な情報が消滅している。もともと地球の文化等に興味等さらさらなかったたので、取り沙汰されてこなかった

1886年のQB星消滅の犯人は現在も搜索中だが、情報を記録していた媒体が根こそぎ無くなり、生存者も存在せず、手掛かりもまるでないので、どのようにして遂行したのかさえわかっていない

ただし7話のキュウベえの考察が進展をもたらす可能性がある

現在さやかのもつ力にいたく興味を引かれている

一般人に視認できないのは簡単な認識阻害の魔法をかけているからである。

妖怪や神について

さやかは存在しないと思っているが、実際は定かではない。ただし全体的な弱体化は免れることはできないだろう。（妖怪や神の全個体が弱体化するわけではない）

幻想郷は存在している。

???

QBの星を滅ぼした存在

技術が恐ろしく発展したQB達でさえ今だ片鱗も掴めていないことがその恐ろしさを物語っている。

死にかける2人な8話（前書き）

ナガン「俺、これ投稿したら、中間の勉強始めるんだ」

死にかける2人な8話

さやかサイド

「…はあ…ハア…」

折れた刀を捨てる。

後二本か…大事に使わないとね…

遠くに悠々と町の上空を飛び、町のほとんどを蹂躪していった特大の魔女を睨み付ける。

「さやかちゃん…行っちゃうの？」

既に息絶えたほむらのそばからまどかが声をかける。

「…うん、行ってくる」

「どうして！？ほむらちゃんも死んじゃったのに…」

「だからこそ、あいつを倒せるのはあたししかない。」

「わたしだって、魔法少女になれば、一緒に…」

「まどかはほむらの最後の言葉を聞いたんでしょ？。」

まどかはぐつと言葉につまる。

「それは…」

「あたしも聞いちゃったしね。なおさらだよ。」

俯くまどか。

「ねえ、逃げようよ…だって、仕方ないよ…誰もさやかちゃんを恨まないよ…」

「誰も恨まなくても、あたしが後悔する。このままあたしの大事な人達を殺した相手に尻尾巻いて逃げるなんて、絶対にできない。」

ポタポタと水滴がほむらの頬に落ちる。

「まどか…あたしはあんたと親友になれて、本当によかった。だってこんなにあたしを心配してくれるもん。あの時さ、まどかを助けられたことは密かなあたしの自慢なんだ。」

だから、さよならは言わない。

気付かれないように右足を後ろに少し下げる。

「それじゃまどか…」

またね！！と背を向けて一気に跳躍

まどかの叫びを聞きながら、魔女に突撃した。

ガバッ

「…ゆ、夢才チ…はあ…」

なんつー夢だ、とため息をつく。

なんで玉砕覚悟で突っ込んでるんだあたしは？そして何故転校生を親しく名前で呼んでたの？後殺してごめん

ベットから離れて身支度をする。

今日も嫌な予感しかないわ

いつも通り登校すると、昨日殺したはずのキュウベえがまどかの肩に乗っていた。

…いやまあ確かにその予感はしてたよ。あれでことがすむなら転校生が真っ先に殺しているはずだし。

（「…あの、さやかちゃん。昨日のことなんだけど…」）

…やっぱりまどか見てましたか…

（「後で話す。だから今はやめよう」）

まどかは何か言いたげだったけど何も言わないでくれた。

昼休み

あたしとまどかは屋上に来ていた。
向かいの屋上にはやっぱりマミはいなかった。

…やっぱりそう割りきれないな…

「…さやかちゃんは魔法少女にだったの？」

まどかがこう切り出す。

「違う。あれはあたしが生まれながらに持っていた能力^{ちから}」

手を広げてその上に霊弾を一個作る。

「あたしは霊力って呼んでる。」

手を振って霊弾をかき消す。

「それで…魔女を倒したんだよね？」

「…うん、そうだよ」

「どうして…最初に言わなかったの…？」

やっぱりわかっているけど聞いちゃうもんだよね…

「…嫌われなくなかったから。おかしいよね、まどか達があたしを嫌うはずなんて万が一にもないのにね…」

「それは…！！そう…だよね…」

まどかは顔を俯かせた

「わたし…怖くなっちゃった…」

あたしの弱気な発言にあてられたのかまどかはぼつりぼつりと言葉をこぼしていく

「最初は…マミさんやさやかちゃんが戦っているのを見て、怖いけ

ど…すごいって思った。力に成りたいって思った…けど、マミさんが死ぬのを見て、そんな想い…全部ふっ飛んじやった…」

まどかの靴の辺りが濡れていく。

近くによってまどかを抱き寄せる

「いいよ、まどか。あんたは正しい。いくら資質があるといっても、か弱い女子中学生。いきなり死と隣合わせの戦いに出ることなんてない。」

まどかが生物を見る。ちなみに生物は最初からいた。空気だったけど

「ごめんキュウベえ…わたし魔法少女にはなれない…」

謝る必要はないぞまどか…むしろこいつが謝るべき。

『そうか…それが君の答えなんだね…』

まどかは頷く

「これからここら一帯はどうなるの？」

『ここは有数の魔女の出現率が高い場所だ。おそらく外からきた魔法少女達の奪い合いが発生するだろうね』

「その人達は…マミさんみたいな人じゃないんだよね」

まどかが尋ねる

『確かにマミのようなタイプは珍しいよ。他の魔法少女は損得を考えるからね。誰だって見返りは欲しいさ』

まあ、綺麗事だけで世の中成り立っているわけじゃないしね

『それじゃあお別れだ。僕は僕と契約してくれる人を探しに行かないと。短い間だったけど、楽しかったよ』

「さよなら、キュウベえ…」

「…（さつさと消えるこの****）」

若干副音声が入ったが一応形だけの別れの挨拶をしておく。どうせまた会うことになるだろうし

生物は何も言わずに去って行った。

キュウベえ（生物）サイド

さて、どうしようか

学校から出て移動しながら考える。

まどかは進んで契約する気はなくなった。さやかも言わすもがなだまあ、方法がなくなった訳じゃない。

ある清潔感溢れる建物の中に入る。

する気が無くても契約せざるを得ない状態をつくれればいいのだからね…

キュウベえの瞳の先にはリハビリに励む上条恭介がいた。

『キュウベえ1632651とジユウベえ1211654かい？こちらキュウベえ1557832だけど…』

さやかサイド

夜

家で勉強していたら恭介の足の包帯の中にある札が恭介の異常を知らせた。

「ストーカーじゃないよ。ちょっと治療が上手くいかなくて変調をきたした時にあたしがわかるようにしたただだからね。治療し始めた時にはりっぱなしにしておいて忘れてただけだから。」

ホントダヨ

「ってなに弁解してんだあたしは」

家から飛び出して病院に向かって飛ぼうとする。

『どこへいくんだい？』

こんな時に限って目の前に生物が現れる。

「…邪魔。どいて」

押しのけて飛ぼうとした。

『病院に行くのかい？行ってもいいけど、その時は君の親友が死ぬよ。』

飛べなかった。

「どういうこと？」

生物を掴み上げる。

『君がいつも一緒に登校している緑の髪の女性、確か仁美だったかい？、が魔女の口づけを受けてしまったようだよ。まどかが止めているけど無駄だろうね。』

仁美が！？こんな時に！？

おかしい。偶然ならなんでこいつが2人の危機を知っている？
そしてそれをあたしに教える意味は？

「キユウベえ…」

まさか…

キユウベえは隠しきれないとも言つように続ける。

『さやかには是非契約してほしくてね。君の親しい人達に少し種を仕掛けておいたけど、まさかこんな早くに使うとは予測してなかったよ』

「キユウウベええええ！！」

見くびっていた。

こいつは感情がない。親しいなんてそんな感情的なものの理解できない

いとふんでいた。だからこんなことはしないだろうとたかをくくっていた。

ピリリリリ

携帯がなる。まどかからだ

『さやかちゃん！？仁美ちゃんに魔女の口付けがあるの。倉庫街にいるから今すぐき…』

電話に出ると切羽詰まった声でまどかが助けを求めてきたけど、誰かに切られたような不自然な切れ方をして、それきり一定音しかない。

と同時に恭介がアレスト（心肺停止状態）に陥ったことを札が知らせる

マズイマズイ

焦るな！落ち着け！

パニックになるのを抑えて冷静になるよう努める

『さて、どうするんだいさやか？このままだとどちらかが死ぬのは確実だ。だけど僕と契約すれば二人共助かるよ』

前言撤回！！こいつ悪魔より性質が悪い！

とりあえず種？だったか？これはただのハツタリに決まってる。まどかにはほむらがついてる。まどかの為なら仁美も助けるはず。

仁美達をほむらに任せてあたしが生物を無視して恭介のもとに急行しようとした時、あの夢が脳裏に浮かび、足を止まらせた。

この選択は、本当に正しいの？

ここで契約しなかったらあの夢に繋がって行くんじゃないのか？

確信にも似た予感が頭を駆け巡る。

…ハハ、何を迷ってるんだあたしは、自重しないって昨日決めたばかりなのに…

踏み出した足を戻して生物と向き合う。

ならば敢えて相手の策にのるのも自重しない。

まどかサイド

これは…罰なのかな…わたしがマミさんを見殺しにした…

帰りに見かけた仁美ちゃんの首に魔女の口づけを見つけて、引き止めようとした。

けれど、止められなくて、ついた倉庫には同じように魔女の口づけを受けた人がいっぱいいた。

さやかちゃんに助けを求めたけど携帯を仁美ちゃんに取り上げられてしまう。

その後集まった人達が集団自殺をしようとして、それは何とか阻止できたけど、そのまま魔女の結界に取り込まれた…

結界の中で四肢を引っ張られて頭の中ぐちゃぐちゃにされる…

…しょうがないよね…罰なんだもん

目を閉じる

その時…

「いや、罰なんかじゃないね!!」

四肢を引っ張っていた使い魔が蒼い閃光にかき消される

「マアスタアア」

聞き覚えのある声

辺りを見渡すと

「スパアアアク!!」

青い魔法少女の服を着たさやかちゃんが魔女に向かって極光を放っていた

さやかサイド

「いやゝ危機一髪ってところだったねゝ」

グリーンシードを回収してまどかに歩み寄る

でもこの服着てるとほんと懐かしい。身体が軽くなるって言うか…

気持ちが高ぶる感じがする。なんとなくだけど予感してたよ、前世のあたしの服になるだろうなあって。そここのところだけはいっくに感謝…は絶対しない

「さやかちゃん…それ…」

まどかが私の服を指差す

「ああ、これ？これはね…なるしかなかった、というかキウウベえに嵌められた」

「えっ、それってどういう…」

意味なの…とまどかが言おうとした時

気配がしたので振り向くと転校生が目を見開いて立っていた

「あなた…どうして…」

「さつきも言っただけで嵌められた。具体的に言くと仁美と恭介が同時に全く違う場所で死にかけててあたしじゃ片方しか救えなかった」

敢えて契約したなんて絶対に言わない

「えっ！？上条君大丈夫なの！？」

「…生物は氣にくわないけど契約は成立したからね。今頃全快になつて不思議がつてるんじゃない？」

後日聞くとその時医者がショックで死にそうになったとか…

「とにかく！まどか！！」

ガシッと肩を掴んで言う

「今後一切生物に耳を傾けちゃ駄目だから！！あいつは悪魔よりひどいやつなの！！分かった！？」

「はっ、はいい！！」

あたしの気迫に押されたのか涙目になって答えるまどか

一応分かってくれたみたい…。後でまどかの家に対生物用トラップを施そう

さてと…

転校生と向き合う

「…別に考えなくあいつと契約したわけじゃない。こっちの方がいろいろと都合がいいからね。」

転校生は何も言わずに踵を返して去る

「…これだけは言っとく。あたしはただでは転ばないから」

帰る、とまどかに声を掛けて帰る

…なんかあたし転校生に嫌われてる？いやいや、真実を話してくれ
たしそれはない…はず…。うん、転校生は一人の方が都合がいいんだ。
きつとそうに決まってる

ガツクリとため息をつく

「どうしたのさやかちゃん？」

「いや、ままならないものだなあって…」

まどかは首を傾げている

出来れば共闘したいよ…

ほむらサイド

ハア…

「…最悪だわ」

まどかに注意を払い過ぎていた

これまで美樹さやかには手を焼かされてきた。そして最後には周りを巻き込んで潰れていく、はた迷惑な人物。

今度は違うようだったから共闘も考えたが、まどかももれなくついてくる。

これは不味い。まどかにはできるだけ離れていてほしいからだ。幸いさやかもキュウベえとの契約阻止に尽力してくれているようなので、さやかにはこれからもそれに専念してもらおう。

そろそろ彼女もくるころだ。戦力は充分。何も問題はない

考えが纏まったところである疑問がふと浮かんた。

そういえば先日魔女を美樹さやかはどつやって倒したのだろう…？

死にかける2人な8話（後書き）

マミ「さて、今回死にかける2人（仁美と恭介）な9話だったけれど…」

絢子「今回のキュウベえ外道だったな。さやかの親友の命握ってゆするところなんてもうな…」

ナガン「親しみというのはキュウベえにとって理解出来ないものだが、自発的に会う回数が多い人物〓親しい人とQBは認識しているぞ。

あと家族を人質にとらなかったのはあの時さやかが対処できた為。家から遠いところにいたら家族が人質になっていました」

絢子「外道ここに極まれり、ね…っか、それだとウチもヤバくないか？」

ナガン「そこはちゃんと理由（逃げ道）がある。きっかけは7話のQBの考察と興味が他のQBに反映されたこと」

絢子「ああ、成る程ね、本来ならさやかを拘束してでも霊力について研究するだろうものだが、

そいつが魔力と霊力の合成にかなり興味を持っていたから、考察が反映した時にその興味が最優先事項となっただってわけか…」

ナガン「exactly」

マミ「うわ、気持ち悪…」

さやか（…なんで鹿目ママが溶け込んでいるのだれもツツこまない

の
)

さやかステータス

状態 良好

武器 変わらず

持ち物 マミのSG
GS 1個

その他 QBと契約
魔法少女になりました

今更隠す必要もない一人な9話（11月27日改）（前書き）

（ 「今回は短いよ。後しばらく僕の出番は無くなるようだね。訳がわからないよ」

今更隠す必要もない一人な9話（11月27日改）

さやかサイド

ここであたしの手札を確認しておこう。自分の強さの確認は重要だ。自分にできることの限界が分かる。言い換えれば引き際を見極められる。

・魔法少女に変身すると若干テンションが上がる。

これは少ししたら慣れてなくなるからあまり意味がないはず…

・魔力が使えるようになった

これで誰が魔法少女なのか一目でわかるようになる。
近くにいればソウルジェムが反応するから。

で、だ…特筆すべきなのはこれ。

・霊力が使えなくなった

どういうことなんじゃあああああ！！

これじゃプラスを帳消しにして尚あまりあるよ！！

しかも原因、理由がさっぱりわからない。魔法少女っていう存在が魔力しか使えないって誰が決めた！！

——『なんだ…つまらないね…』——

昨日あの子の生物の落胆したような言葉には誰でもキレるよね

まどかのところに行くまでずっと生物を擦りきれるまで地面に擦り付けながら走って行ったね。全然イライラは収まらなかったけど

取り敢えず生物を見かけたら流れるような条件反射で蹴り飛ばすレベルまでなにかが昇華したよ！！

札？ただの紙になりましたけど？

「…というわけであたしは魔法少女になるしかなかった」

次の日、まどかに昨日のことの顛末を話した。勿論、魔法少女の秘密とかは話してない。

「…そんな、それじゃあずっとキュウベえは私達を騙していたの？」

信じられないと言う風に尋ねるまどか

「あいつからしてみれば、不都合なことは話さなかったけれど同意したのはあたし達。だから騙してなんかない。むしろなぜあたし達が怒るか理解できてないって感じなんじゃない？」

「そんな…」

「まどか。これからまどかは多分、いや絶対生物は執拗に表れて契約をさせようとするはず。一応まどかの家にはAQB Tをたくさん仕掛けておいたから大丈夫だと思うけど絶対耳を貸しちゃダメ。わ

かった。」

さらっとまどかの家に不法侵入しましたよとカミングアウトする。

「何真顔でとんでもないこと言ってるのさやかちゃん!?

はっ!! A Q B T てもしかして対 Q B 用トラップ (a n t i Q
B t r a p) の略称!?

しかしさすがまどかと言うべきか、ボケはしっかり回収する。

「大丈夫だって、見えないから。」

「そっという問題じゃないよ!!」

えー、と不満をもらす。

まあ自分家にいきなりたくさんのお金を仕掛けましたよと言われれば、
誰だって嫌だろう。

けど、状況が状況だけに我慢してもらいたい。

「まあいくらあたしだってまどかを四六時中監視して生物との接触
を阻止できない。つかそんな転校生のようなストーカーまがい
のことはしたくない。」

「わたしだっていやだよ!! え? わたしほむらちゃんにストークさ
れてるの!?

もう何も信じられないとまどかは頭を抱え始めた。

無視して本題にはいる。

「そこでまどか…あたしと一緒に魔女退治に着いてくる？」

「えっ…」

まどかは予想外の言葉にきょとんとしている。

「あたしは魔法少女。だからここら一帯の魔女は倒さないといけない。だからと言ってまどかから目を離すのも駄目」

ここで一旦区切る。

「でも、これはまどかに危険が及ぶ。もしかしたら死ぬかもしれない。断つてもいい。それならそれで別の案を考えるから」

するとまどかはフフツと笑った

「死なせるきなんてさらさらないんですよ。それにひとりぼっちは寂しいしね。いいよ、さやかちゃん。一緒に着いていつてあげるよ」

今度が自分がきょとんとしてしまった。

「フフツ」

自然と笑いがこみ上げてくる。

あたし達はしばらく笑いあった。

「…そこまで言われたら守るしかないじゃない。わかりました。あたくし、美樹さやかは全力であなたを守りましょう」

まどかの前でひざまずく

「（うつうつ…さやかちゃん妙にノリノリだ…）えっと…慎んで承ります？」

…うん、さすが。ここぞという時に締まらない。それがまどかクオリティー

膝についたもの払って立ち上がる。

うん。なんかすごく空気が微妙だあ♪

「…取り敢えず今日は行くところがあるから明日からよろしく」

最後に締まらないと何か後味がだね♪

勉強になったよ。ハハッ

夕方

「京介、昨日容態が急変したって聞いたけど大丈夫？」

あたしは京介のもとを訪れる。その道中白い生物がいたので近くの公園のトイレに流しておいた。

「大丈夫…みたいだよ。僕は意識がなかったからわからなくてね。気が付いたら足が動くようになっていた、ぐらいの感じしかないからね。むしろ僕の掛かり付けの医者が倒れたみたいで、そっちの方

が心配だよ。」

「ま、これで足も動くようになったし、結果オーライだね」

その後もありふれた話で時間を潰す。

「…つと、そろそろかな」

「？なにがだい？さやか」

「フツツまあそれはついてからの楽しみってことで」

あたしは京介の載った車イスを押して屋上に向かう。

エレベーターが開くと屋上に京介の両親、そして治療に携わった人達が拍手で迎えた。

「これって…」

京介が呆然としていると

お父さんがバイオリンケースを持ってやって来る。

京介に秘密にしてたさやかな退院パーティーだ。

「つまり、そういうこと。それじゃ一番いい演奏、聞かせてよね」

そう言ってあたしも観客の列に並ぶ。

練習もなにもしてないのに、と戸惑っていたがやがてバイオリンを肩に乗せる。

演奏が始まった

やはり練習してないからか上手とは言えないけれど、そこに乗せた感謝の思いはしっかりと伝わってくる

気分がいい…

演奏が終わると同時におこる拍手

京介があたしの方を見る。

「最高の演奏だったよ」

それに笑って答えた。

京介が両親や出席していた人達に囲まれ、各々から様々な賛辞が飛び交う。

ホント、いままで聞いた演奏のなかで一番最高だった…

そして最高に幸せになる……筈だったのになあ…

振り替える

視線の先には展望ビルから望遠鏡でこっちを見ているどっかのだれかさん。

さつきからじろじろ見てきて正直まじでうっとうしい

思いきり殺気を乗せて睨みたいところだけど、ここはあえて不敵に笑ってやる。

バレバレだよ、トーシロー

??? サイド

「!」

バツと、望遠鏡から目を離す

観察していた新米の魔法少女。そいつはあそこにいる人全員があいつから意識を外した瞬間に、こつちを向いて、嗤いやがった。

気付いてやがった…

『どうしたんだい?』

別の望遠鏡に乗っているキュウベえが尋ねる。

「今、テメーの言う新しい魔法少女と目があった」

『何を言っているんだい?ここから病院まで1キロ以上あるんだよ』

「あいつこつちを見て笑いやがった。どうやら最初から気付かれてたみたいらしい。」

それに振り向きざまにあいつが言った言葉…

——バレバレだよ、トーシロー——

ギリツと齒を鳴らす。

トーシローだと、ふざけやがって!!

こっちに気付いたのは感知系の魔法に特化しているからに決まっている。

『それよりも本当に彼女と事を構えるつもりかい?』

「ここまでこけにされて黙っているわけにはいかないっしょ」

そこに緑色の髪の少女、ゆまがやって来る。

「キョウコ、大丈夫?」

「ああ、大丈夫さ。」

けど…もし、あいつが感知系の魔法に特化してなかったら…

アタシは…勝てるのか?

そんな胸騒ぎがいつまでも消えなかった。

今更隠す必要もない一人な9話（11月27日改）（後書き）

絢子「今回、まあ隠す必要もねえけどさ、杏子が始めて出てくる10話だったんだか、そっちはどうだ？」

早乙女「実はね、話の展開に無理があるらしくって脳内会議はしちゃめっちゃなのよ」

絢子「この小説を読んでいる奴らは辛いだろうな」

早乙女「ええ、リアルの方でトラブルがあつたらしくって、かなり時間がとられているの。本来なら甘酸っぱい思い出で終わるはずなのに…」

絢子「そうか…」

早乙女「そっちはどうなの？」

絢子「わっかんね。いつも通りだったけど勘じゃ何か諦めている感じがした。ありやその内書がなくなるぞ」

ナガン「…心配してくれるのはありがたいんだが…シリアスな感じ出していること無いこと言うのは止めてくれ」

絢子、早乙女「てめえ／あなたの心配はしてねえ／してないわ」

（・・・）

さやかのスーテータス

状態 良好

武器 刀0本 ナイフ二本 GSR0丁

その他 霊力がつかえなくなりました

お札が使えなくなりました

まどかがパーティーに入りました

戦闘力 25000

中間試験終了記念外伝（前書き）

ナガン「ノリで書いた。ギャグなのにあんまり面白くない。むしろほのぼの。だけどギャグだからと言い張る。後悔も反省もしてないよ」

中間試験終了記念外伝

さやかサイド

その日、学校の雰囲気は異様だった。

クラスメイト達が談笑しているが、その緊張は隠しきれず、むしろ刻一刻と表情は強張っている。勿論まどかや仁美も例外ではない…。

彼女達は現在机の上で、教科書と最後の格闘をしていた。

「…ねえまどか話かけないでさやかちゃん！！この最後の追い込みが大事なの！！」

まどかがこの変わり様

正直に言えば、理由は解るし理解も出来る。

「…中間テストぐらいでそんなにピリピリするもんなの？」

納得は出来ないけど…

転生少女さやかマギカ テスト・デイ・ライフ

何を隠そう今日は中間試験の日

有り体に言えば、成績にモロに反映するテストがある日。

「ていうかさ、何でもそこまで気負う必要があるの？どうせ少し難しくなる程度でしょ？」

納得出来ないのは、雰囲気ギリギリし過ぎているから
一年生から進級して始めての中間だとしても、異様すぎる。

「さやかさんはご存知ないのですか？」

仁美が教科書片手に話かけてくる。

「何を？」

「——見滝原中学の定期テストは二年生からが本番だ——、って先輩や先生方が仰っていましたことです。」

（ナガン「受験は冬からが本番だ」キリッ）

「何それ？受験生じゃあるまいし。」

一笑に伏す。

「でも、二年生からの定期テストの平均点、全部50点越えてない
そうですよ」

「え？全科目で？」

「はい。全科目で、です」

あと、眉唾物ですけど、と仁美が言うことには

「この中間で出題された問題が大学入試でも出たとか…」

というらしい。

「さすがにそれはないでしょ。つーか今まであたしが知らなかった方が驚きだよ」

「それはさやかさんが授業中寝ていたからだと…」

とそこへテストを持ってきた先生が教室に入ってきた。
教室の緊張が一気に張り詰める。

…これ完全に定期テストのレベル越えてるよね。

アレだよ、多分皆、先生達を銃持って乱入してきたテロリストとしか見てないよ。

まどかなんて何でか泣きそう…、すでに泣いてる人もいるし

「どうやらここまでのようですね。幸運を祈ります」

とまるで死地に向かうような、決死の覚悟な表情で着席する仁美

思わず伸ばした手はギリギリ空を切って”くれた”

…とりあえず言うことは一つ

「What a beautiful site…」

これなんてカオス？

問1

pを素数、nを正の整数とする時($p \nmid n$)!はpで何回割り切れ

るか

問2

円周率 π は3より大きいことを示せ

問3

空間内に四面体 $ABCD$ を考える。この時4つの頂点 A, B, C, D を同時に通る球面が存在することを示せ

問題はこれで全てである ■

(・ω・)

思わずシャーペンを折っちゃった(テヘツ

——「みみ、み見滝原中学の目指すテストはへへへ平均点30点のもの……」——

芥川先生……クールに装っていますけど、30点は希望にすぎすぎ
てます。あと動揺しすぎです

肩を竦めてため息をつく。

………現実逃避するのはそろそろ止めて……

おかしい!!絶対おかしい!!

なにこれ?四面体?階乗?いや習ったけど、色々とステップ飛ばし

すぎー！！

これ自力で突起も何もない10mの壁を登れ、って言ってるよね！？
後何この最後の文！？何かすごい腹立つー！！

この■何なの？これ（笑）だよね？

色々と心の中で（ここ重要）ツツコミを入れていたら、早くも10分が過ぎていた。

……今は問題を解くことに集中しよう。

その後も全科目で超が付く難問が頻出し、大半の生徒がその結果を予想して泣き崩れていた。

「うっ…英語と数学駄目だったよあ…。」

まどかもあたしの腕の中で泣いている。

…この学校は認識障害の結界でも張ってあるの？
もういいや、何か考えるだけ無駄な気がしてきた。

「まあ仕方ないよね。うん仕方ない」

そのまましばらく、まどかは泣き続けた。

…言えない。まどかはあたしも駄目だったと思っているからこうしてるけど、

あたしは全科目50はあるんだよね…。

仁美も英語と理科が悪かったって言ってたし…

これはなんとしても隠さないと、ヤバイことになる。

主に友達関係の面で

もはやそれがテストの目的なんじゃないか、と疑いながらその日は帰った。

テスト受けてない恭介が羨ましいよ…

後日

「はーい、それではテストを返します」

中間のテストが返却された。

あたし 平均

数学	6 3	2 1
英語	5 2	2 9
理科	5 4	2 6
国語	4 9	1 9
社会	5 7	3 1

うん、いいね。特に数学は。平均の三倍ある

「さやかちゃん、何点だったの？」

さて、ここからが本番だ

しのではないと、殺される…！！

「いや、駄目だったわ。」

「やっぱノー勉はキツかった、とまどかに見えないうようにテストをスカートに隠しながら答える。」

「そうだよ。で、何点だったの？」

「な、何でもそこまで聞いてくるの？」

「これはテストの敗者が交わす言わば儀式見たいなものだよ。で、何点だったの？」

まどかの笑顔に地味に圧がある。

ま、まどかが攻めに回っている…だと

「そんなのあたしが許さないし言いたくない点数なの！！まどかなら分かるよね！！」

「いえ、むしろまどかさんにとってはわかりたくない点数なのではないですか？」

仁美が不吉なことを言いながら話に割り込んできた。

「私は見ましたわよ。さやかさんの数学の解答にそれはそれは大きな丸がふつてあるのを」

まるで満点の答えとでもいうようなものでしたわ、と身振りも交えて付け加える仁美。

どこことなく棘があるのはあたしの気のせいだと思いたい。

「え…嘘…だよ…さやかちゃん…全然勉強してないって…」

「あ、当たり前じゃん。仁美の見間違いだよ見間違い」

「ならそのスカートに隠したテストを見せてくれませんか?」

顔がひきつる。

「え〜と、いやそれは…」

とここで教室がやけに静かなことに気付く。

続いて背中に刺さる数多くの視線も

ヤバイ…これは比喻抜きで殺される。

「ちなみに今回の学年成績最優秀者はですね…」

最悪のタイミングでの早乙女先生の報告

「ぶっちぎりで美樹さんでした」。

教室から飛び出すには十分な動機だった。

「追え!!」

「逃がしちゃだめ!!」

「裏切り者に断罪を!!」

後ろからくる足音がやけに怖く感じる。

その後はヤンデレな笑顔（手にカッター）で迫ってくるまどかに恐怖したり、

やむを得ず蹴り飛ばした男子が「ありがとうございます!!」と言いながら倒れるのにドン引きしたり、

文房具を巧みに投げつけてくる紫の髪の女子と対峙したりと散々だ

った

「あたしが何をしたらって言うんだあああ!？」

おまけ

「ほむらちゃん」

「何かしら？」

「テストどうだった？」

「もちろん学年最高点……ってまどか、その手に持っているカッターは何かしらそしてそんな顔で迫らないでもらえないかしらうれし……いえ怖いからそして美樹さやか親指をたてるな!!」

「出る杭は打たれるんだよ。ほむらちゃん」

中間試験終了記念外伝（後書き）

杏子「なあ、アタシの出番は？」

ナガン「知らね」

杏子「てめえそれでも作者かよ!？」

ナガン「なら杏子の出番は一話こつきりになるぞ」

杏子「そこをなんとかするのが作者の務めじゃねえの？」

ナガン「煩いな!!それぐらいわかってるよ!!でもここで原作から乖離するとむちゃくちゃになるんだよ!!」

杏子「つかてめえあのタイミングであいつらと闘わせるんだろ?そもそも勝てんのか」

ナガン「ノーマルで大丈夫だろ?」

杏子「EXにノーマルがあんのかよ」

ナガン「…」

やっちまった2 人な10話(前書き)

兄「ガラドボルグ!!」(メール送信)「

ナガン「ん? 兄からメールがきたぞ」(ガラドボルグ着弾)

——なかなか面白いもん書いてるね——(兄「壊れた幻想!!」)

ナガン「ぐふ!!」

やっちまった2 人な10話

次の日の夕方

「さて、第一回魔女殲滅作戦の、始まり始まり。」

「なんか作戦名が若干怖くなってるよ!？」

今日、学校で転校生はこちらを一瞥するだけで、特にアクションを起こしてこなかったから、いいんだろうということで、予定通り魔女退治を開始する。

まどかと一緒に索敵をしばらくしたけど、なかなか反応がない。

「見つからないね」

「逆に見つかり過ぎて困るんじゃない?。こういうのは見つからないのに限るもんでしょ。」

一旦立ち止まる。

「…東の方から、ちょっと反応があるね…」

昨日のことを思い出す。

「……あいつも来るんだろうなあ……、勝ち気そうだったし……、新米に馬鹿にされたから、絶対くるはず」

まどかに気づかれないようにため息をつく。

自分が巻いた種とは言え……、どうにも面倒なことになりそう……

「ここか…」

路地裏の一区画

ソウルジエムが強く輝いていて、すぐそばに魔女がいることを物語っている。

「あたしから離れない…、いや近すぎても困るから、着かず離れずのところにいて」

「分かりにくい指示ありがとうだよ。」

…まどかも最近慣れてきてない？会った当時はあんなに純粹だったのに…

景色が歪みはじめる。

そこにはカートに乗った、クレヨンで描いたような魔女、ではなくて使い魔かな？、の方がいた。前のとは違ってリアル感がない。

魔女って強く成る程リアルになるのか？、とそんな疑問を考えつつ、戦闘態勢に入る。

「いくよ」

あたしは両手に3本ずつ黒鍵を投影。

概念？なにそれ？魔女に効くの？

と同時に魔女が縦横無尽に走り始める。

黒鍵を魔女に投げつける。魔女に向かって、あるいは進行方向の先に、追い詰めるように投げる。

即座にまた黒鍵をトレース・オン

「止め」

身動きが取れなくなったところに、止めの黒鍵を投げる。

黒鍵は魔女に真っ直ぐ向かって…

「ちよつと、あなた何してるのかしら？」

カキン！カキン！

何者かによって弾かれた。

そいつは地面に降り立つ。昨日の赤髪ストーカーではなく、金髪をツインテールにまとめていて、どこかマミを彷彿させる。手にはボウガンが握られていた。

昨日の奴じゃない…？

とすると、仲間…？

頭をかきながらため息をはく。

「ここで出てきちゃう？もうちよつと後にしてよ」

これ幸いと逃げ出しでゆく魔女

「逃げちゃうよ!!」

ただと残念だったね

ザクッ

上から降ってきた黒鍵に魔女が貫かれる。

逃がすわけないじゃん

「シュート」

手で銃の形を作って、魔女を撃つ仕草をすると、黒鍵が爆発。
魔女は跡形も無く消滅した。

保険は掛けとくもんだね。入ろう!!地震保険!

「なっ!?!」

マミ(偽)は後ろを見て、目を見開いている。

「言っただでしょ。もうちょっと後にしなよって」

不適な笑みを浮かべてやる。

それが癪にさわったらしい、隠しているようだけど、目が怒っている。

「あなた…いつから気づいてたのかしら?」

「うーん、魔女があらわれたくらい…かな。それで、なんで止めたの?」

「…見てわからなかったかしら?あれ魔女じゃなくて使い魔よ。グ

リーフシードを持っているはずがないじゃない」

「…それで？」

「だからあれが4、5人殺して魔女に成るまで待ちなさい、と言っているのよ。」

へえ・・・

こいつマミと似ているくせに、考えが正反対なんだ。

「あんたとは違って、あたしはそういう人見たらほっとけない性格なの。あんたの考えには賛同できない。」

マミ（偽）はやれやれと言った風に肩を竦める。

「あなた正義の味方にでもなったつもりなの？」

だったらお笑い草ね、と嘲笑を浮かべるマミ（偽）

「確か…以前ここにいた巴マミ…と言ったかしら。彼女がその典型よ。馬鹿よね、見返りなんて返ってくるはずがないのに。見ず知らずの他人を助けることなんてするから、無駄死にするのよ。」

イラッ

あたしは無造作に一步踏み出す。

マミ（偽）はさらに笑みを深くする。

「別にあんたがマミに似ていようが思考が真逆とかどうでもいい。ただどね、それであんたがマミを侮辱していいことにはならない。」

「あなた、彼女の後輩か何か？仕方ないじゃない、馬鹿なものは馬鹿なのだから」

目の前で立ち止まって無表情に見据える。

「警告だ。さっさとここから出ていけ。さもないと…！？」

バックステップ

一瞬遅れて、上から矢が地面に刺さる。

「へえ、やるじゃない」

とマミ（偽）は続けて、3本の矢を放つ。

それを一本は避け、残りは黒鍵で叩き落とす。

マミ（偽）は笑ったまま、表情を変えない。

「キヤア！！」

まどかの悲鳴が路地裏に響いた。

振り向くと、まどかの腕に矢が貫通しているのが目に入る。

「ほら、避けるとあなたの大切な親友がどんどん傷ついて行くわよ。」

こいつ…初めからまどかを狙ってたのか！！

再び矢を放つ音

あたしはそれを…、振り返らずに掴み取る。

「な!？」

「守るって言うっておきながらこれか…。反省しないとね…」

決めた、もうこいつ半殺し決定。

「オーケーオーケー、そこまでするのならもう手加減なんてしない、してやらない。」

結界を展開し、閉じ込めて、思いきり殺気を込めて睨む。

マミ（偽）は先程とはうって変わって、顔は面白いように青白くなった。呼吸も荒い。

今頃気づいたようだ。自分が怒らせたのは、狐ではなく、竜だと言うことを。

懷からナイフを取りだし、逆手の少し前傾姿勢で構える。

「おいで、とんでもない馬鹿女」

ようこそ、このすばらしき惨殺空間へ

マミ（偽）サイド

こんなことがあっていいのか

今までどんな敵も、この手で屠ってきた。相手の弱点を突き、なぶり殺す。魔法少女に対しては特に。それで全て上手くことは運べた。今回だって彼女のことは調べ尽くした。

何も変わつたところのない、ただの一般人

それが私の答え

親友を引き連れてこの場に現れた時は、馬鹿だ、と思ひさえした

親友を人質にとりさえすれば、私の勝ち

途中まではよかった。裏をかれて、使い魔を倒されたが問題はな
い。私が負けるはずがない、と過信してしまっていた

思えば、その時一旦退けばよかった

ジャリッ

靴を滑らす音で、我に帰る

5 m先にはナイフを構える、件の少女

「あ…」

殺される

為す術も無く殺される

嫌だ、死にたくない

怖い、逃げたい、怖い、死にたくない、嫌だ怖い逃げたい死にたく
ない怖い怖い逃げたい死にたくない怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

やっちまった2 人な10話（後書き）

ナガン「はい、今回やっちまった2人（まどかに怪我させたさやか、とさやかを怒らせたマミ（偽））な10話でしたけど…」

バァン！！パリン

杏子「な…」

ドサッ

ナガン「杏子オオオオ！？」

マミ「あなたが私を殺すなら…、殺すしかないじゃない！！」（泣き顔でマスキット銃をナガンに向ける）

ナガン「いや何で杏子殺したの！？まだ本編に一文字も出てないよ！？」

マミ「杏子も！！ナガンも！！ノリで！！」

ナガン「いやノリで！？そんなんで杏子死んだの！？こんなのあんまりだよ！！」

杏子「あゝ死ぬかと思ったじゃんかよ」

何事もなかった様に立ち上がる杏子

マミ・ナガン「ええええええええええ！！」

杏子「ギャグ展開じゃなかったら即死だったな」

さやか「ちなみにマミ（偽）の真名はルヴィアゼ……」

ナガン「言つなああああ！！これ以上カオスにしないでくれ！！」

QB「急展開すぎるね、訳がわからないよ」

さやかのステータス

状態 殺戮モード

武器 変わらず

その他

さやかは投げるより斬る方が上手い

戦闘力 30000+????

どこまでも扱いが酷い一人な11話（11月27日改）（前書き）

ナガン「いや違うんですよ。やる気が無くなったとかそういうんじゃない。純粋に忙しくて、書きづらかっただけなんです。」

どこまでも扱いが酷い一人な11話（11月27日改）

さやかサイド

崩れ落ちるマミ（偽）を冷めた目で見下す。

勿論首は繋がっている。

あたしはただ、こいつの首を切るビジョンを頭の中に流してやっただけ。殺気との相乗効果で、ほぼ実際にはねられた時と、同じようになりアルさを体験をしているはず。現在彼女の服に広がっている、黄色いしみがそれを物語っている。

「あたしの怒りはまだ収まってないんだけど、今日はこのくらいにしておいてあげる。次はこのくらいじゃすまさない」

頭を踏みつけてまどかのもとに向かう。

腕の矢は貫通していて、血がだらだらと出ている。抜こうとした跡がないのは幸いだった。

傷ついたまどかを見ると、またマミ（偽）への怒りが、再び燃え上がり始める。

腕、折つとけばよかったな…

「もう大丈夫だよ、まどか」

「…さやか…ちゃん」

「少し痛むよ、力抜いて楽にして」

後ろの部分を握って、一気に引き抜く。

「ッー！」

「よし、抜けた」

すぐさま治癒魔法をかける。

「…あの人は…」

「あそこでのびてる」

「そう…」

「…ごめんね、守るって言うときながら、怪我させちゃった」

あたしの謝罪にぽかんとするまどか

「…フフツ、さやかちゃんのそんな顔見るの初めてかも」

「…！人が謝っているのにそんなこと言わないでよ」

傷がほぼ塞がりかけたから、最後に服の穴を直す。

「はい、終わったよ」

「わっ、すごい。全然痛くない」

腕をぐるぐる回して、感触を確かめるまどか

これでまどかは一先ず大丈夫
後は…

「…降りてきなよ。あんた達だけ逃げようだったって、そうはいかないよ」

その直後、へぶう！！と悲鳴が後ろからあがる。

あたしが振り替えると、槍を油断なく構えた赤髪ストーカーが、穂先をこっちに向け、その後ろで緑のロリが先端が球状になっている杖を両手で握っていた。

腹に靴の跡がついているマミ（偽）が、気絶しなおしているのは可愛嬌。

「ふうん、あんた達仲間じゃないんだ」

「…てめえ、アタシとやるってのか？」

「戦う理由はないけど、昨日のことでボコりたい理由はあるね」

「はっ！一人ぐらい倒したぐらいで、いい気になってんじゃねえぞ」

こいつはマミ（偽）とは違って、小賢しくはない感じがする。純粹に強い、というオーラがある。

後ろのロリはそうじゃないけど。多分後衛のサポートタイプ。

「確かに、あんたをボコるのは骨が折れそうだしね。じゃあ、さつさと帰ってよ。あたしはこれからまた魔女退治に行かないといけないし。」

「させると思ってたの？」「…あんた上から見ていたんでしょ？なら、ここはどうするべきかは…わかって然るべきだよな」

「ハン！十分わかってるさ。天狗になってる正義バカに、お灸を据えなきゃいけないことぐらいわな」

正義バカ、ねえ…

「…一つ勘違いしているようだけど、あたしは正義バカでもなんでもない。守りたいから守る。救いたいから救う。そこに他人の意思

「が入る余地はない」

全てを救うことは、神でさえ不可能なんだから

そう言う赤髪ストーカーはポカンとして、どこか困惑したような視線を向ける。

否定してこないのを見ると、なにか思うところがあるようで…

酷く身勝手な信念だと自分でも思う。でもあたしだって散々悩んだ挙げ句、神奈子に相談して、出した結論。その時あきらめられたのはいい思い出だ。

守りたいから守る、それで充分じゃないか。あんたはそんなことでうじうじ悩ん、で結局何もしないつもりかい？ってね

「…もし守るのを、拒絶されたらどうすんだ？」

「そうだね…相手側の理由に正当性があるなら、引き下がる」かも
”知れないけど、それ以外は聞いてやんない。」

「…それはもうただのエゴじゃねえか…」

「エゴで結構。元々人はエゴの塊だからね。それに、エゴにならな
いと、この先やっていけないし」

きつぱりと言いつつ放った。

この問答自体、何回も経験してる。こんなんで揺れていたら前途多
難どころじゃないしね。

「…クツ、アツハハハハハハ…」、すがすがしいぐらい傲慢だな、
てめえは。もつと早くに会いたかったよ」

「今からでも遅くはないんじゃない？」

「そうだね…ならいつちょアタシも傲慢になつてみますかね…！」

再び構え直す赤髪の槍使い。

「えっ！？どうして！？戦う必要なんてないのにどうして！？」

突然の緊迫した空気にまどかが止めようと説得にかかる。

「こいつはアタシのエゴだ。それにな…こいつが貫き通す意志はな、これぐらいで折れてちゃ世話ねえんだよ。」

「キョウコ…」

「ゆま。手え出すなよ。これはアタシの戦いだ。」

しかし赤髪ストーカーは頑として聞こうとしない。

「まどか。大丈夫だって、あいつも命まではとらないはずだし、それにあたしは絶対に負けないから」

「でも…」

「そ・れ・に・忘れてると思うけど、あたしだってあいつボコリたいの」

まどかの周囲に結界を張り、赤髪ストーカーと対峙する。

「そうだ、あんた名前は？赤髪ストーカーってよぶの、めんどくさくてさ。あたしは美樹さやか、よろしく」

「アタシそんな名前で呼ばれてたのかよ…」

ちよつと落ち込んでいる赤髪さん

「…佐倉杏子だ。よろしくな」

「キョウコ、頑張つて。」

後ろの口りは自分で結界を張り、応援に徹していた。

まどかにウィンク

「・・・」

はいスルーここでキター（棒）

「応援つていいよね。」

「アタシに聞くな。」

ああもういかんいかん！！

黒鍵を投影して、戦いの緊張感を再び張り巡らせる。

杏子は唾を呑み込み、負けじと睨む。

「いざ尋常に・・・」

「勝負！！」

合図と共に駆け出す杏子

手始めに黒鍵を三本投擲。

杏子は楽々と槍を振るって弾き返す。

今度は切断力をあげた一本の黒鍵を投げる。

これも弾き返すだろう、と思っていたけど、流石に怪しかったか、杏子は少し跳んでよける。

黒鍵は地面に深々と突き刺って、破片を撒き散らした。

ここであたしと杏子の距離は3メートル弱

軍刀を一本右手に作りだし、間合いに踏み込む。

杏子がくり出す連撃を体を動かしてよけ、剣で受け流し、反撃する

そして杏子が、槍を右脇腹に突きだす。

僅かに体をよじって回避

そのまま剣をお返しにつきだす。

槍を突きだしたままの杏子に、これを避ける術はないはずで、剣は右肩に迫り…

ガキン

多棍槍の鎖に絡めとられた。

「げっ」

杏子が多棍槍であたしを捕らえようとする。

咄嗟に身を退くけど、突きだしていた右腕が逃げ遅れて、鎖が巻き

付く。

「ヤバッ」

「捕まえたあ！」

多節槍を引き寄せる杏子

大して踏ん張れずに、そのままつられてたたらを踏む。

だけど、同時に多節槍の鎖が緩む。

強烈な回し蹴りを繰り出す杏子

詰めが甘い。60点

そう評価しつつ、瞬動で背後に移動

蹴りは空を盛大にきつた。

「なっ!？」

「遅い!!」

右脇腹に掌底を叩き込む。

「ぐあっ!!」

吹き飛ぶ杏子

受け身をとって体勢を立て直すのが、右腕がだらんと下がっている。

「キョウコ!!」

「へえ、すごいね。咄嗟に腕を割り込ませるなんて」

「っ…さっきの瞬間移動と言い、体捌きといい、ホントめえ何者なんだよ。暗殺者が何かか？」

「さっきのは瞬動って行つて、あんたも使えるはずだよ。足に魔力溜めて、踏み込みと一緒に放出。とっても単純。今これを空中でできなにか試してる。」

勿論嘘だけどね。虚空瞬動は弾幕ごっこではかなり重宝したよ。

「おいおい、いいのかよ、そんなことアタシにばらして」

「あんたとは長い付き合い（主にボコることで）になりそうだしね。遅かれ早かれ教えてたはずだし。それに一朝一夕で出来るものじゃない。」

「はっ、嫌な予感がするから、遠慮しておくけどやってみないとわかんねえだろ！」

いや、だから無理、と口を開いた時には、杏子はあたしの眼前で槍を振りかぶっていた。

槍の間合いとしては少し近すぎる距離で、あたしにとっては充分間合いに入っていた。

反射的に一步踏み込んで右腕をとり、右足を軸として左足を杏子の足元に。そして左肘で左脇腹を肘打ち。そのまま前進する力を利用して、背負い投げるような感じで、壁に叩きつけた。

そのままずるずると膝をつく杏子

いきなりここまで瞬動を使いこなす、杏子の才能に戦慄する。確かに杏子は高機動な動きで、接近戦にもちこむタイプで、相性はいいけど、慣れないうちは、普通は行き過ぎたり、距離が足りなかったりするものだ。よくあたしも始めなかなか距離感が掴めなくて、障害物に激突した。だけど杏子は少しズレただけでほぼ距離を合わせてきた、それも一度で。

杏子とならいずれ本気で戦えるかもしれない

そんな考えまで浮かぶ程だった。

「あんたすごいね、手加減するつもりだったのに、本気で投げちゃったよ」

「グツ…手加減してアタシと互角かよ…」

「まあそこはけい…才能の差ってやつかな…」

「…才能だけでこの先やってけねえぞ」

杏子は精一杯の皮肉を飛ばす

「肝に命じておきますよ。それで、まだやるの？」

「いや、もういいさ。あんたの強さはよくわかったさ。悔しいけど、このまま続けても、アタシが負けるのは目に見えているしな」

言質をとった後に、制服姿に戻る。

ソウルジェムが少し濁っているのを確認したあと、指輪に戻る。

横からロリが駆けてきて、杏子に治癒魔法をかけていた。

「あ、そうだ、命を取らないぐらいの手合わせは大歓迎だから、気が向いたら宜しくね」(ボコリタイムはその時までとっというてあげ

る」

まどかが結界内で何か叫んでいる気がする。そろそろまどかの前世は絶対、覺妖怪さくごうだと確信出来そう。

「はっ！？なんで？」

「いや、あんた強いし。それにあんた瞬動練習したくないの？」

「…わけわかんねえぞ。」

「我只要和強者闘。あたしが望むのは強者との闘いのみ。」

なーんてね、と背を向ける

「まどか、帰ろ」

「え…でも…」

まどかは心配そうに杏子の方を見ている。

「アタシは大丈夫だから、早く行きな。そろそろ帰らねえとヤバイんじゃないの？」

杏子とロリも立ち上がって、あたしとは反対の方向に去っていった。

ていうかまどか、マミ（偽）は放置なんだね…、やっぱり怒るか…

夜

「…明日は上条のところに見舞いに行くから、ちょっと魔女探索は早めに切り上げるから」

まどかと携帯で、明日のことを話す

『うん、わかった…』

歯切れが悪い声が届く

「…何かあったの？」

『えっいや、なんでもないよ!』

「ならいいけど…」

会話が途切れ、静寂が訪れる。

やがてまどかが意を決したように口を開く。

『さやかちゃん。ほむらちゃんのことなんだけど!?!』

どうやらAQB Tが作動した様で…

『今なんかものすごい勢いで飛んでいったよ!あれ?キュウベえだよね!?!大丈夫なの!?!』

ははは、勿論

「大丈夫だ、問題ない」

『それ全然大丈夫じゃないよ!!』

カーテンを開けると、遙か遠くから飛来する白い物体が見えた

そして窓にぶつかる前に電線に引っ掛かり、バチッと白い閃光とともに爆散した。

と同時に付近は暗闇に包まれる

『…ねえ、いまの音ってもしかして』

「いや、偶然だよ」

『やり過ぎだよ!』

「後悔はしてるけど反省はしてないよ…、っと母さんが呼んでるからまたね」

『あつ、ちよつと…』

電話を切る

不意に指輪に目が行く。

そついや濁りとのるの忘れてた

グリーンフィードを取り出してソウルジェムに近付ける。

「あり？」

濁りがなくなってる?どうして?

「さやか、なにやってるの。ライト探すの手伝って」

「あ、はい」

母さんに呼ばれて思考を中断する。

些細な事だと思って、暗かったから、気づけなかった。わずかだが、土台の部分が黒ずんでいたことに…

どこまでも扱いが酷い一人な11話（11月27日改）（後書き）

BGM〱隣から聞こえてくるマミさんの呟き

ナガン「さてついに杏子が出た11話です」

さやか「あたしが瞬動使った杏子を投げ飛ばした想像ができない、
つていう人がいるなら、ネギまの19巻のネギvsアスナの模擬戦
を参照してね」

ナガン「今回、さやかが何やらカッコいいことを言いましたが、簡
単に言くと、気が向いたら助ける、ということの上位互換です」

さやか「この話を書きづらかった一番のポイントがここだとはね…」

ナガン「色々考えた結果、開き直りましたがなにか？」

さやか「まあその話は置いてさ、最後の文何なの？」

ナガン「……フラグはクラッシュするものだ」

詢子「…てめえら少しはマミのこと慰めてならねえのか？」

さやかのステータス

状態 良好

戦闘力	変わらず
QB 殺害数	3
その他	SG に変化あり

ある意味運命づけられていた一人な12話（改）（前書き）

ナガン「い、今起こったことをありのまま話すぞ。俺は包丁さんの外伝を書いていたら、ナチュラルにあのキャラが登場していた。

頭がどうにかなりそうだった…

。次元を越えてやって来たとか、うちのさやかとこいつ、どっちが年上なの？とかそんなチャチなもんじゃねえ、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。」

？「みーつけた」

ナガン「え？」

ヒュン

ナガン「あれ、なんともな…！？あゝあゝ ああああ！？小説のデ
ータがあああ！！！」

？「役目は終わったし、帰るね」

ある意味運命づけられていた一人な12話（改）

さやかサイド

「京介く、ってあれ？」

今日も京介の様子を見に来たけど病室はもぬけの殻。
通りかかった看護婦に聞くと今日退院したらしい。

「むうく京介のやつ。教えてくれてもいいのに」

昨日の意趣返しか…と推測する。

ただ単に忘れていた…とかだったらビンタしよう。学校で、それも
公衆の面前で

フヒヒ…と黒いことを考えてながらまどかと合流しに病院を去る。

道中また白い生物を発見。黙って近くのトイ（ry

「うん。見つからないなあ」

しばらく魔女の反応を探して街のなかを歩き回るが一向にそれらしい
気配がしない。

今日の探索はどうやらハズレになりそう。

「…ねえさやかちゃん…」

さつき、というか今朝から黙りこくって、何か考えていたまどかが不意に口を開く。

「えっと、その…ほむらちゃんのこと何だけどね。」

仲良くしてほしいなあ、なんて、と人差し指をもじもじさせながらお願いするまどか。

はて？あたしと転校生はそこまで仲が悪くないはず。

首を傾げていると、まどかはそれを、違う風に受け止めたのか、

「だから、ほむらちゃんは無口で冷たそうに見えるけど、「不器用なだけで、本当は優しく、気が回る」……うんそう」

あー、うん。うんだいたいわかった。

「つまりまどかはほむらと敵対するな、と言いたいと」

こくんと頷くまどか

「いや、あたしは別に敵対しているわけじゃないんだけど。向こうが歩み寄って来ない、っていうか、なるべく遠ざけたい、っていうスタンスなんだよね。」

密会から一度も連絡も入らないし、まどか同伴の魔女退治にもとやかく言ってこない。

「さやかちゃんはそれでいいの？」

別にいいけど、と喉まで出かかるが、まどかの悲しむ顔が見えたので何とか押し留める。

「まあ、転校生も転校生なりに考えがあるんでしょう。…まどか、」

これだけは言っておくけど、と何時になく真剣なあたしの口調に、まどかは身構えている

「転校生はまどかの貞操の為だけを考えて行動している」

首を傾げて、こめかみをもんで、腕を組んで、あたしの言葉を理解しようとするまどか

「…ごめん、ちょっと一部分わかんなかったから、さやかちゃん、もういつかいつくり言ってお貰えないかな？」

「転校生は、まどかの、貞操の（口パク）、為だけを、思って行動、している」

「へえ、ふうくん、ほむらちゃん、わたしの事を思って行動しているんだ。」

明らかに信じてませんよ、と暗に示している棒読みっぷりだった。

「ま、しばらくしたら、また状況は変わるんじゃない？」

ほら、行くよ。と歩き出す。

まどかも戸惑いながらも頷いて、付いて来た。

夜

まどかと別れた後、気が向いたから、恭介の家に寄ろうかな、と恭介を訪ねる。

インターホンを押そうとした時、家の中からバイオリンの弾く音が耳に入る。

「……」

何となく、何となく押す気にはなれず、踵を返す。

「なんだ、押さねーのか」

ふと顔を上げると、目の前にポツキーをくわえている杏子とはむはむとあんまんを食べるロリがいた。

「なんか演奏聴いてたら、押し掛けるのは気が引けてね……」

「好きなのか？」

「ただの大事な男友達。好きっちゃすきだけど、愛してはない」

はっ？と杏子は鳩が豆鉄砲くらったような顔をした。

「それじゃあんだ、愛してもないやつのに、願ったのか？」

「かけがえのない人の為に使った、と言ってくれない？」

…やっぱあんたは変な奴だよ、と杏子がポツキーを差し出してくる。

「食うかい？」

「食います」

杏子と同じようにくわえてみる。

「そついや…！？あれから瞬動の練習は…したの？」

く…くわえながらだと喋りづらい…

なんで杏子はそんなすらすらと喋れるの？

立ったまま眠れる美鈴と同じぐらい謎だ。

「練習に使う程、グリーンフィードが余ってねえよ」

「ふん…」

なんかこのまま別れるのもアレかな…

「よし、組み手しよう」

「はあ！？だからアタシはグリーンフィードもってないって…」

「魔法なしだったらいいんでしょう？なら問題なし」

「キョウコ、さやかと遊ぶの？」

「話聞いてたか！？」

いくぞ、と杏子の手を引く

あつこら、待てって。と文句を垂れながら抵抗する杏子。

「今日はあたしが満足するまで返さないぞ」

「人が誤解するようなことを言っな!!」

「?何を勘違いするの?」

引つ張ること数分後

着いたのは下が道路の橋

「ここなら遠慮なくできるね。いっちょ派手にやろうよ(みっくみく(物理的)にしてやんよ)」

「(ヤバイ、笑顔が輝いてやがる)組み手は派手にできないだろ…」

諦めた様子の杏子。もうなるようになれ、と言った感じた。

「そうだゆま。太極拳習って見ない?面白いよ」

そういえばこの緑の少女。ゆまって名前。杏子から聞いた。

「昨日のあれのこと?」

あれって多分杏子を投げた技のことかな?

「うーん。あれとはちょっと違うけど、基本は同じかな。ゆまも杏子投げ飛ばしたい?」

「おい…」

「さやかお姉ちゃんを投げ飛ばしたい。」

・・・ウオウそうきたか

なかなか強かった。

橋の真ん中に差し掛かった時、向こうからくる人影が見えた。

「誰だろこんな時間に…って、あ…」

相手もこっちに気付く。

「なっ！？あなたは…」

「昨日さやかにやられたマミの偽もんか…」

「ピンクのお姉ちゃんに酷いことした人だ。」

「ていうかまだいたの。さっさと出てけ、って言ったのに」

「黙りなさい！！今度こそ、その顔を…」

とマミ（偽）が魔法少女に変身しようと、ソウルジェムを掲げる。

勿論変身させる気は毛頭ないし、動作自体かなり遅かったから、瞬動でマミ（偽）の目の前に行き、ソウルジェムをはたき落とす。

ソウルジェムはきれいな放物線を描いて、橋から落ち、ちょうど下を走っていたトラックの目の前に落ちた。

…？なんか体に違和感が…

「顔に…何？」

パリン…

ソウルジェムの割れる音が、やけに大きく聞こえた。

「そんな！？いつの間……に……」

いきなり顔から生気が無くなって、崩れ落ちるマミ（偽）

「えっ？どゆこ……？」

カチリ

と、と言った瞬間に世界がモノクロとなる。崩れ落ちているマミ（偽）も、杏子も、まるで”時間”が止まったように……

14年間一度も見なかった、そしてこれからも見ないだろうと思っていた景色の中に、あたしはいた。

これは……もしかして……

「あなた……どうして……」

困惑の色を隠せずに現れた転校生

……能力が戻ったのか、という淡い幻想は転校生によってぶち壊されましたよ、ど畜生……

いや……能力が無くなったのではなくて使えないだけなんだ……、それがわかっただけでも収穫なんだ。ポジティブ、ポジティブに考えるあたし……！！

「……あ、あんたの能力が時間操作だとはね」

「どういうこと。あなたの能力は時間操作ではないはずよ。」

「それは後で話す。それで、なんでここにきたの？」

「…杏子と協力関係を結んでいるからよ」

カチリ

モノクロからカラーの世界へと変わる。

転校生が時間停止を解いたようだ。

ドサッ

マミ（偽）が倒れた音がする。

瞳孔が開き胸も上下していない

「え？ちよつとまさか…」

腕を取って脈をとるが何も感じられない。

「死んでる…」

それを聞いた杏子が顔色を変えて、マミ（偽）の首を掴んで持ち上げる。

ダイナミック脈拍測定ですね、分かります。

「マジかよ…」

『彼女のソウルジェムは砕け散ったからね。死ぬのは当然のことさ』

いつの間にか橋の欄干の上に座っている生物。

「どついう意味だよオイ…」

『そこにあるのは、ただの脱け殻さ。ただの人間と同じ、壊れやすい体で戦ってくれなんて、とてもお願いできないよ。君達魔法少女にとつて、もとの体なんてただの外付けのハートウェアでしかないんだ。君達の本体としての魂には、魔力をより効率よく運用できる、コンパクトで安全な姿が与えられているんだ』

生物は一呼吸おいて続ける。

『魔法少女との契約をとりむすぶ僕らの役目はね、君達の魂を抜き取つて、ソウルジェムに変えることなのさ』

「ふざけんな！！それならあたし達、ゾンビにされたようなもんじやないか！！」

怒り心頭の杏子がキュウベえに掴みかかる。

『むしろ便利だろう？心臓が破れても、ありったけの血を抜かれても、その体は魔力で修理すればすぐまた動くようになる。ソウルジェムさえ砕かれない限り、君達は無敵だよ。弱点だらけの人体よりは戦いにおいては、よほど有利じゃないか。』

え、今こいつ何て言った…？

魔力さえこめれば元通りになる？

それってつまり…

「フッフフ…」

ああ駄目だ。人殺したつてのに…

「アッハハハハハハ！」

嬉しさで笑いが止まらない。

「さやか…」

心配そうに見てくる杏子

おおかた人殺しで気が狂った、とでも勘違いしているようだけど、別に人の形をした存在を殺したのはこれが初めてじゃない。

それにこいつも曲がりなりにも魔法少女、死ぬことぐらい覚悟してたはず…何も問題は、ない。

ユラリと立ち上がる

よろよろとキュウベエに歩み寄り、隠し持ったナイフで17分割する。

「初めてあんたに感謝したよキュウベエ。アハッ」

マミは、生き返る

杏子サイド

キュウベエをコマ切りにした後嬉々として帰って行ったさやか

ゆまはさやかの豹変ぶりにアタシの服を掴んで、酷く怯えていた。

あの様子だとキュウベえが言ったことに全くと言っていいほどにシ
ョックを受けてない

どうやら気が狂ったと思っていたが、違ったみたいでよかった。が…

人を殺したのを気につけないこと

そしてキュウベエを切り刻んだあとの、ナイフを持つさやかがの笑み
が…

まるで人の形をした人でないもの——強いて言うなら、妖怪——を
幻視させた

「本当に、なんなんだよ…」

ある意味運命づけられていた一人な12話（改）（後書き）

BGM♪マミさん狂喜のティロ・フィナーレ♪

ナガン「さて、マミ（偽）が本当に死にました。永久退場です。」

さやか「それはさておいてさ、この文何？」

別に人の形をした存在を殺したのはこれが初めてじゃない。

ナガン「これか？これは始めは、人を殺したのは始めてじゃない、
なっていたんだが、これだと人間だけしか殺してなくね？、と受
けとめることができるから、変えた結果が上の文」

さやか「人の形をした存在を殺す、って何なのよ。あたしいきなり
直死の魔眼に目覚めちゃったみたいじゃないの！？
何か弁明は？やっちゃったとか言わないでよね」

ナガン「…やっちゃったZ E♪」

ピチューン

アッーーーー！！

さやかのステータス

状態 良好？

QB 殺害数 4

戦闘力 50000

その他

マミに復活フラグが立ちました
さやかが体に違和感を覚えました

上げて下げられた一人な13話（11月27日改）（前書き）

ナガン「ねえ、皆何でさやかを虐めるの？原作で死ぬから？安定のさやかだから？

この前なんてさやかが車に二回轢かれて、四肢銃で何回も撃ち抜かれて、挙げ句の果てに頭潰されたの見たんだけど、これSYK派の俺達に対する挑戦状だよね？何かこう、どす黒い感情が沸いて出ただけだ。」

さやか「あんただって十分虐げてるよね。」

ナガン「主人公だからいいんだよ。」

うん、今の俺のSGはGS化余裕だね。」

さやか「じゃあ見なかったら良いじゃん。」

ナガン「悔しい！！でも見ちゃう！！」ビクンビクン

さやか「……キモ」

上げて下げられた一人な13話（11月27日改）

さやかサイド

「あゝ、駄目だ…」

さつきまで色々書きつらねていたメモを丸めて捨てる。

あれから二日、マミを生き返らせようと、色々準備してみたけど、そこで問題が生じた。

まず、魔力の質の違い

キュウベえは魔力さえこめれば再生できる、と言っていたけど、あくまでそれは自分の体の話。

他人の体では話が違ってくる。あたしの魔力で作った体では最悪マミと拒絶反応を起こして、生き返った瞬間に、また死んでしまうかもしれない。

簡単に言くと灯油で車が動かないのとおなじこと

これは魔力の質をマミに近付けたらいいのだけれど、魔力が余分に必要となる。

マッチポンプ、って言うやつだったっけ？

次にソウルジェムの活性化、というより思考の誘導

今、マミの魂は死んでいると勘違いして、思考が働いていない、というかできてない。死んだら何もできなくなると、マミが思いこん

でいるからだ。

魂だけでも活動できるとか、死んでもやりたいことがある、と思っている人が幽霊となっても、意識を持って活動できる。

確かそういうことを、以前幽々子が言っていたはず。だから、一時的にあたしがソウルジェムに働きかけて、思考を共有させ、体を再生させように促す。だけどこれにも結構魔力がいる。

そして最後に魔力の必要量

中学生とはいえ、マミの体はほぼ成長しきっている。

肉体を一から作るとなると、魔力がグリーンフィード換算で三個程必要となる。

それと思考誘導、魔力質の変換を加えて計算すると、最低でも5個必要で、後2個足りない。

グリーンフィードから、穢れを取り除けばいいんだけどなあ・・・

そうすれば、何色にも染まっでない純粋な魔力が手に入る。

それで体を作り、マミのソウルジェムに支配させれば、後は勝手にマミの体に変化する

魔力も必要最低限だけで賄えるから、コストパフォーマンスもかなりのものなんだけど・・・

現実はそう甘くはないよね。

ないものねだりしてもしょうがない、と切りかえる。

それによくよく考えて見れば、そこまで焦る必要もない。

ふと窓を見ると僅かに遠くが白みがかっている。

「あゝあ、これじゃ殆んど徹夜じゃん」

寝ないよりはましかと、あたしはふとんの中に入った。

次の日

登校すると京介が学校に復学していた。

「さやかさんは京介と話さないのですか？」

クラスメイトに囲まれている京介を見ながら、仁美は尋ねる。

「いや、ここは敢えて話しかけない」

そして話しかけて来たら泣いてやる。

「だ、駄目だよさやかちゃん。京介に酷いことしないで！」

…まどかは何時の間に読心術を習得したんだろう

「いや、何時の間にまどかはそこまで京介と仲良くなったの？」

そしてツッコミの中にボケを入れる…さすがまどかだ。

いや違うよ！？京介君とは何とも無いよ！？と必死に弁明するまどかだけど、それだと帰って怪しまれるよ

チャイムが鳴り、みんなが席に戻る

そっぴゃああいつ場合は、もうどんな感じに弁明しても聞いて貰えないよね…、逆に弁明しない方が正解…なの…かな… z z z

案の定授業中寝てしまった。

放課後

「えっと、それで話って？」

仁美が何時になく真剣な表情で、あたしに相談事がある、と言うから、近くの店で話すことにした。

「相談とは…恋の話です」

「京介のことでしょ？」

今日の仁美の京介に送る視線、あたしに恋の相談を持ちかけることこの2つで誰が好きなのかがわからない程、あたしは朴念仁じゃない。

「そうですか…なら話は早いですわね。さやかさんの言う通り、私は上条京介をずっとお慕いしていました。」

「ング…なら告白すればいいじゃん」

ホットドッグを頬張りながら応対する。

「さやかさんはどうなのですか？」

「え？」

なんであたしが絡んで来るの？

「あなたは京介さんをどう思っているのですか？」

うーん。あたしにとって恭介は…やっぱり…

「ただの親しい男友達。確かに好きだけど、この感情はあくまで友人愛。loveじゃなくてlikeの方」

だから、と続ける

「どうせ仁美のことだろうから、一日猶予をあげるとか、そんなことを言うんでしょう？そんなことしなくても、あたしが京介に告白することなんてない。」

それに”あいつ”に勝る男なんて、あたしにはいないしね。

まあ、流石に演奏ぐらいは聞きに行ってもいいよね、と付け加えておく

「男友達のわりには、よく京介さんに会いに行ってらしたようです

けど、そこは置いておきましょう。
ですが一日猶予をあげると言うのは、私にとっても心の準備をした
いからです。そこは譲れません」

ホントは心の準備なんて、とつくにできてるはずなのに…、まどか
といい仁美といい、ホントいい親友に巡り会えたよ。

「わかってるって」

頑張れ、と声をかけて、あたしはその場を立ち去った。

「デイベイン…バスター!!」

黒鍵や弾幕で魔女の動きを制限し、そこに止めの一撃を放つ

え？掛け声が違う？そんなもんその場のノリで変わるよ

剣で切り刻んでもよかったんだけど、店を出たあたりから、また体
に違和感が出始めたから、今回は遠距離で攻めることにした。

結界が崩れ、元の景色に戻る

カラン

グリーンフィードが地面に落ちる

後4個、いやあたしの分も合わせると5個か…

「ふう…」

「お疲れ様、さやかちゃん」

「大丈夫だった？」

うん、と首肯するまどか

大分魔力使っちゃった…、あんまり使いたくないんだけど

やっぱり切り刻んだ方がよかった…、とグリーンシードをソウルジェムに近付ける。

あれ？ソウルジェムの土台ってこんな黄土色だったっけ…？

と疑問が浮かんだ瞬間

ソウルジェム”が”グリーンシード”から”穢れを取り込んだ。

「っ！！」

反射的にグリーンシードを投げ捨てる。

何が起こった？なんでソウルジェムがグリーンシードから穢れを取り込む？あたしのソウルジェムに何が起こった？

わけがわからない

頭の中で疑問がスパイラルを巻き起こす。

ソウルジェムの結晶は輝いていた。まるで穢れを知らんばかりに

ソウルジェムの土台は濁っていた。まるで穢れを欲するように

「……………」

これはソウルジェムの構造がわかるヒントになるかも…、て違う！
！そんなことを考えている場合じゃない！！普通ならあり得ないんだ。
こんなことは

「さ………、…した……！？」

体に違和感があるのもこれが原因……？

このままだと魔女になっちゃうの……？

まだマミを生き返らせてないのに？

それにキュウベえからまどかを守らないといけない。

あたしには…まだやることがたくさん…

「さやかちゃん……！」

はつと意識を戻すと、まどかが必死にあたしを揺さぶっていた。

「あ……なに？まどか」

「何、じゃ無いよ。いきなりグリーンフィードを放り投げてから、呼び掛けても揺すってもなにも反応しなかったんだよ！？どうしたの？」

現実に戻されて幾分か冷静になる

「いや、ちょっと虫がいて、ビックリしただけだから……」
大丈夫だから、とグリーンフィードを取りに行つて取り繕う

とにかく原因を探らないと

マミを生き返らせるところじゃなくなった。

「き、今日はここまでにしようか」

「え？」

「いや、もう遅いし、あたし帰るね」

逃げるようにその場を去る。待って、とまどかが引き留める声があったけど無視した

何かが歪んだ、音がした。

まどかサイド

いきなりだった

いつもの様にさやかちゃんが魔女を倒して、また探して、帰る。

そうなるはずだった

私は見えなかったけど、多分グリーンシードをソウルジェムに近付けた時に、いきなりさやかちゃんはグリーンシードを投げ捨てた。

「さやかちゃん？」

突然の行動を不思議に思っただけで訪ねてみたけど、返答はない

不審に思っ て回りこんで見たさやかちゃんの顔は、ひどく狼狽えたものだった

「さやかちゃん？ どうしたの？」

顔の目の前で手をヒラヒラさせても、 なにも反応を返さない。 それどころかブツブツと何かを言い始める

「さやかちゃん！ ！」

心配になって体を揺する。 そこでやっと反応してくれた

何とか取り繕おうとして笑っているけど、 ぎこちなさすぎるそれが、 更に心配をあおる

「き、 今日はこちらまでにしようか」

「え？」

「いや、 もう遅いし、 あたし帰るね」

このまま行かせたら駄目な気がして手をつかんだけど、 振り払われる
振り払われた手を、 呆然と見つめる。

さやかちゃんが手を… 振り払った？

ヒリヒリする手を、 おそろおそろ戻す。

明日になったら…いつものさやかちゃんに戻っているよね…

そう自分に言い聞かせて帰るしか…この言い知れない不安から、身を守れなかった。

上げて下げられた一人な13話（11月27日改）（後書き）

マミ「ねえ、あなた私をおちよくっているのかしら？」

ナガン「いえ、その…おちよくっているわけではなくて…、むしろ復活したら大活躍する予定何で…、ですからその…襟を掴む手を放していただけると嬉しいなあ…なんて」

マミ「（…ニコッ）」

ナガン「ぐえ！？ちょ、苦し…放せ！！いや放してください！！」

さやか「はい、外野はほつといて、マミさんの復活は延期となりました。後魂云々は…まあ勘弁してね」

ほむら「伏線の回収が早いけど、元々原作が12話しかないから、急展開になるのも致し方ないわ」

ナガン「後仁美のことだが、俺は別に仁美が嫌いじゃない。つか何もさやかに言わずに告白するならまだしも、あそこまで正々堂々とした子はデイスれない。」

さやか「そう言えば恭介ってあたしのこと好き（ラブの方）じゃなかったんだよね。」

ナガン「最初俺も恭介にちよつとイラッと来たけど、あれが普通なんだよな…。それに告白しなかったさやかも、悪いっちゃ悪い。」
さやか「あんたホントにあたし派なの？」

ナガン「当たり前だ。ただちょっと、客観的に考察しているだけ」

ほむら「それはともかくとして、確かこの後の展開は確かさやかと杏子がお互いの・・・を・・・して　　するのよね」

ナガン「いきなりなに言ってるの！？全然違うから！！マミが・・・で・・・だけだから！！」

マミ「ふっふん、そうなの・・・」

ナガン「はっ！！いや違うぞ！！これはあれだから！！包丁さんに消されたデータの方だから・・・」

ティロ・フィナーレ！！

さやか

状態　　普通

QB殺害数　　5

戦闘力　　30000

その他

SGに異常が見受けられました。
さやかが体に違和感を訴えています。

腹割って話す2 人な14話(11月27日)(前書き)

ナガン「始めてパソコンで自分の小説を見たんだけど、かなり読みづらかったよ。やっぱり携帯とは違うね」

さやか「それはあんたの駄文っぷりが原因なだけでしょ。」

ナガン「…まあ確かにそう何だけどさ。なかなかそう上手く書けないんだよ。何でだろうね。」

さやか「…コラボSSちゃんと書けるの?」

ナガン「大丈夫だ、問題ない」

腹割って話す2 人な14話（11月27日）

さやかサイド

「……」

だるい

仁美に今日は休むとメールしてから、あたしはずっと布団にくるまって、ソウルジェムをながめている。

昨日より土台が黒に近付いているそれは、相も変わらずきれいに光っている。

大体、予想はつく。

結晶が濁りきると魔女になる。だけどあたしは土台の部分。おそらく生物にとってだって、これははじめてのケースのはず。

だけど生物には分からなくても、あたしにはわかる。

先祖返り

元々あたしは妖怪（その前は人間だったけど……）だった。それがたまたま人間の体に入って人の魂の形に無理矢理なっていただけ。最初魂と体はフィードバックしあっていて、繋がりは強固なものだった。けど生物と契約して、その繋がりは一気に弱くなる。

結果、魂は安定を求めて、妖怪のものへと変化していつている。体が違和感を感じるのもそのせい。妖怪の魂で人間の体を動かす。半人半妖では起こらない、この矛盾。

おそらく違和感だけですんでいるのは完全に妖怪の魂に変化してないから。これから体は、ますます動かしにくくなる。そしていずれは…

ぐっと体を抱き締める。

自覚してから、違和感がますます酷くなった体がいやになる。

生物と一緒に意見なのはかなり癢に障るけど、相手と意思伝達できたらあたしはそれでいい（拒絶されるのはごめんだけど）。けれど、このままだといずれは、あたしは壊れた糸人形のように動かなくなる。そうなれば、何も出来ない。

『よお、何ふさぎこんでんだ？』

どうするべきか…と考えを巡らせていると、念話で話かけられる。

ノロノロと窓をあけて見渡すと、下に紙袋を抱えた杏子とゆまがいた。

『ちょっと面貸しな。話したいことがある』

ドカッ ドオン

今の音は古びれた教会の扉を杏子が蹴り破ったものです。あたしは

関係ないよ。

そのまま台座のところまで我が物顔で歩いていく杏子。

「少し長い話になる」

と杏子は抱えていた紙袋から、リンゴを一個取り出す

「食つかい？」

投げて寄越す杏子

「もちろん」

なかなかいいりんごだ。

りんごにかぶり付く

うん、今日も秋田県は平和だね。

ゆまにもりんごを手渡し、同じくりんごをかじる杏子が口を開く。

「ここはアタシの親父の教会なんだ」

…遺品とも言える教会にこの扱い…冥界で親父さん泣いてると思うよ。

「親父はさ…新聞で人が殺された記事を見ては、どうしてこの世の中はこうなんだって泣くような優しい人だった」

「教会を破門にされながらも、親父は教えを広めようとした。だけ

ど皆親父を異端児扱いして聞かなかった。聞こうとしなかった。おかげでアタシ達家族は食い物にも困る始末さ……」

「アタシは悔しかった。少しでもいいから、親父の話を聞いて欲しかった……。だからアタシは契約したのさ。親父の話を聞いてくれます様につて」

「次の日から、ここには人がわんさか集まった。親父は嬉々として教えを話したよ。そしてアタシは魔女狩りに明け暮れた。表では親父が、そして裏からはアタシが世界を救う。そんな気分だった」

杏子がそこで拳を握る。

「でもそれは長くは続かなかった。ある日親父にバレちゃってさ。親父はアタシを魔女と呼んで蔑み、酒に溺れた。そして……アタシだけを残して心中したのさ。だからアタシはその時心に誓ったんだ。この力は自分の為だけに使う……てね。」

ゆまは驚き、そして全部理解した表情を浮かべた。

そこで杏子は改めてあたしを見る。

「あたしは、他人の事情も知らずに、勝手に願いを叶えて、それで全員を不幸にした。あんたは、自分の為に救うって言ったけど、そういう人達も、あんたの都合で助けるのか？」

わかってる。そのくらい

「あんたは充分すぎるぐらいの対価を払って、今も払い続けている。だからさ、これからは釣り銭を取り戻すことを考えなよ。自業自得の人生を歩めばいい。」

「はあ……前にも言ったけどあたしは救いたいから救うの。リアリス

トなの。自分の為に他人を助けることが殆どなの。それに、実際問題他人のことを顧みる暇なんてないよ。」

釣り銭なんて、その人によって変わるもんだし。

「それはあんたが勘違いしてるだけさ。助けた人に拒絶される辛さを、助けられなかった辛さを、あんたはわかってない。」

ブチッ

気付いたら、あたしは杏子に掴みかかっていた。

「ぐっ！？てめっ、何しやが「奢るなよ、小娘」！？」

纏う雰囲気や神のそれにする。神力が無くてもこのぐらいはできる。

「たかが14年生き抜いた程度の人生観で、余が意志を押し量るなど、片腹痛い」

「人間である以上限界がある？違う、4000年、余が見てきた人間達は限界なぞ何度でも乗り越えた。それこそ、我ら神の恩恵が必ずなくなるほどに」

あたしの視線が固まっている杏子の目を射抜く。

「余はかつて1000をも越える人間を守護してきた。50にも満たない人間を守るなぞ、造作もない」

「神は絶対の存在。故に果たせぬ契りは交わさぬ」

ここで神モードは終了

重苦しい空気から解放されて、杏子は気分を落ち着かせようとしている。

ゆまなんて変身して涙目で杏子にすがり付いていた。

…なんか地味にくる

「い、今のはいったい…」 「折角だから、そこら辺も含めて、あたしも自分の過去でも喋りますかね」

特別だよ、と座りこむ

「あたしはね、前世の記憶ってやつを引き継いでいるんだ」

空気は凍らなかった。流星にさっきのあれが効いてるみたい。

「あたしは前世では始め妖怪、この世界で言うところの魔女って感じかな、まあそれだったんだけどね…。人を殺せない、おかしい妖怪だった」

妖怪は人を食らう

体ではわかっていたけれど、そのまた前世が人間だったあたしは、人間は同族という意識が強くて、どうしても理性がそれを邪魔した。

「その時は何とかして力は衰えさせなかった。けど、他の妖怪が人を食らうのをどうしても許せなくて…殺した」

縄張りだと言って追い払った時もあったけど、それでも殺した数の方が多い。

笑ってしまう。同族なのは妖怪だったはずなのに

「それでいつの間にか人間にこの地域を守護する存在と認識されちゃってね…、やがてそこから信仰が生まれて、あたしは神になった」
「ちよつとまで、何でそうなるんだ？」

「妖怪は人の恐怖心、所謂負の感情から生まれるから、人の認識の仕方によって左右されやすいの。それこそ、人がそいつを神様だと思えば、そうなるぐらいに」

裏を返せば、それだけ人の感情は強いってこと。生物が目をつけるのも頷ける。

「そこからは神様として、人々に貢献した。雨を降らせたり妖怪を退けたりご利益を与えたりした。」

柄にもなく頑張った。それだけ、人に認められて、大手を振って歩けるようになったのが嬉しかったから。

「そんな時だったかな…」

あれは雨が降る秋のことだった。

「いつもの様に妖怪が侵入して来てきて、退治に出かけた。けどそれは罠で、あたしはそれにまんまとひっかかった。」

燃える社、そして血に濡れて、冷たくなって倒れている、あたしに仕えていた巫女

「何とかあたしの巫女が応戦してくれたけど社は全壊で巫女も相打ち」

あんたの言う通り、助けられなかった辛さは半端無かった、と言う。

「社を建て直して、新しい巫女が来て、相変わらずご利益を求める人々。あたしにはそれが耐えられなかった」

人はいつか必ず死ぬのにね……。それを目の当たりにして、認めたくなかった。

「だからあたしはあたしがいなくても、村の人が妖怪を退けられるようにした後、逃げるように旅に出た」

巫女や村人達には悪いことしたなあ

「そこから色々あったけど、今は割愛するね。それで、旅をしている内に、ある神様と出会った。その事を打ち明けてみたんだけど、なんて言っただと思う？」

あの呆れた声は絶対忘れられない

——あんた馬鹿だねえ、そんなことでうじうじ悩んでいたのかい——

「もしかして……」

「他人の為に頑張れないなら、自分の為にしまえ。とっても単純な答え」

わかってる。こんなに簡単に解決するもんじゃないことぐらい。

それが、救うことを義務付けられた神の使命への、自己防衛なことも

だから、とあたしは立ち上がる

「あたしの意志はただの夢見る女の子のようなものじゃない。今更
あんたの過去を聞かされたぐらいじゃ、揺らがない」

「……関係ないじゃねえか……だったら、尚更……」
「どうもこの生き方があたしにはぴったりでね」

歪んだあたしにはお似合いな生き方。

それでも、この生き方も悪くはないと思っている。

「今のあんたは人間だ。神の義務に縛られる必要なんてないだろ……」
「くどい、あたしはこれから自業自得で人を助ける。それは変わらない。」

ピシヤリと、誘惑をはね除けた。

「……はあ。わかったよ。あんたはとてつもない馬鹿だよ。ほんとに
と再びリンゴをかじりだす。

「でも、まああんたの強さの秘密がわかったからよしとしますかね」

あーあ、なんか恥ずかし、と杏子はそっぽを向く。

「ち・な・み・に・あんたもあたしの守りたい人に入っているから」
「ブフ!？」

いきなりの守りたい宣言に狼狽える杏子。タイミングもバッチリだ
ったようにリンゴを喉につまらせている。若干顔も赤い

「・・・ゆまは？」

「今更言う必要もないでしょ？バッチリ保護対象です。可愛いなあもう。」

「なっ、てめっそういうこと面と向かって言うなよな」

「そうじゃないと、こんな黄色い救急車呼ばれるような話はしないし。だから……」

落ちていた木材を拾う。

あたしと杏子の影がステンドグラスまで伸びている。

あたしの影から黒い煙が出て来て、人間の上半身の形をとり、杏子の影に剣を突き立てるといふ、何とも不吉な絵を作り出していた。

ガシャン

「こんな未来も、あたしは許さない」

木片を投げつけて、黒い煙を木っ端微塵にする。

「杏子もまどかもママもゆまも、絶対死なせない」

死なせて、やるもんか

杏子サイド

教会から遠ざかるさやかの背中を見つめながら、リングをかじる

「キョウコ……」

「なんだ」

「変な人だね。」

「・・・そうだな」

守ってやる、って言われた時は恥ずかしかったけど・・・まああれだ、嬉しかった。

「でも、優しいね。」

「・・・そうだな」

4000年・・・か

あいつはずっと悩んでたんだろうな・・・

「他人じゃなく・・・自分の為・・・」

身勝手・・・だな

あいつは、決して強くないんだ。神というポストを無理矢理与えられた、歪な存在。

そう言えば・・・解りづらかったけど、なんかあいつ・・・動きがぎこちなかったんだよな。

なんか・・・すげーいやな予感がする。

「キョウコ?」

「なんでもない」

…………アタシも身勝手に、二人ぐらい守れるよな・・・?

腹割って話す2 人な14話(11月27日)(後書き)

ナガン「はい。今回かなり新しい小説のハードルを上げた14話です。」

さやか「よくあるテンプレだね。」

ナガン「忘れがちになるけど、一応さやかつて、現実↓東方↓まどかという設定なんだけど、始めてこの設定を使った気がする。」

さやか「そう言えばさ。タグにチート化って書いてあるけど、いつなの?」

ナガン「知らね。それよりも今はSGの問題をどうにかしろ。」

さやか「っていうかさ。コラボSSって、完結しないと無理だね。何で一話まるまるもう完成させてんの?」

ナガン「……一時のテンションに身を任せた結果さ。」

さやかのステータス

状態 普通?

QB殺害数 6

戦闘力	その他
20000	なし

置き去りにされた2人な15 話(11月28日改)(前書き)

今回はほんのちょびつとでとても解りづらい変態ほむほむ成分を入れて見たよ。
わかるかな？

置き去りにされた2人な15 話（11月28日改）

ほむらサイド

とある工場を見渡せる鉄塔に、私はアイスを頬張っている杏子とその隣でゆまが立っていた。

夜の電気が輝いている工場の一角に魔女の結界が形成されていて、その中で美樹さやかが戦っている。

「…行かないの？」

「何で行く必要があるんだ？あいつが負けるはずないだろ」

「いえ、何となく行きたそうにしていたから。」

「……」

美樹さやかは触手を切り裂き、魔女に肉薄しようとしているが、思うように近付けていない。

キレが悪い

あの密会の時の動きとは比べ物にならないぐらいに。魔力を使うのをかなり控えている…？それも恐れているぐらいに？今日学校を休んでいたけど、何かあったのかしら…。

「あのバカ…」

見てられないとばかりに、ゆまを抱えて鉄塔から降りて、彼女のもとへ向かう杏子。

何だかんだ言って杏子はさやかのことを気にかけている。今日も確

か、彼女と話をしてきたと言っていた。

「…私もゆっくりと話をしたいわね」

まどかのことについては、魔女退治に連れて行ってうるのは遺憾だけど、キュウベえと接触させないという点においては、何も言うことがない。

左手の痣を撫でる。

それに、まどかの家に設置されている、あのトラップ群を抜けてまどかと接触するのは、ほぼ不可能だ。

私が確認するだけで、10匹は罠の餌食となった。

閑話休題

美樹さやかの様子の変化の原因について、一回確認する必要があるわね…

それになにより、何故時を止めた世界で自由に動けたのか…、確かめない。

さやかサイド

やっぱやめといたら良かった…。

杏子と別れた後、今日もまどかと一緒に魔女退治を始めた。

終始まどかの心配そうな視線が背中に突き刺さっていたけど、気付かない振りをした。

そんなこんなで魔女を見つけたはいいものの、体が動かしづらいわけで、簡単には倒せない。

荒く息をして、体に酸素を行き渡らせる。

魔女はここから50メートルといったところで、祈る姿勢のままある。

魔力は使えない。

魔力は穢れを生んで、魂の妖怪化が進み、体が動かなくなるから。だから走って、道中せまりくる触手を切り裂きながら魔女のもとまで到達しないといけない。

息を整えて、一気に走り出す。

触手が四方八方から迫る。

まず最初に迫る2時方向の触手二本を切り落とし、その勢いで後ろにも切り裂く。

しゃがんで触手をかわし、それを斬り伏せた…はずだった。

けどあたしの腕は構えたまま、動いてない。

ついに…！？

ここぞとばかりに迫る触手に捕らえられ、万力の力で締め上げられる。

「が…この…」

魔女の分際で…

とその時、締め上げていた触手が急にその力をゆるめる。そして、誰かに抱えられた。

「たく、見てらんねーぜ。どうしちゃったんだよ」

杏子は魔女から距離をとる。

おかげで、また50メートル地点に逆戻り…

なんでも、腹が立つ。

「ここで見てな。アタシがやる」

ファンと誰かが治癒魔法をかけた気がする。

…ああするさい、なんで邪魔をするの？

「…邪魔…するな…」

杏子の襟を後ろからひつつかみ、まどかの方へ投げ飛ばす。
ただあたしは、あいつを殺したい／食べたいだけなのに…

瞬動を使い、今度は上から攻める。

なに考えて出し惜しみてたんだっけ…。

……まあいいや、思い出せないなら些事だったんだろう。
迫りくる触手を虚空瞬動でよける。

うざりたい

「……邪魔」

そして魔女に肉薄し、胴体を横に両断。

こんなのにあたしは手間取っていたの…？

触手があたしに巻き付いて魔女から離そうとするけど、あたしは微動だにしない。

そのまま一本触手を、食いちぎった。

そんなあたしはあたしじゃない。

ニヤア

口が裂けるほどの弧を描く

嗤う／刺す

あたしは妖怪

嗤う／斬る

こんな、感情を知らないやつらに作られた出来損ないに、負けるはずがない。

嗤う／咀嚼

人間？あはは、なにそれ？そんなの止めてしまえば…

「「さやか（ちゃん）！！」」

あらんかぎりの大声をまどかと杏子があげる。

意識を一気に引き戻される錯覚を覚えて、意識を外に向けると、魔女はもう消えていた。

続いて、ゆっくりと自分の体を確める。

左腕は骨が飛び出していて、右足も同じように重傷。胴体も触手で

何回も刺されたようで、見るも無惨な状態。唯一ましなのは、魔女の返り血をモロに浴びている首から上ぐらい。

なんじゃこれ。痛覚遮断してなかったら発狂もんじゃん。松田さんも真っ青だよこれ。

取り敢えず全部の傷に魔力をこめる。
傷はみるみるうちにふさがっていった。

「さやか…あんだ」

振り替えると杏子とまどかとゆま／獲物三匹、が美味しそうにあたしを…

それを認識した瞬間、ナイフで左手を刺した。
もちろん痛覚遮断なんてしない。

「っ…」

左手から伝わる痛みが、正気に戻してくれる。

一体何をあたしは考えてる！？本来なら助けてくれた杏子達に礼を言っべきじゃないの！？

「なにしてるの！？」

「おい！！！」

まどか／獲物が駆け寄って…

「くるな！！！」

顔を右手で覆い視界を塞いで、左手でまどかを制止させる。

ヤバイ

妖怪の本能がシャレにならないくらい強くなってる。

ここから離れないと…

「…杏子、まどかを頼むね」

「あ、おい…」

「追いかけるな!!」

お願いだから…追いかけてこないで

まどかサイド

触手に何度も刺されながら、嗤い、魔女を切り裂き、突き刺し、そして喰らうさやかちゃんの後ろ姿。

何度も大声を出して呼んでも、まるで聞こえていないとばかりに、振る舞うさやかちゃん。

もういつものさやかちゃんじゃなくなった。

足元が崩れるような感覚に陥る。

「もうやめて…やめてよう…」

認めたくない。

理不尽を許可しない心がふつふつと膨れ上がる。

また、いつものように喋りたい。

日常への渴望が溢れる。

こんなの…絶対おかしいよ！！

それは無意識に出た言葉。僅かな可能性にすぎたもの。

「さやか！！／さやかちゃん！！」

人生で一番大きいだろう声を、あの時出した。

杏子ちゃんも見るに堪えかねていたらしく、声と一緒にタイミングで出たのは、偶然としか言えなかった。

はっと攻撃を止めて、自分の体を確認するさやかちゃん。

よかった

安堵の心に身を任せて、へたりこむ。

だけど、さやかちゃんが私達を見た瞬間…

ナイフで左手を刺した。

「おい！！」

「何してるの！！」

なんで自分を傷つけるのかわからなかった。

「くるな！！」

たがら私が近付くのを拒んだ理由も、わからなかった。

「杏子、まどかを頼むね」

止めて、置いてかないで。

気付けばわたしは、さやかちゃんを追いかけてようとしていた。

きつと…さっきのは聞き違いだったんだよ…絶対そうに…

「追いかけるな!!」

今度こそ、拒まれた。

がくり、と膝が地面に着く。

どうして…こうなったの…？

ここ最近の記憶を掘り返す。

そもその発端は私がキュウべえに呼ばれて助けに行ったから…
だから…

つまり…全部私の…

「ごめんなさい…」

自然とそれが口からこぼれる。

私は近くによって来た杏子ちゃんにすがり付く。

「あ、おい…」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ちょ！？お前一旦落ち着け！！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
……」

パチン

乾いた音が響く。

少し後に、それが私がはたかれた音だと気付く。

「……いい加減にしろよ。アタシに謝ってもどうこうなるもんじゃねえんだ。」

「だって……」

「だってでもくそもねえ！！アタシだって、追いかけたかったさ！！でもな！！頼まれたんだよ！！あいつに……」

それにな！！と今までの仕返しのように杏子ちゃんは言う。

「あいつがてめえをほったらかしにするわけねえだろ！！長い付き合いのてめえなら、そのくらいわかるだろうが……」

はっ、と顔を上げる。

——あたくし、美樹さやかは全力であなたを守りましょう——

そうだった。さやかちゃんは守れない約束はしないんだ。

……だったらきつとすぐに帰ってくる。

ごしごしと涙を拭う。

そうだよね、さやかちゃん。

杏子サイド

「はあ…」

まどかの後ろ姿を見ながらため息をつく。

柄じゃねえってのに…

「・・・」

ジトーっとこっちを見つめるゆまと目が合う。
目が座っていて、妙に迫力があつた。

「な、なんだよ。」

「（・・・女たらし）」

「？今なんて言った？」

「なんでもないの！」

プイッと顔を背けるゆま。

…なんだこの寂寥感は

これもあいつが変なこと頼むからだ。絶対そうだ。

そう愚痴りつつ、さやかのことを考える。

あいつがアタシ達のそばを離れざるを得ない理由。

今日の教会での会話、さっきの戦闘…

左手を刺した時、あいつのあの顔…

おおかた、また思考が戦闘の時の危険な方、多分アタシ達を殺すとか、そこから辺へと流れて行きそうになった。だが、あいつは前世が神って言うていたが、それじゃ理由にならない。

アタシ達はあいつにたてついたわけじゃないからだ。

ちらりと先日のさやかの姿が浮かぶ。

「まさかあいつ…」

「杏子」

いつの間にかほむらが横に立っていた。

「美樹さやかだけど…鹿目まどかだけではなく、グリーンフィードまどで置いたままにして行くな…、いくらなんでもおかしくない？」

「は…？」

ほむらの視線の方向にアタシも目を向けると、確かにグリーンフィードが落ちていた。

「あいつ…」

何やってんだ、とそれを拾う。

そこまで切羽つまっていたってことか…？

本来ならあいつのだけど、依頼料としてもらっておくか。
鉄塔からこっちに行く時も瞬動使いまくったしな。

ソウルジェムを取り出す。

「ん？」

穢れが…ない？

いろいろな角度から見ても濁っている感じはしない。土台も濁っているわけでもない。

「どうかしたの？」

「…いや、なんでもねえ」

ソウルジェムをしまう。

「なあ」

「なにかしら」

「あいつがまどかのそばの離れないといけない理由はわかんねえけど…」

「だけど…」

「かならず帰ってくるよな…」

神だったんだろ。

交わした約束は守るんなら、絶対帰ってきやがれ。

置き去りにされた2人な15 話（11月28日改）（後書き）

バーサヤカ「アッハハハハハハハハハハ！！！！」

ガンガンガンガンガン

ナガン「おい、なんであいつあんなってるの？すごく怖いんだけど」

ほむほむ「これを飲んだらしいわ」

ナガン「ちよっ、おまつ、それ酒じゃなくね？」

ほむほむ「ええ、美樹さやかがかってに間違えて飲んだわ。」

ナガン「…事情はわかったが、このままだと「皆死ぬしかないじゃない！！」」

ほむほむ「巴马ミ、科白をとるのは感心しないわよ」

マミ「これは私の科白よ！！」

ほむほむ「ねえ…さやかがこっちを向いて何か呟いているのだけど。」

「

ナガン「…次はバーサク状態のキャラをどう扱うか、他の作者との座談か……」

——？？？？——

ピチューン

さやかのスーテータス

状態 悪

QB 殺害数 6 + 1 0

戦闘力 1 0 0 0 0

その他

妖怪化が予断を赦さないところまで来ました。

渴望する一人と衝突する一人な16話（11月28日改）（前書き）

——ぽっぴぽぽぽっぴっぽー♪ぽっぴぽぽぽっぴっぽー♪
べ〜ジダブル嫌あーあーあああ♪

ぽっぴぽぽぽっぴっぽー♪ぽっぴぽぽぽっぴっぽー♪

野菜ジュースが嫌い……—

failed

ナガン「くそ!!」

さやか「止めときなよ。今のあんたじゃ、完^{かんそつ}葱すらできないよ」

ナガン「それでも、俺はミクのファンだから。完葱^{かんそつ}しないといけな
いから。」

まどか「わたしの台詞を汚さないで!!」

渴望する一人と衝突する一人な16話（11月28日改）

さやかサイド

まどか達から逃げて早一日

あたしはとある公園で黄昏ていた。

「まどか、どうしてるかな…」

今頃は学校終わってあたしを探してるはず。

……やっぱりやむを得なかったとは言え、あの言い方は不味かった。

今さらながらに後悔する

そこら辺のフォローは杏子が何とかしてくれていて欲しい。

後でまどかに土下座しよ…

そう決意しつつ、ソウルジェムを手のひらで弄ぶ。

土台はそろそろ焦げ茶色を通り越し始めていた。結晶も濁り始めている。

どうも結晶が濁りきったら魔女化するようだけれど…、どうなるのか…

と、向こう側から談笑している2人が近づいてくる。

ってこの声は京介と仁美!?

あわてて柱の影に隠れる。

様子を見ると、2人でベンチに座って楽しく談笑し、笑いあっている。

自然と頬が綻ぶ。

よかった…仁美の告白は成功したみたい。

あれ?あの様子だと京介と仁美ってあたしが帰ってないの知らない?

ちょっと悲しくなったけど、先生が風邪とか言って誤魔化しているんだろうと、あたりをつける。

先生だって、いたずらに生徒を悲しませたくないだろうし。

「…これはまた死ねなくなっちゃったなあ」

あの2人の笑顔を、あたしの死で曇らせたくない。

ここまでくれば、もうなるようになるしかない。

でも、たとえ成功したとしてもあたしは…

ポタッ

「あ……」

あれ……？何で涙が

恭介が仁美にとられたことが悲しいわけじゃないのに……

なんで、こんなに悲しいの……？

このままだと恭介達に気づかれるから、その場から離れる。

「……ぐす……えぐ……」

けれど、涙は酷くなるばかり

わからない

だれか……この涙の理由を教えてよ……

戦いは、好き

あれから日も暮れ、陰鬱な気持ちのままぶらぶらとどこかの立体駐車場のスロープを歩いていたら、魔女の結界に捕まった。

「……邪魔だあああああ……！」

動かない体を魔力で無理矢理動かし、使い魔を斬る、斬る、斬る。いろいろとごちゃごちゃになっている気持ちを、少しでも晴らしたくて

戦いは色々なものを忘れさせてくれる。

しばらくがむしゃらに斬っていると、魔女の結界が消えた。

「はあ…ハア…ハア…疲れた…」

バタツとその場に倒れこむ
気持ちは全く晴れない。
結局魔力の無駄遣いだった。

戦いは、・・・嫌い。

カッン

「ん？ああ…転校生か…どしたの？」

休息していると、転校生が現れたので、座り直す。

「使いなさい」

グリーンシードを投げてよこす転校生

受け取った直後、グリーンシードから穢れがあたしのソウルジェムに吸いとられる。

また体の歯車が、一個壊れた。

「な！？」

「返す。早くしまつて」

若干黒が薄くなったグリーンシードを投げて返す。

「どういうことなの、ソウルジェムが穢れを吸いとるなんて普通ではあり得ないことよ。」

グリーンシードをしまいながら転校生が聞いてくる。

「いや、どうやら魂がソウルジェムになったことがきっかけで、先祖返り起こしているようだし、この土台が完全に黒くなったら完了ってわけ。」

あっけらかんと答える

「…まさか本当に転生者だったの？いや、そうだとしたらあなたは何だったの？」

転校生の落ち着いた情報整理力はなかなかのもんだなあ…

「もしあいつらが来なかったら生まれていた存在、かな」

「…でも穢れを必要とする存在よね。結局は魔女になるっていうことかしら？」

「あんなでき損ないと一緒にしないでくれる？こっちはもっと崇高な存在なの」

「…あなたが時が止まった世界で動けたのも…」

「あたしは前世では時に関する妖怪だったからね。同系統の能力は効かないよ。あんたが逆行していることは、何となく予想できたけ

どね」

「そつ…なら、」

瞬間突き付けられたのは…デザートイーグル!?

「死になさい」

「ぬをつ!?!」

ドオン

動かない体で直撃を避けたのは奇跡に近い

今度は髪の毛数本じゃなくて、頭の皮と耳の一部をもっていかれたけど

「つた…なにを…?」

「美樹さやかはどの時間軸でも私の足を引っ張って来たわ。今回は期待してみたけど、どうやらあなたが魔法少女となった時点で結末は変わらないみたいね。なら…いっそこで私が」

再び銃口を向ける転校生

「それにあなただって、このまま生きていれば、奴等に鹿目まどかに付け入る隙を与えることぐらい、わかっているはずよ。」

「確かにそうだけどね…、生憎あたしはあんたとは違って、まどかを信じてる。あんたこそ、鹿目まどかをなめるな。」

転校生の目が一瞬細められる。

そして転校生は引き金に指を掛けて…

ジャラジャラ

後ろからきた杏子に多棍槍に捕らえられた。

「何してやがる！！早く逃げろ！！」

「…杏子ナイス」

立ち上がる

「最後に一つ。あたしは利用されっぱなしはだいつ嫌いだから」

そう吐き捨てて、重い体を引きずる。

ぐっ…さっきのグリーンフシードが地味に効いてる。

杏子達が見えないところまで歩くと、何も無いところで躓いて転んでしまった。

「っ…このドシツ子だよ、あたしは」

コロコロ

その時、ポケットから”透明”なグリーンフシードが転がり出た。

「え…？」

もしかして…

残りのグリーンフィードも確認すると、全部透明だった

「…こんな時にかい」

何で気付かなかったんだろ…これじゃホントにドジっ子じゃん

まあ、いい。どうせ時間も余り残されてない

いろいろと整理がついてないけど、後でいいや…

やるだけのことはやろう。

杏子サイド

「どこ行きやがった…」

焦る気持ちとは裏腹に足はどんどん重くなる。

一時間の全力疾走はさすがの魔法少女でも堪える。

あそこまで衰弱していたから、そこまで遠くには行けないはず。

くそ！！ほむらのヤローも取り逃がしたし、早く探さないと不味いことになる。

『ゆま！さやかはいたか！』
『ううん、いない。』

くそっ、と悪態をついて駅のプラットフォームに続く階段を登りきる。

そこには、魔法陣の前の備え付きの椅子に座っているさやかがいた。やっと見つけたとホッとするのも束の間で、よく見るとその姿は自分の死期を悟ったようなもので…

気が付いたら、声を張り上げていた。

さやかサイド

「さやか！！」

仕込みが全て終わって、一息ついていたところ、杏子が階段から姿を現した。

「杏子か…さつきはありがとう」

「…どうしたんだよ、らしくもないじゃん」

「そうかな？」

「当たり前だ。いつもならもっと覇気がある。」

覇気ねえ…

「はは…不思議なもんだよね。会って一週間程度しかたっていないのに、そんなこと言える仲になるなんてさ」

ホント、人間は不思議だよな。

「親友なんてそんなもんだろ。いつの間になってるもんさ」

…やっぱり杏子はやさしいなあ…

「…やっぱりあんたにまどかを頼んで正解だった…。」

「な！？おいそれどういう意味だよ」

「もう一つ…頼まれてくれない？」

あたしはソウルジェムを具現させる

土台も結晶も、黒色寸前だった。

結局は魔女化と妖怪化は同時に起こるらしい。

息を呑む杏子

「さやか…」

「あたしはね、たとえ人間じゃなくなっても、まどか達を守る。その覚悟は、今でも変わらない」

もうほとんど動かない体を魔力で無理矢理動かして、椅子から立ち上がり、マミのソウルジェムを魔法陣の中央に置く

「杏子、あんたはあたしがどんな存在になっても受け入れてくれる？」

「あ、当たり前だろそんなこと！！まだ一回も組み手してないだろ！？」

アタシを見くびるな！！と怒鳴る杏子

「ごめんごめん。あんたならそう言うと思ってたけどさ……やっぱり安心した……」

だから、あたしを見つけて（助けて）ね……

”美樹さやか”（ヒト）としてこの世界に生まれ変わって14年

人として生活して、人として学習して、人として遊んだ。妖怪や神だったころと違い、人の変化の速さに身をもって体験したのは、久しぶりだった。

その中でまどかと出逢い、杏子とも親友となった。これからも、社会に出て同僚とかまた知人が増えていつて、そして人として生を終える。そんな生き方をしたかった。

魔法少女となった時から、まともな死に方はしないと想っていた、こうなることもある程度は予想していた。

人間である”美樹さやか”はここで死ぬ。ここからはどうなるかわからないけど、もう人としての生は、歩めない。

自覚した途端、胸がどうしようもなく苦しくなる。

わかっていただけれど……でもやっぱり……やっぱり……

「もう少し……人間でいたかったなあ……」

今までのことが走馬灯となって頭を駆け巡る。

ああ、あの涙って、そういうことだったんだ…

今更気付くなんて…あたしって、ホント…ば…か…

杏子サイド

よせ

泣いていた

やめろ

さやかが…儂い笑顔で、泣いていた。

まだ間に合う

絶対言わない弱音を、始めて口にして

でも、

その涙が、ソウルジェムに落ちた時

どういうわけか

魔法陣が輝き出し、さやかはゆっくりと崩れ落ち、ソウルジェムはグリーンフシードへと、変化した。

体は全く動かなかった

途端物凄い突風が吹き荒れ、吹き飛ばされる。

「うわ!？」

咄嗟に柵に手を伸ばし掴む。

さやかは知っていた。

人を救う難しさも、守ることの厳しさも、それらに必要な残酷さも、あいつは全部知っていた。

その上であいつはその道を進んだ。選ぶしかなかった。

だから、この結末も…覚悟の上

だけど…だけど…!

「~~~~っさやかあああああ!」

——もう少し…人間でいたかったなあ…——

ふざけんな!!余りにも酷いじゃねえか!!こんな、こんなに世界は残酷なのか!?

あいつに救いはねーのか!!

たとえ前世が神だったとしても、人間であるのには変わりはないのに!!救いを受けることができる存在はずなのに!!

あいつに!!

「あいつの最後の願いぐらい…かなえてくれてもいいだろおおお

「!!」

アタシの様に…やり直しのチャンスを与えても…いいじゃんかよ…

突風が止み、あたりは魔女の結界に覆われる。

戦闘用の思考に切り替わっていく自分がやるせない。

ここは…森か…？

見渡していると遠くに落下中のさやかの体と、輝いていた魔法陣の光が徐々に消えていくのが見えた。

「さやかあ!!」

瞬動でさやかのもとに移動し、さやかの体を抱き抱える。当然息はしていない。

くそ、と悪態をついて魔法陣の方を見ると、そこにはのっぺらぼうの人間の素体があり、今度は魔法陣に置いてあったソウルジェムが輝き出す。

みるみるうちに胸が膨らみ、体つきも女らしく変わり、金髪の髪が生えて、最後に顔が形成された。

この顔は…

「巴…マミ」

ソウルジェムの光が収まると、パチリと目を開けるマミ

「あれ…私、たしか…てなんで裸なの私!？」

あわてて体をくるむものを探して周りを見て、ソウルジェムを発見するやいなや、それを拾って魔法少女の服を着るマミ

「…おい」

声をかけるとようやくアタシがいることに気付いたマミ

「あなたは…佐倉さん!？まさかあなたが…」

「アタシじゃねえ、さやかがあんたを恐らくだが生き返らせた。」

盛大な勘違いをされそうだから言う前に否定しておく

「美樹さんが…？一体どうやって…」

とその時、神社が目の前に出現して、障子が静かに開かれる。

そこから現れたのは

「な!？」 「え？」

魔女としては、あまりにもつりあわない神秘的な双剣を両手に持った、大人びたさやかだった。

渴望する一人と衝突する一人な16話（11月28日改）（後書き）

ナガン「今回は、人であることを渴望したさやかと、そのことで衝突した杏子の16話でした。」

まどか「さやかちゃんあの時こんなこと言ってたんだ…」

詢子「それはともかくとしてさ、解説してくれよ。いまいちわかねーんだよ。」

ナガン「さやかは人間でありたかった。何故なら、妖怪になることにトラウマがあるから。」

さやかは1500年ぐらい人から迫害を受ける存在だったんだ。忌避感がない方がおかしい。」

詢子「それだけか？」

ナガン「もう一つ。妖怪や神になるということは、人の道理から外れるということ。例えばまどか達が仲良くしていても、そこにどうしても孤独感のようなものが付いて回る。以上より、さやかは人間でいることを渴望した。」

まどか「いや、数学の証明じゃないんだから…」

詢子「話変えるぞ。次はさやかの魔女のことだ」

ナガン「原作はさやかの魔女はオクタヴィアだが、こっちは別に恋慕なんて抱いてない。だからなるはずがない。人の形なのは、妖怪化が関係しているから。」

詢子「性質は？」

ナガン「それは追々」

まどか「どっちにしろマミさん達には悪夢のような魔女だよね。勝てるの？」

ナガン「大丈夫だ。別に魔女が戦うわけじゃないから。」

まどか「余計心配だよ……」

さやかのスータス

状態
…

QB殺害数 20

戦闘力 0

その他

……………

復活？する一人な17話（11月29日改）（前書き）

さやか「ねえ、コラボSSは？」

ナガン「…いや、違うから、書いてないんじゃない？。書いてはあるよ、ただ、どうせなら短編よりも中編にしようかなあ、て思っ
て…」

さやか「包丁さんの方は？」

ナガン「それは包丁さんが消した。とりあえず蒼妃さん、もう少し待って下さい。必ずあげますんで。読んでないかもしれないけど」

さやか「あえてこのタイミングで一話だけあげてみれば？」

ナガン「そうして欲しい人が多いならあげるけど、すさまじき（興奮
ぎめな）ことこの上ないだろ。」

復活？する一人な17話（11月29日改）

——さやか魔女化から約30分前——

見滝原東公園

まどかサイド

「さやかちゃん…どこ…？」

学校にさやかちゃんは来なかった。電話したけど繋がらない。家に電話して、帰っていないことを知ってからずっと探した。だけど、手掛かりさえ見つからない。

『君も僕のことを恨んでいるのかな？』

何時の間にいたんだろう、電柱の影にいたキュウベえが話しかけてきた。

「あなたを恨んで、さやかちゃんをもとに戻してくれるなら」

『無理だ。それは僕の力の及ぶことじゃない。』

疲れた体を休めるため、ベンチに座る。

「いつか言ってたよね。わたしが凄い魔法少女になれるって話。あれは…本当なの？」

『凄いなんて言うのは控えめな表現だ。君は途方もない魔法少女になるよ。恐らくこの世界で最強の』

「だったら…なんでさやかちゃんと契約したの？」

『さやかは彼女の願いを遂げた。その点についてはまどかは何の関係もない。』

何を言っているの？

「あなたがそうさせたんでしょ！！そのどこがさやかちゃんの願いなの！？」

思わず怒鳴りつけた。

『彼女の場合は特別だよ。さやかと契約するのは僕達の総意で、あのままだと合意なしでの強制契約もあり得た。』

曲がりなりにもさやかさんの願いの1つをかなえてあげたからいいじゃないか、と喋るキュウベえに愕然とする。

「じゃあ、さやかちゃんは遅かれ早かれ、こうなってたの？」

『そうなっていたのは確実だね』

さやかちゃんが、何億というキュウベえに追いかけて回されるビジョンが見える

必死で逃げてたけど、やがてキュウベえに取り押さえられて…

かぶりを振る

認めない！！そんなのわたしが許さない！！わたしが…

わたしなら…なんとかできる？

そんな甘美な餌が、目の前に現れる。

「わたしが…願えば、さやかちゃんをもとに戻せる？」

『君が力を開放すれば奇跡を起こすどころか、宇宙の法則をねじ曲げることだって可能だろう。何故君一人だけがそれほど素質を備えているのか、理由は未だにわからない。』

「さやかちゃんの力を無くすことだって？」

香りが、見た目が、全てに引き付けられていく。

『その程度、造作もないだろうね。』

キュウベえの瞳がわたしを射止める

『その願いは魂を差し出すのに足るものかい？』

言わないと

「うん、わたし…さやかちゃんのためなら…」

言えばわたしは…

「魔法少女に…」

—— なって…どうするの？——

喉まで出かかっていた言葉が、寸前で止まる。

それは、さやかちゃんがさせたくなかったことじゃなかったの？
今までしてきたことをこれは無駄にするんじゃないの？
さやかちゃんは…本当に力を失うことを望んでいるの？

『どうしたんだい？』

これは、只の逃げなんだ。

ただの自己満足

今まで培ってきたことを無下にする程の価値なんて、ない。

気が付けば、さっきの誘いの周りに、幾重もの罠がはつきりと見てとれた。

「わたしは、魔法少女にはならな…」
ドツ「い…？」

瞬きもしてなかったはずなのに、コマが変わったようにキュウベえが蜂の巣になった。

余りに突然のことで、声も出ない。

音もなく倒れるキュウベえ。

カッン

そしてなにかが地面に落ちる音にひかれて振り返ると、足元に銃の薬莢とピストルを落としたほむらちゃんが、怒った顔をしてわたしを睨む。

「ひ、酷いよほむらちゃん。何も殺さなくて「あなたは…」も…」

こっちに迫ってきて、わたしの肩を掴むほむらちゃん。

「いつも自分を犠牲にしてばかり…役に立たないとか、意味がないとか、自分を粗末にしないで！」

ついには泣き出す始末。

あれ？ほむらちゃんもしかして勘違いしてる？

「あなたがいなくなったら悲しむ人がいる…その人達のこと少しは考えて…」「ほ、ほむらちゃん…」

瞬間、ノイズが走った。

「え…？」

これって…

「…わたし達は、どこかで会ったことがある…？」

「っそれは…」

言葉に詰まっているほむらちゃん。

ふと時計を見ると、大分時間が過ぎていた。

「ごめん、わたしさやかちゃんを探さないと…」

「待って、美樹さやかはもう…」

「ごめんね…」

続きを聞かない内にほむらちゃんから離れる。

どっちの続きも、聞きたくなかった／覚悟がなかった。

杏子サイド

どうなってやる

双剣を持ったさやかとアタシが抱えているさやかを見比べる。

「美樹さん…の偽物よね」

マミが臨戦態勢をとりながら確認する。

確かにあっちのさやかはもう大人と言える体型をしている。髪も腰まである髪をポニーテールにまとめている。

だけど、さやかの偽物…なのか？

あれは、さやかだったものじゃないのか？

出てきた考えを振り払う。

「てめえ、さやかに何しやがった!!」

そして叫ぶ。

アタシの予感が外れてくれるのを願って、

「……」

さやか（？）は何も言わない

ただアタシ達をその光のない目に写しているだけ。

「てめえいい加減に…」

なんか言え、と言おうとした時には、さやか（？）はアタシの目の前にいた。

「ッ！！」

咄嗟に瞬動で後ろに跳ぶ

直後さやかの体を抱き抱えていた左腕から血がふきでる。

後一瞬、遅れていたら死んでいた。

冷や汗がでる。

「撤退するぞ！！」

さやかを抱えたままじやろくに戦えない。

とにかくさやかの体をどこか安全なところに

「佐倉さん！！上！！」

首に殺気

弾かれるように横に転がる。

アタシがいたところにさやか（？）双剣を降り下ろした
「この！！」

マミがマスキット銃でさやかを撃つ

だけど銃弾はさやかを掠めるに留まる。

全部見切ったのか！？

そのままマミに接近し、刃を振るう

マズイ！！

そのまま刃はマミの首に吸い込まれて…

キーン！！

飛んできた銃弾に軌道を変えられた。

刃はマミの首を掠める程度に終わる。

銃弾がさらにさやかに撃ち込まれる。

さやかがバックステップで避けたところにスモークグレネードが撃ち込まれ、辺りが煙で覆われた。

シュタツ

そしてゴーグルのようなものを着けたほむらが目の前に現れた。

「逃げなさい!!」

そう言い残して煙の中に消えるほむら

途端に聞こえてくる銃声

「くっそ、いくぞ!!」

舌打ちしてさやかを肩に担ぎ、マミの手を引いて走り出す。

「え、ちよっ…」

「話は後だ!!今は退くぞ!!」

さやかの体がだんだんと冷たくなるのを感じながら、アタシ達は境界から脱出した。

あたりが元の景色に戻る。

「…あの美樹さんは何者なの?」

マミが重い雰囲気の中尋ねてくる。

「あいつは…」

「かつて美樹さやかだったものよ」

後ろから返答が帰ってくる。

振り返ると所々服が斬られているが、しっかりと二本足で立っているほむらがいた。

「嘘…よね？」

「あなた達も見とけたでしょう。それよりも…」

ほむらがマミに視線を向ける

「どうしてあなたが生きているのかしら、巴マミ？あなたはお菓子
の魔女に殺されたはずよ。」

「知らないわよそんなの……それよりなんで美樹さんが魔女になる
のよ！？嘘よ…私を惑わす嘘に決まって「アタシが見届けた」ッ！
？」

二人の会話を遮る

「さやかがマミを生き返らせたことと、魔女になること…どっちも
見届けた」

重い静寂が流れる

「まどかのところに…行ってくる」

アタシは歩き出した。

まどかサイド

ほむらちゃんと半ば逃げるようにして別れた後、わたしはさやかち
ゃんを探し続けた。

端から見たら、不審者極まりない姿だったかもしれない。

そして気がついたら、宛もなく線路の上を歩いていた。

カンカンカン

踏切の音が鳴り響く

ふと、前に視線を向けると4人の人がこっちに向かっているのが見えた。

暗くてよく見えないけど、髪の色は赤と金色と緑と黒色と…青色

さやかちゃん…！？

駆け寄って確かめる。

よかった、杏子ちゃん達が見つけてくれたんだ。

安堵と喜びに顔が綻ぶ。

だけど、近づいて表情が見えるようになった時に、違和感を覚えた。

なんで、なんでみんなそんなに暗い顔してるの？さやかちゃんが見つかったんだよ？杏子ちゃんは寝ているさやかちゃんを抱えているだけなんですよ？

「…ねえ。さやかちゃんは寝ているだけだよ？ちよつと疲れているだけだよ？」

そこで初めて、魔法少女になってから、ずっとはめていた指輪がないことに気が付く

「そ、ソウルジェムは？ソウルジェムはどうしたの？」

「彼女のソウルジェムはグリーンフィードに変化した後、魔女を生んで消滅したわ。」

最後の望みの糸が、切れた。

「嘘…だよな」

ほむらちゃんはソウルジェムを手のひらに出して最後の秘密を告げた。

「本当よ。ソウルジェムが完全に濁りきった時、グリーンフィードと化して、私達は魔女に生まれ変わる。」

違う、絶対違う

「それが魔法少女の逃れられない運命（最後）」

さやかちゃんが死ぬなんて

震える手を頬に添える

そこにぬくもりはなくて、ただわたしの手を冷やすだけだった。

もう、動かない。

さやかちゃんとは、もう話せないし、笑いあえない

「……ごめんなさい」

涙が溢れる。

何がいけなかったんだろう
キュウベえのせい？

違う

「わたしが…わたしが…！！キュウベえを助けなかったら…！！」

全部わたしのせいだ

キュウベえさえ助けなかったら、さやかちゃんは巻き込まれること
も無かった…

キュウベえに目をつけられることも無かった。

思考が負のスパイラルに陥っていく。
ぐるぐる回って、落ちていく。

そんな時だった

ピロピロピロ

メールの着信音

あり得ない。

負のスパイラルなんて、宇宙のはてまで吹っ飛ばしてしまうぐらいの衝撃が走る。

だって、この着信音は…

杏子サイド

いい加減にしろ

なんでそんな風に淡々と事実を告げられる。

さやかを地面に置いた後、ほむらの胸ぐらを掴み上げる。

「てめえは…何様のつもりだ…事情通ですって自慢したいのか…」

ほむらは目を伏せるだけで何も答えない。

「なんでそんな風に答えられるんだ!!」

さやかにすがり付いて泣いているまどかを見やる。

「こいつは…さやかの親友なんだぞ…」

「…キュウベえは…私達を騙していたのね…」

不意にマミが口を開く

「いいえ、ただ言わなかっただけよ。」

「……同じことじゃない……」

マミが膝について崩れ落ちる。

「おい!!」

マミの体を支える

「…どうして…」

「え？」

「どうして美樹さんは私を生き返らせたの…？こんな話を聞かされるなら、いっそのままにしておいてくれればよかったのに…」

マミのソウルジェムが黒く濁っていく

「ッ!!駄目だ!!絶望するな!!テーマを魔女にさせる為にさやかはお前を生き返らせたわけじゃねーだろ!!」「その美樹さんはもう死んだのよ!!魔女になって…」
続きを着信が遮る。

その音楽は、やけにアタシ達の耳に響いた。

ピタッとまどかが動きを止め、急いで携帯を取り出す。その手は覚束なく、震えていた。

そして、携帯の画面を暫くまどかが見つめて、
叫んだ。

「ほむらちゃん!!魔力を流して!!」

「お、おい…」

「誰でもいいからさやかちゃんの体に魔力を流して！！お願い！！」
ほむらにすがり付くまどか。その様子は最後の希望にすがり付いて
いるようだった。

「ま、待ってまどか。いきなりどうしたの？」

ほむらはものすごくうるたえている。

さっきの力リスマ溢れるクールさはどこへやら。

「今、さやかちゃんからメールが来て、体に魔力を流してって…」

何！？

携帯を拾って画面を見る

本文にはこう書かれていた

——体に魔力を流すよう杏子あたりに頼んで——

あいつ…！

言われた通りに手を握り、魔力を流していく。

すると、さやかを中心とした魔方陣が展開されて…

……ハッ

さやかが、目を開き、息を始めた。

復活？する一人な17話（11月29日改）（後書き）

詢子「生き返ったな」

まどか「あっさりだね」

ナガン「そう思うだろブラザー。だけど違うんだよ」
さやか「これで話が終わるわけないよ。」

まどか「……さやかちゃん。なんでそんなに距離を開けてるの？地味に傷付くから止めてよ」

さやか「いやだって……まどかがあんないけない想像をするなんて……」

詢子「何変な想像してんだてめえは……！」

バチン……

ナガン「グエ……なんで俺……？」

まどか「離れて……！気持ち悪い……！」

ナガン「え……何もそこまで言わなくてもいいだろ……」

さやか「……（あれ、なんでこうなった？）話を戻すけど、こっから先、色んな意味で無理じゃん」

ナガン「グス……俺なんて……どうせ……グス……」

さやか「駄目だこれ」

さやかのステータス

現状把握な4人な18話（11月29日改）（前書き）

ナガン「10万PV突破！！ヤッター！！」（・、）「

さやか「読者の皆！！ありがとね！！」

ナガン「さあ、物語も佳境に入って来ましたところで、18話をどうぞ！！」

現状把握な4人な18話（11月29日改）

三人称

その時の対応は十人十色だった。

ほむらは驚きに目を見開き、あり得ない、と呟き

まどかは歓喜にうち震えて、何も言えず、

ゆまはただ安堵し、

マミは事実を知ったショックでいっぱいいっぱい、展開に着いていけず、ただ呆然としていた。

そして杏子は

手から伝わるぬくもりは確かにさやかのものなのに、何故か強烈な違和感を感じざるを得なかった。

その中でさやかは起き上がり、それぞれを視認した後、

「何で線路の上？」

と至極真つ当なことを呟いた。

杏子サイド

あの後、場所を変えようと言うことで、アタシがアジトにしているホテルに移動した。

「あんたさやかじゃねえよな」

部屋に着いた早々に、キユウベエを見つけ出し、窓から放り投げた（10階）さやかに尋ねる。

「…いつから気付いてたの？」

「てめえが起きた時からだ」

「まあわかつちゃうか…。杏子が言った通り、あたしは美樹さやかじゃないよ。まどか達に状況を伝えて、この体を生きながらえさせる存在」

さや、って呼んでね、とさやか…さやはそう自己紹介した。

「じゃ、じゃあさやかちゃんは！？さやかちゃんはどこにいるの！？生きてるよね！？」

まどかがさやに詰め寄る。

「最初の質問から答えると、さやかは今魔女の結界内にいて、生きているはず」

「はず、とはどういうこと？」

ほむらが尋ねる。

「うん、さやかの記憶では魔方阵を起動した後、魔女化と魂の妖怪化の完了が、ほぼ同時に起こったようです。いまのさやかの状態は

半分魔女で半分妖怪な状態なんだ。わかった？ほむほむ」

「ほむ…ほむらよ。」

「ちよ、ちよっと待って！！妖怪化ってどういうことなのかしら？」

「そ、そうだよ！！さやかちゃん人間だったよ！！」

マミとまどかは初耳だと言わんばかりに詰問する。

「さやか之魂は元々妖怪だったんだ。それが無理矢理人間の体に入っていただけ。今回魔法少女となったことでその枷が外れて、妖怪化が進行したんだ」

まあ遅かれ早かれ妖怪化してたかもね、とさやはクローゼットの中に隠れていたキュウベえに、手を伸ばす。

キュウベえが手を避けて、飛び上がる。それを見越していたさやは、空中で身動きが取れないそいつを窓へ華麗にシュート

「それじゃあ…さやかちゃんはもう元には戻らないの？」

「少なくとも、人間には戻ることは不可能かな。でも、そんなおぞましい容姿になったりはしないよ。ちよっと大人びるぐらいで」

魔女化寸前に言った言葉はこういうことか…

今更ながらに理解する。

まどかはよろよろとベッドに座りこむ。

無理もないな…

この短時間で希望と絶望を、何度も行ったり来たりしている。精神も限界のはず。

並の魔法少女だったらもう三回ぐらいは魔女化してるんだろう。

「その反応…あなた達は知っていたのかしら？」

マミはアタシとほむらの反応が違うことに気付いて、尋ねて来た。

「…最初自分が妖怪だった、って言われた時は、ふざけているのか、と一蹴さえしたわ。到底信じられることではなかったから」

髪を書き上げながら、ほむらは返答する

「でも、美樹さやかあのソウルジェムがグリーンフィードから、穢れを吸収するのを見た時、それは一気に信憑性を帯びた」

「…アタシも、度々あいつが、こう人がしないような、凶悪な笑みを浮かべるのを見たことがあるしな、てめえも見たる？」

チヨコをほつばりながらまどかに話をふる。

「…うん」

「あの時、あいつの妖怪化はかなり進んでいたはずだ。思考も妖怪らしくなっていたんだろ。だからあいつは、アタシ達から離れた。」

「そう…だったんだ…」

「…魔女化する必要はあったのかしら？妖怪化が完了すれば、それで良いように思えるのだけど」

話を遮るようにほむらは質問を続ける。

「あるよ、ほむほむ。妖怪化が完了すると、ソウルジェムで動かし
ている体は人間の体だから、そこに矛盾が生じて、体を動かせなく
なる。だからこそ、魂をソウルジェムから開放して、この体に移す
ために魔女化が必要だった。」

「”ほむら”、よ」

今ちよつと強めに訂正したな。

「魂を移す…？」

うん、さやは相槌を打つ

「先も言った通りだけど、現在さやかは半魔半妖（？）な状態なの。
それでさ、あんた達が見たさやかはどんな姿で、何をしたの？」

「何って…魔女の結界を形成して、アタシ達に襲いかかってきたな。
なのに容姿はやけに大人びていたさやかだった。後、妙な青い双剣
を持っていたな…」

さやの表情が変わる。

「…時を止めたり、空間を歪めたりは？」

「それはしていなかったわ」

なら大丈夫かな…、とさやは顎に手をあてて、考えこむ。

「何が大丈夫なんだ？」

「あゝ後で話す。で話を戻すけど、多分もう、魂の主導権争いが始
まってるはずなの。因みにさやかは妖怪の方」

「勝ち目はあるのか？」

「出現する魔女によるかな。ただし、あなた達が援護出来るなら、

勝率は上がる」

「どういうことだ？」

「ほむほむ達の話では魔女の部分も表に現れている。魔女と妖怪の戦いは、あくまで魂の喰らいあいだけど、外からの攻撃には対応している方が対処しないといけなくて……なんて言うかな、とりあえず言いたいことは、魔女の部分を攻撃すれば、援護になるってことなんだけど」

成る程、そういうことなら…

「その役目はアタシが引き受ける」

「杏子ちゃん…」

「…1つ聞くけど、あんたは人じゃなくなったさやかを受け入れてくれる？ けっこーさやかって臆病なんだよね。」

さやかが試すように聞いてくる

んなもん決まってる

「当たり前だろ、アタシは妖怪だろうがなんだろうが、気の合つやつなら関係ない。それに、また頼まれたしな。」

しばらく目を合わせていると、さやが穏やかに笑った

「わかった。さやかを頼むね」

「ゆまも！ キョウコがいくならゆまも行く！」

ずっと黙っていたゆまも名乗りを上げた。

…今アタシゆまの比喻じゃない墓穴ほったばい？

「くっ…ゆま、今回は…」

止めてそんな泣きそうな顔しないでくれ、断れないじゃん。

「ゆまだって役に立つもん！」

「確かに、戦術においては僧侶は重要だよな。相性最悪のほむほむよりは役に立つんじゃない？」

ここでさやが加勢。て言うか今ほむらに刺さってたぞ。

『てめえどういっつもりだ！』

『どーしたもこうしたもないでしょ。もうこれ断られても絶対付いていく感じだよ？』

それに、もし杏子が死んだらゆまは確実に後追いするよね？』

ぐっと言葉を詰まらせる。

実際、ゆまのアタシへの依存は対処すべき問題だ。

ゆまは幼い頃からの虐待によって必要とされないことを何よりも嫌う。

その点から言えば、愛情を求めてアタシに鞍替えしたのは当然だ。でも、アタシは早くゆまが独り立ちしてほしいのが本音だ。だがしかし、その前に死んでしまったら元も子もない。

「…はあ、わかったよ。但し、こいつの言う通り回復役に徹しろ。」

あたしは折れることにした。

さやはまどかの方に体を向ける。

「さやかは後悔してたよ」「え…？」

「あの時は焦っていたとはいえ、きつい言葉を投げ掛けたことを、謝りたいって、土下座しよう、と思ってた。そのことは妖怪になっても変わらない。もしかしたら、あなたの声がエールとなって、届くかもしれないね」

続いて、マミに。

「…多分どうして生き返らせたのか、と疑問に思ってると思うけど、さやかはあなたともっといたかったらしいよ。」

「え？」

「マミと喋り、笑いあい、楽しく日常を過ごす。そんな当たり前のことを願ってた。」

「…どうしてなのよ。人じゃ無くなるのに、どうしてそんなことが言えるのよ…」

「逆に言うけど、人でなければ、人の営みは歩めないの？」

ようはバレなければいい、と得意げに宣言するさや

「妖怪は人より残酷だ、なんて言われるけど、人は時に妖怪よりも残酷になれる。ま、価値観の違いがあるのは認めるよ。」

「…少し考えさせて。私はそんな風に割り切れない」

「うん。これは押し付けられるもんじゃないしね。自分なりに考えて、折り合いをつけて」

最後にほむらに向き合うさや

「ほむほむも…来る？」

「お断りするわ…、後ほむらよ」

私は足手纏いにしかないから、と髪をかきあげながら答えるほ

むら

「そんなほむほむに伝言」

後で一発殴らせろ、だってさ

今度は外の壁に張り付いていたキュウベえを、殴り飛ばしながら、言うさや

「…期待しないで待っておくわ」

変わらない表情（ちょっと疲れている）で、だけど、少し穏やかな雰囲気になるほむら

「さてと、杏子とゆまには色々と教えないとね」

「まあいいんだけどよお…、何でさつきからキュウベえを、物理的に追い出してるんだ？別にそんなことしなくても、結界張れば良いんじゃないの？」

さつきから誰も咎めなかった行為の理由を尋ねる

「結界はかなり魔力を消費するの。そんなことしたらあたし、3時間も起動してられない。」

「は！？じゃあ後何時間起きてられんだ！？」

「んーと、後20時間程度かな」

寝るとその限りじゃないけどね、とさやはあたしの菓子が入った袋から、チョコレートを取り出す。

「ん、おいし」

「おい、勝手に食うなよ」

「杏子結界張って。そこで話すから」

「無視すんな！―まどかも何か言って…てあいつらどこいった!？」

いつの間にかマミとまどかが忽然と姿を消していた。

「もう遅いから帰るってさ」

ささつ、早く早く、と急かすさやに若干イラつきながらも結界を張る。

「ほむほむ聞くだけ聞いときなよ。新しい攻撃スタイルが見つかるかもよ」

「そうね。見付からないとは思っけど、お言葉に甘えようかしら」

さて、周りにキュウベえも隠れていないし、盗聴されている感じもない。

「じゃあ、どこから話そうかな…」

さやの語りが、始まった。

「さやかの…」

現状把握な4人な18話（11月29日改）（後書き）

さやか「ほむほむ〜ほむほむ」

ナガン「これがやりたかったんだよね」

絢子「それで、話すことがあったんじゃないの？」

ナガン「鹿目ママ後書きのレギュラーになつてやがる…」

絢子「出れるとこで出ないと世の中渡つて行けねえんだよ。」

ナガン「まあいいか…。本編に入れたかったけど、話の流れ上削るしか無かった部分をここに記す」キリッ

さやか「どうでもいいからさっさとやれば？」

ナガン「…SGのことなんだが、SGは魂を変換したものだ。この話の設定では、SGは魂と魔女の卵で構成されている。」

さやか「つまり？」

ナガン「土台が魂で、結晶が魔女の卵つてこと。魔女化の時、魔女の卵は土台を食らつて、魔女となる為のエネルギーを手に入れる。その時余るエネルギーをQBが回収する、ていう設定なんだわ。」

さやか「ん？何か違和感が…」

ナガン「違和感はないぞ。その時放出されるエネルギーは魔女を生

成する時のより多いからな。あ、これじゃ逆か。」

絢子「ふーん。ま、急造にしちゃ良い出来だな。」

ナガン「絢子さん何か俺に対する棘を持ってません。」

絢子「前回のまどかの待遇、忘れたとは言わせねえぞ。」

ナガン「うおい！！まだひきずってたのかよ！？」

さやか「この分だと次はほむほむかな」

さやかのステータス

.....

今のところ2人な19話（11月29日改）（前書き）

ナガン「サブタイ考えるのメンドイ。」

今のところ2人な19話（11月29日改）

さやかサイド

「くあっ!」

ガキン!

折れた軍刀を放り、新たな軍刀を投影する。

魂の主導権争いが始まってはや半日

最初は弾幕で牽制もしていた。

けど、ただの妖力の無駄遣いとわかってから、今は剣の創造と強化、瞬動だけしか使ってない。

出来れば、早めに終わらせたいなあ、と期待していたけど、状況は最悪。攻撃さえ儘ならない。

「何であれがあっちにあるかな、ほんと面倒だよ。」

敵———というかあたしなんだけど———は刀を無造作に振りかぶる。

左肩からの袈裟斬り。分かりきった、簡単にいなせるコース。

だけど、直感のままに振り返って軍刀を構える。

刃に罅が入る、嫌な音を発しながら、刃と刃がぶつかる。

そのすきに迫る魔女のあたし。

縦に斬っているのに、横に移動する刃をかわして、魔女を斬り伏せようとする。

でも、振るった刃は、届かない。

あたしの軍刀と魔女が持つ双剣のリーチはほぼ一緒。あっちが届いて、こっちが届かないなんてことは、あり得ないはず。

なのにそれが起こる。

——時空間を司る程度の能力——

それがあたしの能力

敵対してわかる、そのチート加減

バキン

再び刀が折れる

二合、たった二合で今度は碎け散った。

別に雑に作っただけでもないのに、この有り様。

——蒼穹双刃——

それが、あたしの愛刀で、今現在、あっちが構えている双剣。

状況を整理すると、

敵 能力使用可 チート武器装備

あたし 能力使用不可
凡庸装備

攻撃はまともに通らないし、刀は直ぐに砕ける。相手の攻撃は360度全方位から。

…これなんて無理ゲー？

幸いなことは、時が止まった中でも動けることぐらい…

こりゃ死んだかな…

そう言いつつも、再び泣きなくなるような死地に身を投じた。

杏子サイド

「はあ？」

アタシが聞いたそれは、あまりにも無茶苦茶なものだった。

「…つまり、あんたが言いたいのは、その…蒼穹双刃だったか？は凄い業物で…」

さやが相槌を打つ

「時空間を司る程度の能力？を持っているんだよね…？」

「そゆこと、ちなみに、蒼穹双刃は時が止まった中でも関係なく切れるから」

ポク ポク ポク

チーン

……無理だ。勝てねえ

「でも、能力は使えないっぽいよ。ほむほむの話を聞くと。使えたら多分目を合わせた瞬間死んでと思うし。」

「ほむら、よ」

諦めないんだな、ほむら

ちなみにゆまは時間も時間だったからアタシの膝で寝息を立てている。

「…他になんか注意するところはある？」

「そうだね…、杏子はある関係ないかもしれないけど、遠距離戦は生半可な攻撃じゃ掠りもしない。」

弾幕ごっこ、ていうものがあってさ。ルールとかは省略するけど、要は圧倒的な数の弾幕を掻い潜って、一発入れた方が勝ち、な試合みたいなものでね。さやかはそれを結構な数こなしてるの」

ルナティックも安定クリアできるから、とさやは言う。

るなていつく、てなんだ？

「つまり、私と巴マミは足手まといにしかない、と言いたいからね」

「いや、そうじゃなくて、あたしが言ってるのはあくまでサシの時。しっかりと連携を組めば、遠距離攻撃もちゃんとあたるよ。どのみち火力は杏子任せだけだね。」

「なあ、本気のさやかに勝ったやつって、いるのか？」

「えーと…負けたことなら結構あるけど…、全力戦闘なら軍神に一回、月に攻め込んだ時に一回、後は鬼に一回負けたぐらい。」

「全力で戦った回数は？」「50ぐらい」

きゅ、九割四分…

少し前に戻って、過去のアタシを全力で止めなくなる。

確かに救いたいさ。でもこれ無理だろ。聞いてねえぞ。ワルプルギスと戦った方がぜってえ勝率高い。ゆま後衛に回してどうこうなる問題じゃないよな…

「いや、魔女が本気のさやかと同じ強さなわけないじゃん。」

頭を抱えているところに、そうさやが声をかける。

「でも、苦戦は必至、よね」

「それはまあ…さやかのがんばり次第だよ。もしかしたら、主導権争いが激しくて、身動きがとれない、なんてこともあるし。」

さやが希望的予測を述べるけど、焼け石に水なんだよ。

「そうなるよう祈っとくよ。で、あんたはアタシの後ろで待機してるのか？」

「いや、あたしは戦いが終わるまで、結界の外で待機してる。杏子のお荷物にはならないよ。」

さて、あたしは眠るね。とベッドに横になるさや

「あ、おい…って、もうねてやがる。」

揺すってみたり、声をかけてみるが起きる気配さえしない。

「なあ、てめえは来ないのか？」

癖になっている髪を掻き揚げる動作をしながら、ほむらは答える。

「今回、私は足手まといにしかないわ。時間停止はあの魔女に効かず、他の使える魔法は身体強化ぐらい。銃も彼女にあてるのはほぼ不可能だわ。」

「アタシもあいつに攻撃をくらわせることはほぼ出来ないぞ。」

牽制してくれる味方が一人ぐらいはいてほしい。

「……」

だんまりかよ…

「はあ…、ママのやつに期待すっかな」

これでマミも来なかったら……どうすっかなあ……

マミサイド

「……」

鹿目さんと2人で、暗い寂しい夜道を歩く。

鹿目さんはさつきからずっと黙っている。

どんよりとした夜空を見上げる。

考えるのは、これからのこと

私は最早人間ではなくて、魔女を滅ぼし、そして自身もいずれは魔法少女の目的の為に、ただ使われる存在。

魔法少女のことについては、一回考察したことがある。ちょうど、特大の威力を持つ一撃を放てるようになった時に。

出た結論は余りにも残酷で……
思わず紙をビリビリに破いた。

どうして、あの時キュウベえに真相を聞かなかったんだろう……。

ぐるぐると後悔の念が渦巻く。

どうして、あの時の結果を受け止めなかったのだろうっつ。

…事故にあった時、魔法少女にならずに死んでいたらよかった。

キュウベえなんかに耳をかさなかったらよかった。

黒く、濁った感情が私に染み込んでいく。

そもそも、美樹さんが頼んでもないのに、私を生き返らせたから、
今私はこうして悩んでいる。

その上、美樹さんは…

「マミさん」

振り返ると、鹿目さんが決意した表情でこう言った。

「わたし、杏子ちゃんについて行こうと思います。」
まどかサイド

「え…?」

マミさんが驚きの表情でこっちを見る。

「それで、さやかちゃんを呼び戻します。」

「でも、あなたが行っても足手まといになるだけよ。」

確かに、そうかもしれない。けれど…

ふるふると首を横にふる。

「そんなことはないはずです。思い出してください。さやかちゃんの
言葉を。」

——あなたの声がエールとなって、届くかもしれない——

「うぬぼれかもしれないですけど、あの言葉は、わたしにもやってほしいことがあるんだ、って言っているような気がするんです。

わたしは今まで、さやかちゃんに守られてばかりで、挙げ句の果てに、さやかちゃんがさせまいとしていた、契約をしてしまうところでした。」

あの時のわたしは、ただ自分の罪から逃れたかった。

さやかちゃんが一番させたくなかったことで、事にケリをつけようとした。

「たださやかちゃんと一緒に戦うことが、ただ一つの支える方法だと思っていました。」

魔女退治をしているさやかちゃんの後ろで、ずっと、力になりたい、守られてばかりは嫌だ、という感情が渦巻いていた。

「けれどそれは勘違いで、わたしはただそばにいただけで、さやかちゃんを支えることが出来ていたんです。」

今思えば、さやかちゃんが家にAQB Tを仕掛けて、血生臭い魔女退治に連れて行ってまで、魔法少女にさせたくなかったのは、わたしがさやかちゃんにとって、安息の場所だったから。

その場所に戻りたいから、さやかちゃんは今も頑張って戦っている。

「そしてそれは、わたしにとっても同じです。さやかちゃんは、わたしの安息の場所。だから、それを守るにわたしはいきます。」

約束を反故にするのか、って脅したほうがいいですかね？、と少し茶目っ気を出して尋ねる。

「……死ぬかもしれないわよ」

「それでも、わたしはさやかちゃんの親友だから。」

マミさんとわたしの視線が交錯した。

マミサイド

眩しい

鹿目さんを見て、そう感じた。

それに比べて、私は…

さやかさんだって、今も戦っている。一番辛い思いをしている。

それなのに私は、美樹さんに悪態をついていた。

生き返らせてもらったのに、それを無下にしようとした。

なんて、浅ましい人間なんだろう。

…これじゃあ本当に先輩失格だなあ…

ため息をつく。

あの時、守るって決めたんじゃないの？

それをほっぱり投げて、家でベッドの上で蹲っているの？

「わかったわ、私も鹿目さんについて行く。」

否、よ。絶対に否!!

「え?あの…心の整理は…」

「まだ全然ついてないわ。けど、それは後で存分にできる。今は力ツコいい後輩を守らないとね。」

か、カッコいい…ですか、と微妙な顔をする鹿目さん。

さて、ホテルに戻りましょうか。

佐倉さんも、援護ぐらいは欲しいはず。

守りたいものの為に、私は戦う。

そして、勝ち取るう。

ハッピーエンドを。

今のところ2人な19話（11月29日改）（後書き）

ナガン「マミさんが参戦決定!!」

詢子「後はほむほむだけだな。だけど難しいぞ、あの鉄仮面を懐柔できるのか？」

ナガン「ただ、大丈夫だ。問題ない。こつちには秘策がある。」

詢子「まあ、予想はつくな。それで…ほら、今月分」

ナガン「えあ、いや、今はちょっと持ち合わせが…」

詢子「払えないのか…なら、お前も敵なんだな…」

ナガン「……あ、有りました。こ、今月分の給料。」

詢子「最初からそうすればいいんだよ。」

色々と言バイ3人な20 話(11月30日改)(前書き)

あーもう駄文すぎる…

時間ねえ…

色々やバイ3人な20 話（11月30日改）

杏子サイド

「……はあ？」

さやが寝た後すぐに、マミとまどかが戻ってきた。

どっちも決意を固めた顔をして、いの一番に開いた口は

——ついて行かせて下さい！——

これだった。

マミはいい。魔法少女だし、戦力にもなる。ただしまどか、テーマは駄目だ。

ほむらの奴見てみるよ。フリーズしてるぜ。まどかのことになるとすぐこれだ。

「うんいいよ」

「そうだ、い……て」

やけにくぐもった声が後ろからするので、後ろを向くと、起きてドーナツをほつばるさやを視認。

また勝手に食いやがって……！！

いや、今はそれよりも

「なぜかしら？バマミはともかくとして、まどかは足手まといにしなければならない。契約させる気かしら？」

アタシの代わりに、フリーズから立ち直ったほむほ…ほむらが言う。

「まどかはあたしと一緒に結界の外にいて、さやかに呼びかけてもらう」

「それだけの為に？あつてもなくても関係無さそうだけど」

「さっきの話聞いてた？魂の主導権争いは、言わば精神世界での戦いの。だから、現実では微々たる変化しか与えない声援とか、モチベーションをあげる要素が重要になってくるの。わかった？ほむほむ」

「……ほむらよ」

そろそろ諦めかけているな、ほむほむ…ほむら

「ほむほむちゃ…」

言っちゃったか…

口を押さえても、後の祭りだぞ

「………もう何とでも呼べばいいわ…」

ほむ…らは蹲って、ほむー ほむー 言い始める。

カリスマ（笑）ガード…プッ

光筋が見えるのは気のせいだろう。きっとそうだ

あわあわと手をさ迷わせてどうしようか混乱しているまどか

対照的にさやはすんごく満足気な顔をしている。

「ほむほむが一緒に来てくれれば、とっても嬉しいな」

さやはさらに追い打ちをかけにかかる。

そこに容赦の二文字は存在しなかった。

「誰があなた何かに…」

「まどかはついて来て欲しいらしいけど？」

ほむほむ…ほむほむ（諦めるか…）はまどかに視線を向ける。

まどかはおずおずと、けどどしっかりと首を縦に振った。

「ほむらちゃん、私は、魔法少女にはならない。」

「え？」

「だから、代わりに戦ってくれないかな？」

お願い、と頭を下げるまどか

ほむほむに選択肢は無かった。

「……………認めるわ。私の完敗よ」

見誤っていたわ、と髪をかきあげるほむほむ

「それじゃあ……」

「私も行くわ。ただ、勘違いしないで。私はまどかの為に行くのよ。」

ツンデレ乙

「何か言ったかしら杏子？」

「いや、何も」

「そういうことにしとくよ。杏子、説明は任せた」

と、さやはそのまま横になった。

…………… 今度こそ、寝たよな…

「さやちゃんって、傍若無人だね……」

まどかは床に散らばった菓子の袋をテーブルの上に片付けて……片付け……

「ってほとんど食われてんじゃねえか!!」

「気付いて無かったの？ さやさんすごい勢いで食べてたわよ」

安らかに眠るさやだが、よく見ると口元に食べかす、手に砂糖がこびりついている。

「フフ……クフフ……」

「ダメよ佐倉さん。」

「放せマミ。あいつマジぶっちKILL」

「ちょ、杏子ちゃん落ち着いて……」

「アタシは十分落ち着いてる」

「ほむらちゃんもおさえてよー!!」

「それには及ばないわ」

その日、ぐっすりと眠るさやのそばで、大乱闘がささやか（ホテル内で流石に槍は振るえない）に行われた。

「……ね……」

駅の近くの工事現場

そこにアタシ達は集結している。

「ええ。ソウルジェムも反応しているわ」

「ここにさやかちゃんが……」

緊張しているまどかの肩をさやが叩く。

「今から緊張してどうするのよ。それにあたし達は信じて待つだけだから、意味無いし」

ほら、行くよ。とさやはずかずかと工事現場に入っていく。

「私達も行きましょう。」

ほむらもその後続く

……お、普通にほむらって言った

「行きましょう。鹿目さん。佐倉さん。ゆまちゃん」

「はい。」 「おう。」 「うん！」

カツン、カツンと足音が響く。

それにしても、奇妙だ。

魔女の結界の近くは通常空気が澱んでいる。

さやかも例外では無かったが、何処か他の魔女とは一線を画している感じがする。

これも妖怪化の影響か…？

『中々興味深いことになっているね』

上から、今絶賛聞きたくないランキング一位に入っている声がした。

視線を上に向けると、キュウベえが鉄骨の上に鎮座していた。

「キュウベえ…」

「何しに来たのかしら、インキュベーター？」

『僕も見届けに来たんだよ、暁美ほむら。美樹さやかがどうなるのか、確かめにね。』

「あなたがこんなことに興味を持つなんて、どういう風のふきまわしかしら？」 『僕達にも知りたいことぐらいあるよ。そして今回、さやかがその鍵を握っている。』

「妖怪のことか？」

『そうだよ』

「…ねえ…。目的とかどうでもいいけどさ…、あいつ連れてかない？」

キュウベえを見ながら、さやはそう呟いた。

「あいつ多分、あたし達の最高の罠になると思う。…凄く良い考えだ。」

「マミ！！」

「わかったわ！！」

マミのリボンがキュウベえを捕らえる。

「罠も手に入ったところで、さやかもすぐそこ、さっさと行い。」

と、さやが一步踏み出した瞬間

ブシュッ

さやの至るところから、血が吹き出た。

「うぐ！？」

その場でさやは膝を着く

「さやちゃん！？」

「駄目！！出ないでまどか！！」

魔女の攻撃！？結界の外だぞここは！？

まどかを中心にして、円陣を組む。

さやが受けた攻撃の正体がわからない以上、迂闊に近付けない。

「美樹さんはとんでもない魔女を生んだようね。」「そのようね。」

マミとほむらが警戒しながらそう言う。

「~~~~~。ここまで手酷くやられてんのかい。情けな」

さやが前方を睨み付ける。

バリバリッ

睨み付けたところに亀裂が走り、空間が裂け、魔女の結界の入り口が現れた。

「…これは魔女の攻撃じゃないから、構えなくていいよ。」

構えを解いて、さやの方へ駆け寄る。

どうやら、致命傷となる傷はない。

「ゆま」

「うん。」

ゆまが杖を振ると、さやの傷が塞がっていった。

「さやかの受けた傷が、こっちに跳ね返ったみたい。」

「決着はついたのか？」

「いや、まだみたい。でも、大分マズイっぽい」

「…なら、早く行きましょう。」

「ええ」

「皆…」

まどかは心配の色を必死に隠している。

やっぱり不安なものは不安らしい。

「杏子、マミ、ほむら、ゆま」

——必ず、生きて帰って来なよ——

その言葉を背に、アタシ達は結界の中に飛び込んだ。

『きゅっぷい！？』

開始一秒で罫は消えた。

全く以て使えない罫だった。

廊下にキュウベえだったものが散らばる。

壁には、モニターが備わっていて、ザーザーと砂嵐を巻き起こしている。

——ザー……何…ザー…かに……ザー……——

「ねえ、あれ…」

とそこで、マミが指差すモニターが砂嵐の代わりに、段々と映像を映し出していく。

——…うわああ！？来るな化け物オ！！——

逃げる青年の背中が映る。

それを皮切りに他のモニターも次々と映像を映す。

——消えろ！！二度と来るな！！——

武装した集団がこっちに矛を向ける。

どうして？

「ぐっ！」

頭が痛み、手で押さえる

頭に…何か、入ってくる。

これは…さやかか感情？

——お前のような悪は消え去るのが義務なんだよ——

どうしてあたしは歩み寄ろうとしているのに…

——…ごめんなさい。さやか様…——

地に伏した巫女

どうしてあたしに牙を剥く
どうして…

モニターが一つになり、ある光景を映し出す。

——…わりい…——

それは、さやか腕の中で一人の青年が動かなくなる映像だった。

あたしの大切なものを奪い去る！！！！！！

直後、景色が目まぐるしく変わる

守る

この世界があたしから大切なものを奪うなら、

護る

自分の世界を創る

まもる

それでも侵略するモノがあるなら、

マモル

あらゆる手段を使っても……

突き当たりにあるドアが次々に開き、そして、あの場所に着いた。

クロス

魔女は、神社の障子の前で座禅を組んでいた。

「佐倉さん、曉美さん……」

「なんだ」「何かしら？」

マミは静かにマスキット銃を構える。

「あのモニター。不幸な時の記憶しか映して無かったわね。」

「そうだな」

「私、幸せな頃の話も見なくなったわ」

「見るのは無理だな……」

槍を構える。

「後でじっくり話してもらおうぜ」

「そうね、私も興味があるわ」

「ゆまも！さやかお姉ちゃんの話、聞いてみたい。」

ほむらも銃を構え、ゆまはステッキを構えた。

魔女は動かない。

ただ、手を床に置いた。

それがトリガーとなつて、魔方阵が現れる。

その数は三つ。

マミが生き返つた時に見たものとはまた違う。

その中で、人の形をしたものが形作られていく。

そうして出てきたのは

紫の服で頭にカエルのような帽子を被つた少女と、

胸に鏡がある赤い服で、背中にしめ縄を付けている、女性と、

大陸風の緑の服で、燃えるような赤い髪的女性だった。

「諏訪子、神奈子、美鈴」

さやかが三人の名前を呼ぶ。

「殲滅しなさい。」

戦いの火蓋が、切つて落とされた。

色々とヤバイ3人な20 話(11月30日改)(後書き)

ナガン「さやか対杏子達だと思ったかブラザー？その斜め上を言うてやったぜ」(＾3＾)ノ

さやか「おゝのゝれゝはゝ」

ナガン「ん？」

さやか「何しとんじゃボケええええええ！！」

ナガン「マゴフ！？」

さやか「何かもうデットエンドしかないじゃん！？生きて帰ってこれんの！？」

ナガン「星になって帰るんじゃない？それよりも、お前の夫決まったから。」

さやか「あん…え？」

ナガン「ヒントはイザナギから生まれた神の石柱」

さやか「いやいやいやいやいやああ！？お前殺す気じゃんそいつ！！」

幕間（前書き）

ナガン「実は東方やったことないんだよね」

幕間

朝

「…ん…」

寝ぼけた体に朝日が射す。

「ふあ〜」

のろのろと起き上がり、顔を洗いに井戸へ向かう。

「ん〜」

歩きながら、軽く伸びをして、固まった体をほぐす。

しかし、あの夢は何だったんだろうねえ？

ちょうど山の麓を見渡せる、見晴らしのいいところで立ち止まり、遠くを見据える。

虫がさえずり、葉がこすれあう音、しかない。

夢は確かこのことと同じ風景だったはずなんだけど…、何か違うんだよねえ…

「お〜い、何してるの神奈子？朝ごはんもう出来てるよ〜」

しばらく考え込んでいると諏訪子が呼びに来る。

「ああ、すぐいくよ」

私は手早く身仕度を済ませ、家族の元へと向かった

「ふーん、それで、どんな夢だったの？」

朝食時に夢のことを話した。

いつもなら、こんなことはまずしないはずだけど、…気が向いたと
いうかなんというか、話さなきゃいけない気がしたというか、とに
かく話す気になった。

「そうだねえ…、変わらないんだよ」

「変わらない、ってどういうことですか？」

「いや、夢の舞台はここで、いつもの日常だったんだけど…、ちょ
っと違ったんだよねえ。」

「え？ちょっと待って。それあたしも見たかも」

「あたしもです」

ここで、同じ夢を全員が見たという事実が発覚する

「本当に同じ夢なのかい？」

「恐らくそうです。いつもの様に神社の掃除、そして家事を行い、その後博霊神社に宴会に行くところで、目が覚めました」

「まんまあたしの夢だよ、それ」

「確かに、何か違いましたね。こつ…言葉にすらいですけど…」
食卓が静かになる。

そこでふとさっきの遠くの景色が脳裏を霞める

そう言えばあの夢は森からは、沢山の賑やかな声が微かに聴こえてきた気がする。

対してこっちは…

「もの淋しいのか」

素直な感想をポツリと呟く

「あー！そうです！！活気があって賑やかでした！！」

「そう言われればそうだよね」

その言葉は、2人の咽につつかえた骨を、キレイに取り除いたよう
だ。

・・・？

違和感を感じて周りを見渡す。

2人も同じように周りを見渡している

「違う…」

「違うね」

「はい、違います」

夢じゃこんな古い家じゃなく、もっとしっかりしていた。

家具も透明な板が付いた扉の棚があった。

「あれは、外の物でしょうか？」

「多分それで間違いないよ」

夢の話題は白熱していく。

ここはこうだったとか、あそこはこう違う等と、話は進んでいった。

その時、

「もう1つ、最大の謎があるのに今気付いたんですが…」

「奇遇だね。今あたしも気付いたよ」

「私もだよ」

これもまた謎だが、なぜこのことを突然思い出したのだろう。

「あの青い髪の女性は誰だろうね？（でしょう）（だろう）」

「

「私は確か敬語を使っていましたから…、多分神様だと思うんですけど…」

「あたしもかなりかなり親しく話してた気がするね」

「…名前は？確か私はそいつの名前を、呼んだはずなんだ」

誰か知ってるかい？と尋ねる

「そうなんですよ。それがわかりません。」

「えーと、と…、いや違う、…なんだったかな」

肝心の名前が、全く出てこない。

何でか、それに無性に腹が立った。

「ふっ」

朝の日課である太極拳

組を一通りしながら、今日の夢を考えます。

夢では、真正面にある湖には沢山の妖精が飛び回り、絶えず活気の

ある楽しそうな声が聴こえていました。だけど、現^{うつ}は妖精達は数えるほどしかいません。楽しい声なんて言わずもがな。

こうして私は門番の職に就いていますけど、ここを訪れる人なんてあの白黒しかいません。

だから私は、こうして中国拳法の型を暇潰しにやっていますけれど…。

少し…、シャドーでもやりますか

シャドーの相手を空想する

いつもなら、身近な人が仮想敵として目の前に現れるんですが…

「へ？」

現れたのは、薄い青の髪的女性。

誰ですか？と、尋ねるが、返答はなくて、口元に不適な笑みを浮かべて、ただ構えるだけ。

どうやら、それが目的なのでしょう。

「良いでしょう。相手になります」

構える

辺りが一層静かになります。

相手の気配を読み、呼吸、体の重心、目線を感じとる

青い髪の女性が一瞬で目の前に移動する。

活歩、それも無拍子ですか

その次は普通は崩拳か肘打ちでしょうけど…

相手からその気配はない

足元で大きな音。

案の定、それと共につきだされた腕は途中で止まる

その一瞬を見逃さずに、顔面に肘を突き出す。

これは顔を横に反らして避けられる

だけど、まだ私のターンです

肘打ちした腕を伸ばして、顔面に裏拳

大した威力はありませんが、相手の体勢を崩すには充分。

裏拳が女性の顔面に当たります。

しかし、女性は真正面から受け止めて、よろけることはありませんでした。

そして、両者の繰り出した掌底が両者を吹き飛ばしました。

ふむ…なかなかの強者ですね

ちなみに私達は今まで一步も動いてないですし、ましてや手なんて言わずもがな、です。

え？さっきのは何ですかですって？

あれは目線、僅な挙動、思考の交錯が織り成す高度な心理戦です。

さて、こて調べはここまでです。

「行きますよ」

今度は私からしかけます。

しかし、女性は笑うだけで、何も行動を起こしません。

そしてそのまま私の蹴りは……

女性をすり抜けました。

幻影！？何時の間に！？

付近を警戒します。

が、何時までたっても攻撃してくる気配がありません。

それどころか、まるで始めからいなかったように、女性の気配はありませんでした。

どういうことなのでしょう？

「美鈴、あなた何していたの？」

ずっと見ていたけど、途中から変だったわよ、と混乱しているところに、咲夜さん尋ねてく……て、え？

「咲夜さん、青い髪の女性を見ませんでしたか？」

「青い髪？見てないわよ」

あの女性はもしかするとシャドーだった？でも、夢に出たとは言え、見ず知らずの他人がシャドーで出てくるのは、まずあり得ない。そこで、そう言えば、と咲夜さんが口を開く。

「お嬢様が、あなたと同じ質問をしたわね」

「レミリアお嬢様が？」

「ええ、きつとそいつが、新たな波紋を巻き起こすだろう、って愉快に笑っていたわ。近い内に波紋を起こすのに」

「その女性の名前は？」

「さあ、知らないわ。」

「そうですか……」

まあ、精々今日も白黒を入れないようにね。と踵を返す咲夜さん。

結局、レミリアお嬢様にもその女性のことを尋ねて見ましたが、解らずじまいでした。

その時、レミリアお嬢様に掴みかかってしまい、咲夜さんにギタギタにされました。

私としたことが、何でかイライラしたんですね。

紫様、どうなさいましたか？

…藍、これから面白いことが起こるわよ。

は？

さしずめ、当事者しか知らない隠された異変、てところかしら

何故そんなことを？それに今代の博霊の巫女に異変を隠し通せるとは思えませんが…

そう、霊夢は才能にあぐらを掻かずに修行するものだから、今やあの子は弾幕ごっこ以外でも大妖怪と退けをとらない。何か決起迫るものがあるぐらいに。でも、元々隠す必要なんてなかったとしたら？

！？まさか…

大丈夫よ。この異変は幻想郷に直接影響は与えない。むしろ計画にプラスに働くかもしれないわ。

現在は準備もほぼ終わりましたし、地底の方で一悶着有りましたが、計画に支障は有りません。

そう、今度はしくじれないわね……。これで、全て終わらせる。
・・・ところで、藍

何でしょう？

今回起こる異変の名前を考えて見たんだけど……

夢時元異変、何てのはどうかしら

幕間（後書き）

さて、次からバトルだ。

期末試験終了記念外伝（前書き）

詰め込みすぎた。

故に急展開

創造力（誤字にあらず）を膨らませて読んで下さい。

5000字の制約はきつい…

期末試験終了記念外伝

目を開けた時、知らない場所だった。
でも、全く知らないわけではなくて、どこか親近感がある場所だった。

はて、あたしは自室で寝たはずなんだけど。

自室どころか家の中でもないな。

「…水族館、なわけ無いよね」

ぐるっと周りを見渡す限りでは、水族館の水中通路の中にいるようだけど、障気が濃すぎる。

魔女の結界が妥当だよな…

「元凶ぶっ飛ばしてさっさと帰るか」

と障気が濃い方へ歩きだす。

それにしても…

水槽の中の魚を見ると、何でこんなにムカつくんだろう。

いや、違う

この空間のもの全てに腹が立つんだ。

魔女の属性？

だとしたら凄く面倒なんだけど。

勢い余って外にも影響が出そうだよ。

怒りは力をもたらすけど、冷静さを失わせるからなあ。

と、そうこうしてる内に魔女一歩手前の扉だ。

ドオン

「ふうん。先客がいるんだ」

本命のマミか？杏子か？それか大穴のほむらかな？

…よしマミ！！君に決めた！！

カチャ

「…へ？」

扉の向こうにはマミ、ではなくてかなり傷付いた杏子と、懸命に魔女に呼び掛けているまどかがいた。

あー、成る程わからん

いやわかってしまっけど、

…帰れんのかあたし

つか、このシチュにかなりデジャヴを感じる。

そこで、あたしの視線と魔女の第三の目の視線が交錯した。

「がつ!？」

途端に覚えのない記憶や感情があたしの中で暴れまくる。

「この…記憶は…」

そっか、あいつはあたしなんだ。

…

はは…全く

「やること、一つ出来ちゃった」

さて、取り敢えずは…

蒼穹双刃を構えて駆け出す。

握りつぶされそうなまどかを助けますか

杏子サイド

悔しかった

さやかに何も出来ない自分が。

一縷の望みにすがってみたけど、刃を交えれば交えるほど、どんどん消えていく。

そして、魔女がまどかを握りつぶそうとするのを見て、諦めた。

もう、無理だ。

さやかは戻らない。

だけど…

「さやかあアッ！あんた、信じてるって言ってたじゃないか！この力で人を幸せに出来るって！！」

頼むよ神様…

こんな人生だったんだ。

一度ぐらい、

幸せな夢、見させてよ……

ザンツッ！

答えは返ってくるはずがない。

「それはあたし言ってないなあ。自分の為に使うとは言ったけど。」

そう思い込んでいたから、横からの返答に呆けてしまった。

ゴトッ

魔女の腕の落ちる音がやけに遠く聞こえる。

「随分とこつぴどくやられてるね。杏子。」

青いマントに青い髪

美樹さやかが、そこにいた。

さやかサイド

「さやか…ちゃんなの？」

まどかが呆然とあたしを見る。

「いや、美樹さやかだけど、まどかが知ってるさやかとはまた違う存在。」

まどかが知ってるさやかはあっち。」

と、魔女を指差す

「どういうことだよ」

「細かい話はまた後で。簡単に言うと、まだ終わってない。」

杏子達に背を向け、結界をはる。

「その中に入れば、勝手に回復するから、祈ってて。」

「祈る？」

「そう。美樹さやかが無事戻りますように、ってね。」

魔女は剣を振り上げ、大量の戦輪を虚空にだす。

「” いいの？”」

それにあたしは最大限の殺気でお出迎えする。

「” その剣を降り下ろせば、もうコンティニューできない。それでもいいなら、降り下ろせば？”」

魔女の剣が震えだす。

本能的に恐怖を感じ取っているのだろう。

やがて、この殺気に耐えられなくなった魔女は、雄叫びを上げて剣を降り下ろした。

戦輪が唸りをあげて回転し、一直線にあたしに向かう。

「ば〜か。あたるわけ無いじゃん」

小馬鹿にしたステップで華麗に避けていく。

「ほらほら、ただ歩いている敵にも当てれないの。あんたってホント雑魚。」

魔女は性懲りもなく、数で押しきろうと、戦輪を具現化している。

ため息がでる

「だからさ……」

戦輪を擦れ違い様にコマ切りにする。

「当たらないんだよこのドアホ、」

魔女は巨大な剣で両断を試みる。

「ドクされスカタンピンが!!」

剣は呆気なく、それはすがすがしい程に斬り飛ばされた。

そのまま跳躍

「ライダーアアアキイイッック!!」

魔女は仰向けに倒れて、床が崩壊するのに構わず、魔女の胸に飛び乗る。

さて…

「オネンねの時間は、過ぎたよあたしィィ!!」

右手を魔女の胴体に突き刺し、グリーンフィードを掴む。

閃光が辺りを包んだ。

”さやか”サイド

暗い、暗い闇の中

一筋の光さえ見当たらないところにあたしはいた。

どんどんと堕ちていく

抗おうとは思わない。

だって、もう何もしたくない。

結局、あたしのしたことは全部無駄だったんだ。
魔女を狩る道具のあたしは要らなくなった。

目を瞑る。

もう、寝ちゃおう。

足下から、体が崩れていく。

やっと…終われる、と思った、その時だった。

ガシイ

肩を捕まれるという、この場では有り得ない事態に、思わず誰が、と振り向く。

「こんの大ボケヤロオオオオ！！」

殴られた。

ほっぺをグーで、思いっきり殴られた。

とても”良い”笑顔をしたあたしに殴られた。

大事なことから三回言った。

さつきからの急展開に全くついていけなくて、手をほっぺにつけたままポカンとしてしまう。

「ねえ。目エ醒めた？醒めてない？だったらもう一発…」

「あ、ああ醒めた！醒めました！！それはもう！」

「チツ。だったらさっさと行くよ。こんな所でいつまでもウジウジしてないで」

今本気の舌打ちしたよね、このあたし

「へ？何処に…」

「はあ…あんたまだ目エ醒めてないよね。まどかの所々に決まっているじゃん」

あたしが…まどかの所に？

「…行けるわけない。まどかに会う資格なんてない。」

「そのまどかは、危険を顧みずにあんたを呼び戻そうとしてる。」

「え…？」

「たかが喧嘩の一つや二つで親友じゃなくなるわけないじゃん。今度資格が無いって言ったら、もう一方の頬も殴る。」

「…やっぱり無いよ、魔女を狩る道具のあたしに資格なんて無…」

バキィ

本気で殴られた。

さっきのは手加減してたと思えるぐらい痛かった。

「確かに魔女を狩る道具に会う資格なんて持ってないけどね、美樹さやかはそれを持ってる！」

「っ…あたしは魔女を狩るしか能がないんだ！そうやってしか世界を守れないんだ！それが出来ないあたしなんて要らないんだよ！」

「…あんた何か勘違いしてない？」

「え？」

「魔法少女は魔法少女。世界の守護者でも何でもない。元々世界なんて、勝手に回って、勝手に介入して、勝手に終わる。守る必要性なんて、全くない。」

戯れ言だ、なんて言えなかった。

「それにさ、あんた義務で人を救ってるよね。」

「なにを…」

「魔法少女だから救う、そう思っている内は人助けなんて止めなよ。長続きしないし、あんたに見返りが無い。むしろ自分の為に救う方がいい。」

「人を助けるのに見返りを求めろって言うの？！」

「笑顔と礼、これを見返りにするのはいけないの？」
雷に撃たれたような気がした。

「義務でやってれば、そんなささいなものも気付かなくなるし、無視するようになる。そうなれば、人助けは只の善意の押し付けに成り下がる。」

あたしが手を差し伸べる

「だからさ、これからは、自分がそれを見る為に頑張って見れば？」
まどかの、家族の、仁美の、恭介の笑顔がとてつもなく恋しくなった。

「…大してこれまでと変わらないよね」

「でも、世界は変わってるよ。」

ああ、”あたし”はもう全部経験したんだ。

ホント、大馬鹿だなあ…

両頬をパンと叩いて気合いを入れる。

「…うつし！！さやかちゃん是不死鳥の如く蘇りますよ！！！」

あたしは、手を取った。

さやかサイド

「うおらっしゃあああ!!」

掛け声と共に、腕を引き抜く。

——時間逆行開始!!

手の中にあるグリーンフィードの時を逆行させ、ソウルジェムへと戻す。

ソウルジェムは青く、これからの未来を夢見て、明るく輝いていた。

魔女は消え失せ、結界も消えた。

「さやかア!!」

杏子、まどかと、いつの間にか増えたほむらが此方にくる。
傷もすっかり治っている。

「杏子、ほむら、体は？」

「へ？」

「あたしの体。どこにあるの？」

「そりゃ、ホテルに寝かせてあるけどさ……」

その言葉を聞いて、あたしは空間を切り裂いた。

パカッと空間に口が出来る。

そこに手を突っ込んで、ベッドで寝ているさやかの襟首を掴んで引き戻す。

この一連の行動に、まどか達は全く着いていけてない。

最後にさやかの手にソウルジェムを置いておしまい、と。

ソウルジェムを手に握らせると、さやかの顔に生気が戻る。

「おゝいきろ。殴るぞ〜」

と言いつつ、拳は降り下ろす。

「ぎゃああああア！！」

間一髪の所で”あたし”はそれを避ける。

「何すんだアア！！コンクリ碎けてんじゃん！！」

「まどかに謝らないという訳には行かないからね。

さあ、」

ズイと”あたし”をまどかの前に押しやる。

「…」 「…」

二人とも頬を掻いたり、指をモジモジしていて、視線は合わせようとしない。

”あたし”に聞こえるように軽く舌打ち

「！！…まどか、あんなこと言ってごめん！！」

「え！？いや…わたしこそ何も考えなしに言ってごめん。」

まどかに聞こえるように舌打ち

「！！…えーと…お帰り、さやかちゃん」

「…ただいま」

ふう…これで一件落着、と。

一仕事した後の達成感もまた見返りの一つ。

「あ！！おいお前！！」

杏子があたしの足下を見て叫ぶ。
足が、消えていた。

「ありや、どーもお迎えが来たみたい。」

「そんな！！何とかしないと」

「いや、もといた世界に帰るだけだから心配いらない」

もう腰まで消えたよ。

早い…

「ありがとな。さやかを助けてくれて。」

「どういたしまして、”あたし”は突っ走ることが多々あるからさ、ちゃんと見張って置かないと駄目だぞ。」

「あんた人を犬みたいに…まあ感謝してるけどさ…。」

「あたしとしては、この道は歩んで欲しくないけど、とやかくは言わない。ま、また来ることの無いよう願ってるよ。」

「ぐっ…あんたホントにあたしよね？」

「あたしは美樹さやか。それ以外の何物でもないよ。」

ああ、ついに肩まで…

「待ちなさい。あなた何者なの？」

「質問するのが遅いよほむほむ。」

あたしは、条理そのものをねじ曲げる存在、神だよ。」

そして、あたしはこの世界から消えた。

その後

「美樹さやか」

「あれ、杏子にほむほむ。どしたの？」

「ほむらよ。あなたに聞きたいことがあるんだけど。」

「さやかさあ…あの一撃ってどうやったんだ？」

「あれはあたしにもよくわかんない。気が付いたらワルプルギスの夜が半壊してたんだもん。びっくりしたよ。」

「その後ぶっ倒れたけどな。」

「ぐっ…あれは…魔力が何でか物凄く使われてたから。」

「その割には、ソウルジエムは濁ってなかったけど。」

「それは…ていうか、それが出来る人物があたしは一人しか思い浮かばないんだけど。」

「ええ。ああ忌々しい。ほむほむなんてあだ名をいつの間に広めたのかしら?」

「やっぱり広まってたか。」

「そもそも美樹さやか、あなたが……………」

「あんた!!」 「お前!!」 「あなた!!」

「や!遊びに来たよ。」

期末試験終了記念外伝（後書き）

「マミ」解せないわ

ほむほむが戦う21話（前書き）

あなたは昼寝をしています。

そして、目を覚ましてみると、母が自分の携帯を見していました。

その携帯の画面は、書きかけの小説です。

さて、あなたはどうしますかドチクショオォー！！

ほむほむが戦う21話

さやかサイド

斬る かわす

かわす 斬る

突く 折る

受け流す 突く

どれ程この応酬が続いただろう。

もう数えるのも億劫だ。

ギン！！

今ので48合目

剣はまだ折れてない。

分かってきた。

どう返せば威力を殺せるか

例えば、この袈裟斬り

ただ愚直に受けては駄目。

強引に滑らせるのも駄目。

相手の軌道を読み切り、それに合わせるだけ！！

敵の剣はあたしの剣を滑って、空を切る。

体勢が崩れた瞬間、すかさず突きを繰り出す。

あたしと敵の間が不自然に開き、剣は届かない。

けど、

「はあ！！」

斬撃は届く！！

敵は体を無理矢理ひねり、回避するが、わき腹にかすった。

やっと…2回目…

どこのオレンジ頭の修行だよ…

いい加減限界も近い

『がんばって』

・・・うん。がんばる

さっきからまどかの応援が命綱。

同時に、敵の能力の使用に、インターバルが生じるようにもなった。

多分、杏子達との戦闘にリソースを割いているからだと思う。

おかげで、かなり戦いやすくなった。

なっただけど、よりにもよって…

「何で神奈子達を召喚するかな…！」

どこにそんな力を残してたんだよ。

しかも、あたしの親友を召喚するなんて、趣味悪すぎ。

どうする？今の杏子達に勝ち目なんて殆どない。

何せ相手は、2000年以上生きる有名な神二人と、

いつもは冴えないが、近接戦闘に置いては無類の強さを誇る妖怪。

いくら本物より劣っているとは言え、よっぽどセンスが無い限り、弾幕ごっこ初心者がノーマルをクリアできるはずが無い。

「いい加減くたばれ…！」

早くケリをつけないと…！！

ほむらサイド

魔女が手を振り下ろしたことで始まったこの戦い。

開始早々、赤い服を着た、神奈子…だったかしら？、が一枚の札を

取り出す

——「エクスタンデッドオンバシラ」——

すると、空中に御柱が出現する。

「散れ!!」

杏子がそう叫ぶのと同時に、御柱が一斉に襲いかかる。

当たりそうなのを瞬時に予測し、避ける。

御柱が地面に刺さり、土煙が上がる。

「ほむら!! マミ!! 無事か!？」

御柱の向こうから杏子が叫ぶ。

「ええ! 無事よ!」

「こちらも!」

どうやらマミも無事らしい。

でも…

「分断された…」

眼前には高く聳え立つ御柱。

不味いわね…

とその時、土煙の向こうから人影が見えた。

警戒しつつ、両手にベレッタを構える。

「・・・確か、美鈴だったかしら。」

この感じ、ただの使い魔、って訳でも無さそうね。

「本当に、美樹さやかには手を焼かされるわ。」

躊躇なく引き金を引く。

甲高い銃声を上げて、銃弾が美鈴に向かって突き進む。

だけど、あろうことが美鈴は、銃弾を掴んで止めた。

「・・・厄介ね」

避けるどころか掴み取るなんて・・・

少しの間開いた口が塞がらなかったわ。

使い魔でこれだと、あの魔女に私が打てる手は、全くないかもしれない。

先が思いやられるわ…

御柱の向こうからも、戦闘音が響き始める。

援護に回りたいけど、許してはくれないでしょうね。

今は、目の前の敵を倒すことに集中しましょう。

意識を美鈴に集中させる。

美鈴は静かな動作で、一枚の紙を取り出し、掲げる。

——彩符「彩雨」——

色鮮やかな球体が出現し、縦横無尽に駆け巡る。

まさしく、弹幕

はたから見れば、それは綺麗な軌跡を描いているに違いない。

だけど、その渦中にいれば、そんな悠長なことは考えてられない。

「くっ…」

どの球体が当たるとか、当たらないかを瞬時に弾き出し、撃ち落とし、避ける。

「これがどうして”くっこ”なのよ…！」

空間把握能力、予測能力が無いと対処など不可能。

妖怪にとって、これぐらいは兎戯に等しいと言っの！？

チリチリ

本能の従うままに前に体を投げ出す。

さっきまでいた場所が、美鈴によって、踏み碎かれる。

弾幕ばかりに気を取られすぎていた。

体勢を立て直す間もなく、迫る美鈴

踏み込みと共に出された肘打ちを顔を傾けて避ける。

同時に、銃口を美鈴の体に向け、発砲

しかし、銃口をそらされて弾は空を切る

美鈴が畳んでいた腕を開いて、顔に裏拳を繰り出す。

腕を間に入れて、ガード

したはずだった。

次の瞬間、額に衝撃が走り、そのまま美鈴からすさまじい勢いで離れていく。

それは御柱に背中から激突するまで止まらなかった。

「ぐ…う…」

衝撃で視点が定まらない

防御を抜かれた。それに、ただの腕の開閉だけで、この威力

影が差し、弾かれるように横に転がる。

美鈴の足が御柱に突き刺さり、砕いた。

まともに食らえば、命はないわね。

接近戦は向こうのフィールド

——幻符「華想夢葛」——

息つく間もなく、新たな光弾が襲う。

かと言って、遠距離からの攻撃にも抜かりはない。

そこでふと、考えが浮かぶ。

本体が駄目でも球体ぐらいなら…

と手を左手に装着した盾に添えて…

時を止めた。

世界がモノクロへと反転し、球体もその動きを止める。

美鈴も時の束縛からは逃れられなかったらしい。

僥倖ね…

やっと、一息入れられる……

そう気を抜いた瞬間、足が体を支えられなくなる。

どうやら先程の一撃のダメージは思ったより深かったらしい。

覚束ない足を叱咤して、袖のギミックを作動させ、爆弾を取り出す。

本来なら、対魔女用だが、この敵ならば、心もとないぐらいだ。

スイッチを入れ、美鈴の足下に設置。

そして、時間停止を解除すると同時に爆破

これで…

煙の向こうを油断なく凝視する。

それが、いけなかった

ゴリッ

背中に挟りとられるような衝撃

「ぐふ!?!」

しまった弾幕!?

咄嗟に時間を停止

視線を前に戻すと、所々ケガを負っているものの、しっかりと美鈴が拳を突き出していたところだった。

後一瞬遅れていたら、とゾツとする。

油断していた。

綱渡りを終えたと勘違いしていた。

ここはまだ綱の上。まだ半分にも達していない。

落ち着こう。さっきから自分の戦いらしくない。

ともかく、時を止めることが有効であることがわかったことは大きい。

これならば、弾幕は楽に避けられる。

接近されたとしても、容易に距離は取れ、あわよくばカウンターも狙える。

火力だって、対魔女用爆弾をならば、十分ダメージは与えられる。

問題は、時間停止している間

隣から音は聞こえてこないから、おそらくは他の使い魔も時間停止の影響を受けているはず。

しかし、魔女には影響がないだろう。

今のところ、動いていないのは幸いだけど、もし動けるようになれば、時間停止は使えなくなる。

できるだけ早く倒す必要があるわね・・・

今度はC4爆薬を美鈴の周りにセットする。

対ワルプルギス戦用に取ってお置いていたけど、この際だ。

「これで…」

ポチッ

C4が爆発し、爆薬が美鈴に牙を剥く。

手応えもあつた。

弾幕も襲つてこない。

しかし、煙は一向に晴れない。

まだ生きていると言うの…？

これで倒れなかった場合のシュミレーションを構築していく。

魔力で煙を飛ばしたくなる衝動をぐっと抑える。

そして・・・

「・・・ふっ」

うつ伏せで地に伏した美鈴を確認。

爆発に巻き込まれたその体は記すのも憚られる状態だった。

ただ一つ記せるのは人の形は保っていることだけ。

手強い相手だったわ…

袖のギミックを作動して、スナイパーライフルを取り出す。

さて、どちらの援護にまわりましょうか…

美鈴に背を向ける

戦況を見て判断しましょうか…

いや、そんな回りくどいことをしなくても、時を止めてC4を爆発させれば、それで跡形もなくなわね…。

跡形も…？

違和感が全身を駆け巡る。

何か致命的なミスを犯しているような感覚。

もし跡形があれば…

どうなる？

ジャリッ

本能的に振り向いてライフルを盾にする。

直後、ライフルはまるで薄い板切れのように砕け散った。

そしてコンマ一秒も経たない内に、美鈴の拳が腹に突き刺さった。

よく小説で爆発した、何ていう比喻表現があるけれど、言い得て妙だと感じた。

多分爆発が衝撃波のみならば、比喻ではなくなるだろう。

突き刺さる、というのももう少しで比喻では無くなったかもしれない。

背中から、何とも形容し難い音がしたから

テンプレ的に言うならば、

腹で爆発が起き、上半身と下半身が泣き別れたと錯覚した。

それぐらいの威力があった。

声の代わりに口から血が吹き出る。

美鈴から伝わった力積は全て、私に伝わり、体は弾丸と化す。

そのまま御柱を倒し、向こう側へと私を押しやった。

「っ……ぐふ……げほ……」

体がまともに動かない。

今度は私が記すことも憚られる状態になった。

御柱に激突した時にミンチにならなかったのは奇跡に等しい。

改めて美鈴を視界に入れると、とてつもない速さで体が修復されていた。

なんて・・・デタラメ

こちらで魔力で体を治す。

視線を動かすと、杏子が、マミが、膝をついていた。

「くそ、あり得ねえだろ……」

「どう… かね」

敗色は、濃厚だった。

ほむほむが戦う21話（後書き）

ナガン「暢気にコラボSS後回しにしていたら肝心のコラボ先が消えていた。」

詢子「バカだねえ。」

ナガン「いっそ投稿してしまおうか。本編が無茶苦茶アレだけど。」

詢子「せめてこの戦いが終わったらにしな」

杏子とマミさんが出張る22話（12月1日改）（前書き）

前話の感想で、ほむほむの能力が違うという指摘がありました、正しくその通りです。

よって、その部分は辻褄が合うように直しました。

ほむほむの盾の砂時計は約1ヶ月間分の量があり、それを止めている間は時間が止まる。

そして砂時計が落ちきった時、時間停止は使えなくなる。

この時砂時計をひっくり返せば、過去へと逆戻り。

これがほむほむの能力ということ。

それではグダグダになった22話をどうぞ

杏子とマミさんが出張る22話（12月1日改）

守護の魔女

性質は残酷

身内を守る為に甘さは一切捨てている。

故に自分の世界（結界）を守る為には手段はいとわない。

結界は、自分よりもむしろ使い魔を守る為に張られている。

しかし、何故か本体に戦闘が出来ない。したがって自動的に戦闘は使い魔任せである。

故に、守ると言いつつも、使い魔に頼りきりであるこのジレンマに常に苛まれている。

倒すには、その勢力を真っ向から打ち破るしかない。

だが道を示せば、あるいは・・・

杏子サイド

前後左右上下

見渡せば見渡す程諦めが出てくる弾幕の量

直感で上に飛び上がる

コンマ数秒後、御柱がそこに次々と突き刺さる。

「…っラア!!」

そのまま勢いを殺さずに、槍を振るう！！

しかし、これもヒラリとかわされる。

ちょこまかと…

迫り来る弾幕を弾きながら移動する。

しかし、弾幕ごっこは「ごっこ」じゃねえだろ。

これはもしかして基本空中戦なんじゃねえか、っていう勘がさっきからする。

さつきからアイツ（神奈子だったか？）はあそこから大して動いてねえし…

だからといって、自分も空中に上がるという考えはねえ。

そもそも空中戦なんて片手で数える程しかやったことがねえんだよな。

こんな強敵相手に不慣れなことができるなら実演して欲しいもんだぜ。

ゆまの方に弾幕が言っていないのが幸いだな。

「かと言って、このままだとジリ貧なんだよな…」

——筒粥「神の粥」——

「うおっ?!」

弾幕の密度が増しやがった！

そついや最初の攻撃も、カードを掲げていやがった…

アイツがカードを取り出して、掲げること、何かしらの技を繰り出すらしいな…

今まで経験したことがない量の攻撃を捌いていく。

「・・・っ」

何事も始めてやる時には、そのノウハウやコツなんてわからない。だから、ペース配分なんてものも出来ないわけで…

「っ・・・ぐ」

肩に一個被弾

槍が一瞬ぶれる。

また一個、今度は腹

マズイ・・・！！

槍を地面に差し、結界を張る。

弾幕は結界を破壊出来ずに終わっていく。

「最初からこうしてればよかったな」

ズキズキ

攻撃をくらった場所が、地味に痛い。

アタシはさやかじゃないから、回復力はそこまでない。

その時、神奈子の視線がゆまを捕えた。

「つゆま！こっちこい！！」

放たれる弾幕

「キヨウコ！」

しかし、それが到達する前に結界の中にゆまが翔んできた。

——キヨウコの役に立つこと

これがゆまの願い。

これによって、ゆまは何処にいてもあたしの所に瞬間移動することが出来る。

「怪我は無いかな？」

「キヨウコこそ。今治すね。」

ゆまが治癒魔法をかけている間、アタシは考える。

今のアタシじゃ、あいつに勝てない。

あの弾幕を掻い潜って敵に接近するのはどうあがいたって無理。

ゆまとの連携も、ゆまに負担が大きすぎる。

せめて、後一人いたら…

…

後一人、なら…か…

あれが使えれば、一人なんて言わずに13人は揃えられる。

そもそも、うやむやになってたけど結局あれはどうして使えなくな
ったんだっ たっけな…

もし、使えないんじゃなく、使わないなら…

そうか。理論上は使えない理由なんてないじゃん。

あれを使う為に魔力を練る。

「っ…」

忌々しいトラウマが蘇る。

認めるさ。こいつのせいで家族は壊れてしまったんだ。

だけど…

家族を忘れるなんては言わない。

ただ、過去に縛られてばかりで身動き取れないのはもうたくさんだ！

三人称サイド

弾幕の雨の中、杏子の結界は健在していた。

そもそも一発当てれば、勝ちなゲームに威力を求める必要がないからである。

逆に言えば、必要ならば弾幕の威力は上げられるのである。

神奈子が手を振り上げ、弾幕の光が増す。

それらは確実に杏子の結界を抉っていく。

パリン

先程とはうって変わって、結界は呆気なく破られた。
そこに弾幕が殺到する。

とその時、

「おおおおおおー!!」

弾幕の中から、杏子が飛び出す。

強引に突破した為か、所々から血を流している。

それに構わず、神奈子に突進する杏子

——「マウンテン・オブ・フェイス」——

神奈子がまたカードを取り出し、スペルカードを発動させる。

神加奈子を中心として、円形状に広がり、迫る弾幕。

「構うかあああああ——！」

対する杏子は、ただ突進した。

愚直に、まるで某赤い槍のように因果が逆転した感じで。

最低限の防御はしていても、みるみる血だらけな姿になっていく。

しかし、止まらない。

杏子は魔法少女。

傷など、どんなに受けても、ソウルジェムさえ無事ならば、魔力ですぐに回復できる。

だから、体を守る必要もない。

無論、さやかよりは魔力は必要である。

閑話休題

ついに、杏子は神奈子を間合いに捕らえる。

だが、神奈子は動じない。

ただ、無機質な目で杏子を見つめるのみ。

そして杏子が槍を引き絞り、放つ。

ここで、神奈子も動く。

虚空から御柱を取りだし、バットのようには振り回す。
槍は呆気なくはじかれ、あらぬ方向へと飛んでいく。
そのまま御柱の凶刃が杏子に迫る。
到底避けられるものではない。

「へっ」

だが、杏子是不敵に笑い、攻撃があたると同時にその姿は消えた。
神奈子の顔が驚愕に染まる。

幻影

杏子の祈りは、人を父親の話を聞くよう洗脳した。さらに言うならば、父親にも話をさせるよう洗脳したかもしれないのである。

つまり、杏子は元々幻術系の魔法が扱えるのである。
「くらえ!!」

神奈子の背後から、杏子が飛びかかる。

しかし、偽物とは言え、神奈子は腐っても神であった。

体勢を崩しながらも、神速とも言える速さで、確りと御柱で杏子を吹き飛ばそうとする。

杏子の槍が神奈子の胸を貫かんと伸びる。

両者の攻撃はほぼ同時に当たった。

僅かに杏子の槍が早かった。

だが、槍が神奈子を傷付けることはなかった。

対する神奈子の御柱も、全く手応えを感じさせなかった。

これも、幻影

「やっと、届いたぜ。」

神奈子の下から杏子が声を発する。

腰ために槍を構えて、穂先は神奈子を捉えていた。

先程の攻撃で、完全に体勢が崩れた神奈子に避ける術はない。

ブシュ

今度こそ、槍が神奈子の胸に風穴を開けた。

杏子サイド

やったか・・・？

肉を貫く嫌な感触と共に考えたことはそれ。

いや、心臓を貫いた。生きていられるはずが・・・

ゴッ

「!？」

いきなりコイツの周りが突風で吹き荒れ、堪らず吹き飛ばされて、地面に叩き付けられた。

台風のに吹くような生易しいものじゃねえ。
殺す為に吹いたものを感じた。

「キョウコ！」

ドゴッ

「っ・・・？」

左右から同時に吹き飛ばされてくる人影

あっちも苦戦してたか・・・

神奈子は胸を押さえていたが、動けないわけでもないらしい。

「くそ、ありえねーだろ・・・」

「どう・・・かね」

そこは肯定すんなよマミ・・・

「ゆま！まだ行けるよな。」

「う、うん。」

再び神奈子と事を交えようと構えた時、

神社が吹き飛んだ。

マミサイド

「はっ!!」

掛け声と共に周りに浮かぶマスケット銃が激鉄をおろす。

放たれた弾丸は弾幕を相殺するけど、それを埋めるかのように新たな弾幕が視界を埋める。

キリがない・・・!

胸のリボンを解いて、盾を編む。

ガンガンと大量の弾幕が断続的に盾に打ち付けられる。

「ぐっ・・・」

押し負ける・・・

勝敗なんて、解りきっている。

冷静な思考はさっきからずっと逃げることを推奨している。

けど・・・

「負けるわけには・・・いかないのよ!!」

——ティロ・フィナーレ!!——

特大の一発が弾幕を飲み込み、敵（諏訪子）に食らい付く。

だけど、空中を自在に飛ぶ敵に対して、弾速の遅い攻撃は当たる筈がない。

これまでの魔女とは訳が違う。

新しい技を考案する必要があるわね・・・

例えば、限りなく速度と貫通力を上げた攻撃とか。

このタイプにはショットガンみたいに面制圧攻撃に特化したのも有効かしら。

——神具「洩矢の鉄の輪」——

弾幕が人ぐらいの鉄の戦輪にかわる。

ただの弾丸ではびくともしなさそうね

代わりに、数は減り、避けるのもある程度容易くなった。

一撃食らったら致命傷並みのダメージを負うのも目に見えているけど。

「っ・・・」

あまり不確定要素に賭けたくはないのだけれど、四の五の言っていられる状況ではないわね。

創造しましょう。

ベースは何時ものマスケット銃

命中制度を上げるために銃身は長くしないと、
弾速を上げるためには火打石では駄目ね。もっと現代兵器に使われている仕組みにしましょう。
スコープも必要よね。

銃の創造が完了する。

イカツイ・・・原形がかるうじて見えるくらいってどうなのかしら・
。。。

弾丸は・・・反動も考えて、アサルトライフルで使う弾みたいなのが丁度いいわね。

ガチャコン

弾のリロードが完了

さあ・・・いくわよ!!

ダン!

中々の反動が腕に伝わった。

もうちょっと、弾丸はでかくても大丈夫そうね。

薄く研ぎ澄まされた魔力で覆われた弾丸は、戦輪を楽々と破壊し、
なおも突き進む。

避ける間は与えない。

弾丸が諏訪子の腕に食らい付き、怯む。

ここよ！！

すかさずリボンでがんじ絡めにして、巨大な砲身を出現させる。

これで決める！！

「ティロ・・・」

今頃リボンから逃れようとしても、
もう遅いわ。

「ファイナー！！」

特大の攻撃は、確りと敵を捉えた。

弾幕も消えて、一時の静寂が訪れる。

「はあ…はあ…」

手応えもあった。当たる瞬間も、しかとこの目に焼き付けた。

なら、

この胸騒ぎは一体何なの？

——土着神「ケロちゃん風雨に負けず」——

ぞわり

見た。見てしまった。

衣服はボロボロになりながらも、しっかりとこっちを見据えているのを。

少なくとも、私の撃ったティロ・フィナーレの中で一、二を争う威力だった。

それを食らってもまだダメージが見当たらない。

弾幕に、さっきとは比べ物にならないぐらいの威力、スピードが加算される。

避けきれない……！！

「……ああ……！」

耐えきれず、吹き飛ばされた。

地面に強か打ち付けた体が痛い。

顔をあげると、佐倉さん、暁美さんも膝をついていた。

「くそ…あり得ねえだろ…」

「どう…かんね」

無意識に放った同意だった。

思っている、絶対に認めてはいけないことなのに。

それほどまで、追い詰められていた。

そして、痛む体を叱咤して立ち上がろうとした時、

神社が吹き飛び、返り血にまみれた鹿目さんと、胸から血を流すさやさんが、結界に引きずり込まれてきた。

何かが崩れる、音がした。

杏子とマミさんが出張る22話（12月1日改）（後書き）

ナガン「もうゴールしたい…」

次回は短くなるかも…

キャラ崩壊している一人な23話（前書き）

注意！！

今回かなりキャラ崩壊しているキャラが出てきます。

具体的には、

スレた目をした橙が「ババア、金」という程度です

キャラ崩壊している一人な23話

さやかサイド

力が、抜ける

「がふっ」

息の代わりに、血が漏れる。

魔女の持つ蒼穹双刃は、的確に心臓を貫いていた。

油断なんてものは、始めからしなかった。

冷静に事を運んでいたはずだった。

だけど、神奈子達が召喚されてから、知らず知らずの内に、焦りが出ていたのかもしれない。

それ故に、見抜けなかった。

インターバルなんて、存在していなかった。

只のブラフ、はったり

魔女は待っていた。

あたしが決定的な隙を作り出すまで、ずっと。
ボ口を出さなかったのは敵ながらあっぱれだ。

そして、大振りの一撃は、十分決定的だった。

ものの見事に引っ掛かったあたしは今こうして、賭け金の命を取られた。

ズブッ

「あ…」

ゆっくりと、刃が引かれていく。

痛みなんて、もう感じられない。

ただ熱いのか冷たいのかわからない、変な感触。

腕は、あたしの命令を全く聞き入れない。

あたしは血に濡れた刃を他人事のように見ている他なかった。

刃が体から抜けきる。

体が、仰向けに倒れていく。

駄目なのに

負けられないのに

動かない

視野が狭くなる。

杏子達と約束したのに

動いてよ

「ち……くしょ……う……」

暗い視界の中で、微かにまどかの声が聞こえた気がした。

に……げ……て……

まどかサイド

ピチャッ

頬になま暖かい液体が飛び散る。

「あ……が……」

ドサッ

続いて、さやちゃんが不自然に痙攣して、仰向けに倒れた。

「さやちゃん？」

じわり、じわりと左胸がどす黒く変色していく。

あーあこれは洗濯しても落ちないものだろうなあどうしよう

「ゴプッ」

さやちゃんが血を吐く音がトリガーとなって、始めて一連の出来事を受け入れた。

「あ……いやああああアア!!」

血で服が汚れるのも構わず、必死にさやちゃんをゆする。

なんでどうして

死なないって言ってたのに
勝つって言ってたのに

約束は守るって言ったのに

「なにか言ってよ……さやかちゃん……」

その時、結界の入り口が広がり、なす術もなく取り込まれた。

目まぐるしく変わる景色に反射的に目を瞑り、さやちゃんを抱き締め耐える。

ボタン

結界の中心部についたみたいなので、目を恐る恐る開けると、マミさんが、杏子ちゃんが、ほむらちゃんが、血を流して片膝をついていた。

「あ……あ……」

怖い

皆が、死んでいってしまう

「まどか……！どうして入ってきたの……！！？」

ほむらちゃんがわたしの肩を掴んで、睨んでいる。

——アッハハハハハハハ——

聞こえてきたのは笑い声

嘲り、嬉しさ、安堵、喜び、色んなものが混ざりあったものだった。

「おいおい……」

「冗談よね……」

カッン カッン

三人の使い魔の後ろから、さやかちゃんの形をした魔女が歩いてくる。

「逃げ……て……」

声のした方を見ると、さやちゃんが胸を押さえながらも、立ち上がろうとしていた。

「あたしが… 食い止めるから… 皆逃げて」

「な、何言ってるのさやちゃん!？」

「そうよ!! まだ終わってないわ!!」

「アタシは、まだ戦えるぞ!!」

マミさんと杏子ちゃんが食い下がる。

「違う…。魔女があやつて動いている時点で、精神世界の戦いに決着は着いたの。そして、あの魔女が動いていて、あたしの胸には…この傷。」

「止めてよ……」

耳を塞ぎ、いやいやと首を振る。

「さやかは、負けた。」

聞きたくないのに、

なんでこの耳は正常に機能しているんだろう。

「……いつになく弱気ね。傍若無人なあなたはどこへ行ったのかしら?」

でも、

「ほむらの言う通りだな。それがどうしたってんだ?」

三人の戦意は、砕けなかった。

「は?」

「負けただけでしょ?それって裏を返せば、まだ美樹さんはあの中にいる、ってことよね」

「なら、私達が逃げる理由はないわ。」

「でも!!魔女は最強と言ってもいいぐらい強いんだよ!?!。あのワルプルギスの夜よりも最悪の魔女な「ゴチャゴチャうるせえ!!」」

ドン!!と杏子ちゃんは槍を床に突く。

「あんたに言っても意味ないけどさ……。てめえだけがのうのうと救えると思つなよ。」

たまには救われやがれ

そう言つて、杏子ちゃんは背を向けて、槍を構えた。
そんな時だった。

「アッハハハハハハハ！
こりゃあ一本取られたねえ、さやか！」

心底愉快そうな声が聞こえて、赤い服を来た使い魔の女の人が魔女
を、

明らかに敵意を持って蹴飛ばした。

私は、一回死んでいる。

その時のことは、今でも克明に脳裏に焼き付いている。
どうにもならなかった。

力を合わせても、無駄だった。

ただ、無力だった。

——あなたは生きて——

闇に包まれる直前に聞いた言葉は、それだった。

再び目を開けた時、私は愕然とした。

過去に、生まれた時に戻っていたから。

その日、私は泣いた。

己の無力に

騒がしく、うっとうしくも、いつの間にか大切になっていた人達を守れなかったことに

そして、決意した。

今度は、守り通す

私はひたすら己を研磨した。

そのせいで、色々とはやく言われたけど。

私が生きていた間の史実は、変わらなかった。

（過去の歴史はかなり変わっていたけど）

一回経験した通りに物事は進んだ。

この世界は前世とは違ふところは多々あったけど、最終的に行き着くところは変わらなかった。

ただ一つを除いて

巫女さん募集中と言いながら、そのくせ何もしなかった、青が良く似合う神様。

小さい頃、確か先代と私を巡って、巫女異変というのはた迷惑な騒動を起こした、
魔理沙とはまた違う、どこか不思議な雰囲気な魔法少女チックな出で立ちのそいつ。

美樹さやか

彼女はいなかった。

それどころか、過去にも、いたという痕跡はなかった。

それを疑問に思いつつも、迎えたある日、

夢を見た。

彼女が、魔女と戦って敗れる夢

直感的に、これは夢じゃないと感じた。

「とても興味深いわね」

隣に、隙間に腰かける紫がいた。

いつの間に、なんては聞かない。
元々こういうやつだ。

人の夢に勝手に土足で上がる奴。

「…あなたは博霊の巫女よ」

…わかってるわよ。

私は、この地の平定者。

理由もなしに外に出ていくことなんて許されない。

だけど、

見捨てるなんてことも、絶対にしない。

キヤラ崩壊している一人な23話（後書き）

霊夢「落ちるところまで落ち切ったら、後は上るだけよ」

ナガン「自分が一番待ち焦がれた瞬間がかけた・・・!!」

介入する三人に24話（前書き）

ナガン「霊夢が人情厚い人間になってしまったことに対しては反省もしていないし後悔もしていない。性格なんて気の持ちようなんだ」

さやか「いや、あの薄情っていうかアレだった霊夢がこんな風になるなんて…」

ナガン「後この先は東方とのクロスが入るから、知識がない人はちと辛いかも。」

介入する三人に24話

神奈子サイド

虫のさえずりが聞こえる程、静かな夜

大きな、けれど少し欠けた望月が私を照らしていた。

「珍しいね、こんな時期に月見なんて」

そこへ諏訪子が来て、手元にある酒を飲み始める。

視線を月に戻す。

そこまで高い酒でもないし、咎める理由もない。

「…あの女のこと？」

「……どうしてだろうねえ。あいつが夢に出てきてから、胸にポツカリと穴が出来た感じがするんだよ。」

あの月が満ちれば、わかるかもしれない気がする。

だからこうして、今か今かと待ち続けている。

「本当に迷惑な話だよ。勝手に現れて掻き乱して、そのくせ正体は明かさないなんてね。」

見付けたら、とっちめてやる、と諏訪子は一気に酒を煽った。

「そうだね、盛大にとっちめてやろうか」

そしてその後は、盛大に酒を飲み交わそうかね。

「夜分遅くに失礼しますわ」

目の前の空間が割れて、そこから紫が口元を扇子で隠しながら身を乗り出してきた。

「何のようだい？」

「私も月見に混せて貰おうかしらと思って来たかったのだけど、何分相手に急かされているから、単刀直入に言うわ。すぐ来なさいとの霊夢からのお達しよ。」

「博霊の巫女が？」

「断るなら無理矢理連れてこいとも言われているわ。」

なんだいそれは、と呆れながらもあの博霊の巫女がそこまでする理由が気になった。

「なんで私達なの？」

そう問われると紫は、クスリと笑って

「あなた達だからいいわよ。
ほら、早くしてくれないかしら？私、紅魔館の門番も連れていかないといけないのよ。」

あー忙しい忙しいと、紫は空間を開いて、そちらの方へと手招きしている。

割れ目の端には可愛らしいリボンが結んであるが、そのなかには、無数の目がギョロ、ギョロ、と蠢いている。
実にシニールだ。そして入りたくない。

「正直あんまり行きたくないんだけど…」

「あなた達の胸のモヤモヤがとれると言ったら？」

…ふん

「最初からそう言えば良いのにねえ」

「これが性分なのよ」

「そうかい」

やつとこさ手掛かりが見つかりそうだ

私達はスキマの中に足を踏み入れた。

「来たわね。」

スキマをくぐり抜けた先には巨大な陣の中にいる霊夢が佇んでいた。

「こいつはまた……どういったものなんだい？」

「それは門番がき……「ふぎゃー!!」……遠隔操作を応用したものよ。」

「それで、私達を呼び出した理由は何なの？」

うゝ、今日は不幸続きです。と呻いている門番を尻目に問答を続行。

「ちょっと古い知り合いを助けて欲しいの。
青い髪、って言えばわかるわよね？」

「…あんたはそいつを知っているのかい？」

「ええ、知っているわ。」

「なら、彼女は誰なんだい？」

霊夢は少し考えた後、

「これが終わったらいくらでも話すわ。だから今は言っ通りにして。」

「……名前ぐらいは教えておくれよ。」

「さやか。美樹さやかよ。」

そつかい、と陣に足を進める。

「わからないことだらけですけど、私がここにいる意味はなんですか？」

「あんたもここに入るの。」

「あの…、拒否権は？」

「三面ボスに拒否権があるの？」

「メタ発言はやめて下さい。」

わかりましたよ、と美鈴も陣の中に入る。

「じゃあこれからあんた達がやることを説明するわ。

さやかはどういった経緯かは知らないけど、魔女になっているわ。

そして使い魔としてあんた達のダミーを使役中よ。今回はそのダミーの支配権を奪取して、適当に痛めつけておいて。後は私と紫が何とかする。」

魔女ねえ……ここじゃ見ないけど、昔は結構やりあったんだよねえ

「随分と大雑把な命令だね。でも、分かりやすくてやりやすい。」

確かに細かく決められた作戦よりはよっぽどいいか。

しかし、ダミーなんてつくるとはねえ…何考えているのか

「何がともあれ、ひさしぶりに弾幕ごっこじゃない戦闘ですね。」

三人それぞれが、神力または妖力を練り上げていく。

「水をさすようだけど、こんなことしていいの？博霊の巫女としてはあるまじき行為だよ。」

「え？私が博霊の役目で取り組んでいるといついつたっけ？」

霊夢はゆかりんスマイルで返した。

「ハハッ！！そうかいそうかい。そうだよねえ」

さて、おしゃべりはここまでよ、と霊夢が位置につく。

「行くわよ！！」

魂が体から抜けて、空を舞い、そしてまた中に入っていく感覚を覚える。

——あんた、なにもんだい？——

最初の出会いは諏訪対戦
向こうはボロボロだった。

！！これは……

——あんたらさあ……、もうくつつきなよ——
赤い顔で否定するあいっ

——ハア、あんたそんなことでウジウジ悩んでたのかい？——
その後、付き物がとれたようにすっきりした様子になったさやか

……成る程、こりゃダミーを作ったのも納得だ。

安心しな。”あんた”の分までしつかり面倒見てやるよ

え？なんでそんなにすんなりと受け入れるかって？

そんなもんなんだよ。妖怪や神ってやつは。

さて、さしあたっては…

再会の蹴りでも浴びせようかねえ

杏子サイド

どど、どういうことだオイ

使い魔の三人が、いきなり喋りだしたのも驚いたが、魔女に敵意を持って対峙すれば、呆然とするしかねえ。

マミもほむらもさやも、訳がわからないという顔をしている。

「……取りあえずあの人間達を治すべきだよねえ。…ていうかあの服スゴく見覚えがあるんだけど？」

「（両方の意味で）…そうだよね…」

「…誰がやるんですか？私は気しか使えないので、自然回復力は高められますが、治癒はちょっと…、もしかしてあの服は彼女達の正装なのでは？とても自然と似合ってますし……」

「アタシも軍神だからねえ……、確かにものスゴく似合ってたしねえ。だとしたら早苗のインスピレーションはパクリなのかい？」

「私は崇める方が専門だから……、身長その他諸々が著しく違っつていう勘はやっぱ正しかった……」

「……」

「こいつは私達が食い止めるから行つて、中国」
「美鈴です！！って言つかなんで私何ですか！？」

「人当たりが良くて、優しいから。」

「それはあなた達もでしょう！？」

「黙れ、三面ボスがしゃしゃり出るな。」

「だからそれはメタ……、はあ、もうわかりましたよ。さやかのと頼みましたよ。」

美鈴は魔女に背を向けた。

と同時に、魔女の表情がひどく狼狽えたものになる。
立っている場所も変わっていた。

時間停止か……？くそ！！全く反応できねえ

「……どういふことよ」

「？曉美さん…？」

「さっき魔女は時を止めて使い魔に切りかかった。だけど誰一人としてその凶刃を受けることはなかった。さらに強制的に能力を解除された感じもしたわ。」

「つまり…」

あの双剣つて、そこまで斬れないのか？

「え、あたしは嘘は言ってないぞ。原因は知らないけど。」

やべえ…何が嘘で何が本当なのか解らなくなってきた…

「あなた程度の魔力で私達を斬れると思いましたか？」

「所詮は偽りの神力、そんなもので斬ろうと思うなんて…ハ、笑っちゃうね。」

「半殺しで済ませてやろうと思ってたのに…生き急いじまったねえ」

戦輪が、御柱が、静かにポツポツと表れる。

一つ一つが淡く輝いていて、そこに込められた威力は、アタシ達が戦っていたものとは比べ物にならなかった。

「えゝ大丈夫ですか？」

そこへ美鈴が心配そうに聞いてくる。

「あ、矛は納めて下さいね。戦う気はありませんから」

「…何が起こっているの？どうしてあなた達は寝返ったの？」

「それはですね。色々割愛しますけど、使い魔の支配権を無理矢理乗っ取りました。」

割愛しすぎだろ…

「そんなことが可能なの？」

「出来たんだから出来るんじゃないですか？」

それとどうして寝返ったか、でしたか？頼まれたからが半分。私的なものが半分ですかね。」

失礼しますよ、と美鈴はアタシの手に手を添える。

すると、体の内部からぽかぽかと温かくなってきた。

「気の流れを調節しました。わずかですが回復力が上がるはずですよ。」

「…なあ、あんたらはさやかとはどういう関係なんだ？」

そうですね…と美鈴は顎に手をあてて少し考えた後、

「受け継いだ親友、です。」

こう言った。

介入する三人に24話（後書き）

ナガン「ども、SAN値削りながら小説を読んで、動画で回復しているナガンです。」

さやか「何いってんの？」

ナガン（SAN値70/100）「しょうがないだろ。俺の好きなキャラ達って大抵死亡キャラだから壊れたり死んだりしてるんだよ。こないだだってまた一人SMプレイに目覚めやがった。SAN値が危うく0になるところだったんだよ。」

さやか「……ところでこの動画を見てくれ。こいつをどう思う？」

ナガン（SAN値1/100）「……ぐああああ!!」

舞い戻る一人な25話（前書き）

ナガン「あれっすよ。グロ表現なんて、書いても読者を不快にさせるだけなんですよ。百害あって一利なしです。」

さやか「そんなもんなの？」

ナガン「そんなもんなんだよ!!」

舞い戻る一人な25話

神奈子サイド

——蛙狩「蛙は口ゆえ蛇に吞まるる」——

——神穀「デイベイニングクロップ」——

スぺルカード同時発動

TASも真つ青な弾幕が魔女を襲う。

「そらそらどうしたア！！時が動いているとなにもできないのかア！？」

魔女が弾幕を掻い潜ってきたところに御柱を振りかぶる。

しかし、それは空振りに終わる。

もつとも、それは魔女も同じようだけど

魔女は刃が通らないことに齒がゆさを感じている。

確かに、記憶では時を止めた中でもあれは何でも斬れる。
そこに、魔力が加われば尚更。

だけどね…

僅かに乱れた神力を元に戻し、再び体を覆わせる。

斬る対象に魔力及びそれに準ずるものが付与されていれば、話は別なんだよねえ

まず最初に、時が停止した中では物体の運動は停止している。

時を止めた中で斬るということは、切断面の状態をそれこそ0秒で変えると言っことなんだよ。

刹那さえも許さないその所業でさえあればやり遂げてしまうのは感服するねえ。

因みに物体の堅さも一応跳ね上がる。（モンハンでいうところの青ゲージ）

閑話休題

だけど魔力等に関しては例外。

時を止めた中では魔力等は物質化するんだよ。

おまけにそういったものは酷く概念的でねえ、そういった概念で以て無効化するか、魔力等で相殺するしかないんだよ。

紅魔館のメイドも時を止めれるけど、その間はメイドも相手にダメージを与える手段がないから、ナイフをばら蒔くだけにとどまるしかないのさ。

蒼穹双神は恐ろしく切れ味がいいけど、それ故に概念を付与するところができない。

よって、魔女は魔力で以て私達の神力を相殺するしかないってわけなんだよ。

ただどね、力にも格、というものがある。

魔力<霊力<妖力　神力と言った具合にね。
もちろん込める量でも上下するけどさ。

つまり簡単に言うと、

「神力を体に覆わせれば、攻撃は食らわないんだよねえ。」

「誰に向かって何話してるの?」

「入ってきた記憶の整理がてら、読者に説明してたのさ。」

諏訪子はため息を吐きながらも、攻撃は緩めない。

しかし、流石にマンネリ化してきたね…

さやかが起きないとなにも進展しないんだよねえ。

…ちよつつつとイライラしてきた

『霊夢よ。こっちの準備が整ったから、少し動きを止めてくれないかしら?』

「……ちよつと待ってくれないかい?」

確かに霊夢が介入すれば、さやかは確実に助かるだろう

けどねえ…

私はそんなやつと酒は飲みたくないし、

何よりおもしろくない。

だってそうだろう？

「「「「「いい加減起きな！……！（ろ）（なさい）（て）」」」」

バキン

魔女のもつ蒼穹双神の片方が砕け散る。

愛と勇気が勝つ物語ってのはさ

うるっさいなあ…

本当にうるさい

でもって

本当に…力になる

何でいるのとか、どうやってそうなったとか、色々聞きたいけれど、

後だ後。

動かない？そんなバカな

魔女は？正面3メートル辺り

どんな様子？気付いている感じじゃない。

なら、イける

自分でも驚く程呆気なく体は動いてくれた。

魔女は動かない。振り向くだけ。

動けないと言った方が正しいかもね。

斬！！

一瞬の交錯

パキン

あたしの持つ刀は砕いた。
右手を挙げる。

だって、もう必要ないから

パシッ

「先ずは一本、返して貰ったよ」

ははっ、どうしてそんな顔してるの？

「なに、心臓刺されたぐらいで死ぬと思った？」

死ぬわけないじゃん

ものっすごい痛いけど

それよりもそれに思い至らなかった方が恥ずかしい。

もう人間じゃないのにね

やっぱりまだ未練があったらしい

「まっ…それもいつか」

あたしは、人間だった妖怪だ。

神様なのはわからないけど

この世界でただひとつになると思っていたけど、盛大な勘違いだった。

ならば、躊躇する必要もない。

「来なよ。決着つけてやる」

神奈子サイド

『何したの?』

『なに、ちよつと渴を入れてやっただけさ』

さやか意識が出てきたのだろう、魔女が蹲って呻いている。

『ねえ、これってやっていいの?』

『やったらさやかが怒るだろうねえ』

信じて待ちな、と霊夢に待機を告げる。

「私達も信じてみる?」

と諏訪子がやってくる。

それもいいねえと返して、どつかりと腰を下ろす。

美鈴の方に目を向けると、なにやらさやかの体の傷を治しているようだった。

「呑気なもんだよね」

「いや、あれはそんな雰囲気じゃないと思うよ。」

最低限の警戒心を持ちながら話すこと1分、魔女が一際大きな声を上げたかと思うと、蒼穹双神のもう片方も碎けた。

「そろそろかな…」

「ああ、最後の仕上げだね」

魔女がドロドロと溶けて形が無くなっていく。

遙か遠い次元で誰かのS A N値が0になった気がするが気のせいだろう。

たんぱく質の固まりから二つの球体が飛び出す。

「…グリーフシードと陰陽玉が出てきたね」

諏訪子はちよつと驚いている。

「博霊の陰陽玉ではないようだけどねえ」

白いところは輝いていて、黒いところは真っ黒なんだよ。

グリーフシードの黒さとは比べ物にならない黒い。

やがて、グリーフシードは下にあるたんぱく質を引き寄せて、ボコボコと巨大化していく。

遙か遠い次元で（ry

対して陰陽玉の方は全く動かない。
くるくるとその場で回転している。

「あらら、これはきつかけがつかめてないのかな？」

と諏訪子が陰陽玉に触れて、神力を流し入れる。

陰陽玉の回転が段々とはやくなり、それにつれて 黒と白の区別がつかなくなっていく。

そして、白と黒の区別がなくなってくると、陰陽玉はその姿を変える。魔女のようにグロテスクなものではなく、生命が誕生するような神秘性を帯びていた。

「つと、帰ってこれ…！うっわグロ！！ちよっこれなに！？」

…不思議だねえ。これが初めての邂逅なのに、すごく懐かしく感じるよ。

「遅かったじゃないか。」

さやかサイド

戦いは一方的だった。

蒼穹双刃がこの手に戻ってから、能力が使えるようになった。これによって、武器及び能力によるハンディキャップはほぼ0となった。

そして、あたしが終始有利に事を運べたもうひとつの理由

下手だった。

剣の扱いが

一合打ち合ってわかった。

こいつあたしの真似してるだけだと。

記憶にある通りに剣を降っているだけ。

裏打ちされた経験がない。だから投影していた剣も斬られずに碎かれた。

確かにあたしの写し身だし、真似るのは最適だと思うけどさ…

それを見抜けなかったあたしもあたしか

さて

「やつすい茶番劇もこれにて終了。」

魔女の腕を斬り飛ばし、返し刀で首を狙う。

魔女はもう片方の腕に剣を創ってガード。

ばーか

剣は呆気なく斬れた。

そんなんでもガードできないってわかってたよね？

最後のあがきで魔女は空間を広げて、凶刃から逃れようとしている。

それも無意味だって、

あたしも対抗して空間を狭める。

「これで…」

魔女は今だ間合いの中。

「止めだあああ!!」

ザクッ

後ろで蒼穹双刃が刺さった音がした。

ピシ…ピシ…

そこから、罅が入っていく。

「あれ？もう終わってたの？」

後ろからの声にギョツとする。

だってこの声は…

振り返ると、いつもの脇だし巫女服を着た霊夢がお札をしまっていた。

「霊夢…」

「やっぱりね…使い魔にあの双神を召喚したから、もしかしてとは思ってだけど…」

「！！知ってるの？」

「ええ、今でも鮮明に思いだせるわ。」

「げ、幻想郷は？」

「のどかなものよ」

・・・何だももう。ほむらのバカ。あんな言い方するから勘違いしてたじゃん。

「もしかしてあの三人連れてきたのって…」

「酷い戦いだっただね。見てられなかったわよ。」

「酷いって…しょうがないじゃん。つか、こんなことしていいの？博麗の巫女なんですよ？」

「今ここにいるのは博麗霊夢よ」

思わずぽかーんとしてしまった。

まさか霊夢の口からそんなことを聞けるとは思っても見なかったよ。

「変わったね、霊夢」

「あんたは変わってないの？」

「あたしは…変わって戻ったかな」

「あっそ」

直後、誰かの神力が流し込まれて、空間に一気に罅が入る。

これは諏訪子の仕業かな…

「時間ね。また追々連絡するわ。」

「わかった。」

引き止めたりはしない。

絶対また会えるから

「またね」

「ええ。また」

そう言つて霊夢は消えた。

「さてと、神奈子達にも顔会わせに行きますか!!」
空間が、砕け散った。

舞い戻る一人な25話（後書き）

ナガン「最近曜日感覚が無くなってきました。夏休みだからしょうがない。」

さやか「そんなの知らない。さつさと続きかきなよ」

ナガン「夢喰いメリーのSSもいいとは思わないか？」

さやか「話を反らすな。」

ナガン「うるさい。煮詰まってきたるんだよ。ラストどうしようか迷ってるんだよ。」

STOな26話（前書き）

ナガン「最近夢喰いメリーにハマり出しました。絵がいい。しかしこれもクロスするなら戦力的に見劣りしてしまう…。クロスできなさそう…」

さやか「戯れ言乙。後一点。募集したいものがあるので、後書きに書いただつてさ。」

ナガン「前半なんでギャグにしたんだろうなあ…」

STOな26話

三人称サイド

神奈子と諏訪子が戦うのを交代して、魔法少女組は美鈴の説明を受けていた。

「八坂神奈子と洩矢諏訪子、ですって!？」

「知ってるのマミさん？」

「知ってるもなにも、有名どころよ。名前ぐらいは聞いたことあるでしょ？」

「その二人が…」

「あいつらなのか？」

魔法少女組は、二人の強さに驚き、マミはさらに正体を聞かされて驚いた。

「圧倒的ね」

「傷一つついてねえ。」

「所詮魔力ですからね。お二人の神力に弾かれるのが関の山です。」

美鈴が二人の戦闘に補足をつける。

「ジンリヨク？」

まどかが説明の中にわからない単語を見つける。

「神力です。神が持つ力。私なら妖怪ですから妖力を持っています。」

「え？魔力以外にもそういうのってあるの！？」

「ありますよ。先程言った神力、妖力そして人間なら霊力があつてですね、魔力はどの種族も持つことができて……」

妖怪説明中…

「そうなんだ…」

「魔法少女にならなくても、元々持っていたなんて…」

「つか、そっちの方が魔法少女っぽいな。現代兵器とのハイブリッドなやつもいるし。」

「しょうがないでしょう。これと言った攻撃手段が無いのだから。」

まどか、マミ、杏子、ほむらが、それぞれの感想を述べる。

「それにしても、キュウベえ達はなんで知らないのかしら？」

「そうね。知っていてもおかしくはないはずなのに…どうしてかしら。」

魔法少女組の空気は戦うのではなく、疑問を考察するそれに変わりに始めていた。

「あ、あんた達ねえ……此処にきた目的忘れてない？それに美鈴だったよね。なんで杏子達は治してこっちは治さないのさ！！」

「あ、あれ？傷治してないんですか？っていうか治すのではなくて自然治癒力を上げただけなんですが…」

「そんなMPガリガリ削れるようなこと出来るわけないでしょうが！！そして手当てぐらいしろ！！なに悠長に説明してるの！？殺す気か！！」

さやが怒鳴る。

「いや、さやだしなあ」

「これくらいの傷で死ぬとは思えないのよ。」

「おんた達人を何だと思ってんだー！！！」

訂正、シリアルな空気だった。

「つーかさ…さやかが全く起きている気配がしてないの。あの二人が頑張ってるのに。」

「そうなのですか？」

さやは首肯する。

「たぶん神奈子達は決着はつけようと思えばつけれるはず。なのにそれをしない。」

「…待っているんだろ？さやかが起きるのを。」

「でも肝心のさやかが起きないのね。」

そういうこと、とさやが頷く。

「呼びかけてみない？」

魔法少女組 + α が思案顔になって考えていると、不意にまどかがそう言った。

「私達でいい加減に起きろー！！って呼びかけてみれば、きっとさやかちゃん、飛び起きると思うんだ。」

「渴を入れる…いい考えね。」

「ええ、やってみましょう。」

ほむらとマミがそれに賛同する。

「そうだよな。アタシ達だけががんばっても仕方ないもんな。」

「精神論的にも中々いい考えだと思います。」

「いや、それはわかるんだけどさ…、なんで美鈴はあたしを羽交い締めにしてるの？」

「氣を使いました。」

「誰に対してだよ！！」

さやはじたばたと暴れるが、美鈴に完璧にホールドされて抜け出せない。

「さやちゃん、ちょっと痛いの、我慢できる？」

「まてまてまてまてええええええ！！？」

数秒後、誰かを呼ぶ声に混じって微かに悲鳴が響いた。

後にある人は語った。

「あれはもう声じゃないよ。SLBVだった。文末でブレイクシュート撃つてくるとかさ…。並の魔女ならあれで一発KO余裕だよ。」

さやかサイド

目を開けた時、まず目に入ってきたのは、ボコボコと巨大化している肉塊だった。

最悪の目覚めだった。

「遅かったじゃないか」

声に呼ばれて振り返ると、神奈子が手をあげながら歩いてくる。

「ちょっとヤボ用でね。」

バシン！！と勢いよくハイタッチ

「諏訪子もありがと」

「どういたしまして」

「ぎゃあああ！！耳が、耳があああ！！」

視界の隅っこであたしが転げ回ってるのはほっておこう。
つつこんだら負けな気がする。

——ゲオオオオオオオオ——

グリーンシードはその体を懸命に作り上げようと、もがいている。

「オ…オ…」

体がボトボトと崩れているのに、それにも構わずただまっすぐにあたしに向かってくる。

生き汚いを形にしたらこんな感じだと思う。

誰に似たんだか…

「いや、あんたに決まってるよ。」

「心を読むな心を」

ま、誰に似たかなんて詮ないことか・・・。

魔女はそのドロツとした手を伸ばしている。

静かに瞑目して愛刀を手を持つ。

これで、終わらせよう

—— 斬符「八花」……

イキタイ

マダイキテイタイ

八花…

アナタダッテ、ソウシテキタンデシヨ？イキギタナクイキテイタン
デシヨ？

…… 斬符…

ワカッテヨ

ぢゅ……

タスケテヨ

「~~~~~!! あーもう!! わかったよ!!」

ずんずんと魔女の方へと歩いて行って、その体に腕を突き入れた。

すっごく気色悪い感触に耐えながらも、目当てのグリーンフィードを見つけて、握りしめる。

「あたしの中で生きてろ!!」

そして、取り込んだ。

アリガトウ…

肉塊は形を失い、塵へと還っていった。

「あゝ気色わる」

「ハハハ、まあいいじゃないか。そっちの方がさやからしいさ。」

「そうそう。死人を出さないのこそ異変だよ。」

諏訪子の何気ない一言にはつとめる。

そう言えばそうだ。結果的には誰もが笑っている。

やっぱり、仲間は頼りになるなあ

「異変…か。これが異変と呼べるかはわからないけど、少なくともハッピーエンドには相応しいか。」

「誰もが笑うハッピーエンド、達成できたじゃないか。」

「うん。ありがとう。」

…あれ？今まで違和感無く喋ってるけど…

「もしかして諏訪子達も転生したクチ？」

「いや違うよ。記憶が入り込んだだけ。」

「憑依の方？」

「それでもないと思う。実のところ私達もよくわからない。」

…なんか釈然としないけど、昔の様に話せるからいいか。

「さやかちゃん！！」

まどか、マミ、杏子が笑みを浮かべてやってくる。

ほむらは相変わらずの鉄仮面で髪を掻き揚げているし、
美鈴はあたしの体に肩を貸して……

「あ」

——知ってる？人間の身体が妖怪化する時、それはそれは痛いんだ
って——

やっぱ~~~~~！！

あのことすっかり忘れてた！！

「どうしたの？顔青いよ？」

「え、あ、いや」

やばい、美鈴が爆弾抱えて向かって来ているように見える。

来んなくんなくんなー！！

そんな願いも虚しく、美鈴はしっかりと任務を果たしやがった。

「よゝあたし。早く体に入ってよ。うゝ耳がゝ」

「超お断りです」

反射的に即答してしまった。

「え、何で？」

あたしが一歩進む

一歩後退

二歩進む

二歩後退

あたしが腕を伸ばしても絶対届かないように位置取るあたしすごい、と現実逃避していたら、

他の皆も空気が変なことに気付いてこっちを向いている。

ただ、親友三人組は心当たりがあるのか、少し納得した顔をしている。

「さやかちゃん。どうしたの？」

「まさか、まだ問題が？」

「ああいや、その問題っていう問題じゃないんだけど…私的にはかなりいやっていうか絶対入りたくないっていうか…」

最後はしどろもどろになってしまう。

「諦めなよ。さやか」

「最後の試練だと思ってさ。」

「私達は見ただけしか出来ませんが頑張ってる下さい。」

はっ！！そうだ神奈子達に頼めば…

「神奈子！！なんとかして！！お願いします！！」

「いや、なんていうかね…」

「もうそろそろ術が切れちゃうんだよ」

「その意味も込めて頑張って下さい」

そんな殺生な！！

「そ、そんな」

「…だからいま私達にできるのは…」

「決心のつかない親友の」

「後押しをするだけです。」

ドンと三人があたしに息のあつた軽い掌底を食らわせる。思わずたたらを踏んで後退したさきには、あたしの体。

「お帰りがさうい」

「いや…」

だああああ！！

不吉なくらいすんなりと体の中に入った。

恐る恐る目を開けて、手を開閉してみる。

なにも…ない？

あの話は嘘だった？

ほっと息をつこうとしたその時、

全身の全ての骨がおれて、皮が剥がれて、筋肉が断裂して、血液が沸騰する感覚と、一個一個の細胞から、痛覚が同時に送られた。

「…！！」

心臓貫かれた痛みなんて目じゃない。

「……あ……ぎ……」

イタイ…

杏子サイド

「おい、しつかりしろ！！」

さつきからさやかに呼び掛けているがまともに返事もしない。
ただ時折声にならない苦痛を漏らしている。

くそ！！もう終わったんじゃないのかよ！！

「ねえ。あれ大丈夫なの？」

「聞いてた話以上に痛そうなんですけど…どういふことなんでしょ

う」

「心の準備はさせとくべきだったのかねえ。」

元凶三人組は少し申し訳なさそうにしている。

「おい！！これは一体どういうことなんだよ！？」

「妖怪化だよ。体を作り変えているのさ。」

「でも妖怪化は完了したって…」

「それは多分魂の話じゃない？体の話はまた別だよ。」

「多分死ぬことはないと思うので大丈夫だとは思いますが。」

死なねえからって…

「だ…じぶ…な…け…い……わ」

「さやか！？」

「…ね……らせ…で…」

そう言った後、さやかはまた力尽きる。

痛みで気絶しても痛みで意識が覚醒するらしく、うめき声をあげ、身体中を痙攣させて、生き地獄を経験しているようだ。

なんて言いたかったんだよ…

「眠らせて欲しい…て言ったのかしら？」

僅かにさやかが頷いた。

「眠らせても多分同じだと思っよ。」

「魂（精神）と魄（身体）の調和しようとする痛みだからね。魄の痛みを遮断しても、魂の痛みですぐ目が覚める。」

「そんな…なんとかならないの!？」

「ないね。本人が耐えることしかできない。」

「……どのぐらい続くのかしら？」

「少なくとも三日、長けりゃ4日…それくらいは覚悟しておいた方がいいです。」

「3日…」

3日かもかかんのかよ…

ほむらの統計によるワルブルギス出現予測日まで、後2日

STOな26話（後書き）

ナガン「ここから先は一直線？ノンノン。私は鬼ですよ。」

さやか「確かにチート化したけど、全力はまだお預けってこと？」

ナガン「そゆこと。後ここで言いますがフラグ一個回収し忘れた。」

さやか「…」

ナガン「それはさておき、魔女が生存する形になりました。」

さやか「プロットでは死んでるのにね。」

ナガン「そこで、この魔女の名前を募集したいと思います。」

さやか「仮にもあたしなんだから、あんまり不適當な名前はお断りだから」

ナガン「期限は7月31日までとしますので、宜しくお願いします。」

「

さやか「あ！！そうだあたしが使うスペカも考えて！！こっちも期限は同じだから。よろしく！！」

さらわれる一人な27話（前書き）

ナガン「前回更新しなくてすいません。microSDが消えたのに、キレて携帯が洗濯機に戦いを挑んでしまいました。」

さやか「ばかだ。ここにはかがいる」

ナガン「それと前回募集して集まったアイデア、共に0なんだけど、新手のいじめじゃないよね？名前とか自分で考えなさいって言うんだよね？」

さらわれる一人な27話

杏子サイド

「これからちと忙しくなるから、落ち着いたらまた酒でものもうや
つて伝えておいて」

そう言い残して、あの三人組はつゆと消えた。

このままだと具合が悪いので、一番近いからという理由で、さやか
はほむらのアパートへ運ばれた。

アパートの外見はどこにでもある古いものだが、ほむらの部屋に入
るとびっくり、そこには摩訶不思議な空間が広がっていた。

アタシも最初入った時は驚いたな…

取り合えず適当な場所を見繕って、さやかを寝かせた。

病院に行くことも見当してみたが、さやかが現在行方不明であり、
その間の行動の説明が難しいこと、
そしてなにより、身体が劇的に変化しているさやかを連れていくの
はまずかった。

今のさやかの姿は大分変わっている。

身体は大人び、出るところは出て、引っ込んでるところは引っ込んで
やがる。

髪の毛だって、肩ぐらいしかなかったのが、今では腰に届かんばか

りに伸びている。

触ってみるとこれがまた艶やかでさらっさらなんだよな。

アタシも年頃の女の子

羨ましいっちゃ羨ましい

顔からにじみ出てくる脂汗をまどかがハンカチで拭き取る。

「さて、これからのことだけれど」

ほむらが机に肘をつき、手に顎を添えて話し始める。

「今の状況を整理すると、杏子には前に言った通り、およそ二日後、ワルプルギスの夜が出現する」

「ワルプルギスの夜って…あの超弩級の魔女がここに？」

「そうよ。」

流石に名前ぐらいは知ってるよな…

うちら魔法少女にとって、ワルプルギスの夜は一人で挑んでも戦いにすらならないし、複数で戦うに値しない色んな意味で厄介な魔女だ。

よく考えてみな

一人では倒せる筈もない魔女。仕方なく他の魔法少女と共闘して、やっとのことで倒したとしても報酬はグリーンフシード一個。こっちは頼んだ側だから、必然的にグリーンフシードはあちら側。

結果は魔力の無駄遣い。

名前は轟きそうだが、名声よりはやっぱりモノが欲しい。

つまり、あいつと戦うぐらいなら場所を移して魔法少女と縄張り争いするほうがよっぽど現実的だってことさ。

ま、アタシの場合はそうするけど、家族に内緒でやってるやつもいるからな、残って戦う奴らもいるかもしれないけど、やっぱり家族を逃がすか守る為の戦いをするだろうな。

その中で敢えてワルプルギスを倒そうとするのは、名声が欲しい輩か、マミみたいに使命感に燃えた輩ぐらいだろう。

ただ、ほむらは事情が違うらしいけどな。

その当人は地図を引っ張ってきて、机に広げる。

「ワルプルギスの予想出現地点はここ」

「その根拠は何なの？」

「統計だとさ」

「統計？三滝原にワルプルギスが出現したなんて聞いたことないわよ。」

「本人はこれ以上しゃべるつもりもないらしいし、何かの統計ってことにしとこうぜ。」

「…話を進めるわ。そして、八坂神奈子によると美樹さやかの妖怪化が完了するまで、早くて72時間かかる。彼女の頑張り次第で動向なる時間差ではないわ。」

「美樹さんがいてくれたらとても心強いんだけど…」

「無いものねだりしてもしようがないだろ。いつまでもさやかに頼りっぱなしも…まあさやかはいいって言うかもかもしれないけど、悪いと思うぜ。ここはアタシ達で乗り切るべきだ。」

最初はほむらと二人で戦う予定だったしな。

「それは…頼もしいね」

とさやかが会議の中に顔だけ向けて入ってきた。

「さやかちゃん、大丈夫？」

「全然大丈夫じゃない。大問題だよ。身体が全く動かない。」

「やっぱり戦うのは無理そうね」

「メンゴメンゴ。まあ杏子が言った通り、独り立ちの戦いだと思って頑張りなよ。」

さて、あたしは寝ると、さやかは頭を枕に落ち着ける。

「さあ、私達は作戦を組み立てましょう。」

アタシ達は再び机と向き合った。

そっぴやさやかかって眠れたっけ？

時間が時間となった深夜

まどかはすでに帰り、大まかな作戦は決まったところ時だった。

「ふあゝ、もうこんな時間かよ」

「明日は学校あるのに…」

「あなた最近ずつと行ってないわよね。一日ぐらい変わらないわよ。」

今日は三人共ここで寝ることになって、布団を敷いた。

『入っていいかい？』

独特な形の影が部屋に射したと思ったら、キュウベえが部屋の中にいた。

「てめえもう入ってんじゃねえか。」

『つれないね。少しぐらいいいじゃないか。』

「それで、何のようなの？」

『仮説の確認だよ。』

そう言うときュウベえはさやかの近くに行き、全身を舐め回すようないやらしい目付きで眺め始めた。

耳をつかんで吊し上げ、それを阻止。

「何やってんだ、てめえ」

『やっぱり、これで仮説が正しいことが証明された。』

無機質な目が、少し嬉しそうに細まった

「仮説？」

『僕達はね、一回滅びかけたことがあるんだ。君達でいう西暦1886年、何者かによって僕達は全滅寸前まで追い込まれた。凄まじかったね。個体はおるか僕達の集めた情報のデータも根こそぎ壊れていたんだよ。おかげでそれが何者なのかというてががりさえ無い状態だった。だけど…』

キュウベえはさやかを瞳に写す。

『ある個体が一人の少女を見つけることで、事態は変わった。魔力とは違う、それでいて熱力学の法則に捕らわれない力をその少女は持っていた。契約して、その力が使えなくなったとわかった時は酷く残念だったよ。』

「てめえ……」

『しばらくすると、今度はその少女のソウルジェムにあり得ない変化が起きた。さやかはこの現象を妖怪化と称したけど、最終的にソウルジェムに穢れが溜まり、魔女となった。でね、その時一瞬だけ、また別種の力が検出された。これで熱力学に捕らわれない力は三種類になった訳だけど、その力に酷似しているものが殲滅された場所から検出されていたんだ。』

「へー」

さやかが興味なさそうに相槌をうつ。

『だからこうして、確かめに来たんだ。そして君の力はそれと酷似していた。つまり……』

「あなた方を殲滅したのは私達、妖怪ですわ。」

けっして大きくはないその声はやけに響いた。

キュウベえの身体から縦に裂くように空間に線が入って、キュウベえが真つ二つになった。

「杏子離れて!!」

キュウベえを投げ捨てて、言われた通り、マミ達のところまで下がる。

「こんばんは、魔法少女のお三方。」

現れたのは、長い金髪の女性

妖艶を醸し出しているが、全く真意が読み取れない。

「では早速、あなた方を幻想郷に案内しましょうか。大丈夫よ、幻想郷は一つを除いて全てを受け入れるわ。」

ニンマリと全く信用できない笑みを浮かべてソイツは迫ってくる。
じりじりと距離を保って下がってしまう。

何も仕掛ける様子もなく歩いてくるのが、とてつもなく恐く感じる。

「おい、紫。ほむら達はこれからやることあるから見逃してあげてくれない？」

「ええ、わかったわ。」

「いやそこを……ってええ!？」

「本来ならそうするんだけど、今はちょっと都合が悪いのよ。それに、今回はあそこの三人に用が有るわけではないのよ。」

さっきまでの重い空気をパツと払拭して、今度は胡散臭い笑みを浮かべて話し始めた。

「美樹さん、知り合い?」「腐れ縁だよ。名前は八雲紫。服も名前も紫な胡散臭いやつ。」

「あらひどいわね。正義の神様」

「はは、よしてよ。たかが身内のことぐらいで」

さやか、多分それ誉めてねーぞ、皮肉ってるだけだ。

「で、あたしになんか話したいことがあるんでしょ?」

さやかの口調が真剣なものに変わる。

「ええ。出なければわざわざここまで赴かない。」

紫は扇子で口元を隠して、こっちを向く。

「悪いけど、この子30分程かして貰うわよ?」

そう言つて、隙間の中に消えた。

さやかもろとも

さらわれる一人な27話（後書き）

ナガン「さて、ここからは伏線回収タイムだ。」
さやか「この小説も佳境に入って来たね。」
ナガン「ここから一気に突っ走るぞー！！」

B B A 去るな 28 話（前書き）

ナガン「サイハテが最果て。この意味がわかる人挙手。」

シーン…

ナガン「誰か挙げろよ…」

BBA去るな28話

さやかサイド

八雲 紫

一人一種の妖怪で、妖怪のなかでも抜きん出た力を持ち、妖怪の大賢者、神隠しの主犯とも呼ばれている。

紫を基調とした服を来て、頭にはZUN帽。

幻想郷の創設者で、心から愛しているらしく、その瞳の奥は誰にも悟らせない。

この世界ではわからないけど、前の世界では霊夢に興味津々だったはず。

そんな彼女が作り出すのがスキマと呼ばれる空間。

紫の能力である「境界を操る程度の能力」によって、彼女が次元の間に作り出した、紫の私物みたいなもの。

あちこちに椅子やら棚やら御札やらがふわふわと浮いている。

わからないなら四次元ポケットの中を想像すれば多分あつてはるはず。気温、湿度その他諸々は彼女の思うまま、快適に過ごせる。

…そこらじゅうにある目を我慢したら。

いつもならギョロ、ギョロと忙しなく視線を動かす目は、SAN値をガリガリと削っていく。

スキマ送りされた人は大抵、というか絶対この光景を目にするわけ。

普通は防衛本能がショックで気絶すると思う。

この中で目を気にせず冬眠する紫の精神力はある意味すごいと思う。多分ここであの胡散臭さの元凶はこの空間だとあたしは確信してい

る。

何で知ってるかって？

前に紫の式の藍に中々起きてこないから起こしてくれ、って頼まれたから。

小一時間程探して、息も絶え絶えになりながら見つけた紫は、鼻ちようちんを膨らませてヨダレ垂らして爆睡してましたよ。

イラッと来たから、カメラに激写しといた。

でもまさかそれがあんなことになるなんて……

と、閑話休題

で、その目全てが今現在あたしをじつつつと見つめてるんだよ。

瞬き？なにそれおいしいの状態で凝視するもんだから、充血して怖さを倍增させている。

「あの〜二つ程いい？」

「なにかしら？」

「目線外してくれない？」

「ご免なさい。私にも制御できないのよ。」

うそつけ

「もう一つ。あたしのこと識ってるの？」

「それは私を妖怪の大賢者と知っての質問かしら？」「それなら、どういう経緯で？」

「私”のせいね。霊夢だけでも助けようとしたけど、余りにギリギリだった。その為、何故かあなたも霊夢と一緒に転生、その場にあった他の面子は情報化され、各々へと吸収された。証明する証拠は何もないけれどね。」

「そうなの？確かあの時霊夢の側には結構いたはずなんだけど…」
「私ができるのはそこまでよ。後は当事者が解を出しなさい。」

なんか言葉の裏に棘が見え隠れしているのはあたしの気のせいだよ
ね？

あたしが何をしたっていうんだよ…

「あら、自分がした過ちすら気付いてないのかしら？」

「いた！？ちよつとやめて！！触るの止めて痛いから！！」「でも
ここを押すと痛みが和らぐわよ？多分」

「確信がないのならないですよ！！」

そう言うとき紫は深いため息をついた。

「魔力以外の精神エネルギーの存在の露見」

「う」

「並びにインキュベーターに対する妖怪及び神の存在の露見」

前者は間に合わなかったけど、後者をあいつらに悟られずに阻止する
のは骨が折れたわ。と紫は笑顔で言ってくる。

「しょうがないじゃん。知らなかったんだもん。幻想郷だって見つ
からなかっただし。」

「しょうがないじゃない。あいつらに見つかっては意味がないもの。
それに、あなたの能力なら見つけることも出来たはずよ。」

「それは……そうだけど。」

でも、だとしたらどうして？

まだ幻想郷の存在は露見していないなら、切り捨てることも可能な
のに。

「あなたは私に、いえ私達にとって最悪のタイミングで事を起こしてくれたわ。でも…」

あなたのその能力は私達にとって最高に役に立つわ

杏子サイド

「ほぐえ」

さやかが浚われてからきっかり30分にさやかが布団に頭から落ちた。

「さやか!!!」

「ゆ、紫め…頭から落としやがった…」

受け身も取れなかったのだろう、落ちた時すごい音したからな。

「ふふ、ごめん遊ばせ」

「ぬおわ!!」

いきなり虚空から目の前に紫が顔を出して、驚いてどびずさる。

ゴン

勢い余って椅子に躓いて後頭部をテーブルに打ち付けてしまった。

「期待以上の反応ね。」

「杏子がんばれ。超がんばれ」

「ぐおお…てめえ…」

「杏子、言い返すだけ無駄だよ。むしろ慣れた方が楽。つーか、な
んでいんの？」

「言い忘れたことがあったのよ」

紫はマミ達、特にほむらを見据える。

「暁美ほむら。あなたに一つなぞかけよ。無秩序に糸を束ねられる
のはこれで最後。これ以上は意味が無くなる」

そう言つと紫はどこからか糸と人形を取り出して机に置いた。

「わからないならこれを使って考えなさい。誰かに知恵を借りるの
も良いかも知れなくてよ。さやか、答えは教えないようにね。」

紫は扇子を軽く振るう

「この部屋にインキュベーターが入れないようにしたわ。時間は十
分にあるのだから、ゆっくり考えなさい。」

それじゃまた、と今度こそ紫はその姿を消した。

「わからない人だったわね…」

「わからないこそ、紫の真骨頂だよ……あゝ…っ…」

さやかが身を起こそうとして、失敗する。

「おい、まだ動ける体じゃねえだろ。」

「やっぱまだ無理っぽい…」

「ほむら、マミ。手伝ってくれ。」

「わかったわ」

マミと一緒にさやかを布団に寝かす。

「あー、寝たい」

「寝てないの？」

「そろそろいっぱいいっぱい。」

一方ほむらは、手伝わずに人形と糸を手を考え込んでいた。

ほむらサイド

… 本当に今回は今までとは違うわね

去り際のあの言葉…

「無秩序に糸を束ねる…」 「そんなに気になるのか？」

杏子が後ろから尋ねてくる。

「この人形… 鹿目さんに似てない？ 髪も桃色だし。」

そんなことは最初からわかっている。

あの時、私の目的を八雲紫はすでに看破していた。

彼女には全て見透かされている気さえしてしまう。

だからこそ、彼女の言いたいことの予想がついてしまう。
ただ理由がわからない。

「糸を無秩序に束ねる、ってさ、ようはこの人形を簡単に言えばぐるぐる巻きにしたらいんだろ。」

貸してみな、と杏子は人形と糸を奪い、人形に適当に巻き付け始め

た。

「こんなもんだろ。」

「……鹿目さんが見たら苛められていると勘違いされそうね。」

「大丈夫だろ、あいつは早とちりするやつじゃねえって。それよりも、これからどうすんだ？」

はつきり言言いましょうか。ますます訳が解らなくなっただわ。それは他の三人も同じようで、沈黙が流れる。

「因果、ループ、ほむほむの願い」

「え？」

「大ヒント」

「ちよつと待つて、あなたわかつているの？」

「まあね。でも答えは言わないから。それじゃおやすみ」

「お早う」

「早いよ！-！」

私の願いつて…

喋るべきだと言っているの？

「話してもいいんじゃないの？むしろこのまま隠し通す方が都合が悪く思っけど。」

さやかはそれきり口を閉ざした。

「さやかのやつ、教えてくれたって良いじゃんかよ」

「三人よれば文殊の知恵。少しぐらいは考えなよ。」

…口を閉ざしたはずよね？

「因果とループと、曉美さんの願い、だったわね。」

「……無理に話さなくてもいいけどよ、話さないとアタシは何もわかんねえぞ。」

「……わかったわ。話しましょう。」

初めてだと思う。私の祈りを話すのは。

「私は……」

「そういうことだったの……」

「糸を束ねるのはこれで最後、つまり逆行はもうしてはいけないうつのは解るけど、その理由がわからない。」

「わかんねえなあ……」

杏子が納得いかない顔で尋ねてくる。

「なんでそんなに逆行する必要があつたんだ？さやかがいればすぐに解決しそうな気がするんだが」

「一つ言い忘れていたけど、逆行する度に何かが変化することもあった。と言つても、今回は変わりすぎている。さやかだって、本来なら只の資質を持った一般人。妖怪だったことなんて一度もなかったわ。ついでに言うとう妖怪というものの自体が存在していなかったし、魔力以外の力も存在していなかった。」

「まじかよ！？そうぞうできねえ。」

「思い込みの激しい性格で、好き嫌いがはっきりしていたわ。半端な正義感で以てかってに散っていったわ。」

「……正反对ね。」

「正反对よ。そしてあんなに強いとも思ってた。」

「今までの反動かしら？」

「「納得」」

さて、とマミが人形の糸をほどく。

「暁美さんが話してくれたお陰でだいぶわかったわ。」

スチャツとメガネを装着する巴マミ

「推理を始めましょう。」

魔法探偵巴マミが 始まります。

BBA去るな28話（後書き）

ナガン「電波を受信しました。後はキリがよかったからここで切りました。」

さやか「ママがどんどん厨二化していく…。」

ナガン「ティロWWファイナーレWW」

杏子「違う。ティロ、ファイナーレだ」

さやか「ブフツ」

ナガン「あんたには負けたよ。」

ママ「ティロファイナーレ！！（怒）」

PV20万記念外伝（前書き）

ナガン「前半三人称練習。後半は先に謝つときます。」

PV20万記念外伝

1・巫女異変

「霊夢くれ」

このなんとも奇妙な異変のきっかけはこの一言から始まった。

「…これはまた唐突にどうしましたか？頭にうじでもわきましたか？」

「あたしの巫女にするからくない？」

「…いかに美樹様と言えど霊夢を渡す訳にはいきません。」

そう先代の巫女、博麗^{れいか}霊華は霊夢（三歳）を抱き寄せる。

それにしても、彼女は一応所謂転生者、トリッパであり、原作知識を持っているはずなのである。

原作ブレイクを試みていることに彼女が気が付いているのかはなはだ疑問であるが、単に巫女が欲しいならそこら辺の捨て子の少女を拾えばいいはずなのである。

なのに何故やるのか？バカなのか？

「大丈夫だつて、たとえ異変が起きたつてこつちで処理するから。」

「異変解決は博麗の使命です。それにご存じでしょう？博麗の巫女は龍神様に選定されているって。」

「ならもう一回選定してくれるんじゃない？それにそろそろ新しい風を入れるべきだと思うけど。」

「スペルカードという新しい風はもう入りましたが？」

ぐぬぬ…と両者はにらみあう

霊夢はその瞳に何かを灯しながらさやかを見つめる。

「…舌戦はめんどくさくていけないや。なら…」

「これで方をつけましょうか。」

「それが一番シンプルだね。」

スペルカードを取り出し、空に浮かび上がる両者。

「あたしの野望の為に、ここで散れ!!」

「性格変わってますよ。それにそれフラグです。」

「その幻想をぶち壊すよ!!」

「あーもう!! もっと真面目に巫女募集しろ!! このダメ神!!」

弾幕ごっこが始まった。

10分後

「勝ったー!!」

「ま、負けた。」

どうやらさやかに軍配が上がったようである。

「はっはっはー、約束通り霊夢は貰ってくよ。」

とさやかは霊夢に手をのばす。

が、ご存じだろうか

「…いや」

「え?」

「こんなへんな神様といたくない」

世界には修正力なるものがあることを。

その言葉はさやか胸を抉り取るのに十分な強さがあつた。

抉る、抉る、抉る、抉る、抉る

繰り返すこと5（ry

「……」

長い、長い溜め息について、霊夢に背を向けるさやか

「貰っていかないんですか？」

「……霊夢がいやって言っただ。無理強いさせてまで連れて行くほどあたしは鬼じゃないよ。」

大切に育てなよ、とさやかは自分の神社に去っていかなかった。

「うわああああああん！！！！神奈子オオオオ！！！！」

「ぐふえ！！！！」

霊華達から見えなくなった所で能力を発動。神社でのんびりしていた神奈子にボディীবローを食らわせた。

「な、なんだい！？」

「霊華に霊夢とられちゃったよお。でもあたし何にもできない…。嫌われちゃったもん。へんなんだもん……」

「あー、とりあえず事情を話してくれるかい？」

結局、その日から一週間、さやかを幻想郷で見た者はいなかった。

stage clear?

2・守矢一家コスプレ激情（魔法少女編）

さやかサイド

「早苗」

「あ、さやか様、こんにちは」

巫女異変から約18年後のある日のこと。

守矢一家はすでに幻想郷に引っ越し、新たな生活にすっかり順応してる。

ただ、常識にとられないことをモットーとしている早苗が変なベクトルへと突き進んでしまったけど。

簡単に言うと、コスプレに目覚めてしまった。

一説によると原因は神奈子にあるらしいんだけどさだかではない。そしてそれを止めないばかりか順応している神奈子達もアレすぎる。確か前にコスプレが原因で異変になりかけたこともあったなあ。

「さやか様」

そんなことを考えていると早苗があたしをまじまじと見つめながら尋ねてきた。

「さやか様の服って、けっこう変ですよね。」

甦る記憶
トラウマ

「……変とか言わないでよ……」

「え！？ちよつとなんで泣くんですか！？別にけなしたわけでは無いですよ！？聞きたいことがあっただけです！！」

「……聞きたいこと？」

「えつと……その服ですけど、いつから着てるんですか？」

「ずつと、生まれてからずつと着てる。神奈子達もそうでしょ？」

「だとすると、なんでそんな、魔法少女的な服装なんですか？神奈子様達は威厳がある服ですけど……」

「……知らない。」

「そうですね。引き止めたり泣かしたりしませんでした。」

と、そのまま些細な事で終わっていきそうな事から数日後

早苗から美鈴と来て欲しいとの連絡があった。

「なんで私もお呼ばれたんでしょうか。」

「わかんない。そもそもいつも勝手に行ってから、来て欲しいって言われること自体ないのに。」

神社に続く長い階段を登りきる。

「おや？三人でなにかしてい……」

早苗がパシャパシャ写メを取りまくっていた。

被写体は神奈子と諏訪子。

まあ、よく見る光景ではある。

でもなんだろう。あっちに行っではいけないと引き留める自分がいる。

今回のコスプレが妙にあたしの服の感じに似せている気がするからかな？

「あー!!さやか様ー!!」

と携帯片手に手を振りながら走ってくる早苗。

「あーうん、一応聞くけど、それどうしたの?」

「どうですかこの衣装?張り切って自作してみました。」

と早苗はその場でターン。

ピンクを基調とした服で背中には可愛い弓を装備。(まどかの魔法少女の服)

似合ってるねえ。

(因みに神奈子=杏子、諏訪子=マミ)

「色々がちがくね?」

主に胸とか身長とか色とか

諏訪子なんて無い胸押さえて溜め息はしてるし。

「あゝ私はどういったご用件で…」

おずおずといった感じで美鈴が用件を尋ねる。

まさかこれじゃないですよ?という思念が伝わってくる。

「美鈴さんはですね、この間チャイナ服を借りましたよね?」

「はいそうですけど」

「そこでお返しと言ってはなんですが…」

その時、あたしは見た。

美鈴が一瞬裸になり、服がコスプレに変わったのを。（美鈴「ほむら」）

「この服をあげようかと思いましたが」

「え！？ちよつと私の服！！どうなってるんですか！？」

「服ならここに」

「そう言うのではなくて！！どうやって一瞬で着替えさせたんですか！！」

「着替えを一瞬で済ますなんて奇跡以外何者でも有りませんからね。」

「

「てあんた…」

「てへ♪」

能力使うなよ…

（早苗の能力は『奇跡を起こす程度の能力』です。by作者）

「つかこんな使い方できたっけ？」

グツと早苗は親指をたてながら、美鈴の写メを撮る。

「止めてください服返して下さい。スカート短いです。」

「では、あちらで神奈子様達も入れて記念撮影しますよ」

「無視しないで下さい！！」

諦める美鈴。あの状態の早苗は誰にも止められない。

「じゃあ撮りますよ」

「いやなんであたしがセンター！？」

「そうじゃないと意味がないですから。」

「それってどういう…」

「はいタイマーかけましたよ、準備して下さい」

……美鈴の二の舞…だと…

パシヤッ

こうして、世にも奇妙な写真は撮られたのである。

「うわ…写真で見てもすごい違和感がある…色々」と

「私ですよ。髪の毛が赤色なのに…」

「早苗…組み合わせ変えた方がよかつたんじゃないかい？」

諏訪子、美鈴、神奈子が感想（？）を述べる。

「で、なんであたしがセンターなの？」

あたしだって色々とその写真について言及したいことはあるけど、まずその理由が聞きたかった。

「さやか様は、とても目立ちます。宴会の時だって、雑踏の中にいたって、人目でわかつちゃうぐらいに。」

……何だか深い話しになったんだけど…どゆこと？

「たぶんそれは一重に服装に特徴がありすぎるからだと思います。

そして数日前、さやか様泣かれましたよね。私が変と言って。」

「ま、まあそうだけど…」

「別れてから考えました。どうしたらさやか様が変と思われずに済むか。」

「それが…これ？」

「はい。私達も特徴のありすぎる服を着れば、さやか様も変に思われない。」

そう言つて、早苗は写真を改めて見せる。
写真の中のあたしは、確かに比較的普通だった。

早苗…なんていい子なんだ…

ギュー、と思わず抱き締める。

「（イイハナシデスネー）」

「（でもさ、確かにこの服できれば私達が矢面に立てるけどさ、さやかの服が变つていう事実は変わらないよね。）」

「（言うな…）」

外野がなんかうるさいけど無視だ無視。

「でですね、私さやか様の外出用の服も考えまして…」

ちょっと待つてて下さい、と神社の中に入っていく早苗を見て、なにか言い様もない感覚がした。

決定的なミスを犯したけど、それが何かわからない。にも関わらず危機感センサーとも言つべきものに反応しない感じ。
やがて、障子がゆっくりと開かれ

「これを着てくださいー!!」

と突き出されたのは、

2525の歌姫の服の水色版的な服だった。

（名称はPースタイルF B b y作者）

因みに早苗は初・ミクのコスプレだった。

「えっと…これはちょっと…」

断ろうとした。

けど、まばたきした直後、早苗の持つ服が非常に馴染み深い服に変わっていた。

恐る恐る手を頭に持っていく。

手が感じるのは二つに分かれた髪の毛の束。

神奈子達の方に視線を向けると、三人とも……感嘆の表情？

「はい鏡です。」

……これはなかなか……

はっ……いかん、自分に見とれるなんて……

「いや、前からやってみたかったですけど……ここまでとは……どうですか？」

どうって……

確かに良いけど……認めるとなんか負けた気が……でも気に入っちゃったし。

「……いいんじゃない……？」

「じゃあこのネギを……」

「それはいや！……」

「……と言うこともあった。」

「あーなんかそれっぽいこと言ってたな。」

「ねえ、その写真ってまだあるの？」

「あるよ。……ほいこれ」

「どれどれ…って…えー」

「……その早苗って言う人、人選感覚が悪すぎるわね」

「常識に囚われない、が早苗のモットーだから」

「非常識すぎるよ……」

「あら、話している内に目的地に着いたみたい……よ。」

「…あれって…」

「冗談よね？」

「ようこそ！！守矢神社へ！！」

「…帰っていいか？」

「杏子こらえて」

完

次回予告

「こ、この写真は…！」

「文文。新聞号外です…！」

「ゆかりん俺だー！！結こ「誰かしらねえ。フッフ……お仕置きしなくちゃねえ」ぎゃあああ…！」

「ブッ！？アッハハハハなんだこれ！？」
「笑いじぬ〜〜！！」

「やっと見つけたわ。もう逃がさない。」

外伝3「スキマの中であつたよう……いや、絶対あつてなかったわ。
うん」

PV20万記念外伝（後書き）

ナガン「尺伸ばしの外伝でした。早く完結させたいのに…」

魔女「あたしの名前は？」

ナガン「ルービツヒ・フツケンバインさ…いやこれは没ネタです。」

魔女「どうせなら和名にしてよ。」

ナガン「それだと名字は”美樹”に決定するけどいいか？」

魔女「それぐらい条件しぼないと名前なんてでてこないって。」

ナガン「というわけで引き続き名前募集します。それが名前決めるいいサイトでもいいので教えて下さい。×切？なにそれおいしいの？」

魔女の現時点で決められた設定

ほむほむがんばれー！！な29話（前書き）

ナガン「アンケート第二弾をやります。詳しくは後書きで。」

さやか「君の手で話の結末を変えられるかも！？」

ナガン「それではデータが二回吹っ飛んで正直魔女化しなくなった29話をどうぞ。」

ほむほむがんばれー！！な29話

三人称サイド

「まず、暁美さんをこの人形としましょう。」

そうマミはリボンで新しく人形を編む。

色や体型がほむらに似ているのはマミの几帳面さが顕れている証拠だろう。

「暁美さんがある程度時間を過ごし、逆行するとき、恐らくあなたの因果はこんな風になるわ。」

そして、ほむら人形を前に動かして、また元の位置に戻す。

その過程でリボンは逆行する位置に固定し、まどか人形の上を通過させる。

「そして、また逆行して、これを繰り返していくと…」

まどか人形が次第に黄色に覆われていく。

「暁美さんの因果がまどかに絡み付いていった。これが今の状態ね。」

ほむらは何か気付いたようで動揺が見てとれるようになる。

「そ、それが何と関係があるのよ？」

わかっているが認めたくない、そんな声色。

「…曉美さん、鹿目さんが魔法少女になった時の強さはどれも同じだった？」

「…いいえ、むしろ繰り返す度に強くなっていたわ…。最初はワルプルギスと相打ちだったのに、後の方になると一撃で倒してしまう程に。」

「やつぱり…」

この返答がマミの推測を確信へと変えた。

「因果の集束が魔法少女の資質を高めたってことか？」

「そういうことになるわね…」

「そんな！！それじゃ私が…」

ほむらは衝撃の事実茫然自失に陥る。

自分がまどかを最強の魔女に育ててしまった。

自分の行為がことごとく裏目に出してしまったのだ。

そんな残酷な現実にはむらは打ちのめされた。

「どうかしら？美樹さん」

「…ま、40点かな」

まあよくもそんなだけの情報でそこまで推理できるね。とさやかが顔を動かす。

「魔法のメガネですもの。」

「…激しく疑問だけど今は置いておく。マミの推理の補足だけど、実際はほむらの因果だけじゃ弱い。それを説明するには、ほむらの逆行を真実を説明しないといけない。」

ほむらはビクツと体を震わせる。

「大丈夫か？」

「……大丈夫よ。この際だわ。」

「それなら話を進めるよ。ほむらの逆行は厳密には時間逆行じゃない。」

「……どういうこと？」

「本当の時間逆行は……」

「こういうこと」

マミ、杏子、ほむらがバツと声のした方、さやかの右側へと顔を向ける。

また気付かれずに侵入された、と思うよりも先に有り得ないが先이었다。

何故ならその声はさやかの声とそっくり、いや一緒だったから。三人の視線の先にはもうひとりのさやかが手を振りながら消えているところだった。

「……流石あたし、説明する手間が省けた。」

「つまり、本当の時間逆行は……」

「過去の自分も存在しているのか……」

「多分ほむらのそれは平行世界の移動の方がしっくりくる。実際時間逆行の方が平行世界の移動より難しいしね。」

それだけならまだ良かったんだけど、それに加えてほむらは魄からだが伴ってなかった。」

「……？つまり、どういうことだってばよ？」

杏子が横から疑問を口にする。

「元々平行世界の移動だってかなり難しい所業で、ほむらの資質で

は体ごと移動するのは不可能だったってこと。そこで、魂だけ移動して、自分に憑依する形をとったって考えられる。」

「ちよつと待つて、それだと元々いた暁美さんはどうなったの？」

「融合したと思う。そしてそれが、マミの推測を完璧にするファクターのひとつ。」

とそこで、杏子が手を挙げて質問する。

「なあ、別にマミの推測でも筋は通るんじゃないの？ 繰り返せば繰り返す程強くなるんならそれだけ回数こなせばいいじゃん。」

「……一ヶ月は14年の何分の一？」

「え？ えつとそりゃあ12×14分の……あ」

「気付いたよね？ ほむらが逆行して、まどかの因果を増やしてしまう量は時間換算で約一ヶ月。因果の量を二倍にするだけでも170回は逆行しないといけない。」

しかも逆行しているのはほむら自身でまどかじゃないから、加算するのはほむらの因果の量だから、その効率はこちらに悪くなってしまう。

最後に、それだけの回数親友を助けるのを失敗しても、最初の気持ちを忘れずに続けられる？」

そうか、と杏子は己の思慮のなさを悔いる。

170

この数字は逆行する数だけではない。

親友を救えず、見殺しにする回数。

ワルプルギスの夜に希望を折られる回数。

あるいは両親を騙す回数かもしれない。

もしかしたら、諦めかける回数かもしれないのだ。

「こなすだけならどうとでもなる回数。だけど、心が折れるにも十分な回数なんだよ。」

ほむら、あんたは何回逆行したの？」

「……9回」

「ほれ、合わないでしょ？」

後ほむら、話を続けるけど、ソウルジェムは大丈夫？」

「…少し濁っているけれど、グリーンフィードを使えば問題ないわ。」

「ならばよし。」

で、魂の融合に依じて、ほむらが持つ因果は増え、逆行する毎にまどかに絡み付く因果の量も増えていく。」

「でも、それだと曉美さんがもつ因果の量も増えるんじゃないの？」

「まあね。でも、契約はもう取り結ばれているから、後付けの因果は何の影響も与えない。」

「そうなの…」

マミは膨れっ面をしてメガネを外す。

「完璧だと思つたのに…」

「いや完璧だよな。あれだけの情報でここまで推測できるのは。」

「そうだよな。あたしなんか話についていくのが精一杯だ。で、さやか。まだ続きあるんだろ？」

杏子の問いかけにさやかは静かに首肯する。

「もうひとつ理由がある。そのキーワードは…」

「無秩序、ね」

再びメガネを装着したマミが即答する。

流石ティロ・フィナーレ（即答）だ。

「ねえ、そのメガネ……」

「私の必需品よ。誰にも渡さないわ。」

「……………マミの言う通り、無秩序がもうひとつの理由のキーワード。無秩序、つまりランダムに平行世界を移動するもんだから、他の人の因果も巻き込んで逆行してしまう。それはほむらに近しい人のか、はたまたまどかのかはわかんないけどね。」

そしてそれらは自ずとまどかの元へと集束していく。

以上、1・逆行することとまどかに因果が集中する。2・逆行するたびにその都度ほむらが自分と融合することによる因果の増加。
3・無秩序な逆行によって他人の因果も巻き込んでしまう。
この三点がまどかの因果の量を加速度的に増加させた原因だよ。」

ほむらはそれらを、目を瞑って静かに聞いていた。

「……………変わらない。何も変わらないわ。それが全て事実だとしても、ワルプルギスの夜が後30時間強でくるのは変わらない。まどかを救うことが私のたったひとつ道しるべなことも、何も変わらない。」

一見、揺さぶりを一笑に伏すような言動であったが、同時に、自分を見失わないように必死になっているようにも聞こえた。

「……………ああもう、なんでこんな時に話さないといけないのかなあ。」

さやかとてこんな戦意を喪失させるようなことは避けたかった。

とにかく時期が悪すぎたのだ。

ほむらにとって、これらの真実は知らなければならぬもの。

だが、戦闘前に話すことでは絶対にならないものでもあった。
ラスボス戦の前で話す等、言語道断である。

しかし、今しかない。直前など立ち直る暇などないし、戦闘中など
以ての他。

だから、今告げるしかない

「ほむら、あんたにはもうひとつ伝えることがある。」

ほむらにとって、最悪の事実を。

「紫の、逆行は最後にしろ、この言葉の意味は……」

あんたはもう逆行できないってことなんだよ。
コンティニュー

”私”の記憶を洗い出しながら考える。

何故”私”の世界は滅びたのか。

本当に”私”は対処出来なかったのか。

”幻想郷”を救うことは出来なかったのか。

理由はある。

それは”各々”から各々への記憶（魂）の継承。

こちらで確認しただけで30名弱。

これだけの人数の魂を咄嗟に発動させた術式でこちらに飛ばすこと
が果たして出来るのだろうか。

不可能に決まっている。

ならば、”私”は以前から知っていたはず。

答えは、すぐにでた。

”私”は崩壊の三日前に崩壊を察知していた。

.....

これは、やることがひとつ増えたわね。

藍にはこれ以上押し付けられそうにないし……どうしましょうか。
……ふう

私も徹夜組に入るかなさそうね……。

ああいやだいやだ

ほむほむがんばれー！！な29話（後書き）

ナガン「今回、あからさまな伏線を張りましたが、今回のアンケートは、この伏線を回収するか否か、です。」

さやか「普通は回収して欲しいけどね。」

ナガン「でもな、この伏線、回収するかしないかで結末がかなり変わるんだよ。具体的にはトゥルーかハッピー。これを読者に委ねようと思った。」

さやか「え、これどっちがハッピーになるの？」

ナガン「・・・黙秘権を行使します。選ぶのはフラグを回収するか否か。俺にとってかなりの大博打だからな」

まどか「えー」

立ち直りが早いのは仕様です。な30話（前書き）

ナガン「今回から不定期更新になります。主な原因は日曜に時間がとれなくなったので。」

さやか「完結はさせるよね？」

ナガン「ふっ…今では、エピソードが最後に残った道しるべさ。」

立ち直りが早いのは仕様です。な30話

「逆行出来ないって…どういうことよ」

ほむらはさやかに詰問する。

「次あたり、あんたの魂はバラバラになって消滅するってことだよ。原因はさっきの話が絡んでくるけど、魂の融合が諸悪の根源。

この世界に自分と同じ人間がいないように、平行世界の自分も完全に同じじゃない。」

「どうしてだ？自分なんだろう？」

「平行世界はifの世界。この世界とは絶対何かが違う世界。いくら自分とは言っても、ひとかけらでも違うところは存在する。

ほむらを例にとると、まず逆行した時点で魔法少女であることと人間であることが違うし、例え逆行した時点で融合される側も魔法少女だったとしても、願いが全く異なるよね。

そんな状態で融合したら、必ずどこかは不具合が生じる。

繰り返せば、当然ほつれは増えていって、いつの日かその不具合に耐えられなくなって、ボン！！ってわけ。」

「確証は？」

「いや、ない。そもそもこういう事例は経験したことないし。

でも、昔魂喰らってそのまま取り込む奴と戦ったことあるけど、一気に10個ぐらいの魂をイッキして昇天したというアホな結末だった。」

「魂喰らいつて…」

手が変化して大きな口になり、そこから体ごと魂を喰らい、そこで

一言。

もっぐもぐー!!

それがマミの想像だった。なんてすばらし……

「マミ、喰らうものが激しく違うし全然すばらしくもなんともない。むしろ狂気に染まってた。」

「……でもそれは暁美さんとのケースとはあまり関連性がないわよ？そこから推測したなら無理があるんじゃないの？」

マミはさっきまでの妄想を振り払う。顔に出さなかったのは意地だろう。

「忘れているようだけど、これは紫、妖怪の大賢者の言葉。今のはあくまであたしの体験談。無理があるのは当然だよ。」

「……信憑性はあるのかしら？」

「紫はその能力の特性から、モノとモノの境界を見ることに長ける。」

紫から見たらほむらはつぎはぎだらけに見えたんじゃない？まるで決壊寸前のダムのように。

それにあいつの博識なめっちゃだめだよ。エントロピーを凌駕する方法なんてとつくに考え付いてるだろうし。

あいつを言い負かす奴がいたらお目にかかりたいよ。」

「……」

ほむらは今度こそ黙り込んだ。

ほむらサイド

否定したい

今までさやかが言ったことを、嘘だ、何も証拠がない、と切って捨てて、信じないことだってできる。

でも、出来ない。心当たりが有りすぎる。

色々な記憶が混ざりあっているのを、実感してしまった。

病室の部屋番号は？

201 205 302 109

どれなの？

自分の携帯の番号は？

090 - 4863 - 0926

090 - 1624 - 2031

080 - 3524 - 5429

なんで？

携帯を手にとって震える指をおさえて番号を確認する。

080 - 6539 - 5472

「あ…」

もしかしたら、逆行する時の馴れない気色悪さはそうじゃなくて、魂の危険信号だった？

気がついたら、部屋を飛び出していた。

わからない

私は、本当に” 暁美ほむら ”？

わからない

今の私は、契約した時の私？

ワカラナイわからない解らない……

さやかサイド

「 暁美さん！！ 」 「 ほむら！！ 」

やっぱ耐えられなかったか…
説明下手くそだなあ

「 …… 言い方まずった？ 」

「 …… 淡々とした口調がキウウベえを彷彿させたな 」

「 …… 少なくとも、こんな時に話すことではなかったわ。 」

杏子のはちよつとショックだったけど、

マミ、それは重々承知してるよ。

ま、最後まで横槍を入れなかったあたりマミ達もわかってくれた
…… はずだよな？

マミ意外にノリノリだったし、溜まってた鬱憤を便乗して発散した
訳じゃないよね？

「 今しかなかったと言うしかない。けど、謝らないとなあ。 」

さてと、今この状況で一番適任なのは……

まどかしかないよね…

明朝だけど我慢して貰おう、と携帯を手に取るうとするけど届かない。

「ママ、まどかに連絡して。」

「こんな時間に？鹿目さん絶対寝てるわよ。」

「そんな四の五の言ってる暇はない。ほむらはまどか命なんだから、一番適任だよ。」

「…てめえらもうちょい緊張感もてよな。とりあえずアタシはほむら探してくるからな。」

と杏子も部屋から出ていく。

「連絡ついたわ。すぐいくだつて。」

「そう。」

おもむろに体を起こそうとする。

だけど、身体中を駆け抜ける激痛と何故か全く腕に入らない力のせいで、再び布団に逆戻り。

ままならないなあ

「まだ…収まらないの？」「そうみたい。あゝあ、神奈子の話がうそだったら良いのになあ。」

「世界はこんなはずじゃないことではいいよ。」

何だろう、あってるようで何かが違う気がする。

「さて、私も暁美さんを探しに行ってくるわ。」

「ん。わかった。まどかが来たらそう伝えとくよ。」

ボタンと扉が閉まり、シーンと部屋が静かになる。

今度こそ、絶対に、寝てやる！！

……あ、まどかくるかしんないんだった。

やることない。暇だ。

まどかサイド

マミさんに5時に叩き起こされたまどかです。

そしてさっきまではむらちゃんを捜索中でした。

そうです。見つけました。

公園のブランコにソウルジェム片手に頂垂れてます。

すぐく取り乱しているみたいです。あんなほむらちゃんを見たのは初めてです。

「ほ、ほむらちゃん。どうしたの〜」

気を取り直して、その声をかけながら近付いて見たけど、全然反応してくれない。

さやかちゃんの時と同じだ…。

今度は軽く揺らしてみる。

「はっ！！…ま、まどか？」

反応してくれた。

「どうしたのほむらちゃん？」

ソウルジェムはかなり黒くなっていて、それだけショックなことがあったんだろうなってわかる。

「……っ」

すると、ほむらちゃんがぼろぼろと涙を落とし始めた。って…

「まどかー！！」

ええ！？あのほむらちゃんがわたしに泣きついたあ！？

ホント何があつたの！？

誰か教えてよ！！

「それで…私、自分が何なのかも全然わかんなくなっちゃって……
気が付いたら飛び出してた。」

ひとしきり落ち着いた後、ほむらちゃんは全てを話してくれた。
今までの行動の理由、ほむらちゃんの願い、etc…

後でさやかちゃんとOHANASHIしないかね。ウエヒヒ

それよりもホントほむらちゃんどうしたんだろう。

いつものクールビューティーの欠片も見当たらないんだけど。
これで三編みでメガネかけてたら完璧だよ。

メガネほむほむ様だよ。

……はっ！！いけないいけない

「ほむらちゃん……」

「ごめんね、わけわかんないよね。気持ち悪いよね……」

「ううん。そんなことない。ほむらちゃんはわたしの為だけを考えて行動してくれたんでしょ。皆や、他でもないわたしに後ろ指を指されながら。それって普通の人じゃまずできないよ。なんの取り柄……はあるけど、普通の人なわたしよりずっといい。」

「まどか……」

深刻に話さず、残酷な現実とか関係なく、ごく普通の、例えば恋バナの相談をするように接する。

「それに、ほむらちゃん言ったよね。あなたがいなくなったら悲しむ人がいる……その人達のこと少しは考えて……て。」

”わたし”がどんな人だったかはわからないけど、”わたし”に惹かれたのは事実。

だからわたしはわたしらしくする。

”わたし”とわたしは、鹿目まどかだから。

「ほむらちゃんがいなくなれば、わたしは悲しむよ？」

ほむらちゃん

思い出せるはずだよ。

ここまでしてこれた理由を。

ほむらサイド

あの後、私が落ち着いたのを確認して、まどかは家に帰っていった。その時の顔が、すごくアレだったのは気のせいだと思いたい。だって、ねえ？あのまどかが、クズがするような笑いをするはずがないわ。絶対ない。無いったらない。

……少し取り乱したけど、つまりは思い出したのよ。私は、あの笑顔をまた見たくて祈ったんだって。またまどかに救われたってことよ。魂が融合したからってそんなの関係なかった。だって、暁美ほむらだから。

まどかを救う

今ではこれが、最後に残った道しるべ。

そろそろ、まどかを見殺しにしてきたのもたえられなくなってきた。もう逆行できないとわかってても関係無い。渡りに船。臨機応変……はちよつと違うわね……。まあ詮ないことね。

全てに、終止符を。

立ち直りが早いのは仕様です。 な30話（後書き）

ナガン「黒まどか爆 誕！！」

まどか「ウエヒヒ。 って止めてよ！！変な笑い方しちゃったじゃん
！！」

ナガン「帰った時詢子のヤロウかなりひいてたらしいな。」

まどか「え？じゃあ理由聞かなかったのって…」

ナガン「JKでそうだろ。」

日常パートはこれで終わりな31話（前書き）

ナガン「わ、悪かった！！この通りだ（土下座）！！別に貶めるわけじゃなかったんだよ！！なんでもする！！だから許して……」

詢子「……ティロ・フィナーレ（殴打）……ティロ・フィナーレ（殴打）……ティロ・フィナーレ（殴打）」

日常パートはこれで終わりな31話

「…ひう……まどかぁ…もうやめてえ」

「まだだよ。まだ終わらせないよ。」

「ひゃう！……そこはらめえ……」

「ウエヒヒ、ねえここ、すごいことになってるよ。さやかちゃん。」

「あひい！なんで…こんなこと……ん」

「わからないの？…それなら、わかるまでこれを使っていくよ。」

「そ、それって…あふ……」

「そっ、電マ、だよ。」

「や、やめ……ひああああー!!」

やあ、アタシだ。杏子だ。

早速だが、アタシはちよつとゲーセンに行こうと思う。

時間？一時間ぐらい大丈夫に決まってる。

確か新しいやつが出たらしいしな。

金？……しまったな。手持ちがねえ。

近所のチンピラからカツアゲするか。

いや、こんな時に余計なトラブルは止めとこう。

こうなったら散歩でもいい。

この部屋から一刻でも早くでよう。

そろそろ精神的にヤバイ。

ごめんなさやか。あんたを救うって言ったけど今のアタシじゃ助けられねえ。

だから待っててくれ。いつか助け出せるように精進してくるから。

だから、そんな目で見ないでくれ。頼むから。

後若干殺気も込めるな。

グッドラック

さやかサイド

おいまて何だその親指はあああああ！！

ぜってー後で折る！！

助けなかったこと後悔させてやるからなああああまどか足裏マッサージ止めてえええええ！！

「あ、足裏じゃなかったらいいんだ。」

「ふぎ！？違う！！違うからふくらはぎ触るのやめて揉まないでえええええ！！」

揉まれた（まどかにとってはマッサージらしい）所が、あの独特のしびれを断続的に発する。

おまけに（自主規制）

助けを求めようにも、マミは顔を真つ赤にして手で覆っているけど、指の隙間からばっちり視姦してるし、ほむらにいたっては、愛を吹き出しながら、落ち込むという高等テクを実戦中。

杏子はさっき出ていった。

ど、どうしてこうなった…

これはやっぱりマミ達のせいだ。

袋を手にした黒い笑顔のまどかを止めなかったのが悪いんだ。

ヴヴヴヴヴ

「ひいああああ!!」

「ウエヒヒ。気持ち良いでしょ。ママも良く使ってるんだよね。」

「お、お願いiiiiiiii!! 変になるうつつうつつ!!」

「変になりたいの? わかった。大丈夫だよ。きっと大丈夫。」

アッー!!

「うつつ… 神に向かってこの所業。絶対許早苗。」

「さやかちゃん、ゆるしてヒヤシンス。」

「ヒヤシンスどっから出てきたんだよ!! 流石にキレていいよね!!」

「でも、悪いのはさやかちゃんでしょ。勝手にいなくなったり、いたと思ったら死んでたり、生き返ったと思ったら違ったり、負けたと思ったらどんでん返ししたり、挙げ句の果てにはほむらちゃん傷つけたよね？」

少しは頭をヒヤシンス。」

「…確かに、そうだけど… けどほむらは「ヒ・ヤ・シ・ン・ス?」

…ヒ、ヒヤシンス…」

今ここに、あたしと黒まどかの上下関係が決まった。

流石に現時点で電マ装備のまどかに敵わない。

さつきからしきりに電源を切ったり入れたりしている。まだやりたらないの？

マジ勘弁してほしい。（自主規制）しかけた。

「美樹さやか。まどかの気持ちもわかってあげなさい。」

とりあえずほむらは愛を止める。

「おーす、昼食買ってきたぞ。」

「杏子……！さっきはよくも見捨てたな……」

「いや、だって……なあ？」

「たまには救ってよ……！」

「救うって、別に救う場面でもなかったよな？」

「目には悪かったけど、甘んじて受ける罰だったんじゃない？」

嘘つけマミ。眼福物だっただろ。

「そう言えばまどか、学校は？」

「ずる休み」

「へえ……?!」

「?」

まどかは何か?といった風に平然な顔をする。

ここ最近である意味すごく遅くなったね……

「明日から多分しばらく休みになるし、一日ぐらい大丈夫だよ。それに学校以外でしか学べないこともあるもん。」

「少なくともこれは学ぶ必要はないと思うのはあたしだけ？」

「ねえさやかちゃん。真面目な質問してもいい？」

昼食を食べ終わり、マミが食器を片づけていると、まどかが昨日のことを話し出した。

なんでも、生物が言うには君達と生物の関係は人間と家畜の関係と同じらしい。

「でね、キュウベえが言ったの。『願いが条理にそぐわない以上、必ず何らかの歪みをもたらす。やがてそこから災厄が生じるのは当然の摂理だ。それを裏切りと言うのなら、そもそも願い事なんてする方が間違いなのだ。』って。それって、本当にそうなの？」

……ははは

「正論すぎて反論できない……。」

「そんな!!」「でも!!」「」

まどかの叫びをより大きな声で遮る。

「願い事をするのが間違いだなんて、絶対ない。」

願いを否定するとはね……あいつらなんにもわかってない。

「希望と絶望の相転移? はっ、確かに希望と絶望は表裏一体。だが希望の行き着く先は絶望ではない。絶望の行き着く先、それすなわち新しき希望。」

それを魔女化で強制的に断ち切る奴らに、願いを否定することなど言語道断。願いより生まれし我等神をも冒瀆する行為、万死に値する。」

ん? まどか達がなんか強張ってる気がする。

まあいいか、続けよう。

「そして「おいさやか……様」……なんじゃ杏子？」

「ええ……と、口調が変わっておられ……ます？」

あ……知らず知らずの内に神様モード発動してた？

「えー、と。気楽にせい。」

「い、今のは？」

「神様モード。主に神様として民衆の前に現れる時に使うモード。」

「……ひれ伏す人達の気持ちがよくわかったわ。」

「……うん。こうして座っているだけで無礼なんじゃないかって思っちゃったよ。」

「……動くに動けなかったわね。」

なにか納得しているマミ、まどか、ほむらの感想がこれ。

「なんつーか、前やった時よりも威厳つーか、オーラが出た。」

と杏子が些細だけど重大な発見をした。

「マジで……！ やった……！」

「何か良いことなのか？」

「てっきり妖怪オンリーな時まで逆戻りするのかと思ってたから。」

「でも美樹さん、グリーンフィード取り込んだのよね？」

「それなら魔女で妖怪で神様ってことになるね。」

「……軽くカオスね。」

「流石安定のさやか」

「あんたら言いたい放題言いやがって……。」

「……だつてそうしてると、とても神だつて思えない。」「……」

ぐっ！！見事なハモリ……！！

「うるさいな。昔は威厳を持って接した方が良かったけど、今はフランクにした方が信仰が集まるの……！」

「……何かしら、この罪悪感。」

「神様の厳しい現実を目の当たりにしたわね。」

「ごめんね。さやかちゃん。」

「アタシは信仰するぞ。」

「なんでそんな憐れみの目で見るの？て言うか杏子、あんたキリスト教徒だろ。大丈夫なの？」

「家は破門されたんだ。別に大丈夫だろ。なんならあそこで信仰活動してやろうか？」

「それ教会のドア蹴り飛ばした奴の言う台詞？」

むう、と言葉につまる杏子。

それを見て、まどか達はクスクスと笑う。

「ま、さしあたってはワルプルギスの夜を倒してからか。」

「ええ、絶対に勝ちましょう。」

「そうだね……あいた……！」

「どうしたのまどか。」

「いや、昨日変な金縛りになっちゃって……」

「変な金縛り？」

「なんか糸でぐるぐる巻きにされたような感じで体が固定されて……息も結構苦しくて……それで寝違いちゃったみたいなんだ。この電気マッサージ機もわたしの為に持ってきて……杏子ちゃん、マミさんどうしてそっぽ向いてるんですか？」

まどかは電気マッサージ機を首にあてて、不思議そうな顔をしている。

「いや！？、偶然だ」

「そうね偶然ね」

心当たりがありまくりな二人には耳が痛い話。

流石紫だ。そこに憧れもしないし尊敬もしない。

ワルプルギス襲来の前日とは思えない程、のどかな日だった。

日常パートはこれで終わりな31話（後書き）

魔女「ああやばい。遅刻だ遅刻。」

魔女が後書き部屋のドアに手をかける。

瞬間、魔女の全身に強烈な悪寒が走った。

息が荒くなり、ドアノブを持つ手が震える。

「なに…これ」

グチャ　ピチャ

ドアの向こうから、何か叩いている音が聞こえます。
ドアを開けますか？

はい↑
いいえ

本当に開けますか？

はい↑
やっぱりやめる

魔女がゆっくりとドアを開ける。

そこにあつたのは…、

「残念だなあ…この小説打ちきりだ。」

詢子と、肉塊

続くよ！！まだ生きてるよ！！

戦わないでほしい32話（前書き）

ナガン「遅れた。戦術なんて考えられる訳がない。」

戦わないでほしい32話

『こちらは三滝原市役所です。現在、市全域に避難指示が発令されて…』

遠くから、市の車が避難を促している放送が聞こえる。

「いよいよね…」

「ああ、いよいよだ…」

15時27分

ワルプルギスの夜、襲来

さやかサイド

「きた…」

激しく打ち付ける風と共に、部屋の壁を越えて微かに笑い声が聞こえる。

未だにこの体を蝕む鈍痛と共鳴して体に染み渡るような、不快な愉快に笑う声。

今すぐ出て行って一刀両断したい…

試しに体を起こす。ここまでは順調。

立ち上がる。力のかけ方がバラバラで立てない。

思い通りに四肢が動かない。

不可

ため息をついて布団に戻る。

あたしにできるのは、信じて待つことだけ…か…

しかし、不安だ。

だって出かける前にマミが言ったのが、

「美樹さんにはお世話になったわね。これが終わって落ち着いたら一回「言わせるかア！！」まごふ！！」

全く、狙ってたのかは知らないけどフラグは立てないで欲しい。

ドゴオオオン！！！！

その時、地を揺るがす大爆発が起きた。

ビルの隙間どころか上からも火柱が確認できる。

や、やり過ぎ…警察絶対怪しむだろ

軍のお偉いさんの首が飛んだ瞬間を思わず幻視してしまう程だった。

君達の人生に幸あれ

…明らかにオーバーキルだと思うけど…まさか殺れてないのかな

いよね？

回りのビルに赤く照らされている炎を見て、一抹の不安がよぎる。

神奈子達に増援を…駄目か。生物の目を欺けない可能性が高い。

魔女の時の介入だつて、かなり無理を聞かせたらしい。

それに今は計画の最終調整に入っているはず。

余裕もなにも無い。

………

ああもう！！だからいやなんだよ。信じて待つだけって。

気をまぎらわすことも出来ないし、嫌なことばっか考てしまう。

「なんで信じて待てないのさ…」

今の杏子達なら向かうところ敵なしな筈なのに。

この胸騒ぎはなんなんだよ。

そんなに不安なら、あたしがいくよ。

胸が一際波打った。

ほむらサイド

始めの先制攻撃をものとしなかったワルプルギス。ただ今、その形はみるみる内に崩れていっている。

「シヨット、シヨット、シヨット…」

バマミが放つ弾丸が容赦なく歯車を貫通する。

手にしているのは黄色く装飾されたアンチマテリアルライフルみたいなそれ。

多分黒くして戦場に持っていくても怪しまれないと思う。

一発発射したらその限りではないけど。

私？今はバマミのソウルジェムを浄化してるわ。

「曉美さん気付かれたわ。」

マミの報告に手を繋いで時を止め、移動することで答える。

さっきの場所から離れ、またワルプルギスをマミが狙撃する。

杏子は私達の居場所がバレないように前衛で攪乱。

これが私達の基本戦略。

ティロ・フィナーレは撃たない。

ティロ・フィナーレはマミが放つ攻撃の中で一番威力が高いが、その分溜めがいる。それに魔力の消費量もでかい。

それに対して、これは溜めが必要なく連射が可能。威力は劣るけど、魔力パフォーマンスもよく、貫通力は高いので十分効果も期待できる。

ボルトアクションなのはやはりなにかこだわりがあるのかしら。

アンチマテリアルライフル（魔）でワルプルギスを弱らせてからのティロ・フィナーレでフィニッシュ。

これが一番効率的。

「どこ狙って攻撃してんだよ！！そんなんじゃあたるものもあたんねえぞ！！」

杏子が使い魔を蹴散らし、ワルプルギスの注意を引く。
ワルプルギスが放つ攻撃も危なげなく避けていく。

『杏子、北に300メートル移動したわ。』
『了解。』

杏子はワルプルギスの周りを南へ移動する。

そして、その時は来た。

マミの弾丸が歯車の一つを撃ち落とした。
ワルプルギスが初めて笑い声ではない声を上げる。
さらに、杏子の周りにいた使い魔も消失する。

『佐倉さん今！！』
『わかってる！！』

マミはティロ・フィナーレを撃つ準備をする。
杏子の方も巨大な多節槍がワルプルギスを狙う。

この上無く最高のチャンス。

「ティロ・フィナーレ！！」

それを私達は、ものにした。

名前

それは区別するための印。

名前

それは誰もがもっているもの。

名前

それは、存在を確立させる呪。

名前を決めて

あたしが？

そう。あんたが一番適任でしょ？

なんで？

産まれてくる赤ん坊は親に名前をつけてもらうのが普通でしょ。

それもそうか。じゃあ……あんたの名前は

時を支配する妖怪、美樹から産まれた存在。

時音、みき

…音はどこから？

…語呂を合わせただけ。

『やったの…？』

ワルブルギスは派手に吹き飛んで豪快に土煙を上げた。

『それは失敗フラグだ。』

『でも、佐倉さんと私の最高の攻撃よ。倒れないはずが』
『ただけフラグ立てたいんだよ。』

マミの言う通り、これで終わって欲しいのはわたしとて同じ。

「杏子の言う通りよ。あれで倒れたなら、私はここにはいない。」

けれど、現実には往々にして上手くいかない。

私の願望をワルブルギスは何回も打ち砕いてきた。

——アハハハハハハハ

この、嘲笑と共に。

ワルブルギスがその姿を宙に晒す。

その姿は、しかし、ボロボロ。

歯車は欠け、スカートも半分は無い。
そして、逆さまでは無くなっていた。

その時、ワルプルギスが笑うのを止め、初めて雄叫びらしき声を上げた。

第二ラウンド開始のゴングがなった。

ゴウー！と、ワルプルギスから環状に広がる”風”

だけでも風速は今までの比ではなかった。

ズバッ

飛ばされていたビルがかまいたちで真つ二つになる。

「な……」

驚く間もなく、私達は吹き飛ばされた。

……

……成る程そうきたか

成る程じゃないよ！！なんでこんな姿なの！？

普通はさあ、あんたの色違い的な格好とかが相場でしょ!?

それはまあ……しょうがなかったんじゃない? 多分名前とか性質につられたっぽいし。

っーか、なんでそこまで怒るの? けっこー可愛いよあんた。

武器がさあ……指揮棒ならまだわかるよ。

まあこれ、仕込み刀なんだけど……

でも!! 外見が!! なんて!! ネギなんだあああああ!!

ごめん、なんか名前の響きと「歌」の組み合わせで真っ先に浮かんだのがあんたの容姿でさ……。ネギは必需品だよねって思っ……

あたしは!! あんたの!! 容姿が良かった!!

エー……まあ気持ちはわかるよ。恩義を感じているのもわかるし、ゾッコンになるのもまあ理解できる。でもやっぱり個性は大事だとさやかちゃんと思う。

っーかそれは冗談だよね?

うるさいうるさいうるさい!! 取り敢えず杏子達の援護に行ってくるから!!

怪我だけはするなよ

……させたくないなら早く追ってこい。

マミサイド

『佐倉さん!! 佐倉さん!! 答えて!!!』

キュウベえから聞いたことがある。

ワルプルギスが正位置についてからが本番だと。

正しくその通りだった。

私と暁美さんは私のリボンで難を逃れたけど、大分飛ばされて、おまけに佐倉さんから応答がない。

「ワルプルギスは…?」

暁美さんの言葉に釣られてワルプルギスの夜の姿を探すと、ちょうど市街地に侵攻しようとしていた。

いけない!!

佐倉さんの安否が気になるけど、泣く泣く中断して迎撃に向かう。向かおうとした。

「上よ!!」

上を向く。

目の前に……黒い私?

そこから、景色が変わった。

私を模したワルブルギスの使い魔が何も無い、いえ、直前まで私がいたところに砲撃を行っていた。

勿論こんな事ができるのは一人しかない。

「助かったわ曉美さん。」

「話は後。来るわ。」

——キャハハ——

——アハハ——

空からもう二体、曉美さんと美樹さんを模した使い魔が降りてきた。

コピーした？でもそれだと美樹さんね使い魔がいる理由にならない。

『援護して』

と、何を思ったのか曉美さんがいきなり単身突撃を行った。
それも美樹さんに向かって。

ちょー！？なんでよりによって…知らないわよ！！

悪態を心の中でつきつつ、援護射撃で使い魔を足止めする。
そして曉美さんが美樹さんである使い魔と交錯して…

呆気なく使い魔は消えた。

……え？

「やっぱり、思った通り。」

「どういうこと?」

私の側に後退した暁美さんに説明を求める。

「やつらは確かにコピーよ。だけど、私達をもとにしてはいないわ。」

「どういうこと?」

「少なくとも、強さが一緒なんてベタなことはおこりえないということよ。」

成る程

「……分担して各個撃破」

「賢明ね。付け加えるなら成るべく早く。具体的には1分つてここかしら。」

「十分よ。」

軽口を叩きながらも、臨戦態勢に入り、銃を構える。
その直後、

「いや、10秒で終わるさ。」

二人の佐倉さんが使い魔を槍でがんじがらめにして取り押さえ、それぞれに三人の佐倉さんが襲いかかった。
使い魔は為す術なく塵に変える。

今のってもしかしてロツソ・ファンダズマ!?

でも確か幻影魔法だったはず…ダメージは与えられない。

「無事か？」

「ええ。見たところあなたも大丈夫そうね。」

「まあな。しつかし、あのヤローまさかこんな隠し玉持ってるとはね。」

「それはあなたも佐倉さん。ロッソファンダズマは只の幻影だったはずなのに、どうやったのよ。」

「さてね。久しぶりに使えるようになったら実体を持つようになっただけさ。」

実体、赤…

「ロッソ…勝手に技名命名すんな。」もう…。」

「二人とも、そんなことしている場合ではないわ。急がないと取り返しのつかないことになる。」

はあ…少しの休憩も許してくれないのね。ワルプルギスは。

「やべ…もうあんなところにいやがる。はえ…っの。」

「ワルプルギスに追い付いたら、市街地に侵攻させないことを第一に行動しましょう。市街地のビルが凶器にな…それには及ばないよ。」

誰？、と声を上げた時には景色が一変していた。

「魔女の結界！？」

「こんなときに…！！」

焦る曉美さんとは対照的に佐倉さんは冷静だった。

「いや…。どうやら魔女は味方らしい。」

佐倉さんが指さす方を見ると、ワルプルギスも結界に閉じ込められていた。

あり得ない。でも、他に考えられない。

シユタツと後ろに誰かが着地する。

「どーも。さやかの魔女の時音みきって言います。以後よしなに。」

件の魔女はそう自己紹介した。

戦わないでほしい32話(後書き)

ナガン「初音ミク

←

初音未来(漢字変換)

←

初音みき(再翻訳)

←

時音みき

こんな感じで名前決めました。

戦う歌姫…なんて良い響きなんだ。」

みき「ちょ」

設定 時系列

東方におけるさやか の歴史

B・C・2000年頃 妖怪に転生

人間と接触を図るが、友好的な関係は築けなかった。

そのまま各地を点々と旅し、バレそうになったら蒸発するを繰り返していた。

B・C・600年頃 とある場所にいつものように腰を落ち着ける。

B・C・500年頃 一帯の集落にこの地の守護者として認められる。
(半神半妖になった)

B・C・400 まどか 円が巫女になる。

B・C・395 円死亡

B・C・383 村に防衛能力を持たせて、再び旅に出る。

A・D・300 諏訪子と出会う

A・D・305 諏訪対戦勃発
やそまがつひのかみ
八十禍津日神とかなり運命的な出会いを果たす。

諏訪子負ける。

A・D・306 神奈子に諭される。

村に戻る。

A D 3 1 0 やそまがつひのかみ
八十禍津日神に求婚される。

求婚をかけたの鬼ごっこ開始。
気配察知能力が飛躍的に上昇。

A D 3 6 0 鬼ごっこ終了

？

A D 1 8 0 6 幻想郷誕生 神社移設

A D 2 0 0 0 紅魔郷（原作）開始

A D 2 0 1 2 世界崩壊

まどマギ世界へ

あれ・・・な33話（前書き）

ナガン「設定でワックションおいたけど一週間かかってしまった。
ごめん」

みき「あれだね。数学的に最終回に限りなく近づく症候群だね。」
ナガン「止める。」

あれ・・・な33話

膝まで届く黒髪のツインテール

黒のヘッドセット

黒のミニスカートに太もも辺りまで覆うこれまた黒のロングソックス。

本家とは違い、全てが純粋な黒をイメージしたそれ

そして、脇をだしているその特徴的な服装と思わず疑問符を浮かべてしまう、背中に担ぐネギ。

色が違っても、この要素だけでわかる人はわかる。

「初音…ミク？」

自然と、マミの口からその名前がこぼれた。

才色美人なのに隠れオタクなマミだからこそわかる答え。

「…誰？」

当然、杏子やほむらは首を傾げる。

「何でもないわ。」

まずい、とマミはさっきの発言を無かったことにしようとした。
しかし、マミの言葉に対するみきの反応は正しく「えー」だった。

みきサイド

えー

この世界にもボカロいるんだ。てかマミさん知ってるんだ。歌えとか言われないよね。

あ、こんにちは。改めて自己紹介するね。

あたしの名前は時音みき。永遠の16歳だよ♪

身長：158cm 体重：42kgで、スリーサイズは教えて欲しかったら生物と契約してね♪

「はい。アタシ達キュウベえと契約したぞ。」

外野は黙れ。

あたしはさやかに居候していて、まりよ『てんめえ何してんだゴル
ウアア!!』

前触れ無しに大音量の念話が頭の中で響いて、思わず顔をしかめる。

『何？大声出さないでよ。』

『あんた今どれだけ広い結界張ってるんだよ！今すぐ解け！！人の
魔力ばかり使っくな！』

『でも、これ解くとワルプルギスそっち行くよ？』

『能力使ええええ!!』

『あ、能力あたしも使えるんだ。』

『そうだよ！！だから早く空間広げる！！』

成る程、空間を広げる……広げる……

『……やり方わかんない。』

『イメージだよ！！ぐーっと広げていくイメージ！！』

ぐーっと広める…

言われた通りにやってみると、また別の力で空間が広がっていく感覚がした。

おお…て言うことは

結界を縮めていきながら、空間を広げていく。すると、結界にかかる魔力量が大分少なくなった。

『ぐっ……まあ許容範囲か。今度からこうしな……あ、そっか。』

『どったの？』

『いや、もしかしたらそっち行けるかも。』

え？

それってどういう意味？、て尋ねたけど、すでに切れて繋がらなかった。

「で、あなたは何者なの？」

ほむらがそう聞いてくる。

「あたしはさやかの魔女。さやかの胸騒ぎが止まらないらしいから代わりに援護に来た。」

「証拠は？」

「確認して。」

ほむらは念話でさやかに確認をとる。

しばらくした後、「確認がとれたわ」と杏子とマミに伝えた。

けれど、三人はなんか納得がいかない表情をしている。

「さやかの魔女なら、なんか似てる部分があると思ってたけど、そうじゃないのか？全然似てないじゃん。」

「それは本人に聞いて。あたしだって、色違いになると思っていたんだから。名前の響きで容姿を決めたらしいし。」

そう言うともミはなぜか一瞬無人島で仲間を見つけたようなすごく嬉しそうな顔をした。

「それにしてもなにもない結界だな。」

杏子はあたりを見渡して出た感想を言う。

あたしの結界は今現在特に目立った建造物等はなく、ただ結界の模様として数多の時計が宙に浮かんでいるだけな状態である。

「まあ産まれたばかりだし、なにも設定してないしね。」

三人の表情がえ？と意外な真相を聞かされたものになる。

「魔女って自分で結界造ってんのか？」

「ん？どうなんだろ？性質で結界の様子は決まるみたいだけど、使い魔とかはいないし。後で追々決めないといけないっぽいのかな？」
「私達に聞かれても困るわよ。」

——キャハハハハ

いい加減ワルプルギスも結界の元凶がわかったみたいで、こっちに使い魔を寄越してきた。

「ちっ、来やがった。」

ふむ。使い魔か…

「下がって。あたしがやる。」

三人の前に立つ。

攻撃手段は…てこれも決まっていな…

「ねえ、あたしってどんな攻撃したらいいと思う？」

「いやどんなって言われても…」

「っ！か決まってねえのかよ！」

ほむらと杏子は呆れていたけどマミさんは違った。

「歌、なんてどうかしら。」

流石マミさんは格が違った。

それにしても歌か……

「よし。耳塞いで。」

息を大きく吸う。

あ、これって歌じゃないな……ま、いつか。

「……！！！！」

声にならない叫び！（今命名）

……やっぱ今のなしで。

指向性を持たせたあたしの出した声（？）は、正しく音速で地面を
抉りながら、使い魔へと突き進む。

声は使い魔を切り揉まして消し、なおビルの壁を抉りとった。

「……おおう。」

自分でもビックリ

正にバインドボイス

使い魔が消えるやいなやワルプルギスが衝撃波を放ってきた。

「次、防御方法は？！」

「ネギで「ド却下！！」」

取り合えず壁！！壁になるもの……

「これ、だ!!」

地面に手をつき目的の物呼び寄せる。

ドコォ!!

「ぐっ!!」

呼び出したのは巨大な正方形の時計。

ただの盾では色気がないと言っわけで外見をこうした。

バキィ!!

何とか防御の任務は完遂してくれたけど、直ぐに壊れた。

防御力に難あり、か。

「やってくれたな!!」

あちらに攻められまいと反撃に転じる。

この距離だとバインドボイス（破）は届かない。
だったら・・・

「来たれ!!」

剣を抜いて掲げ、戦輪と御柱を具現させる。

さやかの子の親友の双神じゃないから威力はそこまでないけど・・・

「食らえ！」

——魔符「チャクラムオンバシラ」——

魔女相手なら充分、だ！！

戦輪と御柱がワルプルギスに殺到する。

元々あんなにでかいから狙いは大雑把でも当たってくれる。

着弾

・・・あれえ？

なんか全然攻撃通った感じがしないんだけど。

その戦輪。一応刺さったところの感じがすんごくするんだけど？

尽く弾かれた御柱の方がすがすがしいよ？なんでバインドボイスあんなに威力高かったの？

戦・御「魔力が足りねえんだよ。」

・・・さいですか

て言うかこの空気どうしよう。まじでこのビミョーな空気嫌だ。
役に立・・・あれ？立たねえの？的な視線止めてください。

「・・・今わかってるあなたができることを教えてくれないかしら？」

ほむらが髪を掻き上げてこの空気を壊しにかかった。

さやかサイド

さあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい

この美樹さやか、一世一代の大博打をとくご覧あれ。

掛け金は自分の命
当たりは仲間の命。
外れ・・・

・・・

雰囲気出して言ってみただけ、実際そんなことは有るわけない。

『みき。ちょいこれから魔力供給出来ないと思うから。』

みきに魔力が送れなくなるだけ。

ついでに失敗しても何も起こらない。

『はあ?! ちよっ、それってどういう・・・』

『言葉通りの意味だよ。つーかあんたが持つてる魔力で大丈夫でしょ？』

『結界維持にしか手が回らなくなるんだけど』

む、ちよつと突つ走り過ぎてるな、みき。

『別にそれで充分。ワルプルギス閉じ込めるだけで大手柄な。』

『でも・・・』

『大体生後一時間も経ってない奴にそんなに任せられるか。それにさ、みきは一人じゃないの。討伐は杏子達に任せて、信じるのがあんたの役目。』

『信じる・・・』

『そ。何でもかんでも一人で守護するのがみきの性質だから難しいとは思うけど、少なくともそこにいる三人は守護される必要は全くない。自分のやるべきことを間違えるな。』

『わかった。やってみる。』

『ま、心配しなくても戦闘に関してはずぶの素人なんだから、そこら辺はほむらあたりが決めてくれるでしょ。それにこれからビシバシ鍛えていくから、くれぐれも怪我のないようにね。』

『うへえ・・・』

念話を切り、こちら準備に切りかかる。

・・・はあ

痛いのだなあ

あれ・・・な33話（後書き）

ナガン「なんかミクのアーケードが故障してたんだけど。どゆこと？」

さやか「機嫌損ねたんじゃないの？そんなことより、みきのことだけど、なんで強くないの。」

ナガン「まあいまのところ強くてワルプルギス程度だからだし。つか最初から最強とか認めないから。それにぶっちゃけ三人がメインの戦いだし。なんでもかんでもかつさるかつつの。」

さやか「それはわかった。けど何で服装本家のじゃないの？」

ナガン「自重しろや。それに魔女だし、黒かったから・・・派生服装ならオツケーかなって。」

さやか「PスタイルPBだっけ？」

ナガン「私のお気に入りです。」

みき「・・・」

そろそろ終わりたいよ・・・な34話（前書き）

ナガン「碧と書いてアオと読む。後10日で発売だね。そして後100日でセンター試験だ。皆、申し込みは済ませたか？絶望する準備は？結果に怯えてガタガタ震える準備はOK？自分は全くのNOだ。テストコワイ」

そろそろ終わりたいよ・・・な34話

ねえさやかちゃん。わたしどうしても腑に落ちないことがあるの。

んあ？

転生した、って言ったけど、それだと色々と時期が合わない所があるよね？どう言うこと？

ああ、それはあたしもほむらみたいに世界を越えて転生したから時期が合わないのは当然だよ。

そうなんだ。

ま、あたしの場合は完全な転生だから、赤ん坊からスタートしたけど。羞恥心半端なかったわ。

ははは・・・

まどかサイド

「はっ・・・はっ・・・！」

物静かになった街並みをひたすら走る。

手には携帯

電話帳からマミさん、杏子ちゃん、ほむらちゃんに順に発信していくけど、聞こえるのは無機質な機械音。そして、さやかちゃんにも繋がらない。

「ああもう・・・!」

どうして繋がらないの!?

5回程繰り返したこの行程。

願った分だけ裏切られる。

ほむらちゃんの気持ちに少し共感できた。

早く・・・早く伝えないと・・・!!

「あ、やべ。電池切れてる。まいつか。」

ほむらサイド

時音 みき

美樹さやかの魔女の生まれ変わり。

さやかの能力を使用可能であり、保有する魔力もかなり多い。しかし、産まれて間もないことから実戦経験は皆無。美樹さやかの記憶を共有しているとのことだけど、戦いのいろはを知らない以上

当てにならないだろう。

さらにこれだけ巨大な結界を展開しているから、移動に支障は出ないけど、攻撃に回することも不可能。

以上のことを踏まえる。

「・・・基本方針はこれまでとは変わらないわ。但し杏子、攪乱には幻影を使いなさい。ワルプルギスがあなたに注意を向けても、逃げられる場所をキープ。出来るわね。」

そして時音みき、あなたは私達と一緒に行動よ。基本バマミが狙撃で攻撃、ワルプルギスに気付かれた時点で私が時を止める。そして別の場所に移動してまた狙撃の繰り返しよ。ただ、私はいつ時を止められなくなっても可笑しくないから、その時は代理を頼めるかしら。」

「わかった。」

「大丈夫だと思う。」

「わかったわ。」

三人はそれぞれ頷く。

「あと、みき。結界の中を複雑に出来ないかしら？いくら何でも障害物が無さすぎる。」

「お、おっけー」

みきが床に手をつく。

そうすると、あちこちから地面が盛り上がり、壁を作った。

「・・・きつかった？」

「ぜえ・・・いや、これぐらい・・・きつくも何とも・・・ゲホ」

（（きついんだろうなあ・・・）（））

息が上がって明らかに強がっているのがまる分かりだ。

「さあ、攻撃を再開するわよ。」

「鬼かあんたは!!」

「・・・はっ・・・は・・・きつつ・・・」

所変わってほむホーム

そこには荒く息を吐くさやかの姿があった。

「あと・・・六時間」

時間経過で妖怪化が進行するなら、能力で時を進めてしまえばいい。

もう一息、と再び彼女は時を進める。

「ぐっ・・・あああああ!!!」

時を進める、すなわち妖怪化を無理矢理進行させる荒業。それ故、一般人なら卒倒するような痛みが彼女を襲う。

「がっ・・・はっはっ・・・5時間」

だが、さやかはやる。

何がそこまで駆り立てるか、彼女自身もわからない。

ただ、予感がするだけである。

このままだったらと待つだけではいけない、と。

ほむらサイド

腑に落ちない

幻影を上手く使いワルプルギスを攪乱している杏子はわかる。
おそらく幻影魔法は昔扱えた時期があったのだろう。

だけど

「ティロ・ボレー ティロ・ボレー ティロ・ボレー・・・」

マミの射撃能力がはね上がった。

さつきからこわいぐらい同じ箇所にはか当ててない。

ワルプルギスが縦横無尽に動こうが何のその。

目がアレだ。歓喜に満ちていて、やる気爆発、だけど狩人の目。
ぶっちゃけ気持ち悪い。

スキル：精密射撃をどこでつけたのかしら・・・

それにティロ・ボレーって、意味は合ってるの？

そもそも何がそこまでやる気にさせるの？

ワルプルギス、あなた本気出したんじゃない？

中ボス臭しか出してないわよ、あなた。

すごく謎だわ。

そうこうしている内にワルプルギスがこちらに視線（？）を向ける。

「ごめんなさい。それ炸裂魔法弾なのよ。」

ワルプルギスが爆発し、高度を下げる。

この隙を逃さず、杏子が槍で攻め立てる。

けれど腐っても鯛。

ワルプルギスは衝撃波や使い魔で応戦。

「気付かれたみたいだし、移動しましょう。」

マミに言われた通り、時を止めて移動を開始。

・・・やっぱり、腑に落ちない

マミサイド

うふ、うふふふふふふふ

杏子サイド

ん？今なんか邪念が・・・
気のせいかな？

ブオン

「うわ！つとお」

気を散らしていたら使い魔がすぐそばまで接近していた。

使い魔の攻撃を瞬動で避けて、真上に移動。

「せい！！」

投擲した槍は綺麗に使い魔に吸い込まれた。

今の使い魔も魔法少女の姿・・・

全く、胸くそ悪い

視線を上げると一定間隔で閃く一筋の光がワルプルギスに断続的に突き刺さっている。

すげーな、ダメージ効率上げる為にしっかりと連結部分を狙ってる。近距離銃撃と狙撃は勝手が違うはずだけど・・・そこは才能ってやつか。

さつき弾が炸裂したのは、ほむらあたりの入れ知恵だろう。

まあ、ワルプルギスも負けては無いけどな。

風で銃弾を反らして、集中しないようにしてやがる。

無駄な足掻きだけだな

もうワルプルギスは防戦一方。反撃は難しい状態。

分身を16体に増やし、突撃させる。

使い魔を風ぎ払う間に本体はグリーンフィールドでソウルジェムを浄化し、分身には道を作らせる。

さやかのために考案していた技だ。試し打ちにはちょうど良い。

食らえ

「ハア!!」

突き穿つ死翔の槍<ゲイボルグ>!!!

・・・無いな、うん。忘れよう

投擲した槍は風を物ともせず、深々と突き刺さり、歯車の動きを止める。

爆破させたい。が、やり方がわからない。

マミはどうやってるんだ？今度聞いてみるかな。

そろそろ作業と化してきた使い魔討伐をまた終えた時、

「!!!なんだ？」

膨大な何かがマミのところで集束していた。

そして終幕のベルになる。

三人称サイド

「やつ、頑張ってたじゃん。」

ワルプルギスボロボロじゃんと、空間を裂いて三人の前に姿を表したさやかに、一同は驚く。

「なんで・・・」

妖怪化が終わるまで立つこともままならないはずなのに何故。

「ふふ、何ででしょう?」

と、ほむらはそこで気付いた。

さやかは隠しているが、息が上がり、顔色も悪いことに。

明らかに無理をしている。

しかし、何故?とほむらは不審がる。

妖怪化が完了していない今、ここに来て足も手を引くだけなのはわかってはいるはずだ。

「ああ、心配しなくても、この身体はもう半神半妖。足手まといにはならないよ。」

そんなほむらの考えを見透かしたのか、はたまた一同の顔色を伺ったのか、さやかは安心するよう言う。

「さ、悠長に話してる場合じゃないよね。と言っても、もう終わりだけ。」

最後にちよつとちよつかいかけると、とさやかが蒼穹双刃の鰐を重ね合わせる。

すると、鰐が1つになり、反りが更に深くなって、先端から糸が伸びて繋がった。

その弓はとても蒼かった。

「最後はあんたが決着つけるべきだよね。」

そう言つて、ほむらに弓を手渡す。

「矢がないのだけれど？」

作れと？とさやかに視線を向ける。

「矢は要らない。ただ引いて、放てばいい。」

いや、無理。

矢があつてこそ弦は引けるものですが？

釈然としないが、ほむらは言われた通り、そこにあたかも矢が有るように弓を引く。

キリキリと音を立てて、だけどすんなりと弦は引けた。

その時、ほむらははつきりと見た。

据えられた、勝利を約束する矢（終止符）を。

「さようなら。」

長い付き合いだったわね。

手を、放した。

直後、

ワルプルギスに特大の風穴が開き、

崩れた。

「おわ・・・たの？」

「終わったよ。」

ああ、終わった。

ほむらはただ、喜びを噛み締める。

「最後まで、笑ってたね。」

「知らん。あいつの性質なんですよ。」

「・・・もつとこう、感傷に浸った台詞とかを・・・」

「あいつに何の感傷が有るんのさ。」

さやかは歩き出す。

「どこ行くの？」

「杏子迎えに行ってくる。」

「お」「あ」

地面を跳びながら杏子の元へ向かっている途中に杏子とバタリと出くわした。

「大丈夫？」

「それはあんたもだろ？顔青いぞ。」

えゝなんのことかなゝとさやかは顔を背ける。

「はあ・・・あいつらは？」

杏子は諦めたのか皆の安否を尋ねる。

「あんたのお陰で皆無事。」

そっかと杏子は伸びをした。

「んゝ。今日はもう疲れた。早く帰って休みてえ。」

「その前にパ「さやかちゃゝん」へ？」

は？とした顔で二人が声のする方を見ると、遠くからまどかが駆けてきていた。

ずっと走って来たようで、膝に手について息を整えている。

「おい！！なんでこんな所に来てんだよ。」

杏子がまどかに詰問する。

かなり強く言い聞かせていたのに何故来たのだろうか。

「杏子ちゃん・・・さやかちゃん。」

杏子はまどかの心配性故にここに来たと当たりをつけていた。そして、最終戦が終わった時の解放感に包まれていた。

それ故に、

「死んで」

まどかが危害を加えて来る等とは、予想もしていなかった。

ドスッ

そろそろ終わりたいよ・・・な34話（後書き）

ナガン「裏ボスめ。ついに本性を表したか！」

まどか「ふははははー（棒）そうだ我こそが最後の敵超まどかだー、
つてなんなのこれ！！！」

ナガン「台本だが何か？」

D 灰？知らんなそんなもの。 な35話（前書き）

ナガン「パクリ？いいえ、引用です。」

D 灰？知らないそんなもの。 な35話

まどかは一人、避難所でじつと座っていた。
皆がここに来るのを待っているのだ。

「はあ・・・」

心配ではない、と言えば嘘になる。
でも、あの三人ならやってくれるとも信じている。
でも、行って安否を確認したい。
でも、それだと信用を裏切ってしまう。

今まどかはこんなジレンマに苛まれていた。

そして思考がまた一周しようとした時。

ミイツケタ

悪魔の声を、聞いた。

ホムラチャン。コンナトコロニイタнда

「まどか！―どうしてここに」来る・・・」

ほむらはまどかの肩を揺さぶって、ここに来たことを責めようとした。

しかし、それはまどかの言葉によって遮られる。

「何かが来ちゃう！！わからないけど、とっても、危険な何かがある！」

「いやな空してやがる・・・」

避難所で一人、詢子は呟いた。

杏子サイド

「グプッ」

なにが、起こった？

アタシはワルプルギスを倒して、マミ達と合流しようとしていた。

その道中、迎えに来たさやかとばったり遭遇。

そして、そこにまどかが走ってきた。

で、まどかに来た理由を聞こうとしたんだっけか？

今、アタシの身体は宙に浮いていて、

まどかの腕から複数の黒い触手みたいなものが伸びていて、

さやかの体を、尽く貫いている。

あたしを、庇ったんだろうなあ。

「う、のー!!」

血へどを吐きながらも、さやかがまどかを切り払おうとしたが、その前触手を抜かれ、支えがなくなり、膝を曲げる。

足はもう地面を掴んでいた。

「てんめええええ!!!!」

突進し、16分身の多重攻撃を仕掛ける。

16方面からと、本体は上から。

「はああああー!!」

「だ・・・め」

バキッ！！

槍がまどかの偽物に触れるか触れないかのところで、偽物のまどか拳が突き刺さった。

な・・・に？

驚愕する間もなく、このままだと、地面に叩きつけられるので、吹き飛ばされている方向に視線を向けると、

まどかの偽物が黒い触手みたいなものを拳に纏って待ち構えていた。

「！！」

拳と槍がぶつかりあう。

こいつ、なんて力してやがる・・・！！

反撃がまるで・・・

「カアアアアア！！」

まどか（偽物）がもう一方の拳を振り上げる。

「しまっ・・・」

一方の拳だけで手一杯だから、当然、ソウルジェムを全力で守ことぐらいしか、防ぐ余地はなかった。

直後、左腕の感覚が無くなった。

攻撃をモロに食らい、壁に叩きつけられ、そして偽物のまどかがソウルジェムをなお狙おうとしているのを見るしかできない。

こいつ・・・何もん・・・だ・・・

「き？」

偽物の声がやけに遠く聞こえた。
同時に、少し暖くなる。

誰かに、抱えられている？

霞んだ目で見えるのは、さやかを肩に乗せたみきの姿だった。

みきサイド

「あんた・・・その格好は何の冗談？」

後であたしの結界のセキュリティ強化しようとして心の中で誓いながら、
相手を観察する。

多分魔女、のはず

なんでまどかの姿をとっているのかはわからないけど、強敵なのは間違いない。

「みき・・・？」

「さやか、しっかりして。」

何なのあれ？と聞いてみる。

「一旦、退いて・・・」

いやそうじゃなくて

「ぐくくくつ、ひはははははっ！！」

突然、偽物のまどかが笑い出した。

まるで、逃げることを提案したさやかを嘲笑うかのように。
そして、足に力を込めた。

反射的に刀を抜き放つ。

ガイン！！

軌道を帰られた拳は地面に向かい、一メートル程陥没させた。

迷わず、時を止めた。

同じ魔女だからか、さっきの交錯でこいつの思いが刀を通して伝わったから。

言葉でなんか、表せない。表したくない。

逃げよう

逃げて、知らせないと

さやかを肩に担ぎ、杏子を抱き抱える。（杏子の時は止まったまま。
細かい調整はまだ無理。）

最後に、気休め程度だろうけど偽物のまどかのまわりに幾重ものドームを形成する。

時間稼ぎには、なってよね

そして、空間を裂いて、ほむら達の元へ逃げた。

残した一同の中で唯一止まった時の中で動けるほむらはさやかと杏子の惨状に息を飲む。

「何があつたの？」

「まどかの偽物にやられた。危ない何かつてのは多分それ。」

「今どこに？」

「こっから500メートルの・・・」

そう言つて、

指差した一メートル先に、あいつがいた。

ドコッ！！！

「ぐっ！！」

ギリギリのところまで時計を滑り込ませることに成功した。
時を止めるのに使う魔力そっちのけで召喚したから、当然時は動き出す。

「な！？」 「え？」

ようやく事態に気付けるようになったまどかとマミの呆けた声が聞こえる。

なんて力・・・だ、よ。魔力思いっきり込めてんのに・・・！

「っ・・・ンピン・・・グ・・・」

後ろでほむらがまどか達に指示を出しているのを尻目に、このままだと押し負けると思い、偽物のまどかの頭上に御柱を投影。

「オンバシラ！！」

そのまま落とした。

バキィーン

只の腕の一振り

「は・・・？」

それだけでありったけの魔力を込めた時計は、いとも簡単に壊され、なお余りある拳の威力があたしを襲う。

「う・・・ぐ」

うそ・・・でしょ・・・？

マジで、ヤバイ

マミが銃を召喚して撃つ。

傷一つつけることなく、逆に吹き飛ばされた。

ほむらのM870（ショットガン）の零距离射撃。
吹き飛ばすこともなく、素知らぬ顔で反撃された。

違い、すぎる。

あたし達がどうこうできるレベルを、とつくに越えてる。

どうしたら・・・

刀を構えて斬りかかろうとする。

地面から生えた触手みたいなものに取り囲まれる。

どう、すれ・・・ば・・・

「いやあああああ！！！」

そういや、そもそも皆に知らせて・・・どうにか、なったのかな？

三人称サイド

「結界が・・・」

みきが倒れたことにより、本人の意思とは反して結界が解除される。

ほむらが見た空は、ワルプルギスが現れた空よりもどす黒かった。

「ぐっ・・・」

痛みをこらえてまわりを見渡すと、あちこちで皆倒れていた。
少なくともこの場で動けるのはほむらだけだった。

「そうだ、まどかは!？」

倒れている皆の中にまどかがいないのに気付き、身体を無理矢理動かす。

そして、見つけた。

偽物のまどかに触手で首を掴まれもがいているまどかを。そして、偽物のまどかは今にも止めを刺そうとしていた。

「待ちなさい!!」

ワルサー（拳銃）を構え、声を上げてこちらの存在を気付かせる。

「あれ？ほむらちゃんまだ生きてたんだ。ちょっと待っててね。こいつ送ったらすぐに送ってあげる。」

「っさせない!!」

発砲

しかし、そんなものが偽物に効くはずがない。

その拒絶の言葉に偽物のまどかはため息を吐く。

「なんで皆そう言うのかな？わたしはただ皆を天国に送ろうとしているだけなのに。」

わけがわからないよ。と偽物のまどかはおどけて言う。

「やっぱり・・・」

その言葉で、ほむらには合点が行った。

手から伸びる触手、天国、

そして

この空模様が否が応にもあの時の記憶を刺激する。

「あなた・・・4回目の・・・」

彼女は偽物ではない。

正真正銘、鹿目まどかだった存在。

クリームヒルト・グレートヒエン

最強最悪の魔女が次元を越えてやって来た。

「くす」

D 灰？知らないそんなもの。 な35話（後書き）

ナガン「皆さんに聞きたい。小説を読んでいる時、あなたの脳内での空想はアニメですか？漫画ですか？ちなみに自分は両刀使いです。」

さやか「きもい。」

ナガン「リアフレにも言われたよ。褒め言葉だな。」

正直要らなかったミスリーディングな36話（前書き）

ナガン「エリィたんハアハア（；A、）」

正直要らなかったミスリーディングな36話

クリームヒルト・グレートヒエン

その性質は慈悲。

この星の全ての生命を強制的に吸い上げ 彼女の作った新しい天国（結界）へと導いていく。

この魔女を倒したくば 世界中の不幸を取り除く以外に方法はない。もし 世界中から悲しみがなくなれば 魔女はここが天国であると錯覚するだろう。

（引用「魔女辞典」）

「4回目？そつか、あの時もう4回目も逆行してたんだね。」

あの時のことは良く覚えてる、と”まどか”は感傷に浸りながら話す。

「ほむらちゃんが死んじゃって、ワルプルギスの夜が街を、皆を全て蹂躪した。」

え？とほむらは訝しむ。

なんで、私は死んでいる？
それだと辻褄が合わない。

そんな様子のほむらには気付かず、”まどか”は話を進める。

「さやかちゃんも奮闘したけど、ついにやられちゃうの。わたしの側には物言わぬほむらちゃんとキュウベえしかいなかった。そして、ワルプルギスに対抗出来るのもわたししかいなかった。」

違う

彼女は4回目の時のまどかじゃない。よくよく考えたら、彼女が世界を渡る術がない。

「当然、わたしは契約した。そしたらね、ウッフ、呆気なかったなあ。ワルプルギス一撃で消えちゃうの。でもね、そのワルプルギスが貯めていた穢れがわたしの中に流れて来たの。」

むしろもっと別の・・・

「その時ね、気づいたの。世界がどれだけ悲劇で満たされているのかを。」

私じゃない曉美ほむらが関わったまどかだ。

「だから、わたしが全部救う。わたしが作った天国で、幸せに生きてもらうの。だからほむらちゃん。もういいんだよ。もう苦しまなくても。」

わたしが幸せにしてあげる

”まどか”が魔女となつてから10日後、地球どころか、その世界が消滅した。

そして、彼女は必然的に世界の狭間に放り出されて、知ることになる。

他にもまだまだ救わなければならない世界があることを。

彼女は片っ端から世界を救い（滅ぼし）始めた。

当然、世界はそれをよしとはしなかった。

しかし、抵抗は全て虚しい結果に終わった。

世界は常に後手に回るからだ。彼女を脅威と見なすまで、表立った行動は起こさない。

彼女が本格的に、すなわち地球を覆ってしまうほどの大きさの魔女になって、破壊活動を開始しない限り、直接排除しない。

英霊、真祖、果てはアルティメット・ワンまで動員したが、全て彼女には叶わなかった。

そこが天国でない限り、彼女は消滅しないから。

一方、人、及び生命体も黙ってはいない。

彼らも実力での排除を試みたが、それもまた虚しく終わる。

そこで彼らは、望みを託した。

すなわち、彼女の習性、性質、行動パターン等、あらゆる情報を彼女に取り込まれないようにした。

そして、世界の狭間に散らばったその情報を、誰かが見つけてくれますように。願わくは彼女を消す知識を持つ者に、それが届きますように願った。

ぶの悪い賭けだった。

そして・・・

ガブッ

まどかが、触手に噛みついた。

その目には反抗の意志が確かに宿っている。

確かに幸せだろう。だけどそんな幸せ御免被る、と。

「ぶっ、アハハハハハハハ」

それを見て、こらえきれないように”まどか”は嗤う。

「ハハハハハハはあゝ、死ね!!」

そして、まどかを叩きつけた。

「まどかア!!」

まどかはぐったりとしている。気絶しているのか、または・・・

出かかった最悪の考えを振り払い、駆け出す。

”まどか”はさらに叩きつけようと腕を振り上げる。

「いらっしゃい、天国へ。」

駄目だ。間に合わない。

絶望感と共にほむらは目を瞑った。

ザシュ

その時、触手が切り裂かれ、”まどか”が吹き飛ばされた。

そして、まどかを守るように杏子とマミが立ち塞がる。

「よお、腹の傷やバイゼ？治療の時間ぐらいは稼いでやろうか？」

「あなたこそ、ここは私に任せて左手でも治したら？」

「これでも治した方さ。」

二人は軽口を叩き合いながら、滑稽だと言わんばかりの嘲笑を浮かべた”まどか”に突撃した。

「まどか！」

その隙にほむらはまどかのもとにたどり着くことができた。

胸は微かに上下していた。

それをみて、ほむらは安堵の息を吐く。

但し、時間は止まらない。

ほむらの後ろで衝撃音が走り、壁が叩きつけられる音が二回響いた。

「杏子、マミ！」

思わず安否を確認したのがいけなかった。

はっ、と振り返ると今まさに拳を振り上げる”まどか”が。

なんたる失態。

一度ならず二度までも。

まどかに覆い被さって抱き締める。

せめて、死ぬ時ぐらいは・・・

ガキッ！！！！

再び、阻まれる。

「まどかばっか・・・狙うな！」

みきが触手を防御したのだ。

舌打ちした後、”まどか”はその嫌な表情を崩す。

何故、時計に刺さらない？

「悪いけど、時計の時間は止めてあるから、今までとは訳が違う。」

「この。小癩だね！」

”まどか”はそれならばと、時計ごとみき達を触手で覆いつくそうとする。

ドストドスト！！！！

だかそれも、降ってきた針に縫いとめられる

「な！？」

「今までパクリ技ばっかだったけど、これはオリジナル。ま、射出するものが変わったただけだけだね。」

——「スティングガー・ザ・ハNZ」——

数多の長針、秒針、短針、が”まどか”に降り注いだ。

やったのか、とほむらは一瞬期待した。

いや、こんなもので倒せるなら、かわいいもの。私達でとっくに始末出来ている。

三度目の正直。もう目を離さない。
ほむらはそう誓った。

”まどか”がいた所は正に剣山に成り果てていた。

「・・・あゝ、くそ。」

だが、剣山の一針がピクリと動いた直後、吹き飛んだ。

「弱音吐きたい・・・」

そこには、針が深々と刺さっているが、しっかりと二本足で立っている”まどか”が顕在していた。

「なかなかやるんだね。ちょっとびつくりしちゃった。」

「びつくりさせるつもりはなかったんだけどね。そのまま動かないでくれるとあたしとしてはかなり嬉しい。」

「ふふ、冗談？無理な相談だ、よ！！」

”まどか”は時計に向かって拳を振るう。

時計は鈍い音を立てるが、特に異常は見当たらない。
そのままギチギチと押し合いに突入する。

「・・・ねえ、あんた何でそこまでまどかを狙うの？やっぱり自分だから？」

「そんなのは関係ないよ。ただ、こいつは否定した。何も知らないくせに。」

だから、体に教え込ませるの。」

”まどか”はさらに力を込める。
僅かにみきの足が滑る。

声に出さないようにみきは齒を食い縛る。

「それよりも、あなたこそ、何で・・・」

「あ？」

「・・・もういい」

「何勝手に自己完結してん、だ！」

——「ステインガー・ザ・ハンズ」——

みきは再び針の雨を降らせる。

”まどか”はバックステップでこれを避け、距離を取る。

「あなたも残せば何も問題ない。」

残す？

”まどか”がその場で震脚。
僅かに地面が揺れる。

しかし、みきは地中を進む何かを感じ取った。

「ほむら跳べエー！」

その声を聞いたからかはたまたほむら自身もそれに気づいたからか、
まどかを抱えて跳躍。

コンマ数秒後、ほむらがいた場所から凶刃が突き上がった。

ほっとするのも束の間、みきは足が動かないことに気づく。
見ると、足に絡み付く触手。

しまっ・・・

ザクッ

正直要らなかったミスリーディングな36話（後書き）

英霊：世界の使いっ走り。世界が危険に去らされると出てくる殺戮機械。

真祖：一応吸血鬼。世界の触覚。どっかの姫さんは殺人貴と恋仲。

アルティメットワン：究極の一。惑星（恒星も多分含）の意思から作られた生命体。

個体名称は通常タイプ・（金星の場合タイプ・ヴィーナス）

いずれも型月設定

わからなかったらググって下さい。
後細かいことは気にしたら負け。

さて、最終決戦だ。な37話（前書き）

時音 みき

武器 仕込み刀（外見がネギ）

容姿 初音ミクの緑の所を黒くする。

服装 PスタイルPB（ググったら画像は直ぐ出ます。）

性格 さやか神と似ている。勝ち気？

口調 さやかと極若干違いがある。

好物 ネギ

備考 さやかの魔女の部分が分離した存在。さやかと一体化も出来る。

さやかの能力『時空間を司る程度の能力』も使用可能。但し現時点では上手く扱えていない。

本人はちよつと名前と容姿に複雑な思いがある。

歌は普通に上手い。

性質は守護。防衛戦の時にその真価が発揮される。

結界内の様子

時計がふよふよと浮かんでいる。

あと最深部には神社がある。

後魔女特有の禍々しさはない。

（それ以外はまだ決めてません。）

・ ・ ・ なかなかカオス

それではグッダグタな37話をどうぞ。

さて、最終決戦だ。な37話

「ぐっ・・・」

脇腹に激痛

失策すぎた。くそっ

自身への警戒を蔑ろにしてしまっ、有ろうことか敵を視界から外
してしまっなんて。

シュルシュルと触手が巻き付き、腕が後ろ手で固定され、宙吊りに。

足が・・・踏ん張れない

「ハアアアアア!!」

「温いよ」

「ぐあ!」

杏子が後ろから奇襲をかけるけど呆気なく返り討ちにあう。

「杏子!!」

「さて・・・」

「あぐ・・・」

触手の締め付けがいきなり強くなり、上手く息が出来ない。

「このまま大人しくしてくれる？出来れば傷付けたくないんだけど。」

「・・・は」

お　こ　と　わ　り

声が出なかったので、口の動きでみきは答えた。

グシャツ！！！！

四肢が、潰された。

「うああ　ああああアアああ！！！！」
「そう・・・」

”まどか”が何故か、少し悲しみの色を顔に出していた。

そしてみきを壁に叩きつけ、四肢に触手を貫通させることで磔にする。

「ぎ！？あ、あ・・・！！」
「それで動けないよね？」

ささいなミスからの代償は、余りにも致命的だった。

そんな中、みきは疑問に思うことがあった。

「・・・どうして、大人しく？」

ピタツと動きを止める”まどか”

「考えてみれば、最初のあれはまだわからないけど・・・さっきあたしが目を離れた時には、絶対、少なくとも行動不能にはできなかった・・・でもあなたは脇腹、しかも内臓を極力傷付けないようにした。それに態々縛り上げたもそうだし。

どうして、あたしの時だけ「黙れ」」

ドゴォ！！！！

みきの言葉を遮るように”まどか”はみきを殴り付ける。
内臓がイッたのか、ここで”初めて”みきは吐血した。

「殺さない？臆測だけでものを語らない、で！」

返り血を気にもかけず、一心不乱にみきを殴り続ける。

あー・・・いた・・・潰された時もそうだったけど、体験しないと、痛みつてのは解んないわ・・・

「っえい！はは！！死んじゃえ！」

て言うか、うちのマスターは何やってん、の？そろそろ、本気で・・・死ぬ、る・・・

「ふう・・・これで大きい傷は治ったわ。」

みきがなぶり殺しにされている時、マミはほむら、まどかと合流し、まどかの手当てを行っていた。
ほむらは安堵の息をつくが、その表情は厳しい。

勝てない。

負けるしかない。

”まどか”から万に一つの勝機も見出だせない。

ここまで、来たのに・・・！

なんで、後一步が届かない・・・

諦めたらそこで終わり？窮鼠が龍を噛んでも逆に消し炭にされるだけ。

「・・・ちくしょう・・・」

知らず知らずの内にぽつりと出た。

「そう言えば、美樹さんは・・・？」

マミが辺りを警戒しながら尋ねる。

「解らない。でも、最後に見た時、決して浅くない傷を負っていたわ。」

「・・・諏訪子さんとかなら、何とかなるわよね・・・？」

「例えそうだとしても、助けを求める手段がないわ。どのみち私達が助かる見込みは・・・」

「あら？私達が気付くという可能性もあるわよ。」

「え・・・？」

なんで、”彼女”が？もしかして全部見越していた？

ほむら達がその方へと視線を向けると、スキマに腰かけた八雲紫が、そこにいた。

「早速だけど・・・」

そーれ、と間の抜けた声と共に紫が指をならす。
同時に、浮遊感。

「え？」 「ちよっ・・・」

下を見ると、地面ではなくて、スキマが顔を覗かせていて・・・

「ボツシュート」

そのまま落ちていくしかなかった。

「はいストップ」

声が、聞こえた。

ある意味、ずっと待ち焦がれていた声。

さっきまで朧気だった視界が一気にクリアになる。

「さ・・・やか？」

「遅れてごめん。よく持ちこたえたね。」

四肢が治っていた。傷の面影なんて一切残ってなかった。

「ちょっと、休んでて」

え、と言った時には足元には亀裂が入っていて・・・
さやかはあたしをそこに押し込んだ。

「やっぱり出てきたね。」

「ええ。あれぐらいじゃ怪我とは呼ばないよ。せいぜい傷。」
「それもそうだね。」

「・・・さて、”また”会ったな。この身を貫かれた時まで気付けぬかったのは余が落ち度。だが、謝る必要は無かるう?」

さやかの口調が変わる。

くすり、とまどかが笑う。

「まさか、あんな所にさやかちゃんがいたなんてね。あそこ这个世界にはいないと思っていたのに。」

「くつ、その台詞、まるで余がいると不都合だと言っているぞ。もっとも、汝が手を加えずとも、八雲の手で飛ばされがな。」

「・・・」

「なんだその顔は?まさか気付かれないないとも思っていたか? 急所を尽く外しておいて。気付くなと言う方が滑稽ぞ。」

「何を言って・・・」

「誤魔化すな。見苦しい。すでに調べは着いた。だからこそ、余がここで汝に立ちはだかるのだ。」

汝は我を取り込めないのだからな。

”まどか”は”さやか”に憧れていた。

その人となり、性格、そして生き方に。

やがて憧れは、尊敬に変わり、不可侵のものへとなった。

しかし、魔女となった後、彼女は人間を信じられなくなり、人間は皆不幸だと、”さやか”の代わりに幸せにしなければならぬと、手当たり次第に結界に取り込んだ。

そして、確かめるように一人一人の記憶、感情を確かめていった。

しかし、”さやか”を取り込んで、記憶を垣間見た時、状況は一変した。

”さやか”は、信じていた。

人に絶望しても可笑しくない程人の狡猾さ、妬み、負の感情、闇を見てきたはずなのに。

そして、幸せだと、これ以上は望まないと、思っていた。

なんで!？。それじゃあ、わたしは・・・

自己の願い、アイデンティティーを否定された気がして、気が付いたら”さやか””を結界から放り出していた。

この時、完全に自覚してしまえばそのまま消滅しただろう。
しかし、生存本能がそれを阻止した。

以降、”まどか”は人の記憶等はろくに顧みずに取り込んでいる。
願いを否定しうる存在に怯えと、魔女の性質が相反する故の妥協案だった。

だが、ある一人だけではどうしても取り込めていない。

そして、彼女を止めることも

「どうして、それを・・・」

「人間を舐めるな、ということよ。特に希望を持つ者は、な。」

「っ！どうして！どの世界も苦痛！悲鳴！そして穢れで溢れていた！あの世界だってそうだったのに！

だからわたしは送った！だれも傷付かないように！幸せに暮らして行けるように！」

まどかは叫ぶ。己が正しいと、真理だと。

「それは皆が望んでいたか？」

「幸せになれるんだよ！？当たり前前に決まっ」もうよい」「

さやかは悟る。まどかが意志は独りよがりであると。

「汝に余の考えは一生相容れぬものであろう。」

さやかは静かに刀を構えた。

「汝が余を取り込めぬ所以、臆気ながら見えてきた。

さあ、構えよ。余が正義も、汝が正義もまた真理。ならば、これ以上の問答は不要。後はぶつかるのみ。」

「っ！そうだね・・・あなたは”さやかちゃん”じゃない。それにさやかちゃんがそういうなら、わたしも力で証明する！！」

群馬県三滝原市

午後5時38分

最後の戦いが、始まった。

さて、最終決戦だ。な37話（後書き）

二週間前

ナガン「やべえ話が詰まった。まどか山強くしすぎたよ。どうあがいても負けるとか。もういつそ作者の特権でも（削除）使うしか・・」

と思いつつネットサーフィンをしていた所、あるスレに行き着いた。
そこには、

救済の魔女クリームヒルト（魔女化鹿目まどか）は、美樹さやか
のいる周囲数kmを残して「救済」を行っているとのこと

この眉唾ものの公式（？）設定を論議しているスレだった。

ナガン「これだ！」

この設定を多少ねじ曲げて反映して、さやか陣営に勝機を見出だ
せた。
↑今日

次回 最終話「因果の果てに・・・」

お返しコラボ（前書き）

今回は雨季様の「チートじゃ済まない」とのコラボです。

要のキャラが若干崩壊してる気がするのは仕様です

時系列は適当に

お返しコラボ

みきサイド

「葱剣!!」

魔力で出来た斬撃がさやかを狙う。

今相手はバックステップ中。

普通なら、避けられない。

だけど、当たる直前にさやかの姿がフッと消える。

「それも読んでた!!」

そのままの勢いで、後ろの上から迫るさやかに振りかぶって・・・

「残念でした。」

盛大にからぶった。

「あゝゝ！もう！あれ卑怯！反則！！」

「誉め言葉ありがとう。」

うが——！！

あの時、あたしはタイミングはバツチりだった。
しかし、さやか能力であたしとの間の空間を歪め、からぶらせたのだ。

つまり、チート卑怯

あの要って奴も大概だけど、こっちもこっちだ。

「え？要のこと知ってるの？」

「え、まあ戦った？のかな。」

「・・・もしかしてさっきの葱剣ってさ・・・」

「そいつに教えてもらった。」

葱剣、プププ、とさやかは笑っている。

・・・この際技名もあいつ考案にしておこう。うん。

「そっぴゃあいつなんか言ってた？」

「別になにも言っていないけど。なに、知り合いなの？」

「うん。そうだけど、そっぴゃこっち来てから行ってないなあ。」

懐かしそうに当時の記憶を振り替えるさやか。

「どんな感じで出会ったの？」

「そうだね・・・あれは・・・」

「ぐおお・・・あいつらめ・・・」

とある一軒家。

そこで一人の青年、一条要が腹を抱えてベッドにくるまっていた。

そんな時である。

「ふぎゃ
」

突如彼の正面の空間が歪み、そこからさやかが逆さまに飛び出てきた。

「いったゝ。・・・あ。」

頭を擦りながら立ち上がり、要と目があう。

「・・・どうもこんにちは」

「はあ・・・まあ何もないが、余計なことしないならくつろいでいいぞ。」

要はいつもように対応。

これぐらいはもう日常茶飯時になっていた。

「え？あれ？」

「どうした？」

「いや、なんで驚かないのかと・・・」

「慣れっこだからな。」

さやかは考える

この人は慣れているから驚かなかった。つまりあたしのように次元を越えてやって来る人に慣れていると言うことで・・・

「つかぬことを聞くけど、世界をまたにかけてる友人っているの？」

「まあ、な。おっと、名前を言ってないな。一条要だ。」

「あたしは美樹さやか。よろしくね。で、その友人ってどんな人。」

「人の腹をズタズタにしていく奴らだ。・・・ぐっ、腹が、悪いけどその薬をとってくれ。」

さやかは机に置いてあるビンを手渡す。

要は震える手で蓋を開き。薬を流し込んだ。

「・・・ふう」

「中毒患者にしか見えなかったんだけど。つーか明らかに過剰服用だよな？」

「もう効かなくなってきてるんだよ。はあ、また新しいのを買わな

いといけないのか・・・」

要はがつくりと頂垂れる。

ここまで要を困らせる奴も大概だけど、それで縁を切らないこいつも大概だわ・・・

（多分絶対切れねえよb yナガン）

そこでさやかはその友人がどんな人なのか興味を持った。

「ねえ。あんたのその友人ってどんな人？」

要の目がキランと光った。

「よくぞ聞いてくれた！

これがまた迷惑な奴等で・・・」

やべえなんかスイッチ入った。

どどまることを知らない要の愚痴にさやかは静かにため息を吐いた。

青年告白中・・・

「で、さらにはあいつら俺のカード使って豪遊してやがったんだよ。

信じられるか？信じられんねえよ。俺の子供に贅沢させるのはいいけどめえらが贅沢する為に使うなよな。使っても減らない？減るものは減るんだよゴルア！！極めつけはその全ての動機が『俺の腹アイデンティティの為』だと？ふざけんなああ！！！！

しかもみんなそれが当たり前だと思ってるしよオ！なんだよ、『腹痛くない要はただの要』って。俺に分身はいねええ！！！！！！」

愚痴がヒートアップして、口調が乱れに乱れまくっている要。

しかし酷い。腹のことに関してはここには要の味方はいないって・・・。

「はあ・・・悪い。つまらなかつただろ？」

「いや、とても面白かった。」

要が硬直した。

「・・・ふぐう！腹が・・・」

黙って薬を渡した。

30分も経っていないのに、もう効果が切れたらしい。

「ジーザス・・・さやか、お前もか。」

「ごめん。軽いジョーク。ついお腹だけじゃなくて頭の方も危ないよね。手の震えが尋常じゃないよ。」

「大丈夫だ。問題ない」キリッ

「死亡フラグ乙。」

ここで一旦静寂が訪れる。

「治そうか？」

あたしは提案した。

「いらんどうせすぐ穴が開く。」

「違う違う。そんなんじゃないくて。」

あたしが否定すると要はハテナマークを頭に掲げる。

「どういうことだ？」

「・・・論より証拠って言うことで。」

説明するのは無理と判断して、手を要の腹に当て胃の時間を逆行させる。

「はい。これでオッケー。」

「・・・今のは時間逆行か？」

「うん。時間を戻したから効かなくなった薬も耐性が無くなって効くようになったはずだよ。」

要は腹の調子確かめる。

「これは・・・さっきまでどんよりとした胃の痛みがなくなっている。すごく軽い。」

ありがとう、ありがとうがっちり手を握って頭を下げる要。

顔に一瞬光るものが見えたけど気のせいだよね？泣かれる程のことなの？

改めて要の事情に同情するさやかだった。

一週間後ぐらいにまた様子を見に行こう。

その後軽く晩酌に付き合って、さやかは帰って行った。

翌日

「~~~~久々に良く眠れた~~~~」

こんな爽やかな気分になれたのは何日ぶりだろうなあ。

と要は居間へと向かう。

居間は荒れていた。

酒ビンはそのらじゅうに散らばり、流し台には皿が山積み。

誰がやったなんて決まりきっていた。

「おーす要。おじゃましてるぜ。」

ソファにいる一人が代表として挨拶してくる。

「・・・・・・・・・・ぐふ、腹が・・・」

「で、その後どうなったの？」

「再発してた。なんでも次の日に元凶が遊びにきてたらしくて。」

「・・・なんかものすごく不憫。」

「その点だけに関してはね。あいつリア充だし。モノホンのチートだし。」

殺す気で全力で行って負ける自信しかないのはなあ。今どれくらい強くなってるんだろ・・・

さやかは思考を巡らせる。

爆発すれば・・・もうしてるか。何度も（胃が）

みきはなんとなく元凶の動機を理解する。

「それはそうとして、なんで要に葱剣教えてもらったの？どうせなら内壊の方が良いのに。あいつ剣はからっきしだよ」

「・・・そんなに良いの？」

「完璧に決まれば凡人なら即死するはず。怖くてチーターにしか使つてないけど」

えげつな

「つーかさ。葱剣はないわ・・・。」

「・・・考えてよ。」

「・・・そもそも名前要らない。無属性だし、斬撃飛ばしてるだけだし。呪文唱えるわけでもないし。むしろこれ派生させる基礎の技だもん。」

「（逃げた・・・）」

「もう、もう薬が・・・さやか。早く来てくれえっ!!」

続く？

お返しコラボ（後書き）

ナガン「ははは、改めて自分のネーミングセンスに絶望した。」

さやか「っーか微妙に他のともコラボしてない？」

ナガン「実名だしてないからセーフ。続き書くならその限りじゃないけど。」

さやか「続きって・・・」

因果の果てに・・・な38話（前書き）

ナガン「遂に、終わった。このてんこ盛りの無茶設定。我慢して下さい。」

ネギま？型月？大好物です。

因果の果てに・・・な38話

ワルプルギスによって崩壊した三滝原市の一角。

最早これ自然災害じゃねえだろJKというぐらい徹底的に破壊されていた。

さらにその一部はそろそろ更地と化そうとされているところにさやかと”まどか”はいた。

「はあ!」

まどかが腕を振るう。

ビルの土台が無くなった。(ビルなんてもうねえよby作者)

「ふ!」

さやかが剣を振るう。

クレーターが出来た。

「どこの世紀末よ・・・」

スキマの中でマミがそうこちた。

他の三人も哑然としている。

魔法少女組はヤムチャ視点で戦いを見ているから、ビルが独りでに崩れて、大規模な地殻変動がこの極短期間で何度も発生しているしか見えない。

紫でさえ、

「これは凄いわね。目で追うのがやっとなんて。」
と驚いている。

「これがさやかの本気が・・・」

「いえ、違うわよ。ちよっと・・・ではないけど、裏技使っているだけよ。」

あれだけの力があれば最初から魔法少女になる必要無いわよ、と紫が言う。

「裏技？」

「チート、よ。」

「せい！」

さやかが触手を切り払い、まどかに肉薄する。

「いのー！」

それに対抗して、音速を超える拳を振るう。

さやかはそれを紙一重でかわす。

まどかは逆袈裟斬りの剣を空いている手で防御する。
が、いつまで経ってもやってこない。

トンツと手のひらが胴体に接触する感覚。

っ！？フェイク！

さやかの足元が爆ぜると同時に、まどかの華奢な体が吹き飛ばされる。

「っ・・・」

しかし、まどかも負けてはいない。離れ際にさやかの腹に一撃いれていた。

おかしい。

どうして、ただのの一個体だわたとタメを張れる？

それに、この重しみみたいな重圧は・・・

その時まどかはさやかが膨大な”力”を大地から受け取っているのを見る。

「まさか・・・」

「流石に気付いたか。」

契約、してしまったのか？

「どうして・・・」

「どうしてなんて、決まっているだろう？ 汝の正義を打ち破るには、これぐらいしないと不可能であろう。」

後勘違いしてるようだが、まだ正式には契約してはいない。少し境界をむさぼってもらっただけよ。さしづめ、仮契約って言うところか。」

「・・・どうやら、本気でいかないといけないみたいだね。」

「別に手加減したままでいいぞ？ むしろ大歓迎よ。」

まどかの魔力が爆発的に増える。

さやかは冷や汗をかきながらも、

さあここからだと気合いを入れ直す。

直後、

——リライト——

花びらが舞った

「「「！」「」」」

「デイスインティグレイト（原子崩壊魔法）！？それも一行程で！」
シングルアクション

「ふん。決まったと思ったのになあ。」

「っ、貴様・・・」

あり得ないだろ。

後一瞬時を戻すのが遅かったら死んだ。

さやかは荒れた息を落ち着けながら、混乱する思考も落ち着ける。

「リライト」

”まどか”がさやかの方を振り返って、再び呪文を唱える。

言うより先にさやかは動いていたので、それは後ろの地面を抉るのみに終わる。

とにかく”まどか”に位置を知られたら不味い。

せめてもの救いは対象ロックじゃないことか・・・

「そこだね。」

「っ！」

タンツと地面を蹴る。

コンマ数秒後、閃光が迸る。

まどかの攻撃は終わらない。
手をさやかの方へと向ける。

——ディザスター——

極大の閃光がさやかを呑み込まんと迫る。
さやかは上に飛ぶことにより回避。

トン

背中に手があてられた。

「なーんてね」

まどかの拳が、今度こそさやかに直撃した。

「がはっ！！！」

地面を抉りながら転がり、50メートル程でようやく止まったさやかはピクリとも動かない。

「これで終わりだね。」

「マズイ!!」

「くっ!!」

「だめえ!!」

紫は行動を起こすが、到底間に合わない。

——リライト——

花びらが再び舞った。

「あれ？」

消えたのは、時計。

みきが、さやかを守るように前に立っていた。

彼女の危機をいち早く察知して、戦場に舞い戻ったのだ。

結界を展開し、油断なく構えるみき。

「その魔法、障害物を置けば簡単にかわせるね。」

「なに？^{しんがら}殿でもする気？」

「まさか、そんなことする必要なんかまるでないよ。」

してやったりといった表情で、みきは笑う。

「減らず口を！？」

それが癢にさわったまどかは見た。

さやか^の傷が治っている・・・？

彼女のかか^とがさやか^の手を踏みつけていた。

「っりライト！！」

放った魔法は、時計に防がれる。

「交代」

「礼を言っぞ」

みきの手と伸ばされた手が重なり、みきは同化した。彼女はさやかだったもの。故に、同化も可能。

まどかから見たら、みきがさやかに早変わりしたように見えただろ

う。

腹からせりあがる血を逆らわずに吐き出すさやか。

「やってくれたな。効いたぞ、先程の攻撃は。」

「とんだじゃまがあったもんだね。」

「まあ、そう言っな。みきも余なのだ。口出しする権利はあるだろうて。」

「ふん、いいよ。どうせなにも変わらない。何度でも消してあげる。」

「・・・余が言つのもなんだが、もうそれはない。」

なにを、とまどかが言おうとした時、ズシンと重圧とも呼べる圧力がかかった。

体が・・・重い

「・・・っ」

「知っているか？魔女の結界は言わば固有結界。が、実際侵している空間は微々たるもの。故にある程度の矛盾は受け入れられ・・・」

——リライト！——

その時、まどかは何が起こったかわからなかった。

”視認して”からでは避けられない筈なのに、

先読みされた気配なんて無かったのに

さやかは視認してから、魔法を完璧に見切って、かわした。

「つと。まあそう急くな。つまり、この空間は余の世界。腹の中と
言うことよ。」

——斬魔剣・二の太刀——

まどかの反応が一瞬遅れた。

「っこんなもの！」

回避はできないと、まどかは障壁を展開する。

しかし、その斬撃は障壁を素通りし、まどかを切り裂いた。

「な！んで！？」

ある作品内では魔を抜く技としての奥義。斬るものを選択できる剣
技に障壁は無意味。

——二太刀「八花刀廊」——

いつの間にか後ろに回ったさやかが八つの斬撃を飛ばす。

「くっ！」

「この世界で、空間、時間は余の手中。」

なんだそれは、とまどかは悪態をつく。

さつきからの体の重さもそれか！

「しかも時間停止とは違って、一旦破られれば効果は終わり、と言うわけでもない。」

即時的ではなく、恒久的。この空間を破壊するか、さやかの魔力が尽きるまで、抜け出す術はない。

「づうあー!!」

斬撃がまどかの腕を掠める。

「っのゝを!!」

反撃に砲撃を行う。

トンツと背中中に手が置かれる。

「さっきの返礼ぞ。」

——神砲「デイベイニングバスター」——

極大の砲撃がまどかを呑み込んだ。

「やった！」

「いえ、まだよ。」

瓦礫の中からまどかが這い出る。

「やってくれたね。」

「ふん。さっきの焼き増しか？」

「ソナナワケナイヨ。」

——アゝアゝアゝアゝ——

まどかの背中から大量の触手が突き破り、まどかを覆いつくし、肥大化していく。

「あ、あ・・・」

「こんなことって・・・」「これが・・・」

生存願望すら奪い去る、その姿。
漆黒の全てを呑み込む太陽。
地球の約半分はあろうかという、その大きさ。

正しく、最凶の魔女。

「アハハハハ！！モウコレデダレモジヤマデキナイ！！コレデオワリダヨサヤカチャン！！」
「そうだな・・・確かに終わりだ。」

その姿を目にしてもなお、さやかは自然体。

「”これ”を全力で放てる機会など、もうこないであろう。」

まるでエンジンが高速回転しているかのような音を出して、蒼穹双

刃が一方は輝き、一方は見えなくなっている。

さやかがこれを撃つ為には三つの条件があった。

一つは場所。

これは魔女の結界でクリア。

一つは力。

これも星からのバックアップでクリア。

最後に、時間。

こればかりは、まどかが自ら隙をつくらなければ無理であった。

しかし、まどかはさやかに時間を与えすぎたのだ。

そして彼女はまどかが真の姿になる時に、多大な隙が出来ると読んでいた。

「知っているか？時間と空間とは元は一つ。それが137億年前分離し、宇宙を形作った。そして宇宙は今も広がり続けている。」

あれは駄目だ。撃たせてはいけない。

まどかの腕が伸びる。

その腕も山のように巨大で、崩壊の力がさやかに迫るが彼女は避けない。

「汝が世界を滅ぼす力でもって、受けてみよ。これが世界を創った奇蹟だ！！！」

——始符「ビッグバン」——

世界が、はじまった。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

パキイン

威力に耐えきれず、魔女の結界が破れる。

最凶の魔女は消えていた。

しかし、あれだけの威力にリスクが無いわけがない。

現に、さやかのは体は至るところから血が出て、マントも消し飛び、左腕は肩から先が無くなっていた。

そして

パキッ

軽い音をたてて蒼穹双刃は碎け散った。

今までありがとうと感謝の念を込めた後、爆心地に歩き出す。

中心には、まどかが横たわっていた。

その存在は吹けば消えそうな程弱々しい。

「あはは、負けちゃった。」

「そうじゃな。汝は這いつくばり、余はたっている。」

「何あれ？わたしを消し飛ばすなんて、どんなチート？」

「ふっ、上には上がいる。それだけよ」

例えばあいつとかこいつとかあいつとか。

「ねえ・・・どうして、”さやかちゃん”は人に絶望しなかったのかな？」

「さてな・・・。だが、これだけは言える。世の中には絶望しか無いわけがない。同じぐらい、希望に満ち溢れている。」

—— ねえさやかちゃん

—— うん？

—— さやかちゃんは どうして人を助けるの？

—— また藪から棒に。どうしてって言われても・・・っと、はい。

—— ありがとうおねえちゃん！！

—— もう無くすなよ。・・・ああいった笑顔が見れるから、かな。
—— ？

—— だからさあ、・・・そういうことなの！！

ああ、そういうことか。

「ははは」

答えはわかった。

「仮初め、だったのかな。」

さらさらとまどかの体が崩壊していく。

まどかを繋ぎ止めていたものが、消えたのだ。

「仮初めではない。汝によって幸福になれた者も事実いるだろう。だが、全ての民が汝を必要としていたわけではない。」

「・・・なに、それ。」

「余は否定がえらく不得意だな。今回においても、ただ汝の思想を打ち破っただけ、としか思えん。」

まどかはポカンとする。

「変なの・・・。」

「次があれば、これを教訓にせよ。さすれば汝は・・・」

「こんなわたしに、次があればね。」

こうして、最凶の魔女クリームヒルトグレートヒェンは終わりを迎えた。

因果の果てに・・・な38話（後書き）

さやか「あたしTUEEEEキター、（・・）ノ！！」

まどか「駄目だと思う。斬魔剣とかリライトとかパクティオーとか。ていうか世界との仮契約とか何？」

ナガン「紫に聞いて。俺は知らん。」

まどか「てめ・・・それはだめだよ！あんまりだよ！！」

さやか「（なにか聞いてはいけないようなものを聞いた気がする・・・）」「

エピソード（前書き）

エピソードオオオグ!!!

エピソード

あなた達と人間の関係は人間と家畜の関係と同じとは良くいったもののよね。一見実にいいえて妙。

でも一点、決定的に異なるところがあるわよ。決定的で普通なら有り得ない違い。

ふふ、分からないと言った表情ね。無理もないわ。あなた達には到底不可能なものだもの。

そう、感情を理解出来ないあなた達にはね・・・。

それは家畜のどの部分が食べられるかわからないのと同じことよ。

良いわよね。理論的に考えるに際して、感情を殺す必要すらないのは。こっちは損にしか成らないこともやってしまう時もある。

でも、だからこそ面白いのよ。

ある分野において、理論の対義語は感情よ。故に、感情は理論では解明出来ない。感情を理解出来るのは感情を持つものだけよ。

くすっ

失礼。希望と絶望の相転移からしかエネルギーを抽出出来ないあなた達から有効利用なんて言葉が出てくるとは思わなくていい。

あなた達がやっていることは寧ろ無駄遣い。新品のまま捨てるのと大差ないわ。

大量消費の時代は終わったわ。これからはエコの時代。

エントロピーなんてちよつと考えれば直ぐに思いつく。感情を理解している私達の方が遥かに有効利用できる。

あなた達はもう用済み。

よくも好き勝手やってくれたわね異星物。疾く消えなさい！！

ワルブルギス、そして”わたし”が倒されて一ヶ月。

その間、表向きではスーパーセルの被害となった地区の被害の規模等が調査され、復興が始まり、多数の義援金や援助が届きました。奇跡的に死者は出なかったそうです。

そう言えばどこかの大学の教授が、スーパーセルだけではここまでの被害は出ないと言っていました。でも、絶対真相には行き着けない筈です。

真相は私達しか知らない。
そのことにちよつと笑みがこぼれます。

だってなんかかっこいいでしょ。

「さてと」

一ヶ月ぶりに制服に腕を通します。

学校が再開します。

アパートの鍵をかけて学校に向かう。

砂時計の砂は流れ落ち切り、時間停止は使えなくなった。

でも、もう逆行する必要はない。

今思えば、彼女も粹な真似をしてくれたものだわ。

あの日から、美樹さやかは姿を見せていない。

おそらく八雲紫辺りが幻想郷とやらの連れていったのだろう。

それはともかくとして・・・

ちらりと後ろに視線をやる。

『いい天気ねほむら。まあそこに比べたら全然駄目だけど。』

きゅうべえ・・・なのかしら、これ。

あれから10日後、QBが突如見当たらなくなった。

何の前触れもなく、その気になればいくらでも見つけられるはずなのに、その日から一週間全く気配もなかった。

で、その後に現れたのがこれ。

『僕と契約して使い魔にさせてよ!!』
と、耳でお札を渡された。
何でもグリーンフシードの代わりらしい。

・・・をい

そしてこいつ、置いてきた感情を連れ戻してきたわ。

変化の原因を問うてみると、

『最近魔法少女がたくさん死んでいてね、君をサポートして死ぬのを避けさせる事になったんだ。』

というのは表向きの理由で、

『私の正式名称はQ.B。インキュベーターは滅び、その事後処理を任されているわ。』

本当の理由が、これ。

インキュベーターは滅んだと聞いたときは、口調の変わりようもあって思わずはあ？って聞き返してしまったわ。
そして同時に理解した。

八雲紫達が言っていた計画とはこの事だったのだと。

実質支配者が生物から妖怪に代わっただけだけど、少なくとも感情がある方が親しみやすい。

それに、ソウルジェムから魂を元に戻す研究も行っているようだ。

・・・タチが悪くなったただけかもしれないけどね。

そんな訳で、魔女戦において実はかなり不味い状況に私は置かれている。

時間停止は使えないし、重火器もほぼ使いきっている。

実質撤退か援軍が来るまで逃げ続けるかのどちらかしかとれる手段がない。

そこ、変わらないって言わないで。

さて、さしあたっては

まどかとの待ち合わせに遅れないようにしないと。

そう言えばどこかの島の基地から拝借した戦闘機どうしようかしら・
・

「よっ、ほっ」

↑ ←
↓ →

軽快なステップでそれらを踏んでいく。

朝だから野次馬はいない。それどころかゲーセンにいるのはあかし一人だ。

「よっど。」

最後の譜面を押し終わる。

評価は勿論 perfect

だけど、上には上がいて、全国ランキング1位とはまだまだ差があった。

廃人乙ってやつだな。

満足して、ゲーセンを後にする。

この後はまどかに会いに行ったり、マミン家行ったり、魔女を探したりしてる。

今じゃ魔女も使い魔も関係なく滅ぼしている。
魔女だけを狩る意味が無くなったからな。

最近ママと組んで魔女狩りをしている。
実は2年前にも一度組んでいた頃があった。

昔のことだけだな。

アレだ。なんつか、こつちから一方的に解散したからかその反動でテンション高くなるのは仕方ないし、我慢しないといけないことなんだと思う。

でもな。厨二病は感染させるものじゃないとアタシは思うんだよ。
うん。

マミ先輩はあそこで自殺したのか？逃避なのか？アタシのせいなのか？

あのおしとやかで何でも出来るマミ先輩はどこ行った？

あ、変わってねえか。

所詮はアタシも偽りのビジョ・・・盲目的に憧れていただけか。

一回OHANASHIしよう。

その時、擦れ違ったしがない一般人の首筋に、不思議な紋様を見つけた。

どれだけアタシが嘆こうが、魔女は今日も平常運転か。
踵を返し、後をつける。

応援は・・・いらねえ

もう一回言っぞ

我慢しろと？償えと？

出切るわけねえだろ！！

「おい、仁美ちゃん。」

「あ、まどかさん。おはようございます。」

いつもの待ち合わせ場所にいた仁美がいつもと変わらず清楚に挨拶を交わす。

二人は学校に向かって歩き出す。
しかし、仁美の足取りは重い。

「あの、さやかさんとはまだ連絡は繋がらないのですか？」

本来ならここにはもう一人、話の花を咲かせる人物がいないのだ。

「うん」

「そう・・・ですか。」

「でも、帰ってくるよ。」

仁美は懸念していた。

あの時、恭介さんに告白すると告げた時、さやかさんが辛そうだった

たと気にしていたからだ。

勿論そんなことは万に一つも無いのだが、人の記憶は曖昧で、さらには自分で修飾を勝手にしてしまう。

真実の一欠片でも知っていれば間違いを修正できたかもしれないが、生憎仁美は何も知らない。

結果、正面切つて了承を得たとは言え、失踪の原因の一端は自分にあるのではないかと自分を責めていた。そしてさやかはもう・・・でも、まどかはそれを否定する。

「さやかちゃんは必ず帰ってくる。確かに家出ぐらいは衝動的にやつちやうかもしれない。でも有り得ないもん。さやかちゃんがどこかでのたれ死ぬなんて。」

仁美からすれば、まどかが何の根拠もなしにたださやかそのものを視て判断している様に見えた。

しかし、まどかは知っている。

さやかは生きていて、そして帰ってくることを。

「案外、先回りして待つてるなんてことも・・・」

まどかが突然言葉を発するのを止め、前方を凝視する。

つられて仁美もまどかの視線を追う。

一人の女性がいた。

同じ三滝原の制服を着て、木にもたれ掛かっている。

鞆を前に持ち、髪は肩までのセミロング。
そしてその色は、透き通る水色。

その女性がこちらに気づき、手を振ってくる。

まどかは駆け出した。

まどかマガリ編

完

蛇足

満面の笑みでさやかに駆け寄るまどか。
それを笑顔で見ているさやかだったが、ある違和感に気付く。

こう、何かやらかしてしまった時に見せる笑顔。

「ティロ・ファイナーレ（崩拳）！！」

「ほうう！！」

走ってつけた運動エネルギーと絶妙な体重移動、見事な腰のひねりで繰り出されたティロ・ファイナーレは美鈴顔負けの威力を発揮する。

俗に言う、目が笑ってない。

そのままアイアンクロー。右手に纏う何かは幻覚だと思いたい。

「ねえ。今までどこに行ってたの？いくら生きてるってわかってても心配はするんだよ？」

「いだだだだ！ギブギブ」

「何？サプライズでも仕掛けたかったの？だったらまずは生存報告はするべきだよね？ね？」

「それじゃサプライズの意味が無くなりませんねはい。」

仁美はこの展開に着いていけず、呆然としている。

「あら、まどかさんこんにちさようなら。」

角を曲がって挨拶したマミは華麗にUターン。
一分の隙も赦さなかった。

「あの、そろそろ学校が・・・」

仁美が恐る恐る発言する。

今のまどかの状態を見て逃げ出さない仁美の胆力も並々ならない。

「あ、そうだったね。じゃ行こうか。」

「いやだからまずはその手をぐえっ」

まどかはさやかの服の襟を掴んで引き摺る。

それを止めない仁美も一応腹に据えかねていたらしい。

結局、さやは死に体で登校する羽目になった。

おしまい。

エピソード（後書き）

さやか「やっとまどかマギカ編完結したね。実に半年間の努力が実ったところかな。」

ナガン「ま、続くけどな。幻想郷編をやった後は・・・今話題の fate / zero にぶちこんでみようかな。」

さやか「ちなみに幻想郷編と言っても、空白の一ヶ月を書くだけだから、まどか達が絡むことは無いと思う。」

ナガン「それじゃ、幻想郷（魔改造）編でお会いしましょう。」

さやか「ちよっ」

60000ユーロ記念・銀魂式サニーデイルーフ（前書き）

まず言います。

ほんとすいません

60000ユーク記念：銀魂式サニーデイルイフ

「奴が、遂に動くわ。」

ほむらが重苦しい雰囲気の中告げる。

ここはマミのマンション。家主のマミ、ほむら、さやか、杏子が卓を囲っていた。

そこにほのぼのとした表情は見当たらない。

「統計から、奴が現れるのはここ、三滝原ランド。」

ほむらが机に広げた地図のマークした所を指さす。

「確証は？」

マミが尋ねる。

「あるわ。最初は奴も薄々感づいてナリを潜めていたようだけど、でも、長期戦こそ私の本領。堪えきれずに動き出したわ。」

ほむらは机を叩く。

「決戦よ。もう後手には回らない。完膚なきまでに打ち倒す。」

「そうか。なら、あたし達も手を貸すよ。」

「頼りにしてるわ。」

そう笑みを浮かべて、ほむらはマミの部屋を後にした。

「…一つ確認したいんだけど。」

「なんだ。」

マミがほむらが去った方を見ながら杏子に尋ねる。

「奴って誰？」

「知らねーのかよ！！！」

●
●
●

三滝原ランド

その入場口にまどかが一人佇んでいた。

母親が選んだのか、まどかの可愛らしさを十全に発揮させる出で立ち。

そこに、一人の男性がやって来る。

一応正装はしてきているが、今一パツとしない。

「よおまどか、待ったか？」

「ううん。わたしも今来たところ。」

「そりゃあ良かった。」

そんなベタな会話をしている二人少し離れた茂みの中。

「良かった？何を言っているのかしら。まどかは十分もてめえを待ったのよ。何故それに気付かないのかしら？本当に馬鹿ね。彼氏失格よ。さて、てめえのせいでまどかは貴重な十分を無駄にしたのよ？償いはあなたの残りの時間で……またんかいいい……！」

さも当然のように照準を男の頭に合わせて引き金を引こうとするサングラスをかけたほむらに杏子が全力でツツこむ。

「え？何？奴ってアイツのことか？魔女とかじゃねえのか？！つかまずそれしまえ！」

「当たり前でしょう。佐倉杏子、あなたは一体何を聞いていたのかしら？」

やれやれと言った風にほむらは肩を竦める。

殴りてえ、すっげえ殴りてえ

「何も聞いてねえだろ……！てめえがいきなりここに呼び出しただけじゃねえか……！」

「じゃあ言うわ。あの男を始末して。後てめえではないわ。殺し屋ほむらサーティーンよ。」

「知るか！暗殺者気取ってねえで止める！」

「五月蠅いわね。認めないわよあんなジミ……。まどかにはもっといい伴侶がいるわ。私とか私とか私とか。」

「駄目だ手に負えねえ。おいマミ、こいつ止めてくれ。」

言葉では動かないと悟った杏子はマミに助けを求める。

「マミじゃないわ。殺し屋トモエサーティーンよ。」
が、見事に裏切られる。

ほむらと同じく、サングラスをかけて銃のスコップを覗いている。

「・・・何してんだ」

「私はただリア充を狩る憐れな暗殺者よ。」

「無理はしない方がいいわよ厨二病。」

「あなたもねガンデレ。」

軽口を言い合い、二人はまどかと男の後を追う。

「くっ、仕方ねえ。さやかあたし達で「い・や」」

「あたしの名前はさやかサーティーン。面白そうだから付いていきまーす。」

そしてさやかもサングラスと銃を装着し駆け出す。

四面楚歌な状況に杏子はただオイイ！！とツツこむしかなかった。

・・・

まどかと男は楽しそうにメリーゴーランドの馬に乗っている。

そしてその二列後ろでは馬に乗って、銃を構えたサングラス三人衆。

「あの男、見かけに依らず策士ね。これを選ぶなんて。」

「くそつ、狙いが定まらない上に遮蔽物が。ちよつと酔ってきた。」

「そもそも距離が縮まらないわ。本当に進んでいるのかしらこれ？」

「これメリーゴーランドだぞ！台座が回ってるんだよ！当たり前だろうが！」

その後ろには馬車にふんぞりかえってツッコミ役に勤しむことにした杏子がいた。

「あれ？杏子帰ったんじゃないの？」

「うるせえよてめえらが凶行に走らないか見張ってたんだよ！」

「隠さなくても良いわ。あなたも入りたいんでしょ？」

「黙れヤンデレ！」

結局メリーゴーランドでは最悪の結果には至らなかったが、

コーヒーカップ、その他アトラクションでも、隙あらば撃つと言うスタンスを保つ三人に杏子は呆れていた。

「てめえらさあ、虚しくないの？こんなことしてもまどかが悲しむだけだぜ。」

「そんなことは・・・」

「第一、お前はまどかに怨まれたいのか？違うだろ。それに殺さなくても別れるように仕向ければ・・・」

「『それだ!!』」

杏子、ここで痛恨のミス。

「くっ…あ…」

杏子の中で様々な天秤が揺れる。
そして…

「ああもう!!あたしに考えがある。」

男を切り捨てた。

●●●

一方こちらはまどカップル

「ねえねえ、次はあれに乗らない?」

とまどかが指さす先はジェットコースター

「いやあれはヤベーって。もらすって。」

「大丈夫。きっと大丈夫だから。ね」

「でもな」

と男が渋っていると。

「（さつさとのれやジミー）」

「!？」

「騒ぐともう一つ穴が増えるよ。」

背中に何か尖ったものが当てられている。

そう、例えばナイフみたいな・・・

「?どうかしたの？」

「いや、乗ろうか、うん。」

「ホント!やった〜!」

花が咲くような笑顔と対照的に男の顔は青くひきつった笑み。

「ねえ。あれで大丈夫なの？」

「さやかはああ見えてSな部分もある。あいつには適任さ。」

杏子、ほむら、マミはジェットコースターへと向かうまどカップル
+ αの後をつけた。

ジェットコースターの席に座った男の顔色は依然として青い。

いきなり命を狙われている身となつては当然だろう。

しかしさやか、そしてそれに気付かないまどかもある意味すごく鈍感だ。

しかし、さやかへの攻めはまだまだ終わらない。

「・・・しろ」

「え？」

首にナイフを突きつけられた状態で後ろに座ったさやかは囁く。

「う●こしろ。次ここに来るまでにしなかったら殺す。」

「ええええええ！！！」

これには男も声を上げざるを得ない。

「ちょっとどうしたの？ やっぱりやめる？ すいませーんやっぱうるせええ！！ 行けるに決まってるだろ！！」

まどかが気を使って係員を予防とするが、全力で阻止。

そしてそのままFail down

「キャアアアア！！」

まどかは絶叫を上げて楽しむ。

一方、まどかの数列後ろに座ったほむら達。

「どうなってる！？」

と平衡感覚が失われている中で杏子は何とか目を開ける。

さやかが飛んできた。

「えゝえゝえゝえゝ！！」

そのままほむらに直撃。ほむらは沈黙した。
さやかは何とかほむらの席にしがみつく。

「おい、てめえどういうことだ！？」

「ベルト締め忘れた！ベルト締め忘れた！！」

あろうことかベルトを締め忘れたさやかの憐れな結果である。

「うわばばば」

「テンパリ過ぎだろ！！なんだいつもの余裕はどこ行っただよ
！？」

「きよ、杏子助けて——！！！」

半ば無我夢中で掴んだそれは、杏子の髪。

「ぎえ！？ちよっ…アアゝああゝあゝあゝ！！！」

プシュー

「うーん。楽しかったね…あれ？斉藤くん、座高高くなってない

「？」

「…うわーやっちゃったよ俺。絶対ヒクわ〜お前。」

漏らしちゃった。」

まどかがドン引きしている後ろで、ほむらと杏子がさやかに肩を貸してジェットコースターから降りていた。

悪いな。あんたには罪は無いが、許してくれ。
杏子は静かに胸で十字を切った。

「よかった〜実はあたしも。」

水泡に帰した。

ええええええ

最早誰の感情でもいい。

「おいどいうことだア！何でまどかまでうん●漏らしてんのオ！
！」

「知るかまどかの腸に聞けエ！！！」

まどカップルは”何故か”更に絆を深めあっている。

「まどかの・・・がついたパンツ。どこかのトイレで捨てないかしら・・・」

「ほむらア！帰ってこいイ！」

「て、まどか達どっか行くよ！」

「え、トイレあっちだぞ。まさかそのまま行く気かよ！」

「とにかく追うわよ。マミ！何を座っていい？」

あれ？座高...

「佐倉さん」

マミは静かに涙を落とした。

ええええええ

・・・

「なんでよ。何でこう早く裏目に出るのよ・・・」

売店のテーブルに突っ伏すほむら

「っーかさ、これもう認めるしかねえよ。」

「いやよ！なんであんな冴えない男とどこをとっても可愛らしさになるまどかが釣り合うのよ！」

「今現在●んこつけたままだけどね。っーか何でトイレ行かないの？馬鹿なの？それとマミは？」

「トイレだ。」

誰もが沈黙した。

「ねえ、あたしママさんにどう接すれば良いですか？ついでにまどかにも。」

「…」

「…どうやら、その話は後でしないといけないみたいよ」

ほむらの視線の先には、まどカップルが観覧車に向かっていった。

「不味いあいつらキスする気だ！」

「観覧車なんてベタだけど、だからこそ意識してしまう。やはり策士ね。」

「二人とも何やっているの。早く追っわよ！」

いつの間にかママが加わり、三人はダッシュで先回り。

そんな様子を杏子は冷めた目で見つめ、深くため息をついた。

「…くっ」

何やってんだろっとな…

男なんて…

男、なんて…

●●●

「えっと、斉藤くん。あのね…」

「う、うん何？」

観覧車の中では結構いいムードになっているこの二人。
だが何度でも言おう。こいつら一度もトイレ行ってない。

「暁美さん早く寄せて！もう結構いいムードになっているわ！」
「了解よ。」

ほむら達はどこからかちょ…盗んできたヘリでまどかが乗るボックスに近付く。

「え…？」

「な、なんだあ？」

まどか達も流石に気付き、呆然とする。

「我等殺し屋サーティーンズ。憐れなリア充に正義の鉄槌を！！」
とサーティーンズはロケランを構える。

「うわ！やめろオ！」

「ほむらちゃん、マミさん、さやかちゃんやめてえ！」

まどカップルは説得を試みるが、三人は聞く耳を持たない。

「ど、どうすれば」

「あ、あれを！！」

とその時まどかはある方向を指差す。

それにつられて四人はそちらに目を向ける。

一つのボックスの上に誰かが乗っていた。

赤髪に赤いコート、赤いサングラスをかけてはいたが、そのポツキ―をくわえている人物は正しく…

「「「「杏子（佐倉さん）（ちゃん）！？」」「」」」」

「杏子オ？誰だそいつ。」

彼女はポツキ―を口に放り込む。

「アタシの名前はサクラサ―ティーン。」

彼女はロケランを構えて、

「人の恋路を邪魔するバカは、消え去れ。」

誰よりも早く発射した。

呆気にとられていたほむら達に避ける術は無く、

ミサイルはヘリのローターに直撃し、爆発。

三人の悲鳴と共にヘリは下の池に墜落した。

「それじゃ、達者だな。」

その言葉を残し、きょ…サクラサーティーンは去ろうとする。

ボックスの上なのにどうやって？とかは言っではいけない。ご愛敬だ。

「待つて！！こんな男より杏子ちゃんの方がいい！付き合って！」

杏子は華麗に踏み外した。

おと、女って…

終われ

60000ユニーク記念・銀魂式サニーデイルライフ（後書き）

はっちゃけたW

次は正月かな・・・

i f } T・E }

前半（前書き）

ナガン「最初の方で言っていた筈だ。エピソードだけは書いたと。これがそうだ。期待？ ただけ損だぞ。」

さやか「ぶっちゃけ東方、まどマギ、型月の多重クロスです。」

どうして…そんな辛い選択するのかなあんたは。バカだよ、ホントバカ…。

…ごめんね

…許さない。許してたまるか。

…きや!?

それ、預ける。後で返しに来させるから…

…さやかちゃん

それ、絶対いつか返してもらうからね!!絶対!!それで絶対、そこから引きずり出してやる!!

…ありがとう…。

お礼なんて…聞きたくない…

…ごめんね。私、もう行かないと…

~~~~~!!…いつてらっしやい…

…~~~~~いつてきます

桜が散りはじめたころ、一人の女性がある神社の居間でそれをボ―  
ット茶を飲みながら眺めていた。

髪は青みがかった髪で、皆がニコニコできるところでネギを振って  
歌っていそうな歌姫の服、の派生版（PスタイルFB）を来ている。

「やることない…あゝ暇だゝ!!」

退屈をまぎらわしていると、そこに同じく脇を全開に露出している  
紅白の巫女服を来た脇巫女がきた。

「みき、魔理沙が来たけど今夜宴会やるから神社貸したわよ。」

「神様に許可なく貸すって霊夢…はあ、まあいいよ。」

みきは立ち上がる。

「どこいくの？」

「紅魔館で美鈴と組み手してくる。ついでに守矢神社にも……？」

「どうかした？」

「いや、なんでもない」

「そう。ならいつてらっしゃい」

「いつてきますよ」

そう言って、紅魔館に飛び立っていった。

みきサイド

「はっ!!」  
「ぐっ!!」

いつもは暇潰しには最適な美鈴との組み手。

戦いがほとんど弾幕ごっこになった今、これがなかなか重要な位置を占めるようになってきた。

まあ弾幕ごっこもアレだけだね。

で、そこまで強さが違う訳でもないからいつもはそこまで両者の攻撃があたることはないんだけど……

ぶっちゃけ今日はいいのもらいまくってます。

「どうしたんですか？ 今日なんか変に先読みしてますよね？」  
「してない。美鈴こそなんか幻覚でも見せてるの？」  
「まさか。八意のうさぎじゃないですよ私は。」

くそ、なんだってんだよもう。

「せい!!」  
「ふぐあ!!」

「……ふうん」  
「どうしたのですかレミリア様？」  
「いや、何でもないさ。それよりも、”お嬢様”よ。」  
「……わかりましたお嬢様。」

吸血鬼がボコられていくあたしを見て一人、面白そうに笑っていた。

「くそ、ボロボロだよくしょう」

紅魔館で美鈴と小一時間程組み手をしたあと、今度は守矢神社に向かった。

「早苗」

「あつ、みき様。こんにちは!？」

ボロボロになったあたしを見て早苗はぎょつとしている。

「気にしないで。諏訪子と神奈子は？」

「はあ…中で寛いでますよ。」

「わかった。ありがと」

「ゆっくりして行って下さい。」

中に入ると神奈子と諏訪子がスーファミをやっていた。

「すごく…シニールだし…古い…」

しかもかの有名な友情クラッシャーとは…

「あつ来てたんだみき」

「いらつしゃい。今日はいやにボロボロだねえ。」

コントローラーを差し出す神奈子。

「やるかい？」

——食うかい?——

「へっ？」

何…今の？

「？どうしたんだい？」

不思議そうに見つめてくる神奈子。

「あついやなんでもない」

ただの幻聴だろう。

そう思ってその時は頭の隅においやって、気にしなかった。

---

「何だったんだろう、あの声」

あれからしばらく守矢神社でだべって、今博麗神社に帰る途中。

あの声がどうにも気になって、飛ぶのをやめて暫くふよふよと漂う。

……あっちに行ってみよう。

久しぶりに勘の従うままに行き先を決めてみる。

「あ、みき様。どうしたんですか？もう宴会始まりますよ。」

「いやちよつとね…、あんたは行かないの？」

「もう少ししたら行きます。」

着いたのは旧博麗神社と言うべきか、今は分社であるところ。

因みにこっちにも巫女さんは住んでる。  
吸血鬼になっちゃったけど。

特に何も変わつた所は無く、賽銭を確認してみたが大金が入っている訳でもなかった。

「さつき、今日なんか変わったことなかった？」

「今日は特になかったですよ。」

「ふーん。」

ここに何があるのかねえ…

—ゴゴゴゴゴゴ—

「!？」

空が割れる轟音がした…ような気がした。

まわりを見ても何も起こってない。ただ風に揺られる葉のざわめきや虫の声しか聞こえない。

…まただ。守矢神社の時と同じ…。  
なんだか胸騒ぎがする。

「どうかしましたか？」

「わかんない。わかんないから先に行くね。」

「あ、ちよつと!!」

あたしは能力を使って空間を操り、博麗神社に瞬間移動する。

「あら、どうしたの?そんなに慌てて。」

移動した先であたしが目にしたのは、天を仰いでいる紫…ではなくて瞬間移動してきたあたしを不思議そうに見つめている霊夢だった。

「えっ、いや、何でもない」

表面上はいつもどろりに取り繕っているが、頭がこんがらがりそうだ。

デジャヴってやつ…？

カチャン

存在を知らしめるように背中に背負ったあたしの愛刀、蒼穹双刃が音をたてる。

そういえばこれは双剣だったはず。片方しかないのは一体どうして？

——それ、絶対いつか返してもらわうからね！！絶対！！絶対そこから引きずり出してやるから！！——

「！！！」

「本当になんでもないの？すごく変よ。」

「ちよっと…いろいろあつて」

大丈夫だから、とその場を立ち去った。

「…変なの」

霊夢はそう一人ごちた。

「…はあ」

真夜中、宴会に参加した人（？）達は帰るか酒に溺れている。あたしはその傍で酒も飲まずに考え込んでいた。

そもそもこの姿になった時に思い出せない記憶があったけど、こういうのとは違う。

消されているのではなく、只単に、忘れている感じ。

能力をフルに使い自分の記憶の時間を遡るが、思い当たるものはない。

ああもう！！なんで出てこない！？思い出さなければ…あたしは…あたしは■■■を呼び戻せない！！

「えっ…」

誰をあたしは呼び戻すんだ…？

「お困りのようね、みき」

いつの間にか紫が隣に来て妖艶に座っていた。

「…ねえ紫、あたし今から外に行く。」

「はい！？」

しかしその仮初めの鎧はすぐに剥がれ落ちる。何を隠そう紫も実は転生者。あたしと同士だ。しかもそんなに強くない。二千年弱生きて精々中妖怪程度である。

さらに中身が違つ訳だから、当然頭も原作の紫程良くない。  
あとよく弄られる。

今日も紅魔館で一日メイド長に任命されてたらしい。  
駆け引き…はここぞという時だけ上手いな、うん。正に生けるカイ  
ジ。

しかも能力を使いこなせてない。

空を仰いでみ？綺麗な結界でしょ？あたしが主に作つたんだぜ。  
管理は藍と一緒にだから、紫がいなかったら作れなかったかもしれないけど。

#### 閑話休題

あたしは蒼穹双刃を取り出す。

「この剣、もともと双剣つていうことは覚えてるよね？片割れはな  
いと思つてたけど、どうやら違つたみたい。」

「…理由はそれだけではないんでしょ？」

流石１０００年来の親友、なんでもお見通しだ。

「そう、探さないといけない奴がいるはずなんだ。」

紫は瞑目して言う。

「…いいわ、別に止めることでもないだろうし。藍には私から言っ  
ておくから。」

「あれ？いつも止めようとするのに…どういう風の吹き回し？」

「それは藍に愚痴られるからよ。それにね、レミリアが言つてたわ  
よ、『彼女には私を持ってしても見えないなにかがあるわ、彼女

は気づいてないようだけど。でも今日血を取りに来た時に、それが彼女、いや正確に言うと持っている剣ね…それを引き寄せ始めたの。これは近いうちに面白いことが起きるわよ。』って「…ははっ」

思わず笑ってしまう。

「なら善は急げ、だね。早速行ってくるわ」  
「いってらっしゃい。ついでに”コールオブデューティCOD”買ってきて。これお金」  
「あいよ。」

そう告げてあたしは幻想郷から外の世界へと移動した。

「さてと…」

とある山中であたしは蒼穹双刃を天に掲げる。

「導け…あたしを」

淡く光始める蒼穹双刃

導く先は

「群馬県…」

そついや最初に目覚めたところもそこらへんだったな…。  
指し示されたところへと移動する。

「ここか…」

移動した先は駅の近く

ガキンガキン

探索を始めようとした時、おおそ日常では絶対聞くことがない戦闘音がした。

どうやら駅で誰かが戦っているようだ。  
上に登って様子を見てみると、魔獣と4人の少女達が戦っていた。

魔獣とは幻想郷にいる妖怪とは違って、今も外の世界に居続けることができるあたしたちとは気色の違う存在。魔獣が何かは未だによくわかってない。

戦っている少女達に目を向ける。

黒、赤、黄、そして…

「はああああー！」

あっ

ダメだ、止めないと

突貫していく同じ青髪の少女を見て、何故か激しい焦燥感にとらわれる。

無意識に時を止めて接近し、魔獣を切り刻んで離脱。

時を動かすと同時に爆発する魔獣。

ブラットホームの下に隠れて難を逃れる。

青の少女は気絶しているだけで命に別状はなさそうだ。

「お、おい！さやかは！？」

ほっとしていると青の少女がいらないことに気付いた赤の少女が慌てる。いや、それよりも…

「…さやか…」

そう反芻すると同時に新たな記憶ががあたしの頭の中ではじける。  
ただ断片的過ぎて何のことかわからない。  
何か…何でもいい。あとすこしで…。

「まどか…」

カチリ

最後のピースが、はまった。

「あ…ああ…!!」

記憶が止めどとなく溢れる。

美樹さやか市容姿で妖怪に転生したこと。

幻想郷が滅んで、今度は人間で転生したこと。

魔法少女となって杏子やマミ、ほむらと敵対したり共闘したりしたこと。

キュウベえの目論見を完膚なきまでに潰す為にあえて魔法少女となり、紆余曲折あつて妖怪になったこと。

ほむら、マミ、杏子と一緒にワルプルギスの夜戦に赴いたが、倒した後、最悪の魔女、クリームヒルトが次元を裂いて現れ、そのチート具合に全く歯がたたなかったこと。

まどかが魔女を生まれる前に全て消し去ることを願いに魔法少女になったこと。

そして

——「わかった。わたし、待ってるよ。ずっと」——

魔女を消し去る概念となったまどかに絆として双剣の片割れを持た

せたこと。

「…ハハッ…」

頬をつたう涙は一体なんの涙なんだろう。わからないけど…  
これはもう会えないことに対する涙ではないことは確かだ。

「誰だ！」

泣いたことで先程の少女達、マミ、杏子、ほむらに気づかれる。  
涙を拭い、さやかを抱えてプラットホームに登る。ついでにソウル  
ジェムも綺麗に浄化。

「勝手に友達を殺すとかひどいねえ、次からはもっと注意を払いな  
よ。」

さやかを抱えて登場したことで逆に警戒レベルを引き上げてしまっ  
たようで、むちゃくちゃ睨まれてる、とくに杏子から。

「てめえ、さやかに何しやがった!!」

「別になにもしてないよ。ちよつと爆風に煽られて気絶してるだけ。  
」

さやかを横たえる。

「こいつこれからもこんな感じで無茶するから、そんな時は全力で止  
めてやんなよ。もっと仲間（あたし達）を頼れってね」

あとは…とほむらに視線を向ける。

「ありがとねほむら。危うく親友との約束を反故にするところだった。」

「！？なんで私の名前を…」（「答を知りたいなら明日の夜1時に

＝×ビルの屋上で」）

「じゃあね」

あたしはその場から飛び立つ。後ろで杏子が待ちやがれと喚いているが無視無視。

待っててねまどか

『少しいいかい？』

約束の時間の10分ぐらい前、キュウベえもといインキュベーターがひょこつと現れた。

「…何？」

『君に興味があつてね、話を聞きたいんだ。』

「今魔方陣書いてるからパス。」

こいつは前（？）の時間軸とは違って、魔獣を倒した時に出現するグリーンフシード（？）を集める為に契約を迫るが、契約の際全てのメリットデメリットを話している。

何でわかるかって？実際に聞いたことあるから。

だからといって嫌いではなくなつたわけじゃないけど。

『君は魔術師ではない。人よりももっと高位の存在だよ。』

こいつパスって言ったのに無視った…。

『魔方阵は書き終わっているのだろう？見たところ召喚陣のようだけど、なにをよびだすつもりだい？』

「……どうしてソウルジェムが濁りきるとその持ち主ごと消えるんだと思う？」

『それは僕達にもわからないね。君はそれを知っているのかい？』

「まあね。簡単に言くとソウルジェムが濁りきると魔女、あんたらのいう魔獣みたいなものを生み出す核、となる。だけど魔女を滅する”概念”があるから核はその場で消滅。したがってソウルジェムは見かけ上消失し、魔女となる寸前の持ち主も同様に、ってわけ。」

『……でもそれを立証するものは何もないよね。僕らからしたらただの良くできた仮説だ。魔女という存在にはとても興味があるけどね。』

「なら、証明してあげるよ。」

あたしは蒼穹双刃を魔方阵の真ん中に置く。

「言い忘れていたけど、その概念は、もとは鹿目まどかについてごく普通の女子中学生だよ。あたしが今から召喚する子でもある。」

と、そこへほむらがやってきた。

「グッドタイミングだねほむら、今からまどかを召喚するから離れてて。」

ほむらは突然のまどか復活宣言に目を白黒させている。

「あなたもまどかを知ってるの!？」

「知ってるもなにも、あたしはまどかが概念になるのをあんと見届けたじゃん。」

「それはあなたじゃなくて美樹さやかであって…。」

「だ〜から〜それがあたしなんだって、この世界の美樹さやかはまた別の存在なの。忘れた?あたしは転生者だって言ったよ。」

とにかく、とほむらをじつと見据える。

「あたしに任しときな」

ほむらは何か言いたげにしていたが渋々といった感じで引き下がる。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の弓に。」

我が寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ、つか  
応えさせる。」

――「えー…」

儀式の詠唱にあるまじき発言にどこからか突っ込みがくる。

自然と頬が綻ぶのを抑えきれない。

「誓いをここに。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者」

魔方陣の中に神力を流し込む。何が出るのかはわかりきっているけど、失敗の可能性を少しでも減らしたい。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤、いや――」

流し込んだ神力はいわば手、中が見えない箱の中で目的のものを探す。

「魔法少女の守り手よ!!」  
やがてその手を誰かが握る。  
頬が一層つり上がる。

迎えに来たよ、まどか

――うん、待ってたよ。さやかちゃん――

しっかりと握り返し思いきりこっちに引っ張った。

「きゃっ!!」

召喚陣の光であたりが白一色にそまる。

どれぐらいたっただろう、光が収まった先には、

桃色の髪をそのまま下ろし、魔法少女の服を着ているまどかが笑顔で蒼穹双刃を手に佇んでいた。

「ほんとに呼び戻してくれたんだね」  
「わかってたくせに。」

そして、満面の笑みで高らかと宣言した。

「約束通り返してもらいにきたよ!!」

あ、COD買わないと。

ナガン「これがトゥルーエンドだ。」

さやか「ほんとに原作忠実にしたらこうなるんだ…。つーか英霊召喚では無理が無くね？」

ナガン「チートが何言ってるやがる。つーか話進めるぞ。簡単に言うとな…。」

リセット

元々から違う因果がリセット

”さやか”では転生しなかった。

以下流れは同じ。

さやか「分かりにく!!」

ナガン「リセットされたから違う存在になりましたよと言ったとき。そして実はみきは本来の因果を表していたのだ!」

さやか「何故にミク？」

ナガン「・・・転生前にやっていたことが原因さ。」  
さやか「うそくさ。」



美樹さやか魔改造計画1日目（前書き）

さてさて始まりました。 幻想郷（魔改造） 編

手始めにさやかから。

まどかマギカ編で語られなかったところも補完していきます。

## 美樹さやか魔改造計画1日目

「・・・ん、むう。知らない「博霊神社だよ。」・・・ぬう。」

くそ、お決まりのセリフを。

いや、そもそもこれもパターン化してるか。

っ！か何で博麗神社？

てっきり病室だと思ってた。

視線を巡らせると、壁にもたれているみきがいた。

体を起こす。

着ている服は魔法少女のそれではなくて、ごく普通の着流し。

ペタンと左肩から先は凹んでいる。

「何日寝てた？」

「3日。死んだように眠りこけてた。」

紫呼んでくるね、とみきは部屋を出ていった。

「・・・」

一人になった所で、蒼穹双刃を具現化しようと試みるが、一向に出てくる気配はない。

やっぱりか・・・

がつくりと頭を垂れる。

今まで一度も折れることはなかった。

そして、あるべきものがぽっかりと抜けた感覚。

だから、そんな予感はいした。

でも、堪えるものは堪える。

「目が覚めたみたいね。」

という言葉と共に入ってきたのは、紫と霊夢だった。

こちらはいつもと同じで、紫は紫色を基調とした服。そして霊夢は紅白の脇を出している奇抜な巫女服。

「紫、と久し振り、かな？ 霊夢。」

「ええ、14年ぶりね」

「？」

14年ぶりって

「転生したらしいわよ。あなたと同じで。」

あたしの推測を紫が肯定した。

「・・・何よ」

あたしがジーっと見つめていると、霊夢が所在なさげに聞いてくる。

——「何よ。あんまりジロジロ見ないでくれる？」——

「変わった？」

あたしの予想していたキツい言葉を見事に裏切ってくれて、思わずそんなことを口走った。

「変わった？何が？」

「随分丸くなつた気がする。」

ふーんと素っ気ないが、心当たりは有るようつで。

「まあ挨拶はこれくらいにしておいて、紫。」

霊夢にうながされて紫はスキマからあるものを取り出す。

「これって・・・」

「あなたも気付いているのでしょうか？その腕はもう治らないって。」  
「ちよつ。それどういう意味！？」

霊夢達の後ろに付いてきていたみきは何も聞かされておらず、狼狽えている。

「腕の魂ごと文字どおり塵と化したからよ。基礎が無ければ再構成しようとも出来ないわよ。」

「それに惑星単位の化け物を滅ぼしたの。腕一本ですんだだけでもよしとしないさい。」

紫、霊夢の二重口撃によって渋々ながらもみきは納得する。

実際ビックバンは相討ち覚悟で放ったのが本音。文字通り捨て身の攻撃だった。

い、生きようとは努力したからね！！

で、威力が威力だったから指向性を持たせることも一苦労で、結果的には全方位攻撃（自分中心かつ含む）を前方180度（自分不含）にしか出来なかった。しかも左腕が巻き込まれた。

あれをくらってまだ存在を保っていたまどかも大概だ。

それはともかくとして・・・

「ありがたく受け取るけどさ、早すぎない？」

手にとって、この義手の精巧さは理解した。

だからこそ、この3日間でこれが作れるとはとても思えない。

「他の四肢もあるわ。」

予め作ってましたかさいですか

「んで、これどうやって付けるの？」

「それはね……」

あたしが義手を傷口に当てていた所に紫が手を添えてさらに押し込んだ。

ブスッ

中から機械音がしたと思った直後、中で肉を刺す音も聞こえた。

…ぐぎゃ ああああああ！！！！！！

「強く押したら後は勝手に接合してくれるわ……痛いらしいけど」

「は、早く言えよ…。」

極上の笑みを浮かべる紫と対照的に畳みに這いつくばり悶絶しているあたし。

絶対確信犯だ

霊夢は興味無さそうにそれを見ている。

「動く？つて…そこまで痙攣してたら確認するまでも無いわね。」

義手はちゃんと接続されて、あたしの意志を正確に顕している。

「大丈夫さやか？」

みき…とりあえずポーカーフェイスを覚えやがれ。

かなり腹が立ったのでパスを全開にしてやった。

みぎやああああ…！！

博霊神社に二度目の悲鳴が木霊した。

そうして耐えること5分、ようやく痛みがひいてきた。

いやね、もうね。地獄でしたよ。腕のなかかき回されているみたいでね。

「じゃあ弾幕ごっこで「段階飛ばしすぎだ!」」

霊夢意外にアグレッシブだな…元々か。

「もう一つの方は私でもどうにもならないわ。」

「…まあそうだろうね。ってかこれもうにかされてたら口が塞がらないわ。」

そう言つて、ゴロンと布団に寝転がる。

「あゝあ。どっかに良いもの落ちてないかなゝなんて…」

ガスッ!      ザクッ!!

二つの影が天井から降ってきて、あたしの顔を掠めて畳みに刺さった。

「……(ダラダラ)」

あたしの顔、今すごい青いかも。

・  
陽の光が射していると言うことは外から降ってきたんだろうな…

「な、何!? 何なの。ていうか天井!」

「これは…!」

落ちてきたのは白と黒の双剣だった。

え？え？タイミング良すぎじゃね？つーか誰が？

「まさか…竜神様が？だとしたら……でも真意は？……」

縁は少し考えた後、推測を述べる。

「美樹さやか。それを手に取りなさい。」

多分雰囲気的にそうだろうなあとは思ってたけどさ…

呪いの武器だったとかは無いよね？

「あるわけ無いでしょう。失礼よ。」

…はい

恐る恐る手を伸ばして、柄を掴む。

行くよ、と皆に視線を送る。

首を傾げるみき。

早くしろとジト目で返す霊夢。

神妙な面持ちでこくんと頷く紫。

…キャラ崩壊甚だしいな紫。

そう思いつつ、それらを抜いた。

バチバチと黒と白の紫電がそれぞれの刃から迸っている。

何だろう、今や古錆びた記憶を刺激するフォルム

つかこれ、中華剣じゃないけど、黒天白夜じゃね？

ルーツさんとボレアスさんのあれでしょ？

竜神様って…まさかね

止めよ止めよ

外に出て、軽く素振りを試してみる。

刃が通った軌跡に紫電が漂う。

——斬符「グランドクロス」——

前は白い十字が飛んでいったが、今回は少し歪んだが、縦が黒くなっていた。

続いて、柄の部分を重ねる。

すると、柄が合わさり、白黒の弓に変化した。

左手に矢を添えて、右手で弦を引く。

キリキリと弦が鳴る。

そこにある木に向かって、矢を放つ。

真ん中には当たらず、右にそれたけど、矢は音を切り裂き木を深く刺さった。

そのまま衝撃に耐えきれず粉々に砕け散った。

左手は要りハビリであるのはともかく、ぶっちやけ蒼穹双刃よりチ  
ート武器だった。

正に鬼に金棒。

「どうだったかしら？」

「文句のつけようがない。流石龍神様ってところかな。て言つか本  
当にいたんだ。」

「あのお方は幻想卿の守り神よ。」

うわおう

「会ったことあるの？」

「一度だけ、それも遠目にだけねど。」

空を見上げる。

そこには至って変わらない青空が広がっていた。

感謝の意を込めて、一礼。

部屋に戻ると、何故かみきが昏倒していた。

近くには鞘が転がっている。

天井を見上げるとあたしの推測通り穴が二つ増えていた。

そして霊夢、諦めた表情をするのはわかるけど茶なんか飲んでないで放置すな。

静かに合掌。

取りあえず布団に寝かしつけた。

ここで紫が真剣な表情になる。

「さて、例の計画決行まで残り4日となったわ。」

え

「よ、4日？すごいキツキツじゃん。」

「そちらの事件が予想外だったのよ。おかげで予定が狂ったわ。」  
「ごめんなさい」

素直に謝る。忙しい中労力を割いてくれたんだし。

「まあ許容範囲内だからいいわ。後は各自戦力を暖めておくだけだ

ったから。それで、今から作戦の概容を話すのだけれど、その前にやることもあるわ。」

「？」

はて？

「美樹さやか。あなたは二代目八十禍津日神やそまがつひのかみとなり、その任を全うしなさい。」

あたしの立てていた安直な予想を遙かに上回る、衝撃の事実を告げられた。

美樹さやか魔改造計画1日目（後書き）

ナガン「ふはは、やってやったぜ。」

さやか「おい。何故ゆえにこうなった？」

ナガン「0編への序章に決まってるだろ。だいたいみきが聖杯戦争に参加して生き残れると思ってるのか？それにな、まだ伏線回収仕切ってないし。」

さやか「…まあ確かに。少なくとも足は引つ張るはず。つーか伏線あった？」

ナガン「あるに決まってるだろ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8190s/>

---

転生少女 さやか(!?) マギカ

2011年12月2日14時55分発行